

福岡県の装飾古墳

福岡県文化財調査報告書 第288集

(上 巻)

2025

福岡県教育委員会

序

装飾古墳とは、彫刻・線刻・彩色などによって、埋葬施設の内部や外部に図文を表現した古墳の総称で、歴史的な価値だけでなく、原始美術的な価値もあり、国民的な関心も高いものです。

福岡県内の装飾古墳は、存在が確認できる数で78基と全国的にみても屈指の数を誇り、題材に大陸系要素もみられるなど、アジアへの窓口となった本県の歴史的特徴を顕著に示す文化財です。しかし、特に彩色された装飾古墳は、発見され、開口した時点から劣化が始まることから、装飾古墳の保存・活用は本県の文化財保護行政にとっても、重要な課題の一つです。

近年、従来の実測図、写真という二次元情報に加え、デジタル技術を活用し、石室と図文を一体的に記録する三次元による記録方法が試みられています。特に熊本地震以降、古墳の三次元計測は、装飾古墳の保存・活用の基礎資料として注目されています。

そこで福岡県教育委員会では、令和4年度から3カ年をかけ、県内の装飾古墳について、三次元計測とこれまで長年蓄積してきた考古学的な情報の整理を併せて行う詳細調査を実施しました。本書は、その調査成果を記録したもので、今後適切な保護をする上で必要な基礎資料となるものです。本書が装飾古墳の保存・活用、合わせて県民の皆様の理解に資する資料として、広く活用されれば幸いです。

最後に、調査の実施及び報告書の作成にあたり、調査指導委員会委員の皆様、県内市町村文化財行政主管課や関係諸機関をはじめ多くの方々に御支援・御協力いただきましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

令和7年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 寺崎 雅巳

例 言

1. 本書は、文化庁からの国庫補助を受けて令和4～6年度に福岡県教育委員会が実施した、福岡県装飾古墳総合調査に係る報告書である。
2. 調査にあたっては、外部の有識者3名からなる福岡県装飾古墳総合調査指導委員会を設置し、その指導をもとに調査及び報告書作成等を実施した。
3. 調査及び報告書作成等にあたっては、県内市町村文化財行政主管課や県内外の関係諸機関、その他多くの方々に御協力・御支援をいただいた。
4. 図・イラストは原則として各自治体が刊行した調査報告書や市町村史に掲載された図を転載、または一部改変を加えた。出典・改変については挿図目次に示した。団体名や報告書名については、教育委員会名を〇〇教委、埋蔵文化財を埋文、等と一部省略を加えた箇所がある。
5. 写真図版は九州歴史資料館が撮影した写真の他、各自治体が刊行した調査報告書や市町村史に掲載された写真、各自治体が保管する写真等を掲載し、出典・資料提供機関を挿図目次に明記した。
6. 昭和10年代以前に撮影された写真や製作された実測図のうち、撮影年が分かるものについてはその撮影年を記載するように努めた。昭和20年代以降に撮影された写真のうち、撮影年が分かる装飾古墳については必要に応じて撮影年を記載した。
7. 今回の調査に際し、計測可能な装飾古墳については、SfM / MVSによる三次元計測を実施し、それにより作成した正射投影図を掲載した。計測データについては九州歴史資料館で保管している。
8. 本書の執筆は、大庭孝夫（教育庁教育総務部文化財保護課）、岸本圭（福岡県立アジア文化交流センター・九州国立博物館）、吉村靖徳・吉田東明・進村真之・小嶋篤（九州歴史資料館）が分担し、目次に示した。編集は吉田・進村が担当した。

目 次

(上巻)

I はじめに (大庭)	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の基本方針	5
3. 調査の組織	10
II 調査の方法と範囲 (岸本)	13
1. 装飾古墳の定義	13
2. 図文の分類	13
3. 凡例	15
III 福岡県の装飾古墳 (進村・吉田)	21
(1) 福岡地域	21
(2) 北九州地域	43
(3) 小郡市・朝倉市郡地域	77
(4) 久留米・うきは地域	99

(下巻)

(5) 南筑後地域	177
(6) 筑豊地域	215
(7) 京築地域	239
IV 福岡県の装飾古墳に関する基礎研究	263
1. 装飾古墳研究史 (吉村)	263
2. 装飾古墳保存管理史 (吉村)	269
3. 古墳築造技術に基づく装飾横穴式石室墳の時期変遷 (小嶋)	276
4. 装飾古墳関連データ (吉田)	290
V 総括 (大庭)	305
1. 装飾古墳と非装飾古墳	305
2. 福岡県内の装飾古墳の分布と特徴	306
3. 装飾古墳の保存活用	309

挿図目次

図 1	福岡県の自治体と地域区分	4
図 2	現地調査（桜京古墳）（九州歴史資料館所蔵写真）	8
図 3	現地調査（山田 1 号墳）（九州歴史資料館所蔵写真）	8
図 4	第 3 回調査指導委員会（川島古墳群視察）（九州歴史資料館所蔵写真）	9
図 5	第 4 回調査指導委員会（久留米市）（九州歴史資料館所蔵写真）	9
図 6	福岡県の装飾古墳分布図	12
図 7	装飾図文の具体例	14
図 8	福岡地域分布図（国土地理院 1/200,000 地形図『福岡』に加筆）	21
図 9	吉武熊山古墳位置図（国土地理院 1/25,000 地形図『福岡西南部』に加筆）	22
図 10	吉武熊山古墳石室実測図（1/120）（福岡市教育委員会 1981『重要遺跡確認調査報告書 I』Fig.8）	22
図 11	吉武熊山古墳の壁画装飾（1/40）（福岡市教育委員会 1981『重要遺跡確認調査報告書 I』正誤表）	23
図 12	吉武熊山古墳墳丘測量図（1/300）（福岡市教育委員会 1981『重要遺跡確認調査報告書 I』Fig.7）	23
図 13	吉武熊山古墳奥壁（福岡市教育委員会 1981『重要遺跡確認調査報告書 I』巻首写真）	23
図 14	浦江 1 号墳位置図（国土地理院 1/25,000 地形図『福岡西南部』に加筆）	24
図 15	浦江 1 号墳墳丘測量図（1/600）（福岡市教育委員会 2005『浦江古墳群 1 号墳』図 6）	24
図 16	浦江 1 号墳奥壁（1/30）（福岡市教育委員会 2005『浦江古墳群 1 号墳』図 17）	24
図 17	浦江 1 号墳石室実測図（1/100）（福岡市教育委員会 2005『浦江古墳群 1 号墳』図 10）	25
図 18	奥壁の装飾（九州歴史資料館所蔵写真）	25
図 19	東光寺剣塚古墳位置図（国土地理院 1/25,000 地形図『福岡南部』に加筆）	26
図 20	東光寺剣塚古墳墳丘測量図（1/1,000）（福岡市教育委員会 1991『東光寺剣塚古墳』図 4）	26
図 21	東光寺剣塚古墳石室実測図（1/100）（福岡市教育委員会 1991『東光寺剣塚古墳』図 15）	27
図 22	石屋形実測図（1/80）（福岡市教育委員会 1991『東光寺剣塚古墳』図 16）	27
図 23	石屋形全景（九州歴史資料館所蔵写真）	28
図 24	線刻文様拡大（九州歴史資料館所蔵写真）	28
図 25	五郎山古墳位置図（国土地理院 1/25,000 地形図『二日市』に加筆）	29
図 26	五郎山古墳周溝・テラス復元想定図（1/600）（筑紫野市教育委員会 1998『国史跡五郎山古墳』第 15 図）	29
図 27	五郎山古墳石室実測図（1/160）（筑紫野市教育委員会 2020『国史跡五郎山古墳保存整備事業報告』第 3 図）	30
図 28	玄室奥壁壁画実測図（1/40）（筑紫野市教育委員会 1998『国史跡五郎山古墳』第 27 図）	30
図 29	玄室西側壁の壁画（1/40）（筑紫野市教育委員会 1998『国史跡五郎山古墳』第 29 図）	31
図 30	玄室奥壁装飾文様拡大（九州歴史資料館所蔵写真）	31
図 31	五郎山古墳石室正射投影画像（1/120） 基盤研究（A）（1922026）『VR 画像を活用した日本装飾古墳 デジタルアーカイブの構築』2007～2010 年	31
図 32	五郎山古墳石室内部（福岡県高等学校教職員組合 1951『北九州古文化図鑑』第二輯第 13 図下）	32
図 33	五郎山古墳遠景（昭和 50 年）（筑紫野市所蔵資料）	32
図 34	五郎山古墳保存施設（昭和 50 年）（筑紫野市所蔵資料）	32
図 35	玄室奥壁（九州歴史資料館所蔵写真）	33
図 36	奥壁上部拡大（九州歴史資料館所蔵写真）	33
図 37	右側壁（船）（九州歴史資料館所蔵写真）	33
図 38	殿様塚古墳群 1 号墳位置図（国土地理院 1/25,000 地形図『二日市』に加筆）	34
図 39	殿様塚古墳群 1 号墳石室略測図（約 1/120）（筑紫野市 2001『筑紫野市史』資料編（上）P306 第 117 図）	34
図 40	殿様塚古墳群 1 号墳石室奥壁文様拡大（九州歴史資料館所蔵写真）	34
図 41	桜京古墳位置図（国土地理院 1/25,000『神湊』に加筆）	35

図 42	「桜京古墳の石室」(昭和 46 年)(宗像市教育委員会 2007『桜京古墳』巻頭カラー図版 2(1))	35
図 43	石屋形装飾実測図(宗像市 1997『宗像市史』通史編第一巻第 166 図)	35
図 44	桜京古墳墳丘測量図(1/600)(宗像市教育委員会 2007『桜京古墳』第 5 図)	36
図 45	石屋形装飾(1/32)(宗像市教育委員会 2007『桜京古墳』第 16 図)	36
図 46	桜京古墳石室実測図(1/100)(宗像市教育委員会 2007『桜京古墳』第 17 図)	37
図 47	奥壁装飾(九州歴史資料館所蔵写真)	37
図 48	桜京古墳石室正射投影画像(1/100)(九州歴史資料館所蔵画像データ)	38
図 49	前室右側壁線刻「船」(宗像市教育委員会 2012『桜京古墳Ⅱ』図版 3)	38
図 50	権現塚古墳位置図(国土地理院 1/25,000 地形図『福岡南部』に加筆)	39
図 51	権現塚古墳奥壁石材(九州歴史資料館所蔵写真)	39
図 52	権現塚古墳石材の装飾(九州歴史資料館所蔵写真)	39
図 53	片縄山古墳群位置図(国土地理院 1/25,000 地形図『福岡南部』に加筆)	40
図 54	丸ノ口Ⅴ群地形測量図(1/600)(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』第 110 図)	40
図 55	丸ノ口Ⅵ群地形測量図(1/600)(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』第 152 図)	40
図 56	丸ノ口Ⅴ群 5 号墳主体部実測図(1/120)(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』第 130 図)	41
図 57	丸ノ口Ⅴ群 5 号墳全景(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』図版 57 一 下)	41
図 58	丸ノ口Ⅴ群 5 号墳石室奥壁(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』図版 63 一 下)	41
図 59	丸ノ口Ⅵ群 2 号墳主体部実測図(1/100)(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』第 153 図)	42
図 60	丸ノ口Ⅵ群 2 号墳全景(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』図版 72 一 右下)	42
図 61	丸ノ口Ⅵ群 2 号墳奥壁装飾(那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』図版 73 一 右下)	42
図 62	北九州地域分布図(国土地理院 1/200,000 地形図『福岡』『中津』に加筆)	43
図 63	一本松塚古墳位置図(国土地理院 1/25,000 地形図『八幡』に加筆)	44
図 64	一本松塚古墳石室実測図(1/60)(小倉高校考古学部 1988『まがたま』P75 第 2 図)	44
図 65	発見当時の一本松塚古墳(小倉高校考古学部 1988『まがたま』P65 図版 1 一 上)	45
図 66	発見当時の一本松塚古墳石室入口(小倉高校考古学部 1988『まがたま』P65 図版 1 一 下)	45
図 67	一本松塚古墳奥壁(九州歴史資料館所蔵写真)	46
図 68	一本松塚古墳石室正射投影画像(1/100)(九州歴史資料館所蔵写真)	46
図 69	相坂横穴群位置図(国土地理院 1/25,000 地形図『折尾』に加筆)	47
図 70	相坂横穴群分布図(1/600)(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』第 3 図)	47
図 71	「本城横穴甲室副葬品ノ配列 乙室全上」(福岡縣 1934『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第九輯挿図)	48
図 72	「遠賀郡本城横穴ノ壁画」(福岡縣 1934『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第九輯第七図版)	48
図 73	第 14 号墳玄室上線刻画(鳥等)(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』図版 6)	48
図 74	第 14 号墳玄門右上線刻画(人物)(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』図版 7)	48
図 75	第 14 号墳線刻画実測図(1/60・1/120)(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』第 13 図)	49
図 76	第 15 号墳実測図(1/120)(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』第 15 図)	49
図 77	第 14 号墳玄室天井線刻(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』図版 8)	49
図 78	第 15 号墳線刻画(格子)(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』図版 10)	50
図 79	第 15 号墳玄門左上線刻(北九州市教育委員会 1996『相坂横穴群』図版 10)	50
図 80	下吉田古墳群位置図(国土地理院 1/25,000 地形図『小倉』に加筆)	51
図 81	下吉田古墳群分布図(1/2,500)(北九州市教育委員会 1972『小迫窯跡・下吉田古墳群一図録篇一調査報告』第 2 図)	51
図 82	第 2 号墳後室(九州歴史資料館所蔵写真)	51
図 83	第 2 号墳石室正射投影画像(1/100)(九州歴史資料館所蔵画像データ)	52
図 84	第 2 号墳奥壁(九州歴史資料館所蔵写真)	52

図 85	第 2 号墳後室左側壁 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	52
図 86	第 4 号墳後室右側壁 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	53
図 87	第 4 号墳奥壁 (昭和 45 年) (北九州市教育委員会 1972『小迫窯跡 下吉田古墳群 - 図録篇 - 調査報告』 図版第七 - 下) ……………	53
図 88	第 4 号墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ)……………	53
図 89	水町遺跡群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『金田』に加筆)……………	54
図 90	「水町横穴群 8・9 号」(現、水町 A12・13-1 号横穴墓) (直方市 1971『直方市史』上巻 P181 第 6 図) ……	54
図 91	水町遺跡群遺構配置図 (1/600) (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』付図 3)……………	54
図 92	水町遺跡群全景 (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』巻頭図版 1-1)……………	55
図 93	A13- I 号横穴墓実測図 (1/120) (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』第 129 図)……………	55
図 94	A13- I 号横穴墓線刻実測図 (1/15) (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』第 130 図)……………	55
図 95	A13- I 号横穴墓線刻 (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』図版 39-1)……………	55
図 96	B18 号横穴墓実測図 (1/120) (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』第 189 図)……………	56
図 97	B18- I 号横穴墓線刻拓影 (1/6) (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』第 195 図)……………	56
図 98	B18 号横穴墓羨門 (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』図版 51-1)……………	56
図 99	B18- I 号横穴墓羨道線刻 (直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』図版 51-5)……………	56
図 100	垣生羅漢百穴位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『中間』に加筆)……………	57
図 101	「羅漢山第一號墳実測圖」(柴田喜八 1923「筑前国底井野の横穴群」『考古学雑誌』 第十三卷第五号)……………	57
図 102	垣生羅漢百穴 (昭和 30 年代) (福岡県文化財保護課指定資料中)……………	57
図 103	Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓実測図 (1/120) (中間市教育委員会 2001『垣生羅漢山遺跡群』第 6 図)……………	58
図 104	Ⅲ A 地区第 1 号墳横穴墓全景 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	58
図 105	Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓玄室右側壁 (中間市教育委員会 2001『垣生羅漢山遺跡群』図版 11)……………	58
図 106	Ⅲ A 地区第 2 号横穴墓羨道部右側壁 (中間市教育委員会 2001『垣生羅漢山遺跡群』図版 11)……………	59
図 107	Ⅲ A 地区第 3 号横穴墓屍床前面 (中間市教育委員会 2001『垣生羅漢山遺跡群』図版 11)……………	59
図 108	Ⅲ A 地区第 4 号横穴墓玄門天井部 (中間市教育委員会 2001『垣生羅漢山遺跡群』図版 11)……………	59
図 109	瀬戸横穴群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『中間』に加筆)……………	60
図 110	調査風景遠景 (中間市教育委員会所蔵写真)……………	60
図 111	瀬戸横穴群第 14 号横穴実測図 (中間市 1978『中間市史』上巻 第 82 図)……………	61
図 112	奥壁中央騎射武人図 (中間市 1978『中間市史』上巻 第 83 図)……………	61
図 113	奥壁左側日輪・鳥獣図 (中間市 1978『中間市史』上巻 第 84 図)……………	61
図 114	西壁人物・馬図 (中間市 1978『中間市史』上巻 第 86 図)……………	61
図 115	奥壁右側船図 (中間市 1978『中間市史』上巻 第 85 図)……………	61
図 116	図文拡大 (中間市教育委員会所蔵写真)……………	62
図 117	垂木表現拡大 (中間市教育委員会所蔵写真)……………	62
図 118	図文と調査者 (中間市教育委員会所蔵写真)……………	62
図 119	竹原古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『脇田』に加筆)……………	63
図 120	竹原古墳墳丘測量図 (1/400) (若宮町教育委員会 1982『竹原古墳』Fig. 3)……………	63
図 121	竹原古墳石室実測図 (1/100) (若宮町教育委員会 1982『竹原古墳』Fig. 5)……………	64
図 122	入口から見た前室・後室の壁画 (1/30) (若宮町教育委員会 1982『竹原古墳』Fig. 12)……………	64
図 123	竹原古墳入口 (昭和 31 年) (宮若市教育委員会 2020『国史跡竹原古墳保存整備事業報告』写真 4) ……	65
図 124	竹原古墳奥壁・玄門部両袖石 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	65
図 125	竹原古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	66
図 126	奥壁文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	67
図 127	竹原古墳解説板パネル (昭和 57 年) (九州歴史資料館所蔵写真)……………	67
図 128	損ヶ熊 1 号墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『脇田』に加筆)……………	69

図 129	損ヶ熊 1 号墳全景 (若宮町教育委員会 1998『原田遺跡群』巻頭図版) ……………	69
図 130	損ヶ熊 1 号墳墳丘測量図 (1/600) (若宮町教育委員会 2003『原田遺跡群 I』第 3 図) ……………	69
図 131	損ヶ熊 1 号墳石室実測図 (1/120) (若宮町教育委員会 2003『原田遺跡群 I』第 7 図) ……………	70
図 132	損ヶ熊 1 号墳奥壁実測図 (1/40) (若宮町教育委員会 2003『原田遺跡群 I』第 9 図) ……………	70
図 133	損ヶ熊 1 号墳奥壁 (若宮町教育委員会 2003『原田遺跡群 I』口絵①) ……………	70
図 134	古月横穴群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『中間』に加筆) ……………	71
図 135	「古月百穴附近地形図」(昭和 3 年)(福岡縣 1928『史蹟名勝天然記念物調査報告書』) 第三輯 P23 第一版) ……………	71
図 136	「壁画 (其一)」(昭和 3 年)(福岡縣 1928『史蹟名勝天然記念物調査報告書』) 第三輯第八版) ……………	71
図 137	「壁画 (其三)」(昭和 3 年)(福岡縣 1928『史蹟名勝天然記念物調査報告書』) 第三輯第九版) ……………	71
図 138	「古月横穴 9 号」(1/100) (福岡縣 1934『史蹟名勝天然記念物調査報告書』) 第九輯画版第五ノ一) ……………	72
図 139	2 号墓玄室内装飾文様実測図 (1/20・1/40) (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』 第 26 図) ……………	72
図 140	2 号墓玄室左側壁 (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』) 図版 24 一上) ……………	73
図 141	2 号墓玄室前壁 (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』) 図版 24 一下) ……………	73
図 142	6 号墓玄室内装飾文様実測図 (1/40) (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』) 第 57 図) ……………	73
図 143	6 号墓玄室左側壁 (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』) 図版 40 一上) ……………	73
図 144	9 号墓実測図 (1/160) (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』) 第 36 図) ……………	74
図 145	9 号墓玄室内装飾実測図 (1/40) (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』) 第 39 図) ……………	75
図 146	9 号墓墳丘 (福岡県文化財保護課指定資料中) ……………	75
図 147	9 号墓奥壁 (鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴』) 図版 30 一下) ……………	75
図 148	9 号墓実測図 (昭和 6 年)(福岡県文化財保護課指定資料中) ……………	75
図 149	古月横穴外観 (昭和 40 年代)(福岡県文化財保護課指定資料中) ……………	76
図 150	現在の古月横穴群 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	76
図 151	小郡市・朝倉市郡地域分布図 (国土地理院 1/200,000 地形図『福岡』『熊本』に加筆) ……………	77
図 152	花立山穴観音古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『二日市』に加筆) ……………	78
図 153	花立山穴観音古墳墳丘測量図 (1/400) (小郡市教育委員会・福岡大学 2007『花立山穴観音古墳』 第 3 図) ……………	78
図 154	花立山穴観音古墳石室実測図 (1/120) (小郡市教委・福大考古研 2007『花立山穴観音古墳』 第 22 図) ……………	79
図 155	石室入口と墳丘 (小郡市教委・福大考古研 2007『花立山穴観音古墳』) 巻頭図版 1 一上) ……………	79
図 156	石室全景 (小郡市教委・福大考古研 2007『花立山穴観音古墳』) 図版 4 左下) ……………	80
図 157	玄室左側壁 (小郡市教委・福大考古研 2007『花立山穴観音古墳』) 巻頭図版 1 一下) ……………	80
図 158	玄門左袖石線刻 (小郡市教委・福大考古研 2007『花立山穴観音古墳』) 図版 6 一右上) ……………	80
図 159	線刻拓影 (小郡市教委・福大考古研 2007『花立山穴観音古墳』) 第 24 図) ……………	80
図 160	花立山穴観音古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) ……………	81
図 161	観音塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『二日市』に加筆) ……………	82
図 162	観音塚古墳墳丘測量図 (1/1,200) (福岡縣 1933『史蹟名勝天然記念物調査報告書』) 第七輯第一図) ……………	82
図 163	観音塚古墳遠景 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	82
図 164	「観音塚壁画面見取圖」(昭和 8 年)(福岡縣 1933『史蹟名勝天然記念物調査報告書』) 第七輯第三図) ……………	83
図 165	「石室実測圖」(昭和 8 年)(福岡縣 1933『史蹟名勝天然記念物調査報告書』) 第七輯第二図) ……………	83
図 166	石室実測図 (1/120) (朝倉高等学校史学部 1969『埋もれていた朝倉文化』) P294) ……………	83
図 167	袖石拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	83
図 168	観音塚古墳後室 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	84
図 169	観音塚古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	84

図 170	観音塚古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ)	85
図 171	観音塚古墳近景 (九州歴史資料館所蔵写真)	85
図 172	仙道古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『甘木』に加筆)	86
図 173	仙道古墳石室実測図 (1/120) (三輪町教育委員会 2001『国指定史跡仙道古墳』第 29 図)	86
図 174	仙道古墳石室奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真)	87
図 175	仙道古墳石室左側壁 (九州歴史資料館所蔵写真)	87
図 176	湯の隈古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『田主丸』に加筆)	88
図 177	湯の隈古墳石室略測図 (昭和 39 年) (平凡社 1964『装飾古墳』森貞次郎実測)	88
図 178	湯の隈古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真)	88
図 179	湯の隈古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ)	89
図 180	狐塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『田主丸』に加筆)	90
図 181	狐塚古墳外形実測図 (1/500) (福岡県 1954『福岡県文化財調査報告書第 17 集』図版第二)	90
図 182	狐塚古墳石室実測図 (1/250) (福岡県 1954『福岡県文化財調査報告書第 17 集』図版第四)	91
図 183	奥室奥壁下部大石面模写図 (福岡県 1954『福岡県文化財調査報告書第 17 集』図版第九)	91
図 184	奥室北側壁面模写図 (福岡県 1954『福岡県文化財調査報告書第 17 集』図版第一一上)	91
図 185	第一次保存施設 (昭和 40 年代頃) (朝倉町教育委員会 1989『あさくら町の歴史ものがたり』所収写真)	91
図 186	奥室南側壁石面模写図 (福岡県 1954『福岡県文化財調査報告書第 17 集』図版第一二)	91
図 187	石室全景 (福岡県 1954『福岡県文化財調査報告書第 17 集』図版第三上)	92
図 188	現在の保存施設 (九州歴史資料館所蔵写真)	92
図 189	奥壁全景 (九州歴史資料館所蔵写真)	92
図 190	古墳略測図 (昭和 27 年) (九州歴史資料館所蔵図)	92
図 191	狐塚古墳石室実測図 (1/60) (朝倉市教育委員会所蔵図)	93
図 192	装飾文様拡大① (九州歴史資料館所蔵写真)	94
図 193	装飾文様拡大② (九州歴史資料館所蔵写真)	94
図 194	狐塚古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ)	94
図 195	小田茶臼塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『田主丸』に加筆)	95
図 196	小田茶臼塚古墳墳丘測量図 (1/1,200) (甘木市 1982『甘木市史資料』考古編図 241)	95
図 197	小田茶臼塚古墳現況 (九州歴史資料館所蔵写真)	95
図 198	小田茶臼塚古墳石室実測図 (1/60) (甘木市 1984『甘木市史資料』考古編図 243)	96
図 199	玄門閉塞石と石室右側壁の線刻石 (甘木市教育委員会 1979『小田茶臼塚古墳』図版 19-2)	96
図 200	線刻壁画拓影 (甘木市教育委員会 1979『小田茶臼塚古墳』第 14 図)	97
図 201	線刻壁画 (甘木市教育委員会『小田茶臼塚古墳』図版 23-2)	97
図 202	月読神社位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『田主丸』に加筆)	98
図 203	月読神社御神体 (九州歴史資料館所蔵写真)	98
図 204	久留米・うきは地域分布図 (国土地理院 1/200,000 地形図『福岡』『熊本』に加筆)	99
図 205	日輪寺古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『久留米西部』に加筆)	100
図 206	「筑後國久留米市日輪寺古墳」(京都帝國大學文學部 1917『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』 京都帝國大學文學部考古學研究室研究報告第一冊 図版第十五)	100
図 207	日輪寺古墳墳丘測量図 (1/500) (久留米市教育委員会所蔵図)	101
図 208	日輪寺古墳石室実測図 (久留米市 1994『久留米市史』第 12 巻第 411 図)	101
図 209	「久留米市日輪寺古墳石室槨壁彫刻模様拓本」(京都帝國大學文學部 1917『肥後に於ける 装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究室研究報告第一冊 図版第六下)	102
図 210	石室見取図 (福岡県文化財保護課指定資料中)	102
図 211	石障装飾図 (福岡県文化財保護課指定資料中)	103
図 212	石室全景 (昭和 50 年) (九州歴史資料館所蔵写真)	103
図 213	玄室右側壁石障 (九州歴史資料館所蔵写真)	103

図 214	日輪寺古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) ……………	103
図 215	浦山古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『久留米』に加筆) ……………	104
図 216	浦山古墳石室・石棺実測図 (1/135) (久留米市 1994『久留米市史』第 12 巻第 388 図) ……………	104
図 217	浦山古墳墳丘現況測量図 (1/500) (久留米市教育委員会所蔵図) ……………	105
図 218	浦山古墳石棺拓影 (久留米市 1994『久留米市史』第 12 巻第 389 図) ……………	105
図 219	浦山古墳遠景 (昭和 26 年) (福岡県文化財保護課指定資料中) ……………	106
図 220	「石室及石棺」(京都帝國大學文學部 1919『九州に於ける裝飾ある古墳』京都帝國大學文學部 考古學研究室研究報告第三冊 図版第二十三) ……………	106
図 221	保存施設設置前 (昭和 37 年) (久留米市教育委員会所蔵写真) ……………	106
図 222	石棺外観 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	107
図 223	石棺内壁文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	107
図 224	浦山古墳石室・石棺正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) ……………	107
図 225	下馬場古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『久留米』に加筆) ……………	108
図 226	下馬場古墳墳丘測量図 (1/800) (久留米市教育委員会 2014『下馬場古墳―第 2・3 次―』第 11 図) ……	108
図 227	石室実測図 (水野真澄 1917「筑前国三井郡草野町大字吉木東古墳」) ……………	109
図 228	下馬場古墳石室・裝飾実測図 (1/100) (久留米市教育委員会 2014『下馬場古墳―第 2・3 次―』 第 7 図) ……………	109
図 229	保存施設設置前 (昭和 40 年頃) (久留米市教育委員会所蔵写真) ……………	110
図 230	下馬場古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	110
図 231	裝飾文様拡大① (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	110
図 232	下馬場古墳石室正射投影画像 (1/120) (科研費 (基盤研究 (A)「VR 画像を活用した日本裝飾古墳 デジタルアーカイブの構築」(1922026) 2007～2010 年) ……………	111
図 233	裝飾文様拡大② (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	111
図 234	前畑古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	112
図 235	前畑古墳石室実測図 (久留米市 1994『久留米市史』第 12 巻第 247 図) ……………	112
図 236	前畑古墳石室全景 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	112
図 237	前畑古墳石室正射投影画像 (1/120) (科研費 (基盤研究 (A)「VR 画像を活用した日本裝飾古墳 デジタルアーカイブの構築」(1922026) 2007～2010 年) ……………	113
図 238	裝飾文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	113
図 239	薬師下北・南古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	114
図 240	薬師下北古墳墳丘測量図 (1/300) (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 史蹟之部挿図) ……………	114
図 241	薬師下北古墳 (昭和 37 年) (久留米市教育委員会所蔵写真) ……………	115
図 242	薬師下北古墳石室実測図 (1/100) (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 史蹟之部挿図) ……………	115
図 243	「古墳附近図並ニ内容圖」(大正 13 年 6 月 仮指定のため草野町長宛文書 個人蔵) ……………	115
図 244	薬師下南古墳墳丘測量図 (1/300) (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 史蹟之部挿図) ……………	116
図 245	薬師下北古墳石室南側露出部 (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯史蹟之部 図版第六) ……………	116
図 246	薬師下南古墳文様拡大模写 (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯史蹟之部 図版第八) ……………	116
図 247	薬師下南古墳石室実測図 (1/120) (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 史蹟之部挿図) ……………	116
図 248	薬師下南古墳全景 (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯史蹟之部図版第七) ……	117

図 249	限 3 号墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	118
図 250	限 3 号墳石室実測図 (1/80) (田主丸町教育委員会 2002『限 3 号墳』第 4 図) ……………	118
図 251	限 3 号墳墳丘測量図 (1/200) (田主丸町教育委員会 2002『限 3 号墳』第 3 図) ……………	119
図 252	奥壁装飾実測図 (1/40) (田主丸町教育委員会 2002『限 3 号墳』第 8 図) ……………	119
図 253	限 3 号墳奥壁 (田主丸町教育委員会 2002『限 3 号墳』図版 4) ……………	119
図 254	中原狐塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	120
図 255	中原狐塚古墳実測図 (水野真澄 1917「筑後国浮羽郡竹野村知徳古墳」) ……………	120
図 256	「狐塚羨道ノ門口ヲ閉塞スル巨石」(福岡縣 1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯 P54) ……	120
図 257	中原狐塚古墳周辺測量図 (1/400) (田主丸町教育委員会 2004『中原狐塚古墳』第 2 図) ……………	121
図 258	奥壁装飾 (田主丸町教育委員会 2004『中原狐塚古墳』巻頭図版 1) ……………	121
図 259	中原狐塚古墳石室実測図 (1/150) (田主丸町教育委員会 2004『中原狐塚古墳』第 6 図) ……………	121
図 260	中原狐塚古墳石室正射投影画像 (1/120) (久留米市教育委員会所蔵画像データ) ……………	122
図 261	玄門から奥壁 (田主丸町教育委員会 2004『中原狐塚古墳』巻頭図版 2 - 上) ……………	122
図 262	玄門前室側右袖石 (田主丸町教育委員会 2004『中原狐塚古墳』図版 7 - 右下) ……………	122
図 263	後室右側壁の連続三角文と舟 (田主丸町教育委員会 2004『中原狐塚古墳』巻頭図版 2 - 下) ……………	123
図 264	奥壁靱拵大 (田主丸町教育委員会 2004『中原狐塚古墳』図版 5 - 下) ……………	123
図 265	寺徳古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	124
図 266	寺徳古墳石室実測図 (1/100) (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 史蹟之部挿図) ……………	124
図 267	寺徳古墳墳丘測量図 (1/250) (田主丸町教育委員会 2001『寺徳古墳』第 4 図) ……………	125
図 268	寺徳古墳石室実測図 (1/80) (田主丸町教育委員会 2001『寺徳古墳』第 7 図) ……………	125
図 269	寺徳古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	126
図 270	右側壁装飾文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	126
図 271	寺徳古墳石室正射投影画像 (1/120) (科研費 (基盤研究 (A))「VR 画像を活用した日本装飾古墳 デジタルアーカイブの構築」(1922026) 2007 ~ 2010 年) ……………	127
図 272	益生田古墳群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	128
図 273	益永支群 9 号墳文様拡大 (昭和 44 年) (久留米市教育委員会所蔵写真) ……………	129
図 274	益永支群 18 号墳石室実測図 (久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』第 5 図) ……………	129
図 275	浮羽工業高校考古学同好会調査古墳石室実測図 (1/120) (久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』 第 7 図) ……………	130
図 276	A 群 12 号墳奥壁 (久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』巻頭図版 1 - (1)) ……………	131
図 277	益生田 A 群 12 号墳平面図 (1/150) (久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』第 9 図) ……………	131
図 278	益生田 A 群 12 号墳石室実測図 (1/100) (久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』第 16 図) ……	132
図 279	益生田 A 群 12 号墳装飾詳細実測図 (1/10) (久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』第 22 図) ……	132
図 280	益生田 A 群 12 号墳石室正射投影画像 (1/120) (九州歴史資料館所蔵画像データ) ……………	133
図 281	装飾拡大 (久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』巻頭図版 1 - (2)) ……………	133
図 282	西館古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	134
図 283	西館古墳墳丘測量図 (1/200) (田主丸町教育委員会 1996『西館古墳』第 3 図) ……………	134
図 284	西館古墳石室実測図 (1/100) (田主丸町教育委員会 1996『西館古墳』第 5 図) ……………	135
図 285	奥壁装飾実測図 (1/10) (田主丸町教育委員会 1996『西館古墳』第 7 図) ……………	135
図 286	人物像顔料付着状況図 (1/5) (田主丸町教育委員会 1996『西館古墳』第 8 図) ……………	136
図 287	西館古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	136
図 288	大塚 8 号墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	137
図 289	「装飾古墳石材」実測図 (1/20) (熊本県立装飾古墳館 1997『福岡県の装飾古墳』P29 挿図) ……	138
図 290	「装飾古墳石材」(昭和 43 年) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	138
図 291	珍敷塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	139

図 292	珍敷塚古墳石室実測図 (1/400) (うきは市教育委員会 2007『屋形古墳群』第 7 図) ……………	139
図 293	珍敷塚古墳奥壁 (北九州市立考古博物館 1983『九州の装飾古墳』図録 P7) ……………	140
図 294	奥壁模写 (昭和 26 年) (福岡縣高等学校教職員組合 1951『北九州古文化図鑑』第二輯 第 14 図) ……	141
図 295	旧覆屋 (昭和 40 年代前半) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	141
図 296	現在の珍敷塚古墳保存施設 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	141
図 297	珍敷塚古墳内部保存施設 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	141
図 298	壁画面の修復作業① (紫外線照射) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	142
図 299	壁画面の修復作業② (クリーニング作業) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	142
図 300	珍敷塚古墳奥壁 e-Heritage 画像 (東京大学池内研究室 e-Heritage プロジェクト) ……………	142
図 301	原古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	143
図 302	原古墳墳丘測量図 (1/400) (うきは市教育委員会 2007『屋形古墳群』第 13 図) ……………	143
図 303	原古墳石室実測図 (1/100) (うきは市教育委員会 2007『屋形古墳群』第 18 図) ……………	144
図 304	原古墳奥壁実測図 (1/20) (うきは市教育委員会 2007『屋形古墳群』第 17 図) ……………	144
図 305	原古墳奥壁保存施設 (平成 10 年頃) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	145
図 306	原古墳石室入口 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	145
図 307	原古墳石室実測図 (1/50) (福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯挿図) ……………	145
図 308	原古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	146
図 309	原古墳石室内 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	146
図 310	原古墳奥壁イラスト (吉井町 1977『吉井町誌』第一巻 P64) ……………	146
図 311	鳥船塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	147
図 312	鳥船塚古墳奥壁実測図 (1/30) (平凡社 1964『装飾古墳』樋口隆康実測) ……………	147
図 313	鳥船塚古墳保存施設 (平成 10 年頃) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	147
図 314	鳥船塚古墳石室実測図 (1/200) (うきは市教育委員会 2018『国指定史跡鳥船塚古墳』第 2 図) ……	148
図 315	鳥船塚古墳奥壁実測図 (1/40) (うきは市教育委員会 2007『屋形古墳群』第 26 図) ……………	149
図 316	鳥船塚古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	149
図 317	床面の状況 (うきは市教育委員会 2018『国指定史跡鳥船塚古墳』図版 1 - (2)) ……………	149
図 318	古畑古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	150
図 319	古畑古墳墳丘測量図 (1/200) (うきは市教育委員会 2007『屋形古墳群』第 32 図) ……………	150
図 320	古畑古墳石室実測図 (1/80) (うきは市教育委員会 2007『屋形古墳群』第 37 図) ……………	151
図 321	古畑古墳奥壁イラスト (吉井町 1977『吉井町誌』第一巻 P65) ……………	151
図 322	古畑古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	152
図 323	富永古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『田主丸』に加筆) ……………	153
図 324	「富永古墳墳丘断面見取圖」(小松眞一 1924「福岡縣浮羽郡福富村竹重の一装飾古墳」 『人類學雜誌』第參拾九卷第四號第五號第六號 P201 第一図) ……………	153
図 325	「石室石材見取圖」(小松眞一 1924「福岡縣浮羽郡福富村竹重の一装飾古墳」P201 第二図) ……	154
図 326	「彩色板石及柱状石材」(小松眞一 1924「福岡縣浮羽郡福富村竹重の一装飾古墳」P202 第三図) ……	154
図 327	「彩色板石Ⅱ見取略圖」(小松眞一 1924「福岡縣浮羽郡福富村竹重の一装飾古墳」P204 第四図) ……	154
図 328	「彩色板石ⅢⅣⅤ実測略圖」(小松眞一 1924「福岡縣浮羽郡福富村竹重の一装飾古墳」P205 第五図) ……	154
図 329	「富永古墳副葬品」(福岡縣 1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯 P49 写真) ……………	155
図 330	「富永古墳石材」(浜田耕作 1928『京都帝國大學文學部陳列館考古圖録』第壹七 (2)) ……………	155
図 331	現在の富永古墳 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	155
図 332	日岡古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『吉井』に加筆) ……………	156
図 333	「日岡古墳奥壁紋様圖」(坪井正五郎 1889「筑後日ノ岡の石槨内面模様」 『東洋学芸雜誌』第六卷第八八号) ……………	156
図 334	「日岡古墳玄門部紋様圖」(坪井正五郎 1889「筑後日ノ岡の石槨内面模様」)『東洋学芸雜誌』第六卷第八八号) ……	156

図 335	日岡古墳墳丘測量図 (1/600) (吉井町教育委員会 1989『若宮古墳群 I』付図 3) ……………	157
図 336	日岡古墳近景 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	157
図 337	日岡古墳石室実測図 (1/80) (吉井町教育委員会 1989『若宮古墳群 I』付図 4) ……………	158
図 338	日岡古墳石室奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	159
図 339	右側壁文様 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	160
図 340	玄門部天井石 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	160
図 341	日岡古墳旧保存施設 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	161
図 342	現在の保存施設 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	161
図 343	日岡古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	162
図 344	重定古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『千足』に加筆) ……………	163
図 345	重定古墳「古窟文字」(文様) (大蔵種教 1825「小図小言」『甘木市史資料』考古編 P2) ……………	163
図 346	「上宮田村重定名窟上圖」(矢野一貞 1853『筑後将士軍談』卷之五十一) ……………	164
図 347	「窟中朱像」(矢野一貞 1853『筑後将士軍談』卷之五十一) ……………	164
図 348	重定古墳墳丘測量図 (1/600) (浮羽町教育委員会 1994『朝田古墳群概報』第 5 図) ……………	164
図 349	羨道部より後室を望む (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	165
図 350	重定古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	165
図 351	後室右側壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	165
図 352	重定古墳石室実測図 (1/100) (浮羽町教育委員会 1994『朝田古墳群概報』第 6～10 図) ……………	166
図 353	後室右側壁模写絵 (日下八光昭和 37 年) (うきは市立浮羽歴史民俗資料館所蔵額装絵) ……………	167
図 354	装飾文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	167
図 355	重定古墳石室正射投影画像 (1/160) (科研費(基盤研究(A))「VR 画像を活用した日本装飾古墳 デジタルアーカイブの構築」(1922026) 2007～2010 年) ……………	168
図 356	塚花塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『千足』に加筆) ……………	169
図 357	「塚鼻古墳奥壁装飾模様」(島田貞彦 1925「筑後に於ける二三の装飾古墳の新例」 『歴史と地理』第十四巻第一號) ……………	169
図 358	塚花塚古墳墳丘測量図 (1/400) (浮羽町教育委員会 1994『朝田古墳群概報』第 12 図) ……………	170
図 359	塚花塚古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	170
図 360	塚花塚古墳石室実測図 (1/80) (浮羽町教育委員会 1994『朝田古墳群概報』第 13～16 図) ……………	171
図 361	塚花塚古墳奥壁・左側壁拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	172
図 362	奥壁文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	172
図 363	古墳現況 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	172
図 364	塚花塚古墳石室正射投影画像 (1/100) (科研費(基盤研究(A))「VR 画像を活用した日本装飾古墳 デジタルアーカイブの構築」(1922026) 2007～2010 年) ……………	173
図 365	盾古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『千足』に加筆) ……………	174
図 366	盾古墳全景 (個人所蔵写真) ……………	174
図 367	文様拡大 (平成 4 年) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	174
図 368	安富古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『草野』に加筆) ……………	175
図 369	安富古墳全景 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	175
図 370	安富古墳墳丘測量図 (1/200) (うきは市教育委員会所蔵図) ……………	175
図 371	安富古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) ……………	176
図 372	安富古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	176

表目次

表 1	詳細報告装飾古墳等一覧 ……………	17・18
表 2	その他の古墳等一覧 ……………	19・20

I はじめに

1. 調査の経緯

(1) 装飾古墳とは

装飾古墳は、古墳時代の4世紀～7世紀にかけて、埋葬施設の内部や外部に彫刻、線刻、顔料による彩色、敲打などの技法を用いて、あるいはそれらを組み合わせて、なんらかの意図的な図文表現を施した古墳である。

全国で10万基以上ともいわれる古墳の中で、現状765基（令和6年10月20日 熊本県立装飾古墳館発表）確認されている装飾古墳は、その半数以上が北部・中部九州に集中し、福岡県内では78基と、都道府県別では熊本県に次いで2番目の数を誇る。

本県における装飾古墳の分布は、筑後川中流域南側の久留米・うきは地域や、八女地域を中心とする南筑後地域、遠賀川流域のある北九州地域に分布のまとまりがあるが、それ以外の地域では点在する。県内装飾古墳のうち、我が国を代表する装飾古墳である桂川町王塚古墳は国特別史跡で、その他国指定史跡は24件、県指定史跡は10件（有形文化財（考古資料）として1件）、市町村指定は9件と、装飾古墳の半分近くは史跡で保護されている。

(2) 福岡県によるこれまでの行政的な取組

ここでは福岡県による装飾古墳の取組の概要について振り返る。

県内における専門家による装飾古墳調査の最古例としては、明治21年（1888）11月24日、坪井正五郎によってうきは市日岡古墳が調査されたのがはじまりである。明治26年（1893）には、道路開削に伴ってうきは市塚花塚古墳が発見され、明治29年（1896）には久留米市寺徳古墳、明治34年（1901）年には八女市乗場古墳、明治45年（1912）には久留米市日輪寺古墳と、装飾古墳が続々と発見された。

国土開発によって遺跡が発見され、その多くが破壊されていく中で、遺跡の保護を図るため、大正8年（1919）6月1日の「史蹟名勝天然紀念物法」が施行される。県内においても大正10年（1921）の水城跡、大宰府跡の史跡指定に続き、大正11年（1922）3月8日には日輪寺古墳、うきは市楠名・重定古墳、乗場古墳が、装飾古墳としては県内で初めて国史跡に指定され、同年10月12日には塚花塚古墳も指定されているなど、装飾古墳の保護を進めている。

さらに、県では史蹟名勝天然紀念物法に基づき、「史跡名勝天然紀念物」の調査を開始し、装飾古墳も調査対象とした。この当時、文化財を所管していた福岡縣學務部社寺兵事課の囑託であった島田寅次郎・川上市太郎らにより、重定古墳、塚花塚古墳、日岡古墳、うきは市富永古墳、乗場古墳、久留米市下馬場古墳・浦山古墳・日輪寺古墳などの筑後川中流域や八女地域の装飾古墳の組織的な調査が実施され、その成果として計8冊にわたる『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』が刊行されたことは特筆される。

戦後、昭和23年（1948）年に「教育委員会法」が公布施行され、福岡県教育委員会が発足する。社会教育課（昭和26～29年（1951～1954）は文化課）が文化財を所管していたが、昭和40年代後半までは行政側の調査体制が不十分であったことから、実際の調査にあたっては九州大学の鏡山猛、高校教員の森貞次郎らを県の調査員として委嘱し、筑紫野市五郎山古墳、宮若市竹原古

墳などの調査を実施した。また、ないし中学・高校の郷土部・考古学部によるうきは市珍敷塚古墳、北九州市日明一本松塚古墳などの調査が行われた。

福岡県による組織的な取組としては、昭和 44～46 年度（1969～1971）に文化庁が装飾古墳保存対策研究会（会長：佐藤敬二：西日本短期大学、九州大学名誉教授）に委託し、王塚古墳をモデルケースとして装飾古墳の保存対策研究を委託したことが最初である。その事業をきっかけに、県内の装飾古墳の保存施設の整備が急速に進み、この研究を得られた保存・活用に関する知見は、県内装飾古墳の保存・活用対策の基盤となった。

昭和 50 年代以降、装飾古墳は基本的に管理団体である市町村が主体となり、調査・保存整備が実施されているが、県は市町村が行う事前の確認調査や保存施設整備、石室内の消毒等に県専門職員を派遣する、あるいは調査や支援という形で協力してきた。平成以降、市町村が文化財専門職員を採用するようになり、管理団体である市町村が独自で確認調査や史跡整備を行っている。

近年の県による装飾古墳に関する取組としては、平成 13 年（2001）に福岡県文化財保護審議会から建議された「福岡県重要・大規模遺跡の保存活用基本計画」で提示された 8 つの遺跡群の中で、装飾古墳群の項目を設けたことが重要である。その中で、「本県は、特別史跡の王塚古墳を代表とした多くの重要な装飾古墳が存在することで知られている。装飾古墳は、筑後地域のように一定地域に群在することもあるが、地域を代表する性格があることから点在することも多く、個別的な史跡指定や整備が進められている。今後は、学術的な調査研究に基づいて、田主丸地区など群在する地区の体系的な整備と活用が課題になる。」と県の文化財保護行政の重要施策として位置付けられた（福岡県文化財保護審議会 2001）。

それを受けて、県と関係市町が協議を行い、平成 16 年度（2004）より県内の装飾古墳の所在市町が協調して、装飾古墳の実践的な調査研究・保存・整備・活用等に関する情報収集並びに意見交換等を横断的な組織レベルで行うことを目的とする「福岡県装飾古墳保存連絡協議会（以下「協議会」）」を設立し、現在まで原則として研修会を年 1 回開催し、情報共有を図っている。

以上、本県に所在する装飾古墳は本県の文化財行政にとって重要な課題の一つであり、今後のさらなる保存活用を図る上でも、装飾古墳の既存情報の整理と公開が求められていた。

（3）本事業の目的

本県では、保護が進んでいない遺跡を対象に悉皆的な分布調査等を行い、積極的に埋蔵文化財包蔵地を把握しようとする取組を進めている。平成 24～28 年には中近世城館跡、平成 29～令和元年度には戦争遺跡、令和 2～5 年度には近世窯業関係遺跡の分布調査を行い、報告書を刊行した。これらの事業の成果として、遺跡を網羅的に把握できたことはもちろんだが、調査の過程で市町村文化財担当者と連携したことで、対象遺跡の認識の共有や理解を深めることができた。

県内の装飾古墳は、昭和 40 年代から石室の完全密閉と温湿度管理が講じられ、原則的に開閉可能なガラス扉等によって石室を密閉し、覆屋を設置することによって彩色の急激な変色等外部の影響を最小限に抑え、かつ定期的な管理や限定的な公開活用を可能とする措置を講じてきた。

一方、こうした保存措置が取られていることから、新たな調査研究活動は大きく制限されており、これまで福岡県下の装飾古墳に関して悉皆的な調査で行政資料化されたものはなく、熊本県立装飾古墳館が全国の調査研究の一環で福岡県の装飾古墳を取り上げた（熊本県立装飾古墳館 1997）

ほか、平成 14 年（2002）に開催された埋蔵文化財研究会の資料集成、熊本県立装飾古墳館による装飾古墳の全国的な悉皆調査（平成 30 年（2018）熊本県立装飾古墳館 2018）がある。

平成 23 年（2011）の東日本大震災において福島県や宮城県等の装飾古墳が被害を受け、平成 28 年（2016）の熊本地震では多くの装飾古墳が被害を受けた。嘉島町井寺古墳では、熊本地震で石室がいつ崩壊するかわからないほどの損傷を受けた。その際、文化財担当職員が個人的に三次元データを作成していたため、被害状況を可視化でき、その後の保存対策にも寄与するなど、三次元データの有用性が確認された。この状況については、平成 29～令和元年度にかけて、熊本県に災害復興支援として福岡県職員も派遣され、状況を逐次把握できたことから、福岡県においても装飾古墳に対する三次元計測による基礎的なデータ収集の意識が高まっていた。

加えて、高松塚古墳・キトラ古墳の壁画劣化問題を契機に文化庁が設置した古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループにおいて、平成 26 年 3 月に装飾古墳の保存・管理、活用の在り方の基本的な考え方について整理された報告書（古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ 2014）が刊行されて、それに基づく、新たな取組が求められていた。

さらに、県内の装飾古墳の基礎データとして、先の協議会により平成 17 年度（2005）に墳丘・石室や図面・写真等の記録の基礎情報、保存管理状況を把握したアンケート「装飾古墳の現状と管理についての調査票」が実施されていたが、公表はされていなかった。

そこで、福岡県では、現在これまで蓄積してきた記録類及び入室可能な石室の三次元計測データを取得・整理し、報告書として公開することで、将来に向けた装飾古墳の調査研究・保存・活用できる基盤を整えるとともに、装飾古墳を保存管理している関係市町と共通認識化を図るため、装飾古墳を対象にした悉皆的な分布調査を 3 ヶ年で実施することとなった。

ちなみに、本事業は、令和 3 年 3 月に策定した、福岡県の文化財保護行政の総合的な施策の大綱である『福岡県文化財保護大綱』の VI 章の、「文化財の悉皆的調査」「県指定文化財の取組」「文化財の保存管理・整備等の取組」「文化財データベースの充実と情報化への対応」「文化財保護ネットワークの強化」に該当する。

参考・引用文献

川上市太郎 1936 「筑前王塚古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第 11 輯 福岡縣

熊本県立装飾古墳館 1997 『福岡県の装飾古墳』

熊本県立装飾古墳館 2018 「全国の装飾古墳一覧（中間報告）」『熊本県立装飾古墳館研究紀要』第 14 集

熊本県装飾古墳館 2024 「全国の装飾古墳数について（令和 6 年（2024）10 月 20 日公表）

<https://kofunkan.pref.kumamoto.jp/sys/wp-content/uploads/2024/10/fe9b941913c149b16b1352d3e9a33770-724x1024.jpg>

古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ 2014 『古墳壁画の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ報告書』

福岡県教育委員会 1975 『特別史跡王塚古墳の保存 - 装飾古墳保存対策研究報告書 -』

福岡県教育委員会 2021 『福岡県文化財保護大綱』

福岡県文化財保護審議会 2001 『福岡県重要・大規模遺跡の保存活用基本計画』

埋蔵文化財研究会 2002 『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』

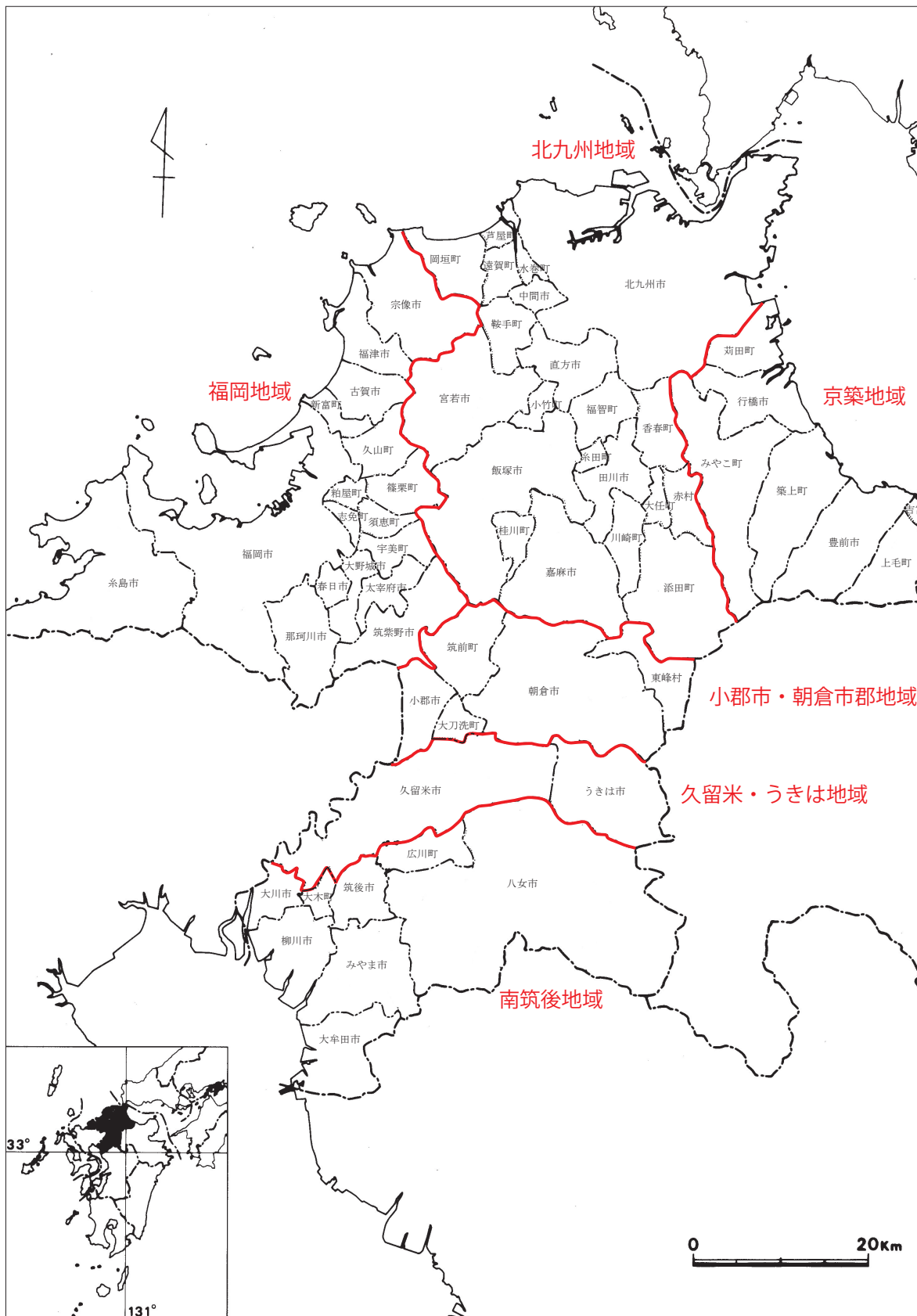


図1 福岡県の自治体と地域区分

2. 調査の基本方針

まず、装飾古墳を調査するにあたり、先の目的に則り、基本方針を次のとおり定め、それに則って実施していくこととした。

(1) 福岡県装飾古墳総合調査基本方針

令和4年6月20日

福岡県教育庁教育総務部長決定

1 目的

国特別史跡王塚古墳に代表される本県の装飾古墳は、全国でも2番目に多い80基余りが確認されており、本県の古墳時代を特徴づける貴重な文化財である。

しかし、これまで県内各地に所在する個々の装飾古墳については、各自自治体で個別に調査が実施されているものの、県内の装飾古墳を網羅するような総合的な分布調査及び研究は実施されてこなかった。

そこで、本県では最新のデジタル機器を用いた総合的な分布調査を関係自治体と連携して実施し、基礎情報の把握と整理に努めるとともに、本県における装飾古墳の歴史的な位置付けや評価、保存管理のためのデジタルデータによるアーカイブ化を行う。

本調査の実施主体となる九州歴史資料館は、装飾古墳の調査研究・活用の拠点化を図り、適切な保護を推進するとともに、関係自治体と連携し、装飾古墳を核とした新たな地域の魅力の創出に繋げる。

2 対象・範囲

本調査は、装飾古墳が集中する筑後地域を中心に、県内全域を対象とする。また、既に古墳が破壊され、装飾石材のみが保管されているものや、文献等で過去に装飾を有する古墳の存在が確認できるものも対象とする。

3 組織・体制

- ・調査は文化財保護課と九州歴史資料館が連携して実施する。文化財保護課は事務手続と事業の統括を、九州歴史資料館は調査をそれぞれ主たる任務とする。
- ・調査の対象、方針やスケジュール、遺跡の評価に関して、学識経験者から指導・助言を受けるため「福岡県装飾古墳総合調査指導委員会」を設置する。

4 スケジュール

令和4年度：既存情報の把握、整理、一次調査（基礎的な情報収集と整理）

令和5年度：二次調査（重要遺跡の詳細調査）

令和6年度：二次調査（補足調査）、総括（調査成果の分析と評価）、調査内容に基づく成果報告書の作成

5 国庫補助等

埋蔵文化財緊急調査費国庫補助（遺跡詳細分布調査 補助率50%）を活用する。

6 調査結果の取扱い

- (1) 調査の成果は調査報告書として刊行し、県内の文化財関係機関や図書館に送付して幅広く閲覧に供する。
- (2) 調査により得られた装飾古墳のデジタルデータ（3D計測データ）は、関係自治体と共有し、今後の保存・活用の基礎資料とする。またデジタルデータは、九州歴史資料館の展示やHP等で積極的な活用を図る。
- (3) 調査により価値付けがなされ、保存が必要と判断された古墳については、国、県又は市町村による史跡指定を積極的に推進する。

(2) 一次調査（悉皆調査）

令和4年度(2022)は、事務局内部で種々の打合せを実施し、「福岡県装飾古墳調査基本方針」を定め、同時に既存情報を集めた「福岡県装飾古墳調査表」以下「調査表」を作成した。

一次調査では、県内に所在する装飾古墳について平成17年度(2005)に実施した「装飾古墳の現状と管理についての調査票」を基礎に、調査指導委員会からの意見を踏まえ、39項目について適宜修正や新規情報の追加を市町村に依頼した。なお、下線有は本調査で追加した項目で、それ以外は装飾古墳連絡協議会の項目である。

本書では、このデータすべての項目を公表するわけではないが、本事業後も定期的に情報を追加・修正していくことで、今後の取組に活用していく。

○一次調査票(福岡県装飾古墳調査表)記載要領

I. 概要

(1) 名称:市町村文化財遺跡分布地図等に記載されている名称を記載してください。名称不詳の場合は仮称でも構いません。読みは、ひらがなで記載してください。

(2) 所在地

(3) 発見の経緯

(4) 墳丘の種類(墳形)と規模:古墳の種類と規模(墳径や墳丘高)の記載してください。

埴輪・石製装飾の有無:埴輪及び石製装飾の有無を記載してください。「有」の場合、埴輪に関しては「円筒埴輪」または「形象埴輪」、石製装飾に関しては「石人」「石馬」など何を模したものかについても記載してください。

(5) 埋葬施設:石室の種類(単室または複室、両袖または片袖)、規模(玄室の長さ・幅など)、石棚・石屋形の有無、石材、その他特記事項を記載してください。

(6) 装飾の内容:施文方法(線刻・浮彫又は彩色)、施文箇所(袖石、石棚など)、色と顔料について記載してください。

(7) 時期:「6世紀後半」のように築造時期を記載してください。

(8) 主な出土遺物:土器は須恵器・土師器まで区別してください。他の出土遺物に関しては、鏡・武器・馬具・装身具など遺物のカテゴリまで記載してください。また、出土遺物の指定の有無及びその範囲についても記載してください。

(9) 史跡指定:指定の有無(「有」の場合、国・県指定まで)と指定年月日(「昭和〇年〇月〇日」のように和暦で記載してください)。

(10) 指定の範囲:(全域又は一部)

(11) 指定面積:(〇㎡)

(12) 所有者:「公有地」又は「民有地」を記載してください。

(13) 管理団体:遺跡の管理を行っている団体名(管理団体が自治体の場合自治体名)を記載してください。

(14) 発掘調査履歴:「昭和〇年 〇〇による調査」のように調査主体を明記したうえで、時系列に沿って記載してください。

(15) 公有化履歴:「昭和〇年 指定地のうち〇㎡を公有化」のように時系列に沿って記載してください。

(16) 整備履歴:「昭和〇年 石室入り口にコンクリート製の覆屋を設置」のように時系列に沿って記載してください。

(17) 文献:以下の例のように、主な文献を列記してください。

例:小林行雄 1951「日本古墳文化の美術」『世界美術全集』2 平凡社

(18) 実測図の有無:実測図の有無を記載してください。実測図がある場合、「玄室・前室・羨道実測図(1/50)」のように実測箇所と縮尺が分かるように記載してください。

(19) 写真の有無:写真の有無を記載してください。写真がある場合、「4×5ポジカラー」のようにフィルムの大

きさと種類が分かるように記載してください。

(20) 3Dデータの有無と種類:石室の3Dデータの有無を記載してください。3Dデータがある場合、「.3ds」などファイル形式も記載してください。

(21) レプリカ・模写の有無と種類:石室全体や石室内装飾のレプリカ・模写(「日下八光氏によるもの」など)の有無を記載してください。レプリカ・模写がある場合についてもその旨を記載してください。

(22) 発見からの経緯:発見されてからの経緯を、時系列に沿って記載してください。

II. 保存と管理について

1. 保存について

(1) 保存状況:墳丘の現状(マウンドを持たない横穴墓は構築された岩盤や周辺の状況)、石室の現状、壁画の状況

(カビ・浸水等)について記載してください。

(2) 保存施設の有無:保存施設の有無について記載してください。保存施設がある場合、施設の状況(扉や柵の種類など)、照明の有無、鍵の管理主体についても記載してください。

(3) 壁画の公開:壁画の公開の有無について記載してください。公開している場合、公開形態(随時・予約制・定期公開など)についても記載してください。

2. 管理について

(1) 管理に関する規則・マニュアルの有無:管理に関する規則・マニュアルの有無について記載してください。ある場合は名称を記載してください。

(2) 壁画の環境管理及び記録方法:環境管理の有無について記載してください。管理を行っている場合、記録方法や記録の開始時期についても記載してください。

(3) 壁画の点検:点検項目(点検者、点検回数、時期、内容、記録方法)について記載してください。また、石室入室に際しての留意点やマニュアル等の有無について記載してください。

(4) 壁画におけるカビ等の微生物に対する処置:処置方法について記載してください。

(5) 石室内の環境等の調査履歴と内容:「昭和〇年 石室内損傷調査」のように、いつどのような調査を行ったかについて、時系列に沿って記載してください。大学等外部機関に依頼したものに関しても、記載してください。

(6) 墳丘等の管理状況:管理状況(どのくらいの頻度で、誰が、どのような管理をしているか)について具体的に記載してください。

(7) ガイダンス施設の有無:装飾古墳に関するガイダンス施設の有無を記載してください。ガイダンス施設がある場合は施設名も記載してください。

III. 整備工事について

(1) 工事の概要:工事の要因・目的、工事内容、工事後の状態について、具体的に記入してください。

(2) 墳丘整備の方法:墳丘整備の方法について、防水対策等も含め記載してください。

(3) 石室の保存・保護対策方法:石室の保存に関する取組について記載してください。

(4) 壁画の保存・保護対策:壁画の保存に関する取組について記載してください。

(5) その他:上記以外に特記事項があれば、記載してください。

(6) 整備報告書の有無:整備報告書の有無について記載してください。整備報告書がある場合、その名称についても記載してください。

IV. 現状での問題点

現状で抱えている問題点や課題等について、簡潔に記載してください。

(3) 二次調査（詳細・重点調査）

二次調査（詳細・重点調査）については、一次調査で把握した装飾古墳の基礎的な情報に基づき、二次調査対象古墳を選定した。選定に際しては、現地への進入の可否や石室内への進入の可否、写真・図面等の基礎的情報収集の程度等を念頭に置き、調査指導委員会に諮りながら二次調査の必要性について検討を進めた。

実際の調査にあたっては、所在市町村の担当者と共に現地を訪問し、古墳や横穴墓の内外の現況確認、三次元計測や写真撮影などの調査を実施した。また、その後も必要に応じて現地を訪問し、補足調査を重ねる場合もあった。市町村や個人が所有する装飾古墳関連の写真や文書等、関連資料の調査も併行して進めていった。

行政による装飾古墳保護が進められる以前の、古い時期の記録しかない装飾古墳については、基礎的な情報として一般的な実測図による記録の作成が必要とされることは改めて言うまでもないが、通常立ち入りが制限されている装飾古墳の石室内に一定期間進入せざるを得ない。また、従来の手実測や高精度のデジタル技術を駆使した計測等を実施した場合、装飾古墳に対して環境面で負担をかける懸念も生じることとなる。そこで、重点調査については、入室が必要な場合は石室の負荷を軽減するため、作業時間を極力短縮することを第一義とした。基本的に石室内はAgisoft社のMetashapeとiPad liderを選択して、これらを併用する手法を採用した。敲打による装飾を行っているのものについては、ひかり拓本を試験的に導入した。

これまで、正射投影図法に基づいた二次元の実測図や写真による装飾古墳の記録は、訓練を経た専門家しか全体像を把握できなかったが、今回作成した古墳の三次元計測による正射投影図は、装飾と石室との位置関係や装飾の広がりなど、石室全体が客観的に見やすいデータすることが可能であり、今後様々な場面での活用も期待できる。

(4) 調査経過一覧

【令和4年度】

6月20日 「福岡県装飾古墳総合調査基本方針」「福岡県装飾古墳総合調査指導委員会設置要項」の教育総務部長決定

8月20日 【第1回福岡県装飾古墳総合調査指導委員会】 於：九州歴史資料館

「福岡県装飾古墳総合調査基本方針」「全体調査スケジュール」「装飾古墳に係る既存情報の整理（一次調査一覧表）項目」「二次調査実施箇所（案）」など説明、意見交換

11月21日 県内市町村に「福岡県装飾古墳総合調査に係る既存情報の整理について（照会）」

（令和4年11月21日付 4教文第1925号）を发出

1月26日 大牟田市萩ノ尾古墳の現地確認、三次元計測調査



図2 現地調査（桜京古墳）



図3 現地調査（山田1号墳）

2月21日【第2回福岡県装飾古墳総合調査指導委員会】於：八女市岩戸山歴史文化交流館
一次調査結果及び二次調査候補地、報告書目次案などについて審議

【令和5年度】

4月11日 小郡市花立山穴観音古墳・筑前町砥上観音塚古墳の現地確認、三次元計測調査

4月18日 八女市乗場古墳・八女市稻荷山18号横穴墓の現地確認、三次元計測調査

5月11日 久留米市益生田A群12号墳の現地確認、三次元計測調査

朝倉市湯の隈古墳・狐塚古墳の現地確認、三次元計測調査

5月26日【第3回福岡県装飾古墳総合調査指導委員会】於：桂川町王塚装飾古墳館
装飾古墳の定義（案）、図文分類（案）などについて審議

1月10日 上毛町穴ヶ葉山古墳・穴ヶ葉山3号墳・山田1号墳・百留1号横穴墓の現地確認、三次元計測調査、上毛町穴ヶ葉山南3号墳の現地確認

1月11日 久留米市日輪寺古墳・浦山古墳の現地確認、三次元計測調査

1月12日 うきは市安富古墳の現地確認、三次元計測調査

1月26日【第4回福岡県装飾古墳総合調査指導委員会】於：久留米市役所
図文の凡例（案）、個別表（案）、装飾古墳編年（案）について審議

2月6日 北九州市一本松塚古墳・下吉田古墳群2・4号墳の現地確認、三次元計測調査

2月26日 嘉麻市西郷横穴墓の現地確認、三次元計測調査

3月10日 宗像市桜京古墳・中間市垣生羅漢百穴の現地確認、三次元計測調査

【令和6年度】

4月25日 田川市経塚横穴墓群110号墓の現地確認、三次元計測調査

5月2日 朝倉市月読神社御神体・湯の隈古墳の現地確認、三次元計測調査

6月28日【第5回福岡県装飾古墳総合調査指導委員会】於：九州歴史資料館

会場は、うきは市るり色ふるさと館の予定であったが、前日までの大雨で会場使用が不可能になったため、急遽九州歴史資料館を会場として委員会を開催。

報告書内容（Ⅰ～Ⅲ章まで）についての審議

7月25日 みやこ町三ツ塚2号墳の現地確認、三次元計測調査

10月18日【第6回福岡県装飾古墳総合調査指導委員会】於：九州歴史資料館
報告書内容（Ⅳ・Ⅴ章）についての審議

令和4年度～6年度事業の総括



図4 第3回調査指導委員会（川島古墳群視察）



図5 第4回調査指導委員会（久留米市）

3. 調査の組織

本調査を実施するにあたり、装飾古墳が所在する市町村と共同で実施するとともに、福岡県装飾古墳総合調査指導委員会を設置し、古墳時代を専門とする学識経験者の3人委員に委嘱し、学術的な価値づけについて意見をいただいた。調査指導委員会は計9回実施した。

福岡県装飾古墳総合調査指導委員会

委員長：重藤 輝行 考古学 佐賀大学芸術文化デザイン学部教授

福岡県文化財保護審議会専門委員

委員：河野 一隆 考古学 独立行政法人文化財機構東京国立博物館学芸研究部長

[令和4年度：九州国立博物館学芸部長]

委員：辻田 淳一郎 考古学 九州大学人文科学研究院教授

[令和4・5年度：九州大学人文科学研究院准教授]

事務局名簿

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
福岡県教育委員会			
教育長	吉田 法稔	吉田 法稔	吉田 法稔 (～4.30) 寺崎 雅巳 (5.1～)
副教育長	上田 哲子	上田 哲子	上田 哲子
理事兼教育総務部長			松永 一雄
教育総務部長	松永 一雄	松永 一雄	
文化財保護課長	明永 好弘	比山 裕隆	比山 裕隆
参事	田上 稔	杉原 敏之 (兼課長技術補佐)	杉原 敏之 (兼課長技術補佐)
課長補佐	赤間 寛人	赤間 寛人	野美山 智美
課長技術補佐	杉原 敏之 (兼企画・埋蔵文化財係長)		
管理係長	広津 壽子	古賀 功親	古賀 功親
企画・埋蔵文化財係長		大庭 孝夫	大庭 孝夫
企画・埋蔵文化財係	大庭 孝夫	岡田 諭	岡田 諭
	城門 義廣	城門 義廣	梶佐古 幸謙
	出見 優人	出見 優人	廣重 知樹
文化財保護係長	岸本 圭	森井 啓次	下原 幸裕 岸本 圭 (アジア文化交流センター併任)
九州歴史資料館			
館長	城戸 秀明	城戸 秀明	城戸 秀明 (～4.30) 吉田 法稔 (5.1～)
副館長	吉村 靖徳	吉村 靖徳	吉村 靖徳

(兼埋蔵文化財調査室長)

総務室長	黒岩 計光	黒岩 計光	山下 雄二
総務班長	高山 美保子	岡本 裕子	岡本 裕子
埋蔵文化財調査室長		吉田 東明	吉田 東明
埋蔵文化財調査室室長補佐			入佐友一郎
文化財調査班長	森井 啓次	進村 真之	進村 真之
文化財調査班	小川 泰樹	岸本 圭	坂本 真一
	坂元 雄紀	坂本 真一	出見 優人
		小田 和利	
大宰府調査班長	吉田 東明	宮地 聡一郎	宮地 聡一郎
	進村 真之	坂元 雄紀	坂元 雄紀
	宮地 聡一郎	小嶋 篤	小嶋 篤
	小嶋 篤		

現地調査その他でお世話になった方々（敬称略：順不同）】福岡県内自治体以外

株式会社とっぺん、京都大学総合博物館、京都大学大学院文学研究科、熊本県立装飾古墳館、国立歴史民俗博物館、月読神社（朝倉市）、東京藝術大学大学美術館、東京国立博物館、東京文化財研究所、根岸競馬記念公苑馬の博物館、TOPPAN ホールディングス株式会社、池内克史、池田朋生、上野武則、朽津信明、榊晃弘、森本哲郎、秦俊治郎、東典子、クラウドニア＝ザンカン

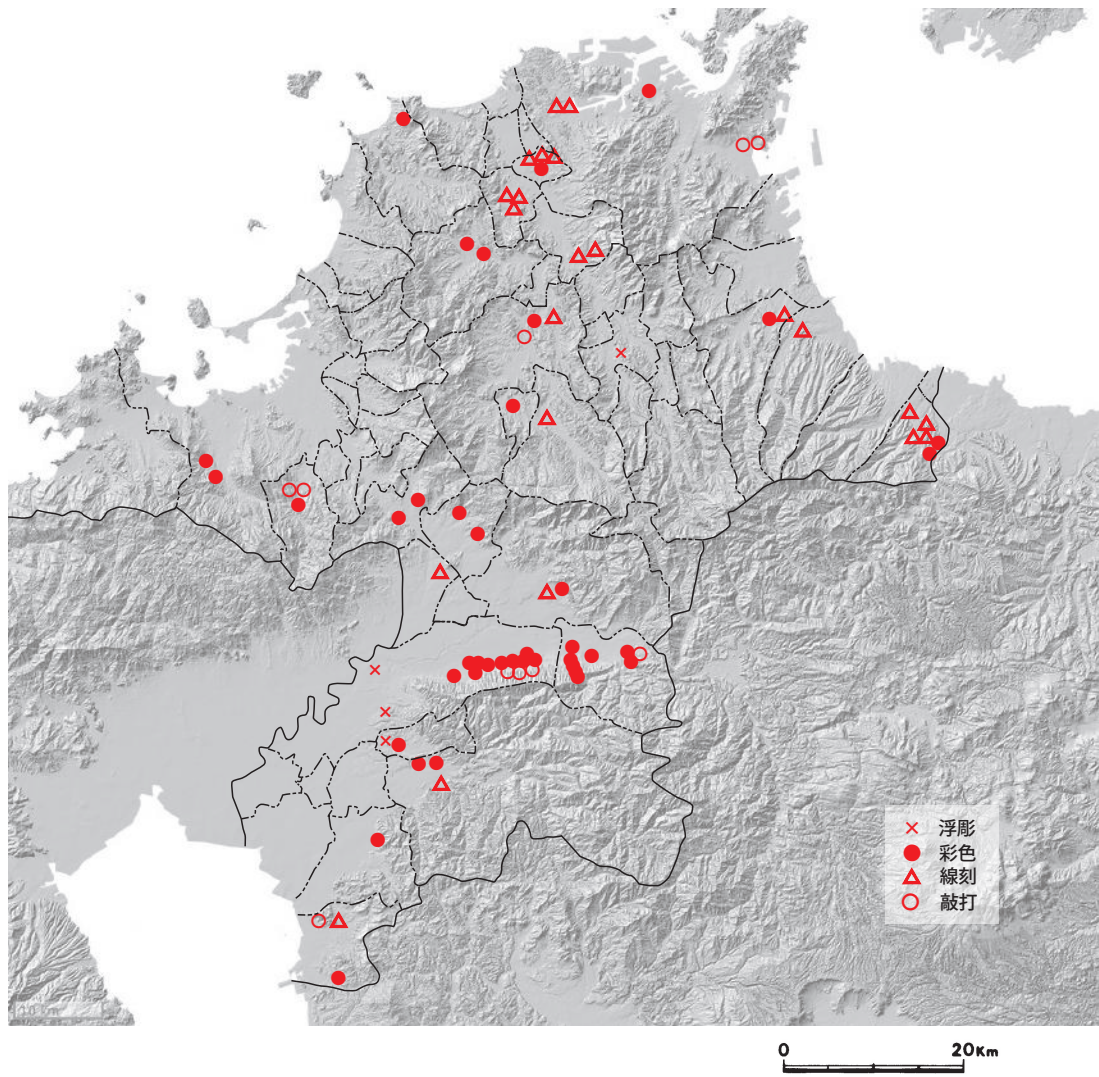


図6 福岡県の装飾古墳分布図

Ⅱ 調査の方法と範囲

1. 装飾古墳の定義

本報告でいう装飾古墳とは、埋葬施設に彫刻や線刻、敲打、彩色により図文を表現した古墳とする。時代を古墳時代とするため、弥生時代に位置づけられる箱式石棺への装飾は含めない。

彩色について、赤色顔料を棺や石室に面的に塗布する事例が多くみられるが、図文による装飾とは考えられず、装飾古墳としては位置づけない。ただし、人為的に広範に塗り分けたような事例については参考資料として扱うものとした。

埋葬施設が古くから開口した古墳・横穴については、壁面に落書きがなされている事例が多い。ただし、図文の内容や刻まれたタッチ等から調査報告書等により評価がなされているものは装飾として扱った。評価が不安定なものについては、参考資料として扱っている。

横穴について、天井を切妻や寄棟に成形し、家を意識したようなものがみられるが、装飾古墳（横穴墓）とは位置づけない。ただし小屋組を意識した装飾的なものについては装飾として位置付けた。なお、熊本県のように横穴墓外面に装飾する事例は福岡県にはみられず、施文場所による分類は行っていない。

装飾古墳の分類については、小林行雄の1964年刊行『装飾古墳』で示され、その後細分等の検討がなされてきたが、この研究史については杉井健が体系的に整理している（杉井2020）。小林は装飾古墳を①石棺系、②石障系、③壁画系、④横穴系に分類し、その後に横口式石槨・陶棺を含めた全国的な視点や、装飾古墳数が最も多く、かつ初期段階のバラエティーに富むものが多い熊本県の状況から再検討がなされてきた。全国的な調査研究の視点では有用であるが、現在福岡県で確認されているものに限定した上では、小林のいう①石棺系、②石障系とも該当古墳数が少ないことから、本報告では細分せず、無用の混乱を避けるため学史的に重要な小林分類を踏襲した。ただし、「石棺系」「石障系」「横穴系」と「壁画系」は比較する基準が異なるため、埋葬形態での基準に統一するものとし、「石棺系」「石障系」「石室系」「横穴系」としたい。以上から、本書での分類案は福岡県に該当がない分類を除くと岩瀬透（岩瀬2000）や高木恭二（高木2012）の考え方に一致する。

分類にあたっては装飾技法も検討の余地がある。先行研究では「浮彫」「線刻」「彩色」「彫刻」の区分が用いられてきたが、福岡県では近年「敲打」技法の事例が増加しており、地域的な特色と考えられる。ついては、「浮彫」「線刻」「彩色」「敲打」「彫刻」の分類を行う。敲打は、線刻とは異なる、太い面的な装飾を指し、必ずしも「敲いて打った」と判断できないものもあるが、これまでの報告等では「敲打」が用いられているため混乱を避けるため新たに名称を定めていない。

2. 図文の分類

図文の分類は、既往の研究と今回の調査票の情報を元に、数段階の分類を行った。

まず幾何学文と具象文に大別し、それぞれ具体的に細分した。幾何学文は、直弧文・鍵手文・円文・三角文・蕨手文・双脚輪状文・線文に分ける。直弧文は学史的には細分案があるが、本県では2例のみであり細分していない。円文は円文（一重）と、塗りつぶし円文、同心円文、車輪文（周縁に加飾される同心円文）に細分した。塗りつぶし円文は大小で分け小形を珠文として抽出する

研究もあるが、その境が曖昧であるため細分していない。三角文は独立して描く三角文と連続三角文、三角文の派生かと考えられる菱形文に細分した。蕨手文は蕨手文から派生するとみられる渦文を細分に加えた。双脚輪状文は同心円文と蕨手文の組み合わせともとらえられるが、学史をふまえ別個に分類した。線文は格子文と放射状文に分類した。

具象文は器財と船、家、動物、葉、人物、天体、神獣に分け、器財と動物はより具体的に細分した。図文の多くはデフォルメされて描かれるため、馬・犬・鹿・猪のように特定することが困難なものもある。人物の多くは単体で描かれるものは少なく、船を漕いだり馬に騎乗したり具体的な行動を伴うものが多いが、分類ではなく個別に記すこととした。

参考文献

岩瀬透 2000 「古墳への装飾 その出現と変遷」『残されたキャンバス 装飾古墳と壁画古墳』大阪府近つ飛鳥博物館図録 22
 小林行雄 1964 『装飾古墳』 平凡社
 杉井健 2020 「八代海沿岸地域における装飾古墳の特質と発生意義」『八代海周辺の装飾古墳』熊本県文化財調査報告書第 337 集 熊本県教育委員会
 高木恭二 2012 「装飾古墳」『講座日本の考古学』第 8 巻 青木書店



図7 装飾図文の具体例

3. 凡例

- 1) 各タイトルの冒頭に付した番号は、福岡県内に所在する装飾古墳の数を示す通し番号である。なお、(参考)と付したものは、過去において装飾古墳として認識されていたが、現在では装飾古墳と認識されなくなったものや、検証するために必要な根拠に欠けており装飾古墳として認める根拠が充分ではないものである。
- 2) 各タイトルの名称は、市町村照会によって回答されたものを正式名称として記し、併せて読み仮名を付した。
- 3) 位置図で使用した図幅は国土地理院発行 1/25,000 地形図を使用し、その図幅名を各図のキャプションに記載した。
- 4) 「立地」は、福岡県内の位置、平野や河川や丘陵との関係、周辺古墳群や近隣の装飾古墳との位置関係に留意して記述した。
- 5) 「経緯」は、発見当時の経緯から、その後、現在に至るまでの調査・整備、話題や問題となった大きな出来事等を記述した。
- 6) 「名称」は、今回の調査で市町村から回答があった正式名称の他、過去に他の呼び方で呼称された古墳・横穴墓等がある場合には、それらを併せて掲載することにより、相互の名称が照合できるように配慮した。
- 7) 「所在地」は、現在の市町村名、大字名を記載した。
- 8) 「指定」は、指定の種類、年月日を記載した。正式名称とは異なる指定名称がある場合は、その名称を記載した。
- 9) 「墳丘」は、墳形が分かる場合はその形状、および大まかな寸法を記載した。公的刊行物による報告が行われている場合はそれに従った。
- 10) 「主体部」は、その形状を記載し、主要な属性をカッコ内に記載した。また、大まかな寸法を併せて記載した。横穴式石室の名称は入口側から見て右・左と呼称した。石室は単室の場合は玄室、複室構造の場合は前室・後室と呼称した。後室の入口部は玄門、前室の入口部は羨門とし、奥壁の反対側は前壁と呼称した。
- 11) 「装飾」は、公的刊行物による報告が行われている場合には原則としてその記述事項に従った。今回の報告書への記載については、装飾技法、確認された部位や形状、解釈された図文に関する内容以外に、明瞭や不明瞭さ、他の解釈や異論等を併せて記載することにより、装飾古墳の理解と解釈に客観性を持たせることができるように配慮した。
- 12) 「遺物」は、古墳・横穴墓等の概要を知ることができる情報に絞って記載した。
- 13) 「顔料」は、書籍や公的刊行物に記載されているものに加えて、これまでに自然科学的な調査に基づく顔料分析が行われている場合はそれらをすべて記載することにより、顔料分析に関する経緯と現在の認識を理解することができるように配慮した。
- 14) 「年代」は、石室構造や出土遺物に関する年代観をもとに実年代で記載した。
- 15) 「調査歴」は、これまでに把握されている公的な発掘調査履歴を中心に記載した。埋蔵文化財保護行政が充実する以前の発掘調査が行われていることが明確に把握されている場合は、併せて記載した。
- 16) 「整備歴」は、これまでに把握されている公的な整備履歴を中心に記載した。

17) 「現況」は、その古墳・横穴墓等が置かれている現在の状況を記載した。

18) 「図面等」は、その古墳・横穴墓等が過去に図面等が作成され報告された履歴がある場合は、それらを記載した。また、今回実施した写真測量による三次元計測調査の他、東京大学池内克史研究室が2005～2014年度に実施したe-Heritageプロジェクトの調査成果（池内克史2015『最新技術でよみがえる九州装飾古墳のすべて』東京書籍）や、河野一隆を研究代表者とする科研費（基盤研究（A）「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」（1922026）2007～2010年の成果も併せて記載した。

19) 「写真」は、過去に九州歴史資料館が装飾古墳の記録作成を目的として撮影し、九州歴史資料館にて現在保管中の各種写真フィルムを中心に、当該市町村が所有する各種写真フィルムや写真データ、昭和37年10月から2年間にわたって藤本四八が撮影し、現在は長野県飯田市美術博物館が保管する写真フィルム、1998・2000～2001年に熊本県立装飾古墳館が委託し、奈良国立文化財研究所（当時）の牛嶋茂が撮影した写真フィルムを併せて記載し、写真資料に関する情報の拡充を図った。なお、他にも装飾古墳に関する写真資料の情報を複数確認することができたが、今回は記載していない。

九州歴史資料館が所管する各種写真フィルムのうち主要なものについては、平成14年度に一部デジタルデータ化が行われているため、それらに関する情報も記載した。

20) 「映像」は、映像制作を主業務とする事業者が作成し、現在各市町村が保管する映像を記載した。

21) 「模写」は、日岡古墳の模写を行った杉山寿栄男、王塚古墳調査に際して模写を行った伊勢幸平・藤野不二男、文化財保護委員会の委嘱を受けて昭和30年以降に県内各地の装飾古墳を行った日下八光の模写に関する情報を記載した。

22) 「パネル」は、九州歴史資料館・九州国立博物館が製作・保管する写真パネルに関する情報を記載した。

23) 「模型」は、正確な調査成果をもとに製作された装飾古墳・横穴墓の模型に関する情報を把握できた限りで記載した。

24) 「文献」は、当該装飾古墳・横穴墓等に関する過去の学術的報告や行政による調査報告書、市町村史等、基礎情報となる文献を記載した。なお、装飾古墳を網羅的に紹介する一般書籍や郷土雑誌については、必要に応じて記載した。

25) 過去に装飾古墳の可能性が指摘された経歴のある古墳や、装飾古墳として指摘された経緯があるが、その後、消滅してしまい検証不可能な古墳などについては、「その他の古墳」として表2にまとめた。これらは参考古墳として「参〇」の通し番号を付けた。

表1 詳細報告古墳等一覧

番号	名称	所在地	種別	指定等
福岡地域				
1	吉武熊山古墳	福岡市西区吉武	彩色	福岡市指定史跡 平成15年3月10日
2	浦江1号墳	福岡市西区金武	彩色	福岡市指定史跡 平成21年3月2日
参1	(参考)東光寺剣塚古墳	福岡市博多区竹下	(線刻)	
3	五郎山古墳	筑紫野市原田	彩色	国指定史跡 昭和24年7月13日 一部解除 昭和59年7月25日
4	殿様塚古墳	筑紫野市山家	彩色	
5	桜京古墳	宗像市牟田尻	彩色・線刻	国指定史跡 昭和51年3月31日
6	権現塚古墳	那珂川市片縄北	彩色	石材の一部を移築保存
7	丸ノ口古墳群V群5号墳	那珂川市片縄西	敲打	那珂川市指定史跡 平成11年6月22日
8	丸ノ口古墳群VI群2号墳	那珂川市片縄西	敲打	那珂川市指定史跡 平成11年6月22日
北九州地域				
9	一本松塚古墳	北九州市小倉北区日明	彩色	(古墳)北九州市指定史跡 昭和48年3月22日 (出土品)北九州市指定有形文化財(考古資料) 昭和48年3月22日
10	相坂横穴群14号横穴墓	北九州市八幡西区本城	線刻	
11	相坂横穴群15号横穴墓	北九州市八幡西区本城	線刻	
12	下吉田古墳群2号墳	北九州市小倉南区吉田	敲打	
13	下吉田古墳群4号墳	北九州市小倉南区吉田	敲打	
14	水町A13-1号横穴墓	直方市上境	線刻	福岡県指定史跡 平成12年3月27日
15	水町B18-1号横穴墓	直方市上境	線刻	福岡県指定史跡 平成12年3月27日
16	垣生羅漢山ⅢA-1号横穴墓	中間市垣生	線刻	福岡県指定史跡 昭和32年8月13日
17	垣生羅漢山ⅢA-2号横穴墓	中間市垣生	線刻	福岡県指定史跡 昭和32年8月13日
18	垣生羅漢山ⅢA-3号横穴墓	中間市垣生	線刻	福岡県指定史跡 昭和32年8月13日
19	垣生羅漢山ⅢA-4号横穴墓	中間市垣生	線刻	福岡県指定史跡 昭和32年8月13日
20	瀬戸横穴墓群第14号横穴	中間市瀬戸	彫刻・彩色	消滅
21	竹原古墳	宮若市竹原	彩色	国指定史跡 昭和32年2月22日
22	損ヶ熊古墳	宮若市原田	彩色	福岡県指定史跡 平成12年3月27日
23	古月横穴2号墓	鞍手郡鞍手町古門	線刻	国指定史跡 昭和7年10月19日 追加指定 昭和61年5月26日
24	古月横穴6号墓	鞍手郡鞍手町古門	線刻	国指定史跡 昭和7年10月19日 追加指定 昭和61年5月26日
25	古月横穴9号墓	鞍手郡鞍手町古門	線刻・彩色	国指定史跡 昭和7年10月19日 追加指定 昭和61年5月26日
小郡市・朝倉市郡地域				
26	花立山穴観音古墳	小郡市干潟城山	線刻	福岡県指定史跡 平成19年2月5日
27	観音塚古墳	朝倉郡筑前町砥上	彩色	筑前町指定史跡 平成7年3月31日
28	仙道古墳	朝倉郡筑前町久光	彩色	国指定史跡 昭和53年5月6日
29	湯の隈古墳	朝倉市宮野	彩色	朝倉市指定史跡 昭和44年12月3日
30	狐塚古墳	朝倉市入地	線刻	福岡県指定史跡 昭和30年3月5日
参2	(参考)小田茶臼塚古墳	朝倉市小田	(線刻)	国指定史跡 昭和54年9月4日
参3	(参考)月読神社御神体	朝倉市須川	(敲打)	石室構築に使用された可能性のある石材
久留米・うきは地域				
31	日輪寺古墳	久留米市京町	浮彫・彩色	国指定史跡 大正11年3月8日
32	浦山古墳	久留米市上津町	浮彫	国指定史跡 昭和26年6月9日
33	下馬場古墳	久留米市草野町吉木	彩色	国指定史跡 昭和19年11月7日 追加指定 平成25年3月7日
34	前畑古墳	久留米市草野町草野	彩色	福岡県指定史跡 昭和38年1月16日
35	薬師下北古墳	久留米市草野町草野	彩色	消滅
36	薬師下南古墳	久留米市草野町草野	彩色	消滅
37	隈3号墳	久留米市田主丸町中尾	彩色	
38	中原狐塚古墳	久留米市田主丸町地徳	彩色	追加指定・名称変更 国指定史跡「田主丸古墳群 中原狐塚古墳」 平成14年3月19日
39	寺徳古墳	久留米市田主丸町益生田	彩色	国指定史跡「寺徳古墳」昭和43年6月11日 追加指定・一部解除 昭和61年8月6日 追加指定・名称変更「田主丸古墳群 寺徳古墳」 平成14年3月19日
40	益生田古墳群 益永支群9号墳	久留米市田主丸町益生田	敲打	消滅
41	益生田古墳群 益永支群18号墳	久留米市田主丸町益生田	彩色	消滅
42	益生田古墳群 浮羽工業高校考古学同好会調査古墳	久留米市田主丸町益生田	敲打?	消滅

表1 詳細報告古墳等一覧

番号	名称	所在地	種別	指定等
43	益生田古墳群 A群12号墳	久留米市田主丸町益生田	敲打	追加指定 国指定史跡「田主丸古墳群 益生田古墳群」 令和6年10月11日
44	西館古墳	久留米市田主丸町益生田	彩色	国指定史跡 平成14年3月19日
45	装飾古墳石材(大塚8号墳石材)	久留米市田主丸町石垣	彩色	久留米市指定文化財(考古資料) 指定名称「装飾古墳石材」平成8年5月29日
46	珍敷塚古墳	うきは市吉井町富永	彩色	国指定史跡「珍敷塚古墳」昭和28年3月31日 名称変更「屋形古墳群 珍敷塚古墳」昭和61年2月25日 追加指定 平成15年8月27日
47	原古墳	うきは市吉井町富永	彩色	国指定史跡「屋形古墳群 原古墳」昭和61年2月25日 追加指定 平成27年10月7日
48	鳥船塚古墳	うきは市吉井町富永	彩色	国指定史跡「珍敷塚古墳 附 鳥船塚古墳」 昭和28年3月31日 名称変更「屋形古墳群 鳥船塚古墳」昭和61年2月25日 追加指定 平成31年2月26日
49	古畑古墳	うきは市吉井町富永	彩色	国指定史跡「珍敷塚古墳 附 古畑古墳」 昭和28年3月31日 名称変更「屋形古墳群 古畑古墳」昭和61年2月25日 追加指定 平成27年10月7日
50	富永古墳	うきは市吉井町富永	彩色	
51	日岡古墳	うきは市吉井町若宮	彩色	国指定史跡 昭和3年2月7日
52	重定古墳	うきは市浮羽町朝田	彩色	国指定史跡 大正11年3月8日 指定名称「楠名重定古墳」
53	塚花塚古墳	うきは市浮羽町朝田	彩色	国指定史跡 大正11年10月12日
54	盾古墳	うきは市浮羽町朝田	(敲打)	消滅
参4	(参考)安富古墳	うきは市吉井町福益	(敲打)	うきは市指定史跡 昭和56年11月1日
南筑後地域				
55	萩ノ尾古墳	大牟田市東萩尾町	彩色	国指定史跡 昭和36年4月5日
56	倉永古墳	大牟田市倉永	線刻	福岡県指定文化財(考古資料) 昭和57年4月1日 指定名称「倉永古墳壁画残欠」
57	倉永茶臼塚1号墳	大牟田市倉永	線刻	
参5	(参考)石櫃山古墳1・2号石棺	大牟田市岬	(線刻)	保存修理後、保管
58	丸山塚古墳	八女市宅間田	彩色	国指定史跡 昭和53年3月24日
59	乗場古墳	八女市吉田	彩色	国指定史跡 大正11年3月8日
60	稲荷山横穴群第18号墓	八女市立花町北山	線刻	
61	成合寺谷古墳	みやま市瀬高町本吉	彩色	福岡県指定史跡 平成25年3月29日
参6	(参考)石神山古墳出土石棺	みやま市高田町上楠田	(線刻)	(古墳)国指定史跡 昭和51年2月6日 (武装石人)国指定重要文化財(考古資料) 昭和51年6月5日
62	石人山古墳	八女郡広川町大字一条	彫刻・彩色	国指定史跡 昭和52年7月19日
63	弘化谷古墳	八女郡広川町大字広川	彩色	国指定史跡 昭和52年7月19日
筑豊地域				
64	川島古墳	飯塚市川島	彩色	福岡県指定史跡 平成4年9月2日
65	城腰1号横穴墓	飯塚市佐興	線刻	
66	山王山古墳	飯塚市西徳前	敲打	福岡県指定史跡 平成27年9月25日
67	経塚横穴墓群110号墓	田川市伊田	浮彫	
68	西郷横穴群第1号横穴	嘉麻市西郷	線刻	
69	王塚古墳	嘉穂郡桂川町寿命	彩色	(古墳)仮指定 昭和9年11月9日 国指定史跡 昭和12年6月15日 国特別史跡 昭和27年3月29日 追加指定 昭和52年7月2日 (出土品)国指定重要文化財(考古資料) 昭和31年6月28日
京築地域				
70	皆見大塚古墳	京都郡みやこ町皆見	彩色	福岡県指定史跡 令和元年9月13日
71	三ツ塚古墳群2号墳	京都郡みやこ町皆見	線刻	
72	黒部古墳群6号墳	豊前市松江	線刻	福岡県指定史跡 昭和55年3月1日
73	穴ヶ葉山古墳	上毛町下唐原	線刻	国指定史跡 昭和14年9月7日
74	穴ヶ葉山3号墳	上毛町下唐原	線刻	
75	穴ヶ葉山南3号墳	上毛町下唐原	線刻	移築保存
76	百留横穴墓群1号墓	築上郡上毛町百留	彩色	上毛町指定史跡 昭和49年11月25日
77	百留横穴墓群6号墓	築上郡上毛町百留	彩色	上毛町指定史跡 昭和49年11月25日
78	山田1号墳	築上郡上毛町安雲	線刻	上毛町指定史跡 昭和55年4月1日

表2 その他の古墳等一覧

番号	名称	所在地	内容
福岡地域			
参7	上の浦(かみのうら)古墳	筑紫野市牛島	発掘調査時に彩色が確認されたが、文様表現が確認されなかったため装飾古墳と判断されなかった。 (筑紫野市教育委員会1986『上の浦遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第14集) H14北部九州装飾古墳画像データベース2点(No.0326・0327)、6点(No.0955～0960)
参8	久戸10・11号墳	宗像市河東	発掘調査で赤色顔料確認。検討の結果、文様ではないと判断された。 (宗像町教育委員会1979『久戸古墳群』宗像町文化財調査報告書第2集) H14北部九州装飾古墳画像データベース久戸10号墳8点(No.0311～0318)、久戸11号墳7点(No.0319～0325)
参9	大石岡の谷古墳	福津市大石	昭和48年9月に開口、彩色古墳として報道された。 その後、開口部閉塞のため詳細不明。 (福津市教育委員会2014『国指定史跡津屋崎古墳群保存管理計画』) 国指定史跡「津屋崎古墳群」平成17年3月2日
参10	船原古墳	古賀市谷山	『古賀市教育委員会2004』で彩色壁画の可能性が報告された。 その後の理科学的分析により赤色顔料ではないことが判明した。 (古賀市教育委員会2004『船原古墳群I』古賀市文化財調査報告書第36集、古賀市教育委員会2016『船原古墳I』古賀市文化財調査報告書第68集) 国指定史跡 平成28年10月3日
北九州地域			
参11	土手の内(土居の内)横穴墓群	中間市下大隈垣生	『平凡社1964』装飾古墳要覧に記載。 『埋蔵文化財包蔵地カード』『土手の内古墳群』の項には「土手の内丘陵上、東面、南面、西面する計八基の横穴墓が見られる。一号墳は東面し内部に線刻の装飾あり」とある。墓室左側壁に、弓に矢をつがえている左右対称の線刻と動物らしい線刻がある。描かれた矢には鏑式と雁又式とがある、と記されている。その後、宅地造成により消滅したらしく所在不明となった。 昭和43年、中間市教育委員会が開口する2基の横穴墓を確認し遺物を回収。 『講談社1965』装飾古墳地名表には「船 彫刻(線刻)渡辺正気氏調査破壊消滅」とある。
久留米・うきは地域			
参12	特別ノ名称ナシ 若宮古墳	久留米市草野町	『福岡県1928』一覧表に記載。「石材大ナルモノヲ用ヒタリ僅カニ斑紋ノ跡トモ見ユル装飾アリ」 『平凡社1964』装飾古墳要覧 『講談社1965』装飾古墳地名表に「図文不明瞭 色彩(赤)戦後破壊消滅」とある。
参13	鹿毛塚古墳	久留米市草野町	『福岡県1928』一覧表に記載。「内壁ニ文様濃シ」 『平凡社1964』装飾古墳要覧 『講談社1965』装飾古墳地名表に「同心円文・蕨手文 色彩(赤・青)昭和28年破壊消滅・鏡山猛氏示教」とある。
参14	特別ノ名称ナシ 上緒富古墳(上緒富古墳)	久留米市草野町	『福岡県1928』一覧表に記載。「頂上ニ地藏尊ヲ祀ル内壁僅カニ文様ヲ見ル」 『平凡社1964』装飾古墳要覧(上緒富古墳)、『国立歴史民俗博物館1993』、『熊本県立装飾古墳館1997』に記載。
参15	特別ノ名称ナシ 上江下小路古墳	久留米市草野町	『福岡県1928』一覧表に記載。「朱青ノ紋様ヲ僅カニ残ス明瞭ナラズ」 『平凡社1964』装飾古墳要覧(下小路古墳) 『国立歴史民俗博物館1993』、『熊本県立装飾古墳館1997』に記載。
参16	山ノ下古墳	久留米市草野町	『福岡県1928』一覧表「僅カニ朱模様ヲノコス」、 『講談社1965』装飾古墳地名表に「図文不明瞭 色彩(赤) 昭和20年代前半破壊消滅」とある。
参17	特別ノ名称ナシ(発心)	久留米市草野町	『福岡県1929』一覧表に記載。 「内壁ニ朱ノ痕跡アリ」
参18	森塚古墳(森崎古墳)	久留米市草野町	『講談社1965』装飾古墳地名表に「森崎古墳 草野町大字吉木・字下上江下 図文不明瞭 色彩(赤・青)二基のうち破壊された一基か」とある。
参19	中馬場古墳	久留米市草野町	『講談社1965』装飾古墳地名表に「図文不明瞭 色彩(赤)淵上米蔵氏報告」とある。 「埋蔵文化財包蔵地調査カード」(昭和41年3月古賀寿)には草野町大字吉木字中馬場の古墳について「若宮八幡宮参道西側にある円墳で封土は削り取られて東西18m、南北10m、高さ5.5m位になっているが規模雄大であったと思われる。石室も大きく玄室の広さ4.15×3.15mある。玄室の両側壁、奥壁に朱の彩色が残っている。」とあり、この古墳の事を指す可能性がある。
参20	中馬場2号墳	久留米市草野町	昭和39年8月22日淵上米蔵「埋蔵文化財包蔵地調査カード」に記載。若宮八幡宮参道近くの古墳で、損壊を受けるが前室・玄室共に大きいとある。玄室奥壁に赤色で文様の描写があり、玄室両側壁にも「点々と朱の色を見る」と記される。 『福岡県教育委員会1979』030548「中馬場第2号墳 径20m、高さ約7m、複室、装飾古墳」と記載がある。
参21	合原4号墳	久留米市草野町	石室完存 過去に公表された書籍等なし。 私有地内にあり本格的な調査履歴なし。
参22	大橋寺古墳	久留米市田主丸町地徳	『講談社1965』装飾古墳地名表「大橋寺(だいきょうじ)古墳 円文・同心円文 彩色(赤・青)戦後破壊消滅し、石室の石一枚残す」とある。
参23	清澄橋(清長橋)古墳	久留米市田主丸町石垣	昭和31年8月、35年8月12日、37年2月23日金子文夫調査『埋蔵文化財包蔵地調査カード(田主丸町)古墳3』に記載がある。 「前期前方後円墳で竪穴式石室の内面に朱・青の不明の描画装飾あり、紋様明らかならず」と記載がある。 『講談社1965』装飾古墳地名表には「円文・同心円文・馬 彩色(赤・青)昭和30年頃破壊消滅」とある。 現在把握している古墳との照合はできていない。

表2 その他の古墳等一覧

番号	名称	所在地	内容
参24	清澄橋古墳	久留米市田主丸町石垣	昭和41年3月28日金子文夫調査『埋蔵文化財包蔵地調査カード(田主丸町)古墳3』に記載がある。 「低い前方後円墳、横穴式(石室)、彩色描画古墳」とある。 現在把握している古墳とは照合できていない。上記参23との関係も不詳だが、別古墳を指すものと思われる。
参25	益永7号墳	久留米市田主丸町益生田	『埋蔵文化財研究集会2002』には『国立歴史民俗博物館1993』を主要文献に掲げるが記載なし。恐らく益永9号墳を指すものと思われる。
参26	益永184号墳	久留米市田主丸町益生田	昭和40年代作成『埋蔵文化財包蔵地調査カード(田主丸町)古墳6』に記載がある。 墳丘南北11m、東西16m、石室は羨道部が長い珍しい形状。 「同心円文3つあり」と記載がある。 現在把握している古墳との照合はできていない。
参27	益生田古墳	久留米市田主丸町益生田	『平凡社1964』装飾古墳要覧にある「益生田古墳」は益生田古墳群中の一つを指すものと思われるが、どの古墳に対応するのか照合できていない。 『講談社1965』装飾古墳地名表には「円文・同心円文 彩色(赤・青・白)昭和20年破壊消滅」とある。
参28	紋塚古墳	うきは市吉井町富永	『福岡県1939』に、昭和14年より以前に破壊された旨の記載。 『平凡社1964』装飾古墳要覧 『講談社1965』装飾古墳地名表には「同心円文 彩色(赤・青)破壊消滅」とある。 『国立歴史民俗博物館1993』一覧表に記載。
参29	稲荷塚	うきは市吉井町竹重	『吉井町1977』に記載。 同心円・靱等が描かれた円墳。「描画石現存せず」とある。 吉井町竹重の稲荷神社境内にNo.50富永古墳が所在することから、この古墳のことを指すものと思われる。 (吉井町1977『吉井町誌』第一巻)
南筑後地域			
参30	上妻郡吉田村古墳	八女市吉田	『筑後将士軍談』上妻郡吉田村古墳條に、「吉田茶屋ノ西伊勢社ヨリモ二丁許西ノ山ニ石窟アリ深サ一丈五尺横奥ノ間七尺五寸五分次ノ間六尺一寸五分イト太ク美シキキニテテレル窟アリ奥ノ正面ノ石壁ニ一丈六寸字ヲ彫付タリ後世ノサカシラトハ見エズ」とあり、斎藤忠は「装飾古墳を意味したものかもしれない」とする。(斎藤忠1952『装飾古墳の研究』吉川弘文館)
参31	釘崎11号墳	八女市豊福	江口寿高1984「真夏の昼の夢—八女古墳群に新たな装飾発見—」『筑後考古』第9号に記載。袖石に同心円状の赤い装飾。現在、開口部は土砂流入により狭小のため確認できていない。 具体的古墳名の記載は無いが、『八女市24集』の位置表示をもとに、現在では釘崎11号墳に同定される。
参32	釘崎6号墳	八女市豊福	『熊本県立装飾古墳館1997』に記載。釘崎11号墳に同定。
参33	釘崎10号墳	八女市豊福	『小田富士雄編1991』に記載。釘崎11号墳に同定。
参34	磯良塚傍の採集石材	大川市酒見	『大川市教育委員会1994』に報告が掲載。大川公園内の磯良塚傍に置かれていた赤色顔料塗布と線刻が施された凝灰岩平石。端部に抉り込みがあることから石障の可能性が指摘された。 (大川市教育委員会1994『酒見貝塚』大川市文化財調査報告書第2集)
京築地域			
参35	綾塚古墳	京都府みやこ町勝山中黒田	昭和50年2月に装飾古墳の可能性が報道されたが、みやこ町教育委員会による科学的分析の結果(調査者は東京文化財研究所 朽津信明)、顔料は検出されず、装飾古墳ではないと判断された。(勝山町史編纂委員会2006『勝山町史』上巻) 国指定史跡 昭和48年4月14日
参36	中村西峰尾遺跡線刻石	豊前市中村築上郡築上町上河内	調査時に線刻装飾古墳の可能性が指摘されたが、検討の結果、古墳石室に使われた石材である可能性は低いと考えられるに至った。 (九州歴史資料館2014『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告—15—』)
参37	百留横穴墓群2号墓	築上郡上毛町大字百留	『森貞次郎1985』に記載。その後、上毛町教育委員会による調査の結果、装飾は確認されなかった。(『上毛町教育委員会2010』) 町指定史跡 昭和49年11月25日
参38	百留横穴墓群3号墓	築上郡上毛町大字百留	『森貞次郎1985』に記載。その後、上毛町教育委員会による調査の結果、装飾は確認されなかった。(『上毛町教育委員会2010』) 町指定史跡 昭和49年11月25日

Ⅲ 福岡県の装飾古墳

(1) 福岡地域



図8 福岡地域分布図 (1/200,000)

1 吉武熊山（よしたけくまやま）古墳

立地 福岡県の北西部、早良平野の南端に位置する。室見川上流域左岸の丘陵斜面に占地する、計145基からなる金武古墳群中の1基である。小群単位では金武古墳群中最も東端に位置し、ほぼ南北にのびる丘陵上に築かれた、12基の円墳によって構成されるK群に帰属する。同じ彩色系装飾古墳である浦江古墳群1号墳は、本古墳から1km南東にある。

経緯 昭和53年12月初旬、福岡市教育委員会による早良平野内の埋蔵文化財分布調査によって、彩色壁画を有した古墳であることが確認された。ちょうどその前後に、本古墳が分布する丘陵を造成・開発する計画の問い合わせがあったこともあり、市教育委員会では昭和54・55年の2ヵ年にわたって吉武古墳群K群6～12号墳の測量・実測を行った。

調査終了後に消毒を実施し、密封状態による保護が図られている。

名称 吉武K7号墳（『福岡市教委1981』） 吉武熊山古墳（指定名称）

所在地 福岡市西区吉武

指定 福岡市指定史跡「吉武熊山古墳他3基」平成15年3月10日

墳丘 円墳（径15～16m、高3.4m）

主体部 横穴式石室（単室両袖型、南西向きに開口、花崗岩）全長6.1m、玄室幅2.2m、玄室長2.85m、玄室高2.85m

装飾 玄室の奥壁腰石と、それに接する左右側壁腰石に赤単色による描画が確認され、肉眼観察ではベンガラと推測された。文様描写では筆の使用は認められず、顔料の塊を指でこすりつけるような塗布手法が想定されている。

奥壁は腰石のほぼ全面に描かれ、壁面の上部2/3に同心円文・渦文・帯状曲線文を配し、下部1/3の無文帯のほぼ中央に、唯一の具象文様である右手を上げた人物像を配置する。右手を斜め上方にひろげた図形だが、左手と下半身にあたる部分に顔料は認められない。



図9 吉武熊山古墳位置図（1/25,000）

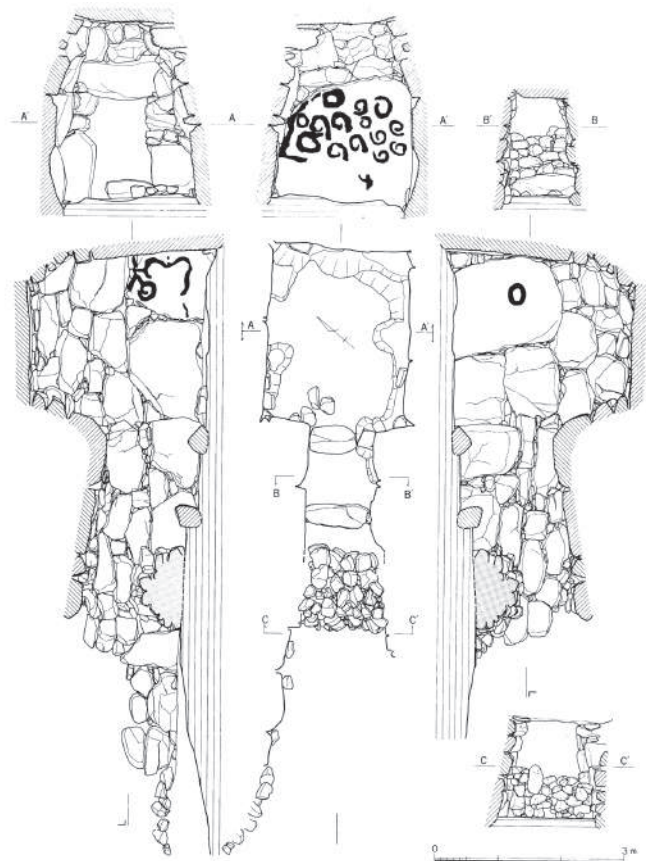


図10 吉武熊山古墳石室実測図（1/120）



図11 吉武熊山古墳の壁画装飾 (1/40)

側壁部の装飾は、その前方に接する腰石にも描くスペースが充分にあるものの、奥壁に接する部分以外には認められない。左壁面は硫化物の付着で判別が困難だが、確認できた文様は上部に渦文、その上・右・下辺に縁取り状に曲線を描く。右壁は横長の同心円文を一つ描く。

遺物 玄室～羨道後半部の攪乱土、および閉塞部前面の墓道埋土から土師器・須恵器・武器・馬具・中世遺物出土。

顔料 赤（肉眼観察でベンガラ）（『福岡市教委 1981』）

年代 6世紀後半

調査歴 昭和53年度 分布調査で装飾壁画発見（福岡市教育委員会）

昭和54・55年度 重要遺跡範囲内容確認調査（福岡市教育委員会）

現況 発掘調査後、埋戻して現状保存

図面等 昭和55年度 古墳群位置図、墳丘測量図、石室実測図、装飾壁画実測図（福岡市教育委員会）

写真 福岡市教育委員会 1980 撮影 35mmカラーリバーサル・モノクロ

パネル 九州歴史資料館 パネル1点（106×126）

文献 福岡市教育委員会 1981『重要遺跡確認調査報告書Ⅰ－装飾古墳・吉武K7号墳－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集



図12 吉武熊山古墳墳丘測量図 (1/300)



図13 吉武熊山古墳奥壁

2 浦江（うらえ）1号墳

立地 福岡県の北西部、博多湾に面した早良平野の南端に位置する。早良平野を南北に貫流する室見川上流域の左岸、河口から9kmほど遡上した場所にある。西側に聳える飯盛山や西山から東側に派生した丘陵斜面には、野方古墳群、羽根戸古墳群、金武古墳群などの後期群集墳が形成されており、本古墳群はそのうちの一つである。西山北東麓の扇状地上に所在し、隣接する金武古墳群が丘陵上に展開することと比較すると、やや低地に立地する。

経緯 浦江古墳群は、福岡市教育委員会が2001年から開始した、圃場整備事業に伴う発掘調査によって確認された。計13基が確認されており、周辺にはさらに多くの古墳が存在することが予想されている。立地からA群とB群に区分され、A群において径20mを超える2基の円墳（1・3号墳）のうち、1号墳は彩色壁画を有する古墳であることが確認された。

名称 浦江古墳群1号墳（『福岡市教委2005』）

浦江1号墳（指定名称）

所在地 福岡市西区金武

指定 福岡市指定史跡 平成21年3月2日

墳丘 円墳（径23～25m・二段築成）

主体部 横穴式石室（複室、後室両袖・前室片袖、南向きに開口、花崗岩石材使用）全長7.9m、玄室幅2.1～2.4m 玄室長2.9～3.3m

装飾 後室奥壁に赤一色で描画される。奥壁左側に描かれた壁画は比較的明瞭で、荒れた花崗岩の壁面には顔料が厚く残っていた。右側石材は表面が比較的平滑だったためか、赤色顔料がごくわずかに残るのみで遺存状況が極めて悪い。

左側石材の中央に上下二段に蕨手状の渦巻き文様が見られる。右側石材の右側下方にも同様の文様が存在し、左側にも同様の文様が描かれていた可能性がある。しかし中心に位置する右側石材中央



図14 浦江1号墳位置図 (1/25,000)

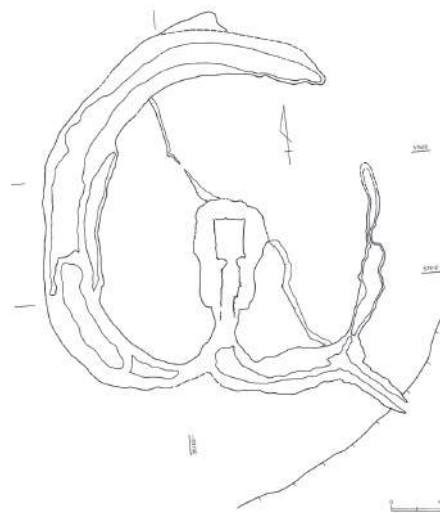


図15 浦江1号墳墳丘測量図 (1/600)



図16 浦江1号墳奥壁 (1/30)

部に描かれた壁画等、その他の文様については判然としない。石材の隙間に使用された小石材にも壁画の痕跡が見られることから、壁画は奥壁全体にわたって描かれていたものと思われる。

発掘調査の際には、玄室床面の下面敷石上にも赤色顔料が認められ、石室が完成した状態で壁画が描かれていることや初葬段階で描かれた可能性が高いことが確認された。

顔料 赤（『福岡市教委2005』）

遺物 玄室・前室内から多く出土。須恵器・武器・馬具・装身具（福岡市教育委員会）

年代 6世紀後半

調査歴 平成14年度 圃場整備事業に伴う発掘調査（福岡市教育委員会）

現況 発掘調査後、真砂土による埋戻しを行い現状保存

図面等 平成14年度 古墳群位置図、墳丘測量図、石室実測図、装飾壁画実測図、床面赤色顔料位置図（福岡市教育委員会）

写真 九州歴史資料館2002撮影4×5カラーリバーサル、35mmカラーリバーサル
福岡市教育委員会2002撮影6×7・35mmカラーリバーサル、6×7モノクロ

文献 福岡市教育委員会編2005『浦江古墳群1号墳-浦江遺跡第5次3-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第862集

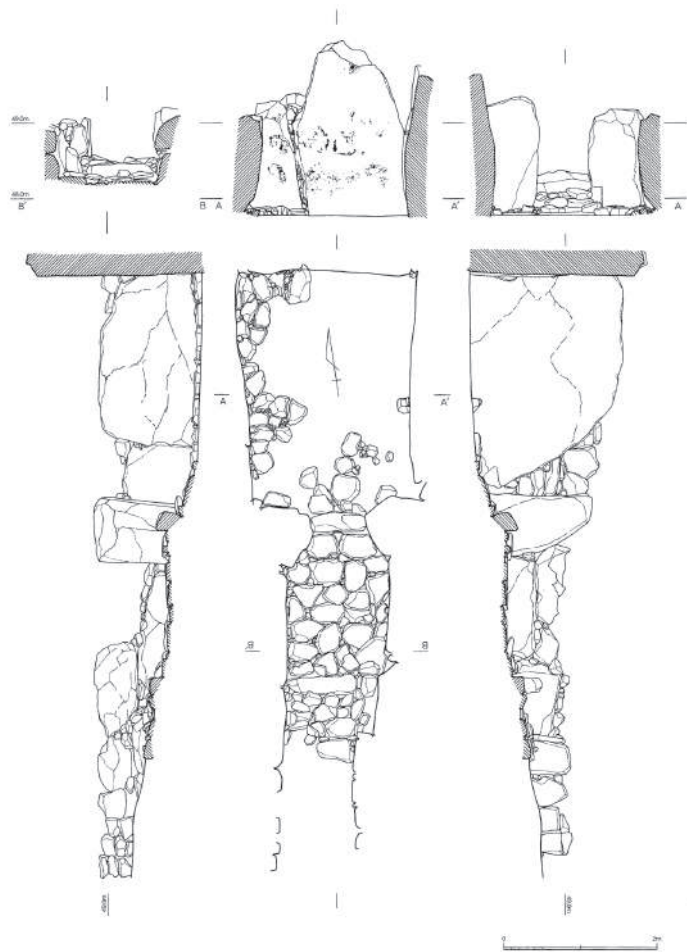


図17 浦江1号墳石室実測図（1/100）



図18 奥壁の装飾

(参考1) 東光寺剣塚(とうこうじけんづか)古墳

立地 福岡県の北西部、博多湾に面した福岡平野中央部、那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵の西側に位置する古墳である。標高9～11mの那珂川に近い丘陵平坦面上に、前方部を西に向けて築造される前方後円墳である。北西に隣接してやはり前方後円墳の剣塚北古墳があり、また南東400mの位置には前期前方後円墳として著名な那珂八幡古墳がある。

周辺は開発がかなり進んでおり旧来の自然景観をほとんど留めてはいないが、現在は大規模工場の敷地内にあり、緑地として保存が図られている。

古墳の周辺には弥生時代～古代の集落遺跡として知られる比恵・那珂遺跡群が展開しており、とりわけ6世紀後半から7世紀代に比定される大規模倉庫群とそれを取り囲む柵列群については、日本書紀に記載のある「那津官家」に推定されていることから、本古墳の被葬者との関連を想定する向きもある。

経緯 発見は古く、『筑前国続風土記』に「剣塚」として取り上げられており、この時点で既に開口していたことが分かる。『筑前国続風土記拾遺』には、石室内に前方部側の側壁を欠いた石棺(石屋形)が置かれていることや石佛が安置されていること、古人の宅地ではなく古墳であること、等の記載がある。『福岡縣 1925』では「由緒あると思はるゝ古墳」の一つに「東光寺古墳」として取り上げられ、古来は剣塚と称されていたことや周濠の痕跡が認められること、等が記載されるが、石室内の線刻装飾に関する記載はない。『福岡縣高等学校教職員組合 1951』には墳丘実測図が掲載されるが、解説文中に線刻装飾に関する記述はみられない。

平凡社 1964『装飾古墳』には壁画系装飾古墳として剣塚古墳の名称が見えることから、これ以前に本古墳が装飾古墳として認識されていたことが分かる。同様に、講談社 1974『古代史発掘 8 装飾古墳と文様』では船の彫刻(線刻)のある装飾古墳として本古墳の名が掲げられ、教育社 1985『装飾古墳』では自由画風線刻による多数の船が描かれた壁画系装飾古墳として一覧表中に項目が記載される。



図19 東光寺剣塚古墳位置図 (1/25,000)

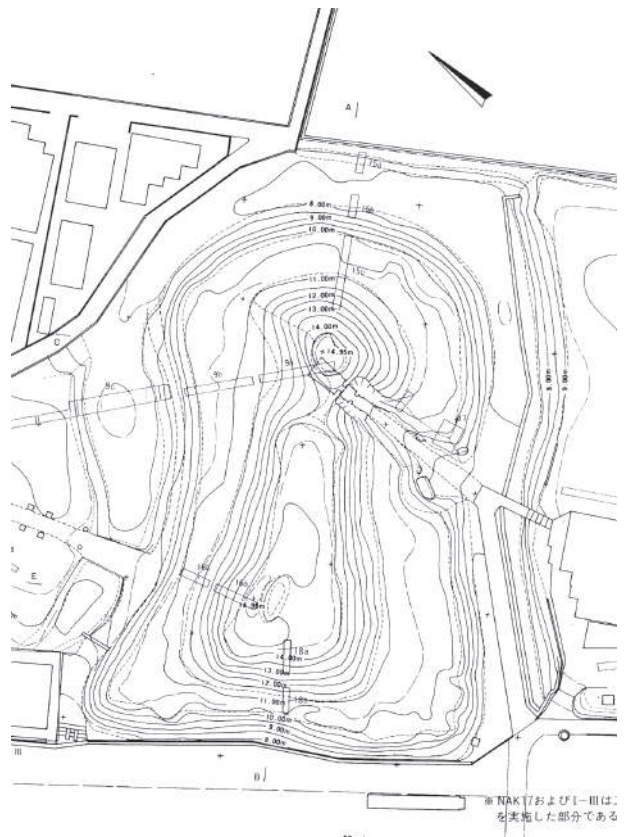


図20 東光寺剣塚古墳墳丘測量図 (1/1,000)

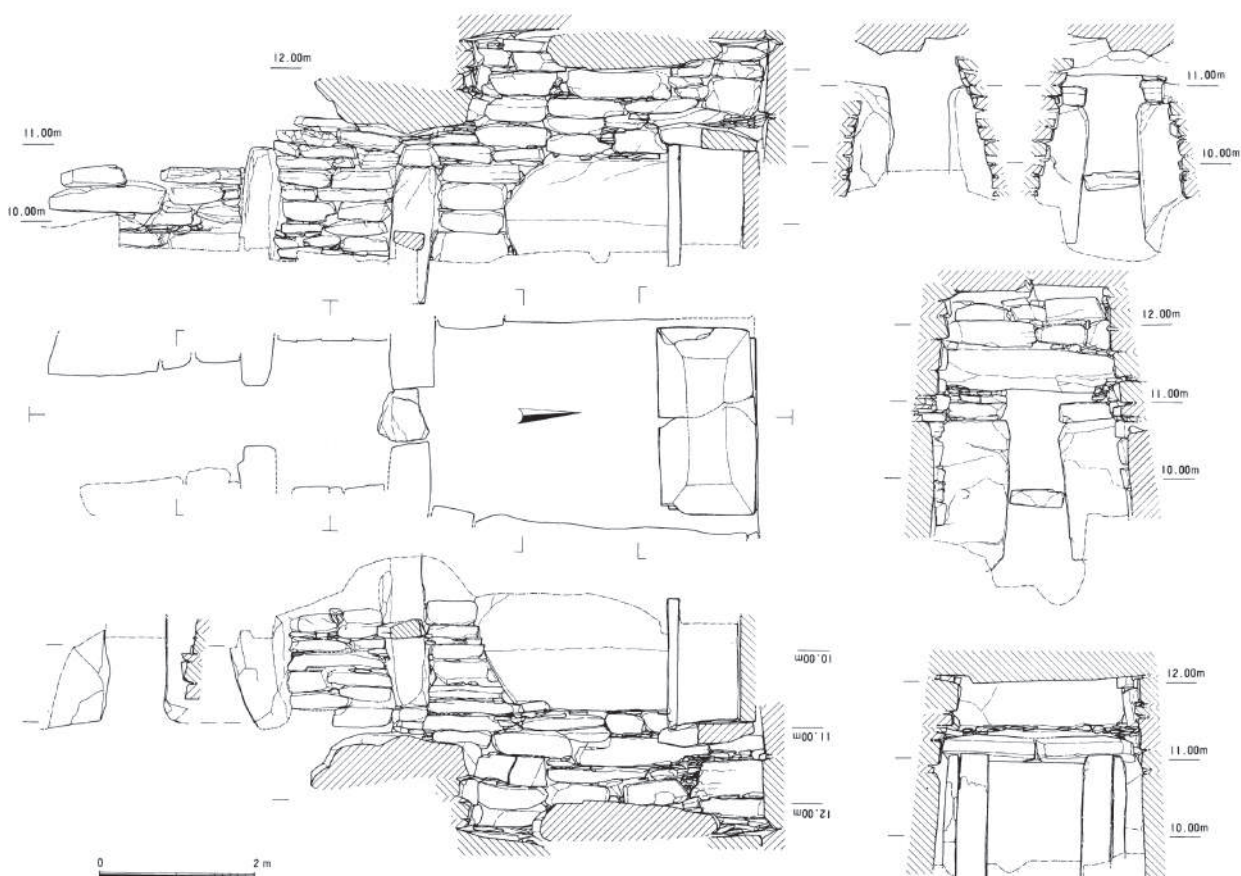


図 21 東光寺剣塚古墳石室実測図 (1/100)

福岡市教育委員会が昭和 63 年 9 月 17 日から翌年 3 月 25 日に実施した範囲内容確認調査では、墳丘測量と墳丘・周濠のトレンチ調査、石室内実測と一部トレンチ調査が実施された。『福岡市教委 1991』では壁面の装飾について言及があり、調査検証の結果、古墳に伴う線刻壁画ではない、と結論付けられた。なお、石室内各所に赤色顔料の塗布痕が認められ、科学的分析が行われている。

名称 剣塚 (『筑前国続風土記』)

剣塚・観音山 (『筑前国続風土記拾遺』)

剣塚・観音山・つるミ塚 (『筑前国続風土記附録』)

東光寺古墳 (『福岡縣 1925』) 剣塚古墳 (『平凡社 1964』)

東光寺剣塚古墳 (『福岡市教委 1991』)

所在地 福岡市博多区竹下

墳丘 前方後円墳 (全長 75 m、周濠外縁全長 126 m、二段築成、第 3 周濠南東側に造り出し部)

主体部 横穴式石室 (複室両袖型、南向きに開口、石屋形、粗面玄武岩・花崗岩・安山岩質熔結凝灰岩石材使用 (『福岡市教委 1991』唐木田芳文)) 全長 9.15 m、後室長 4.18 m、後室幅 2.78 m、

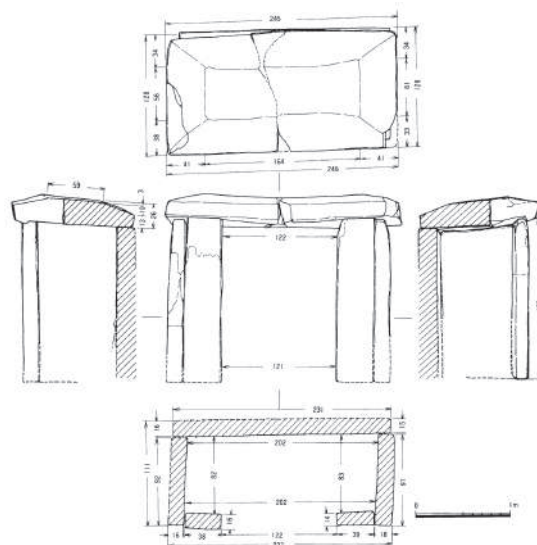


図 22 石屋形実測図 (1/80)

後室高 2.84 ～ 3.00 m

装 飾 石室を構成する壁面のうち、奥壁を除く各面に「線刻」が認められた。後室右壁、前室右壁では一部密集状態にある。

これらは、①遺存する赤色顔料を切る重複関係にあること、②線の太さ、幅、風化度合が多様であること、③石室石材の調整剥離部分の稜の風化よりも総じて風化度合が少ないこと、の点から石室造営時もしくは直後に形成されたものとは認め難く、石室開口後に付けられた「傷」と結論付けられた。

遺 物 採集遺物の一部が(株)アサヒビール博多工場、九州大学玉泉館に保管・展示。昭和 63 年度調査でトレンチ内から須恵器、円筒・形象埴輪等出土(福岡市教育委員会)

顔 料 赤(自然科学的調査の結果、ベンガラと判断)(『福岡市教委 1991』)

年 代 6 世紀中頃

調査歴 昭和 63 年度 重要遺跡範囲内容確認調査(福岡市教育委員会)

現 況 現状保存。石室内に観音像があり石室入口は閉鎖。通常は立ち入り不可。

図面等 昭和 63 年度調査時に墳丘測量図・石室実測図作成(福岡市教育委員会)

写 真 九州歴史資料館 1980 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 5 点

九州歴史資料館撮影 35 mm カラーリバーサル「剣塚古墳」22 点

H14 北部九州装飾古墳画像 DB 4 点 (No. 0080 ～ 0083) ・ 11 点 (No. 0605 ～ 0615)

福岡市教育委員会 1988 ・ 1989 撮影 35 mm カラーリバーサル ・ モノクロ

文 献 福岡県高等学校教職員組合 1951 『北九州古文化図鑑』第二輯

平凡社 1964 『装飾古墳』小林行雄編

講談社 1974 『古代史発掘 8 装飾古墳と文様』乙益重隆編

教育社 1985 『装飾古墳』森貞次郎編

福岡市教育委員会 1991 『東光寺剣塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 267 集

福岡市教育委員会 2006 『那珂 41』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 887 集



図 23 石室形全景



図 24 線刻文様拡大

3 五郎山（ごろうやま）古墳

立地 福岡県の西側、佐賀県境に近い位置にある。この付近は脊振山系から派生する丘陵と三郡山系から派生する丘陵とが近接して「二日市地峡」と呼ばれる狭長な地勢を形成しており、北西には福岡平野、南には筑紫平野が開けている。宝満川は三郡山に源を発してその山麓を回り込むように流れる。五郎山古墳は宝満川の西岸、脊振山系から東に派生する山丘の先端にある、標高 70m の独立丘陵上に立地する。南西 1.5 km で佐賀県境に達し、北西 20 km で博多湾、南西 38 km で有明海へと到達する。佐賀県鳥栖市田代太田古墳とは 8.5 km 離れた距離にある。

経緯 昭和 22 年 10 月 21 日、土地所有者により石室内に壁画があることが発見された。福岡県では史蹟調査委員の鏡山猛、森貞次郎、さらに臨時委員として小林行雄（京都大学）を加えて調査を実施、昭和 23 年 3 月 16 日に仮指定の措置がとられ、昭和 24 年 7 月 13 日に国の史跡に指定された。

昭和 25 年に盗掘坑を塞ぐための応急工事、昭和 35 年に保存施設設置工事が行われ、石室出入口に鉄筋コンクリート製の覆屋が建築された。覆屋入口には鉄製扉とシャッターが設けられ、奥の石室入口にも格子戸と扉を設けて二重の保護が図られた。保護施設設置後、見学者に対しては記帳の上、鍵を貸し出していたが、昭和 40 年 8 月頃には入口の鉄製扉が壊されて石室内で焚火が行われたり、カビ等の繁殖が著しく見学者によるいたずら等があったため、昭和 53 年に一般公開を中止し、石室を消毒した上で閉鎖された。

昭和 50 年に土地公有化、昭和 56 年には五郎山古墳を含む 5.2ha の範囲が公園として計画決定が行われ、昭和 63 年から平成 3 年にかけて、古墳が所在する公園東側一帯を除く範囲が施工された。古墳については平成 5 年に筑紫野市教育委員会が五郎山古墳保存整備基本計画策定委員会を設置、その計画に基づき平成 6 年度（第 1 次調査）～平成 8 年（第 3 次調査）の間、委託を受けた福岡大学が調査を担当し、調査完了後の平成 10 年 3 月に筑紫野市教育委員会から発掘調査報告書が刊行された。また、平成 9～12 年度に古墳本体、周辺環境整備、ガイダンス施設「五



図 25 五郎山古墳位置図 (1/25,000)

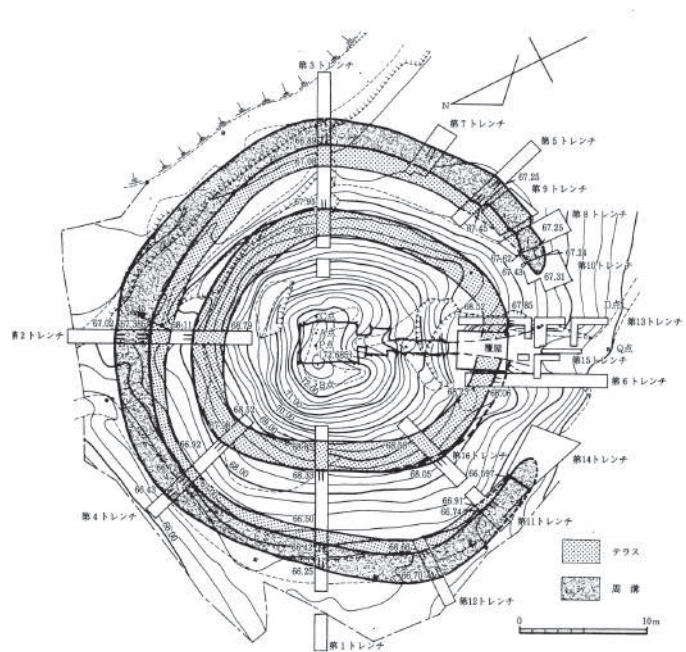


図 26 五郎山古墳周溝・テラス復元想定図 (1/600)

郎山古墳館」の設置等、総合的な保存整備事業が実施された。

平成9～12年度の総合的保存整備事業実施後、復元墳丘の舗装材や石室環境観測機器類の劣化、植栽の繁茂による景観・環境の変化、園路の自然災害被災、ガイダンス施設展示機器類の劣化等が顕著となり、前回整備事業から約20年が経過した平成28～令和元年度に保存整備事業が実施された。

名称 五郎山古墳（『北九州古文化図鑑』第二輯）

所在地 筑紫野市原田

指定 国指定史跡 昭和24年7月13日

一部解除 昭和59年7月25日

墳丘 円墳（二段築成）墳丘径31.8～32.5m、墳丘高10.2m、周溝径34.9～36.6m

主体部 横穴式石室（複室・両袖・南西向きに開口・花崗岩）全長11.42m、玄室長4.32～4.52m、玄室幅2.89～3.05m、玄室高4m

装飾 玄室奥壁・両側壁・玄門両袖石に施文がある。奥壁では腰石とその上の五角形の巨石、およびその右側の石にある。

腰石は上段・中段・下段の三段にわけて描かれており、靱・鞆・弓・人物・動物・騎馬人物・船・家・円文・同心円文・珠文・三日月形文などが描かれている。五角形の巨石には人物・動物・旗・珠文・円文・同心円文、右側の石には円文が描かれる。玄室東側壁には人物・船・同心円文、西側壁には船・珠文、玄門袖石にも船等が描かれる。

全体的に影絵風に描かれ、輪郭線をもつ図文もいくつかある。色を重ねている図文もある。図文の数の多さはこの古墳の特徴であり、一見すると無秩序に並んでいるように見えるが、部分的に一つのまとまりを構成しているものや、情景を表現しているものもあるとみられており、文様群に対する解釈もいくつか出されている。

顔料 赤・黒（2）・緑・黄（『山崎一雄1951・1974』） 赤・黒・緑（『平凡社1964』）

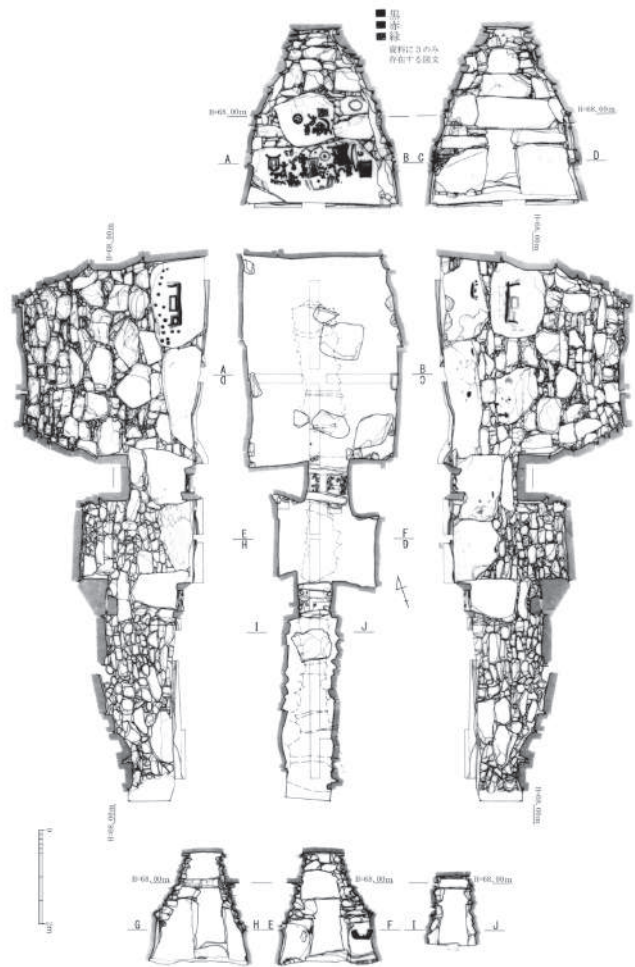


図27 五郎山古墳石室実測図 (1/160)

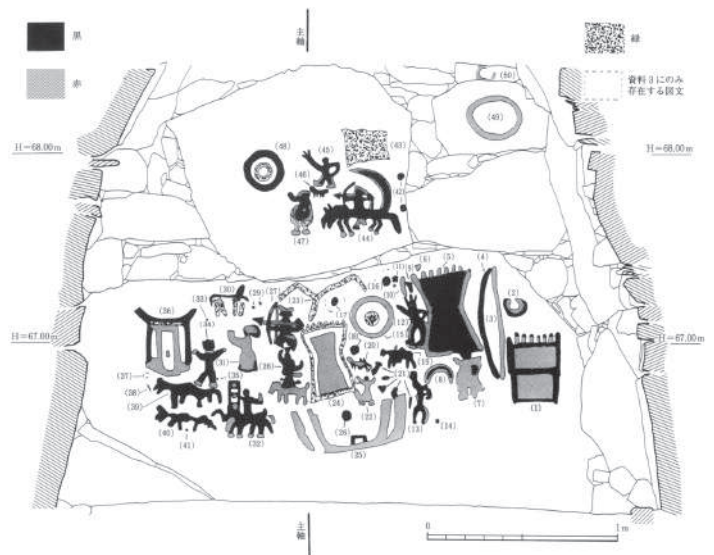


図28 玄室奥壁壁画実測図 (1/40)

赤・黒・緑 (『筑紫野市教委 1998』)
 赤・黒・灰 (「朽津信明・川野邊渉 2000」)
遺物 昭和 22 年調査以前から既に盗掘。
 土師器・須恵器・武器・馬具・装身具 (筑
 紫女学園・個人蔵・筑紫野市教育委員会)
年代 6 世紀後半

調査歴 昭和 22 年 福岡県調査 (県史蹟調
 査員鏡山猛・森貞次郎・臨時委員小林行雄)
 平成 6～8 年度 第 1～3 次調査 (筑紫野
 市教育委員会・福岡大学)

整備歴 昭和 25 年 墳丘復元工事
 昭和 35 年 保存施設設備工事 (鉄筋コ
 ンクリート製覆屋・鉄製扉)
 平成 9～12 年度 総合的保存整備事業
 (墳丘復元・周辺環境・ガイダンス設置)
 平成 28～令和元年度 総合的保存整備
 事業 (墳丘・観察室・外周・ガイダンス
 施設整備)

現況 保存整備工事後、現状保存

図面等 昭和 22 年 石室・壁画実測図
 (小林行雄原図・森貞次郎補筆) (福岡大

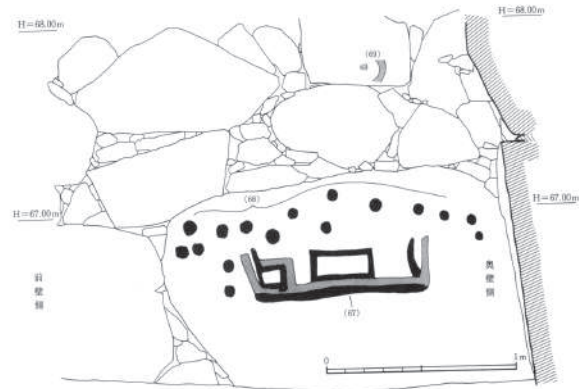


図 29 玄室西側壁の壁画 (1/40)



図 30 玄室奥壁装飾文様拡大

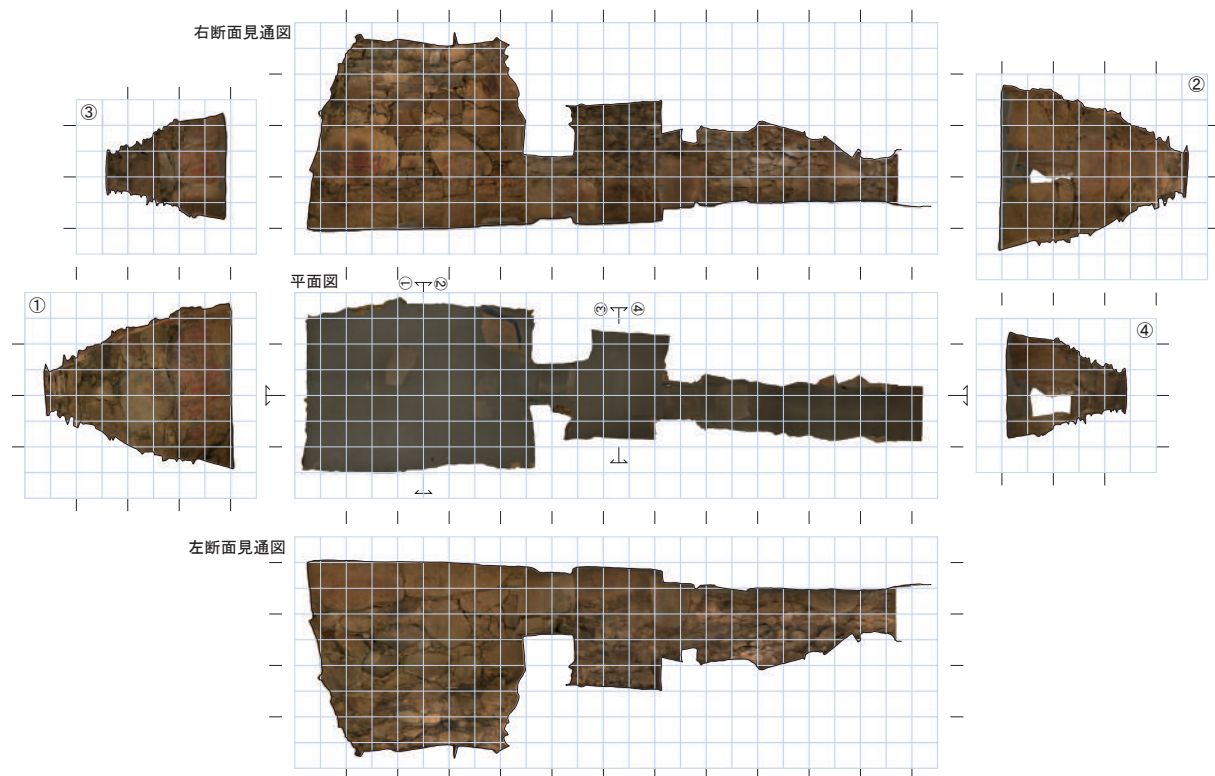


図 31 五郎山古墳石室正射投影画像 (1/120)

学考古学研究室 森貞次郎寄贈資料)

第1次～第3次調査時墳丘・石室・壁画実測図（筑紫野市教育委員会）

（写真計測）基盤研究（A）（1922026）2007.11.6～15計測
写真 藤本四八撮影4×5カラーリバーサル「前室から見た奥壁の細部」1点、同「様々な形象の彩画」（後室奥壁）（後室奥壁下部）2点、同「家屋の彩画」（後室奥壁細部）A・B 2点

九州歴史資料館 1975 撮影4×5カラーリバーサル10点・カラーネガ2点

九州歴史資料館 1990 撮影4×5カラーリバーサル14点、他21点

九州歴史資料館 1966 撮影35mmカラーリバーサル6点、1990 撮影35mmカラーリバーサル66点、1991～2003 撮影35mmカラーリバーサル22点

九州歴史資料館 2002～2005 巡検時撮影35mmカラーリバーサル13点

H14 北部九州装飾古墳画像DB 19点（No. 0085～0103）・25点（No. 0619～0643）

熊本県立装飾古墳館 2000.5.15 撮影4×5カラーリバーサル9点・モノクロ4点

筑紫野市教育委員会・福岡大学 1994～1996 調査時写真（筑紫野市教育委員会）

映像 筑紫野市教委・RKB映画社 2000『よみがえる装飾壁画－五郎山古墳－』

筑紫野市教委・ノビルデザイン 2020『五郎山古墳にみる黄泉の世界』

模写 日下八光 現状模写・復元模写7点（国立歴史民俗博物館）

模型 原寸大可動式石室模型（五郎山古墳館ガイダンス施設内）

パネル 九州歴史資料館 2点（高181×幅227・高108×幅235）

九州国立博物館 2点（「奥壁」高127×幅158・「船」高102×幅128）

文献 福岡縣高等学校教職員組合 1951『北九州古文化図鑑』第二輯

筑紫野市教育委員会 1998『国史跡 五郎山古墳』筑紫野市文化財調査報告書第57集

筑紫野市史編さん委員会 2001『筑紫野市史』資料編（上）考古資料 筑紫野市

筑紫野市教育委員会 2020『国史跡五郎山古墳 保存整備事業報告』筑紫野市文化財調査報告書第120集



図32 五郎山古墳石室内部
（1951『北九州古文化図鑑』）



図33 五郎山古墳遠景（昭和50年）



図34 五郎山古墳保存施設（昭和50年）



图 35 玄室奥壁



图 36 奥壁上部拡大



图 37 右側壁（船）

4 殿様塚（とのさまづか）古墳群 1号墳

立地 福岡県の西側、三郡山系の一つである宮地岳（標高 339m）の南東側斜面中腹に位置する。南側眼下には筑紫平野が広がり、北東側の冷水峠を越えた先には嘉穂盆地が開けている。殿様塚古墳群は現在までに 7 基が確認されている。

経緯 昭和 51 年 5 月 10 日、土地所有者の一報を受けて福岡県・筑紫野市教育委員会が装飾古墳であることを確認した。写真撮影・略図作成後、入口を土嚢で閉塞して保護が図られた。

名称 殿様塚古墳群 1号墳（『筑紫野市 2001』）

所在地 筑紫野市山家

墳丘 円墳 直径 20m

主体部 横穴式石室（複室・両袖・南西向きに開口）玄室長 3.8m・玄室幅 2.1～2.5m、高約 3m

装飾 奥壁・左側壁に文様が描かれる。奥壁は右腰石の方柱状石材上部に軀状、その上の左側石材に盾状、右側の石材に連続三角文様、左側壁腰石の奥壁側は円を基本とする文様が描かれる。

顔料 赤・緑（『筑紫野市 2001』）

年代 6世紀後半

調査歴 昭和 51 年 5 月 10 日、福岡県・筑紫野市教育委員会が確認、記録作成

現況 入口を土嚢で閉塞して現状保存

図面等 石室・壁画略測図（筑紫野市教育委員会）

写真 九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル 3 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 6 点 (No. 1436～1441)

文献 筑紫野市教育委員会 1998『筑紫野市内遺跡分布地図』

筑紫野市史編さん委員会 2001『筑紫野市史』資料編（上）考古資料 筑紫野市



図 38 殿様塚古墳群 1号墳位置図 (1/25,000)

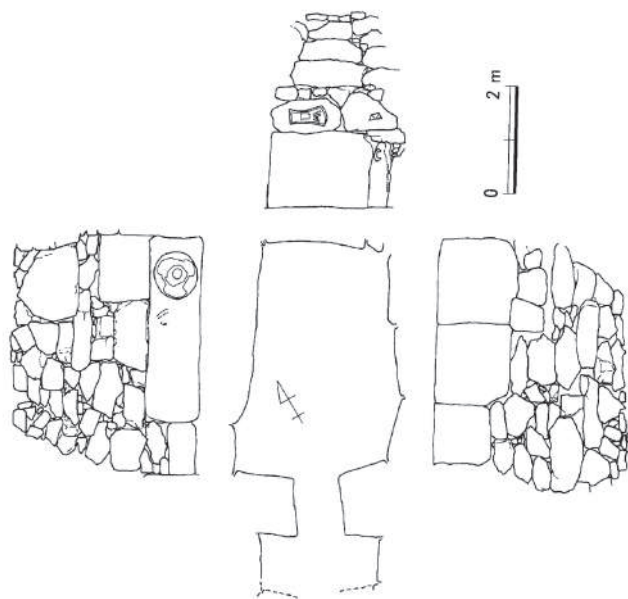


図 39 殿様塚古墳群 1号墳石室略測図 (約 1/120)



図 40 殿様塚古墳群 1号墳石室奥壁文様拡大

5 桜京（さくらきょう）古墳

立地 福岡県の北部、玄界灘へと向かって北流する釣川下流域左岸に位置する古墳である。釣川の開析作用によって形成された、名児山（標高165m）を最高所に北側へと派生する山稜の北西側、標高45mの斜面中にある。付近には約200基の古墳群が密集し、牟田尻桜京古墳群中の一つを構成する。玄界灘に面した海浜部までの距離は1kmを測り、南西1.8kmには宗像大社辺津宮がある。

経緯 石室は以前から開口していたらしく、落書き等が残る。昭和46年10月23日、東海大学附属第五高等学校考古学研究会が行っていた遺跡分布調査で装飾壁画が発見された。

昭和49年度に福岡県教育委員会が主体となって、墳丘測量、石室清掃および実測を実施し、調査後は開口部を土嚢で密閉して保全を図った。昭和51年3月31日には国指定史跡に指定された。

宗像市教育委員会では平成15年度から平成18年度まで、史跡の範囲内容を確認する目的で調査を実施。その後、平成21年度に石室内実測、平成22年度に顔料調査や周辺地形測量調査を実施した。また平成20年度以降、石室内の定期観察と環境調査を継続している。

名称 桜京古墳（『東海大五考古学研究会 1974』）
桜京古墳（『玄海町 1979』） 桜京2号墳（『宗像市 1997』） 桜京古墳（『宗像市教委 2007』）

所在地 宗像市牟田尻

指定 国指定史跡 昭和51年3月31日

墳丘 前方後円墳 全長39.0m、後円部径24.0m、後円部高6.4m、前方部幅13.5m

主体部 横穴式石室（複室・両袖・石屋形・西向きに開口・玄武岩）全長8.86m、後室長3.88m、奥壁幅2.05m、後室高3.63m

装飾 奥壁鏡石のほぼ全面とその上に積まれた石材の一部、および石柱前面から内側面にかけて施文される。文様は沈線で区画された三角文のみによって構成



図41 桜京古墳位置図 (1/25,000)

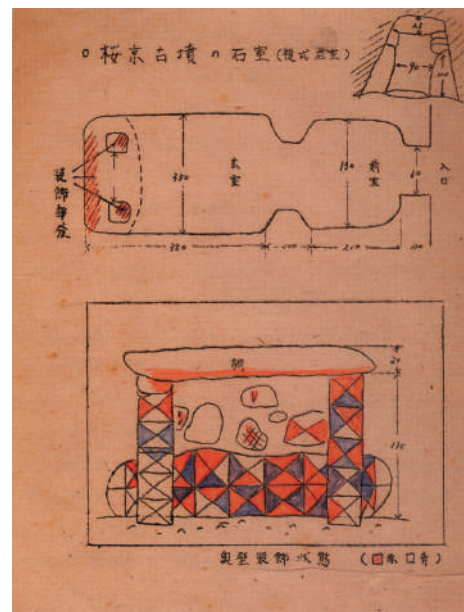


図42 「桜京古墳の石室」(昭和46年)

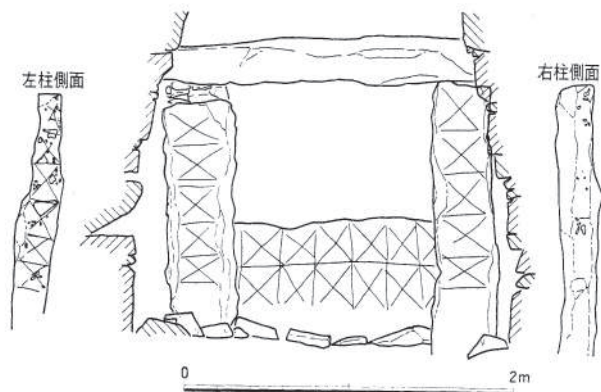


図43 石屋形装飾実測図 (『宗像市 1997』)

され、赤・緑・白の3色で塗り分けられる。沈線が重複する部分や彩色が沈線の区画をはみ出す部分、沈線を施さずに彩色する部分もある。

前室右側壁にある船の線刻、後室右側壁にある魚の線刻は後世の所産とみる見解がある。

顔料 赤・青（『東海第五1974』） 赤・緑（『講談社1973』 斎藤忠）

赤・黄・緑（『玄海町1979』・『宗像市1997』・『宗像市教委2007』）

赤（ベンガラ）・白（白土）・緑（セラドナイト）（『宗像市教委2012』）

遺物 平成15～18年度調査時に須恵器・土師器・武器・装身具（宗像市教育委員会）

年代 6世紀中頃

調査歴 昭和46年10月 東海大学附属第五高等学校考古学研究会が石室・壁画略測図作成。

昭和49年度 墳丘測量・石室実測（福岡県教育委員会）（昭和50年7月補測）

平成15～18年度 墳丘測量・トレンチ調査（宗像市教育委員会）

平成21・22年度 石室実測。顔料サンプル採取・分析、周辺古墳群測量

平成20年度～ 石室内環境調査

現況 入口を土嚢で閉塞して現状保存

図面等 昭和46年 石室・壁画実測図（東海大学附属第五高等学校考古学研究会）

昭和49・50年度 墳丘測量図、石室・壁画実測図（福岡県教育委員会）

平成15～18年度 墳丘測量図（宗像市教育委員会）

平成21・22年度 石室・壁画実測図（宗像市教育委員会）

（写真計測）基盤研究（A）（1922026）2010.1.22～27計測

（写真計測）九州歴史資料館2024.3.10計測

（レーザ計測）東京大学池内研究室2010.1計測

写真 九州歴史資料館6×9カラーネガ

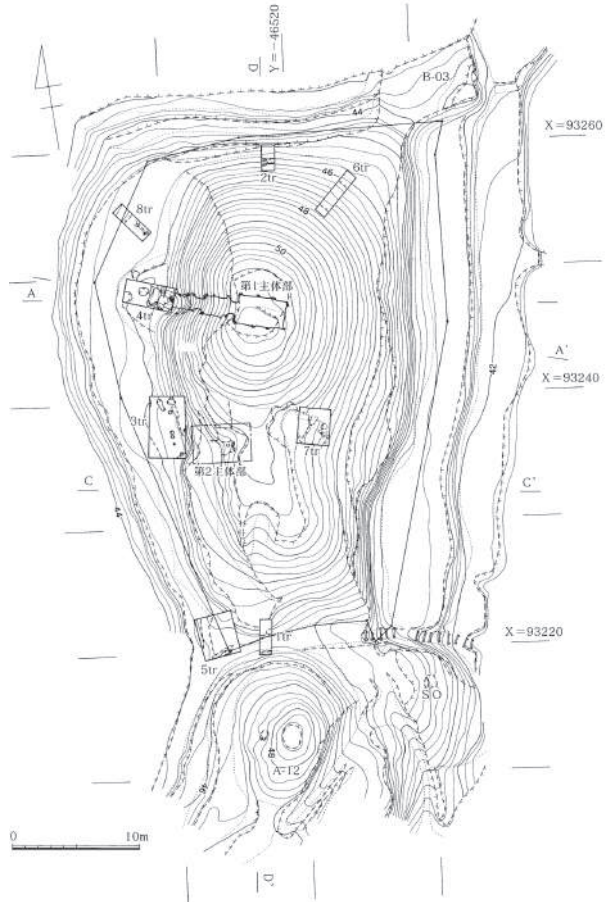


図44 桜京古墳墳丘測量図（1/600）

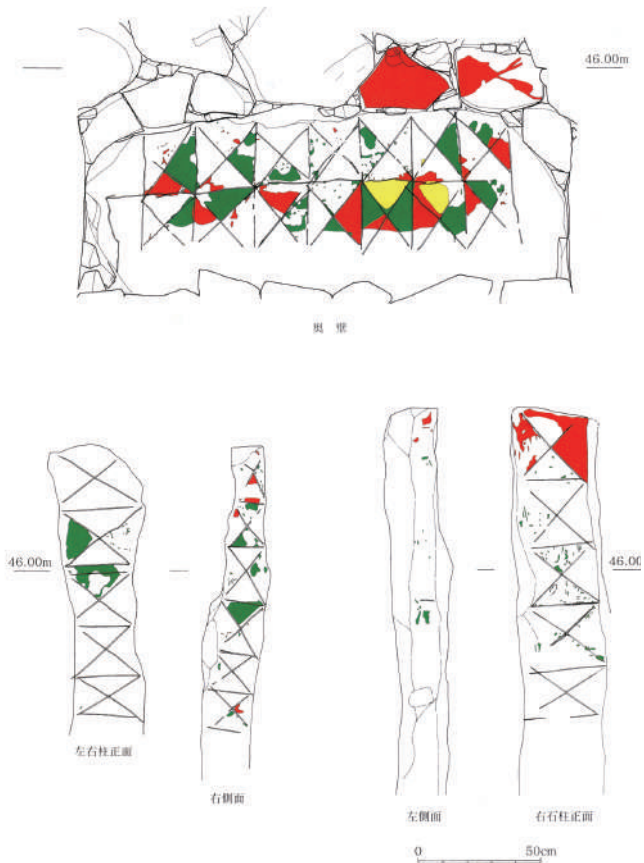


図45 石室形装飾（1/32）

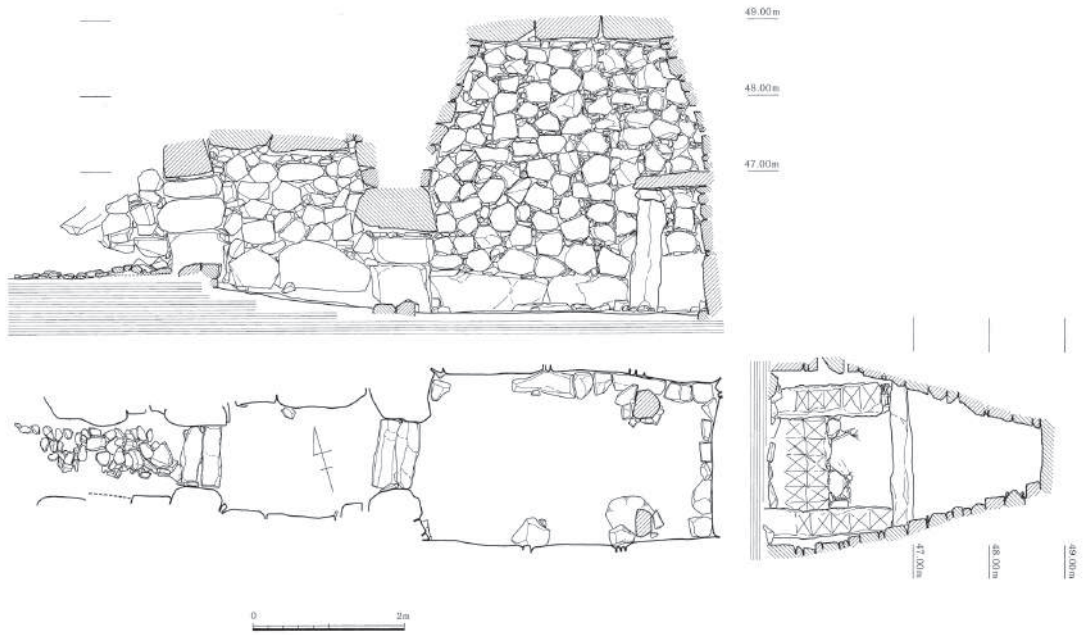


图 46 桜京古墳石室実測図 (1/100)



图 47 奥壁裝飾

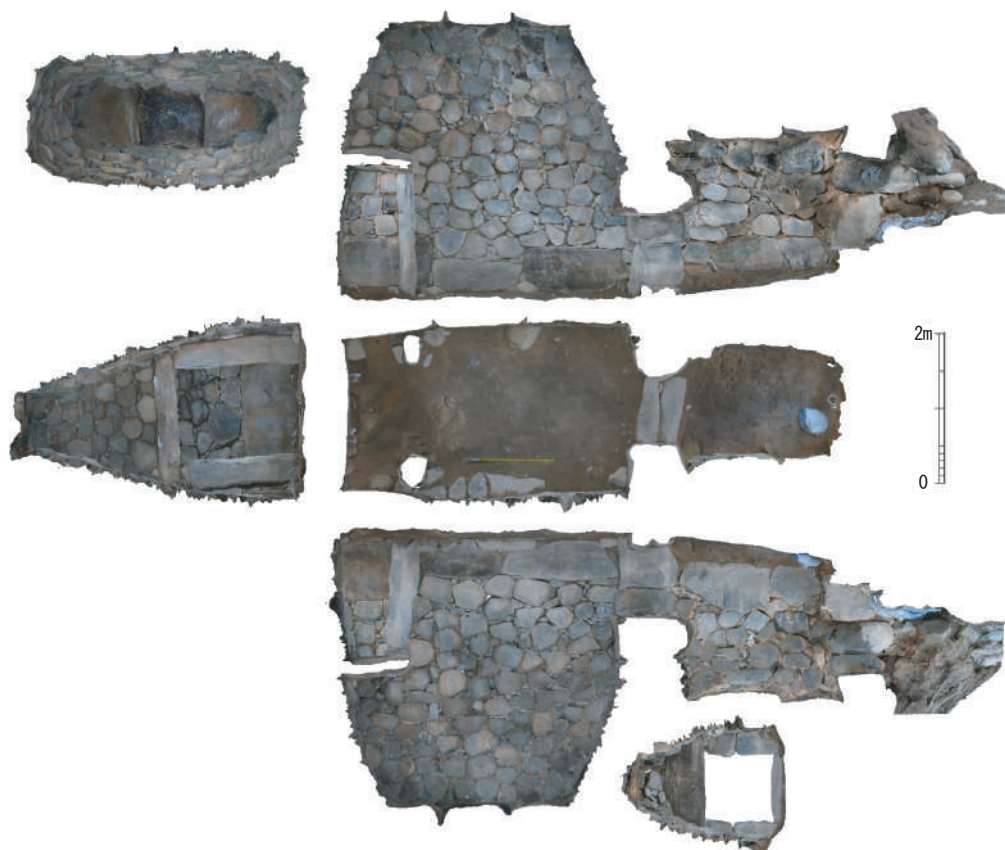


図48 桜京古墳石室正射投影画像 (1/100)

4点、紙焼き1点

九州歴史資料館 1975 頃撮影 4×5 カラーネガ
(奥壁・奥壁拡大) 6点

九州歴史資料館 1975 撮影 35mm カラーネガ 5点
宗像市教育委員会 2009・2010 撮影 6×7 カラー
リバーサル・デジタル写真

宗像市教育委員会 2003・2004・2009・2010 調
査時撮影 35mmモノクロ、カラーネガ・リバー
サル

九州歴史資料館 2024. 3. 10 撮影デジタル写真
H14 北部九州装飾古墳画像DB 1点 (No. 0084)・
3点 (No. 0616～0618)

パネル 九州歴史資料館 1点 (85×137)

文献 玄海町史町史編纂委員会 1979『玄海町誌』玄海町
宗像市史編纂委員会 1997『宗像市史』通史編 第一巻自然・考古 宗像市
宗像市教育委員会 2007『桜京古墳』宗像市文化財調査報告書 58集
宗像市教育委員会 2012『桜京古墳Ⅱ』宗像市文化財調査報告書 65集



図49 前室右側壁線刻「船」

6 権現塚（ごんげんづか）古墳

立地 福岡県の西部、福岡平野の南西端部に位置する。福岡平野を南北に流れる那珂川の中流域左岸、背振山系の一つ、片縄山から東側に派生する丘陵斜面に占地しており、500m 東方の眼下に那珂川を見下ろす位置にある。同一丘陵には野口古墳群や観音堂古墳群など中期の古墳群が分布する。

経緯 昭和 43 年の宅地造成による破壊以前に石室は破壊されていたらしく、3m × 1.5m、厚さ 0.4m ほどの花崗岩が 3 個、遺存する北半分の周溝内に置かれていた（『那珂川町 1969』）。その当時、現地視察を行った福岡県教育委員会によって同心円文の彩色が確認され、彩色系の装飾古墳であることが分かった。なお、造成時に大型器台等の須恵器が発見されたらしいが現在は伝わっていない。

彩色のある石材はその後、那珂川中学校に保存されていたが、現在では那珂川市教育委員会の収蔵施設に移動、保存されている。

名称 権現塚古墳（『那珂川町教委 1969』）

所在地 那珂川市片縄北

墳丘 円墳（前方後方墳とする記載がかつてあったが誤認であることを確認した） 直径 27m、高さ 4m、周溝幅 4m、周堤幅 6m、周堤高 1m

主体部 横穴式石室（昭和 43 年宅地造成の時点で石室石材が周溝内に置かれていた）

装飾 1968～69 年頃、破壊後の石材に赤色で同心円文が描かれていることを福岡県教育委員会職員が確認。他に、舟 1 点があったとする記録もある。

年代 6～7 世紀

現況 装飾確認後、石材を移築保存

写真 九州歴史資料館 1968・69 頃撮影 35mm カラーポジフィルム 2 点（個人撮影写真の複写）

那珂川市教育委員会デジタル写真データ（移動後、文様拡大写真）

文献 那珂川町教育委員会 1969『油田古墳群』那珂川町文化財調査報告書第 1 集

那珂川町教育委員会 1970『那珂川町文化財遺跡調査』

那珂川町教育委員会 1976『郷土誌那珂川』 那珂川町



図 50 権現塚古墳位置図 (1/25,000)



図 51 権現塚古墳奥壁石材



図 52 権現塚古墳石材の装飾

7 丸ノ口（まるのくち）古墳群V群5号墳
 8 丸ノ口（まるのくち）古墳群VI群2号墳

立地 福岡県の西部、福岡平野の南西端部に位置する。那珂川中流域左岸の片縄山から東側に派生する丘陵斜面に占地しており、彩色系装飾古墳である権現塚古墳から約1.2km南西にある。周囲には片縄山古墳群と総称される後期の群集墳が数多く展開しており、丸ノ口古墳群はその群中の一つである。調査前の段階では既に消滅していたI群を除き、6支群26基の古墳が確認された。

経緯 中学校建設に伴う事前発掘調査のため、那珂川町教育委員会（当時）が平成9～12年度に片縄山古墳群中の41基を対象として発掘調査を実施したところ、丸ノ口古墳群中で2基の装飾古墳が見つかった。この2基についてはその後、保存に向けた協議が行われ、学校用地の一部を古墳公園として保全されることとなった。

名称 片縄山古墳群（総称）丸ノ口支群（支群名）
 『那珂川町教委 2003』

所在地 那珂川市片縄西

指定 那珂川市指定史跡 平成11年6月22日
 < V群5号墳 >

墳丘 円墳 直径14.5m

主体部 横穴式石室（単室両袖構造、南東方向に開口、花崗岩石材使用）全長約6.2m・玄室長2.5m・幅2.1m

装飾 奥壁腰石の中央に2、腰石上の石に1、合計3つの円文が確認された。3つとも中心に点を持つ。施文は鑿状の工具で突っつくように敲打し、幅5cmほどのベルト状に彫り窪めて円を表現する。施文範囲は表面を薄く削る程度でその窪みは浅い。

遺物 土師器・須恵器・武器・馬具・装身具

年代 6世紀後半

< VI群2号墳 >

墳丘 円墳 直径10m

主体部 横穴式石室（複室両袖構造、南東方向に開口、羨道部から墓道部削平、花崗岩）残存全長5.2m、後室長2.3m、後室幅2.4m、後室高2.4m

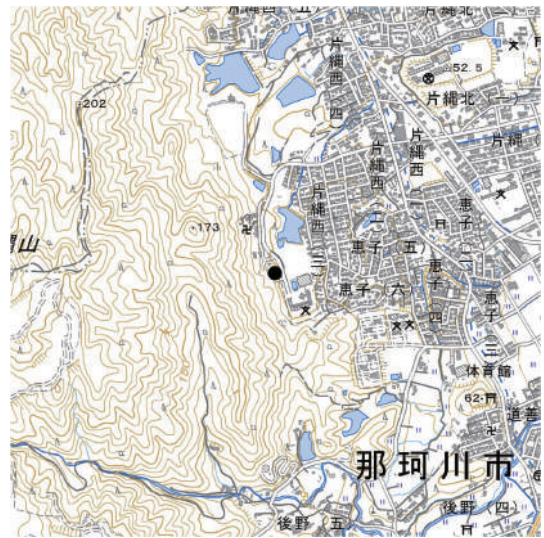


図53 片縄山古墳群位置図（1/25,000）

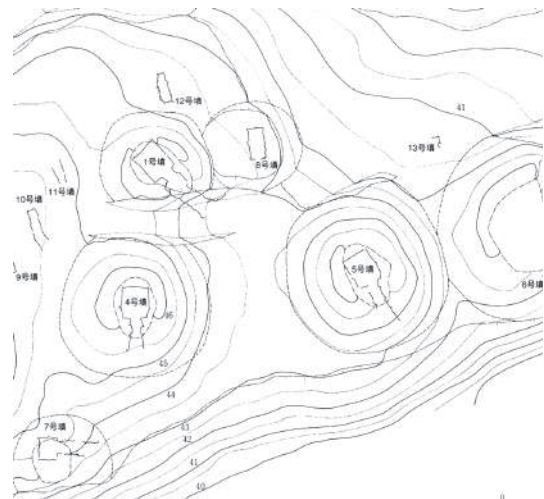


図54 丸ノ口V群地形測量図（1/600）

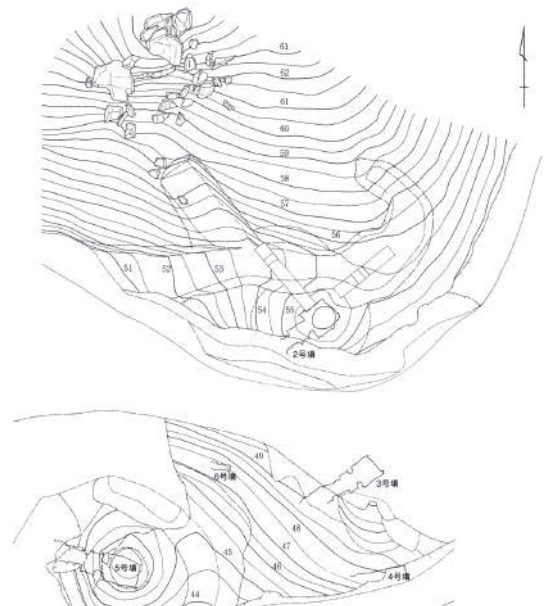


図55 丸ノ口VI群地形測量図（1/600）

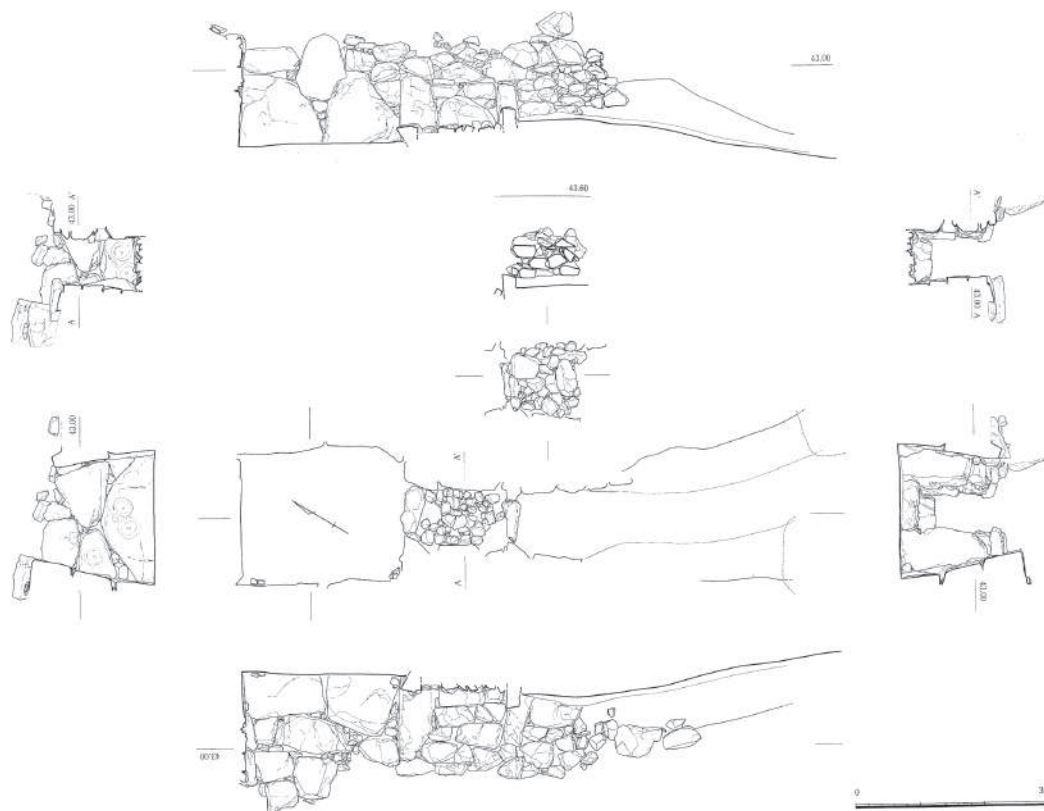


図 56 丸ノ口V群5号墳主体部実測図 (1/120)

装飾 後室奥壁と左側壁に敲打による施文が確認された。奥壁では腰石に円文と逆台形の文様、腰石の上に積まれた二段目の石に円文が描かれる。腰石の円文は直径約 30 cm で、打面が粗く不明瞭だが内側にも円形の打面があり、同心円文とみられる。逆台形の文様は同心円文の右斜め上方に描かれる。上端は不明瞭だが上辺約 32 cm、下辺約 24 cm、高さ約 20 cm。円文の下位には三角文とも思える痕跡があるが石材風化のため明確ではない。二段目石材の円文は径約 20 cm で腰石の同心円文と比較すると打面が整っており、その内側にも弧状の打面が認められる。

左側壁の装飾は奥壁腰石の同心円文よりも若干高い位置にあり、上向きの弧状の文様を描く。

遺物 須恵器・武器

年代 6世紀後半



図 57 丸ノ口V群5号墳全景



図 58 丸ノ口V群5号墳石室奥壁

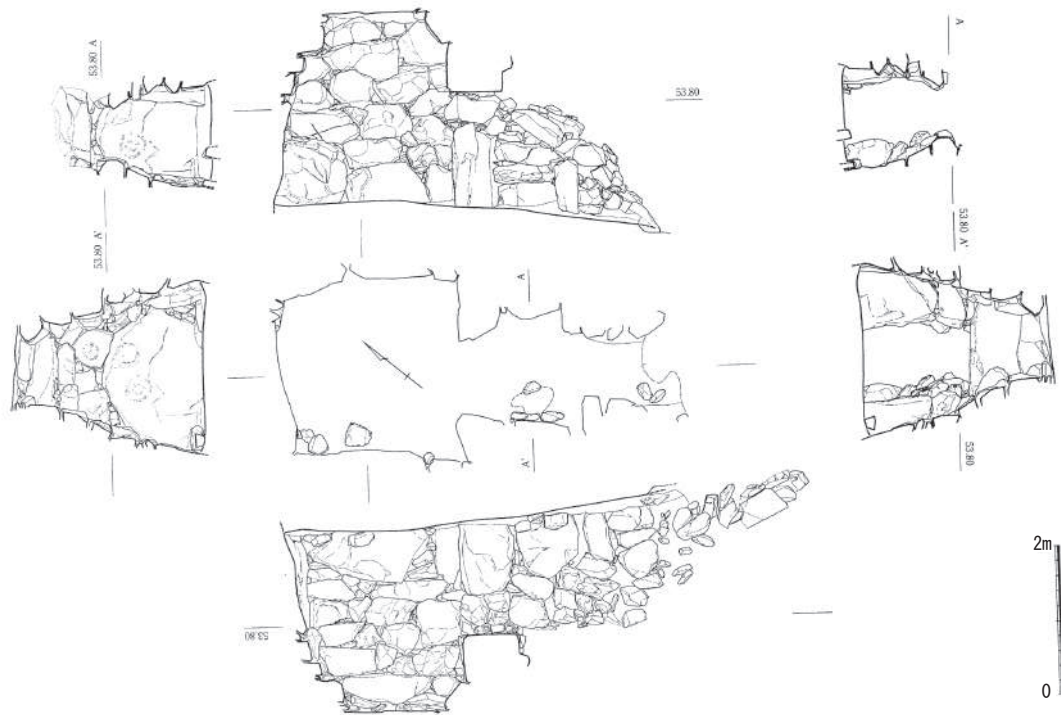


図 59 丸ノ口VI群 2号墳主体部実測図 (1/100)



図 60 丸ノ口VI群 2号墳全景

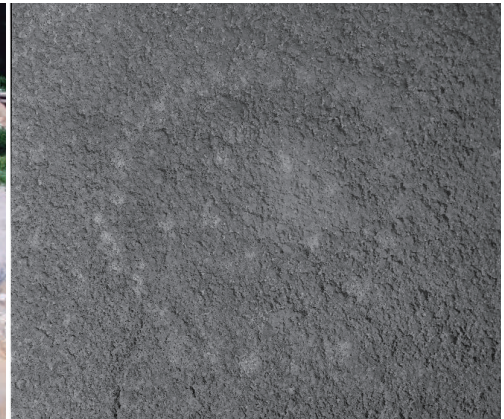


図 61 丸ノ口VI群 2号墳奥壁装飾

調査歴 平成9～平成12年度 開発事業（中学校建設）に伴う発掘調査（那珂川市教育委員会）

整備歴 平成15年度 丸ノ口V群5号墳は移築復元後、アクリル板設置

丸ノ口VI群2号墳は現状保存、ガラス門扉付覆屋設置

現況 保存整備工事後、現状保存

図面等 古墳群分布図・墳丘測量図・石室実測図（那珂川市教育委員会）

写真 九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル（遠景・石室内・保護施設）

那珂川市教育委員会 1998・1999 発掘調査時撮影 4×5 カラーリバーサル、6×7 モノクロ・カラーリバーサル、35mm モノクロ・カラーリバーサル

文献 那珂川町教育委員会 2003 『片縄山古墳群』 那珂川町文化財調査報告書第61集

那珂川町教育委員会 2003 『丸ノ口古墳群保存整備事業報告書』

(2) 北九州地域



図 62 北九州地域分布図 (1/200,000)

9 一本松塚（いっぽんまつづか）古墳

立地 福岡県の北東端、北九州市小倉北区の日明丘陵地と呼ばれる洪積丘陵上にある古墳である。到津方面から北に延びる金刀毘羅山系丘陵の先端に位置する。響灘の海浜部から500mほど内陸で、西側には響灘へと注ぎ込む板櫃川がある。墳丘上にはかつて松木が樹立し、付近の漁夫たちが帰船の際の目印としていた。近年では古墳周辺の市街地化が進んでおり、かつての景観は失われている。

経緯 昭和24年（1949）、小倉高校考古学部が小倉市役所・西日本新聞社の後援を得て小倉市域の遺跡分布調査を実施した際に、古墳の所在が確認された。翌25年7月に後室奥壁の彩色壁画が発見され、にわかに注目を集めることとなり、同年9月、小倉高校考古学部によって発掘調査が行われた。

後室は既に盗掘されていたが、前室床面は後室床面よりも一段低くつくられていたことが幸いして前室床面には盗掘が及んでおらず、そのため前室の副葬品が遺存していた。調査成果は「小倉市日明一本松塚調査の概要」として報告、昭和48年3月22日に古墳は北九州市指定史跡に、出土品は市指定有形文化財（考古資料）に指定された。その後、昭和63年に「日明・一本松塚古墳調査報告」がまとめられ、この報告をもって正文とされた。

市史跡指定の際、墳丘裾部に擁壁が築かれ石室入口が整備され、平成11年には石室入口側に



図63 一本松塚古墳位置図（1/25,000）

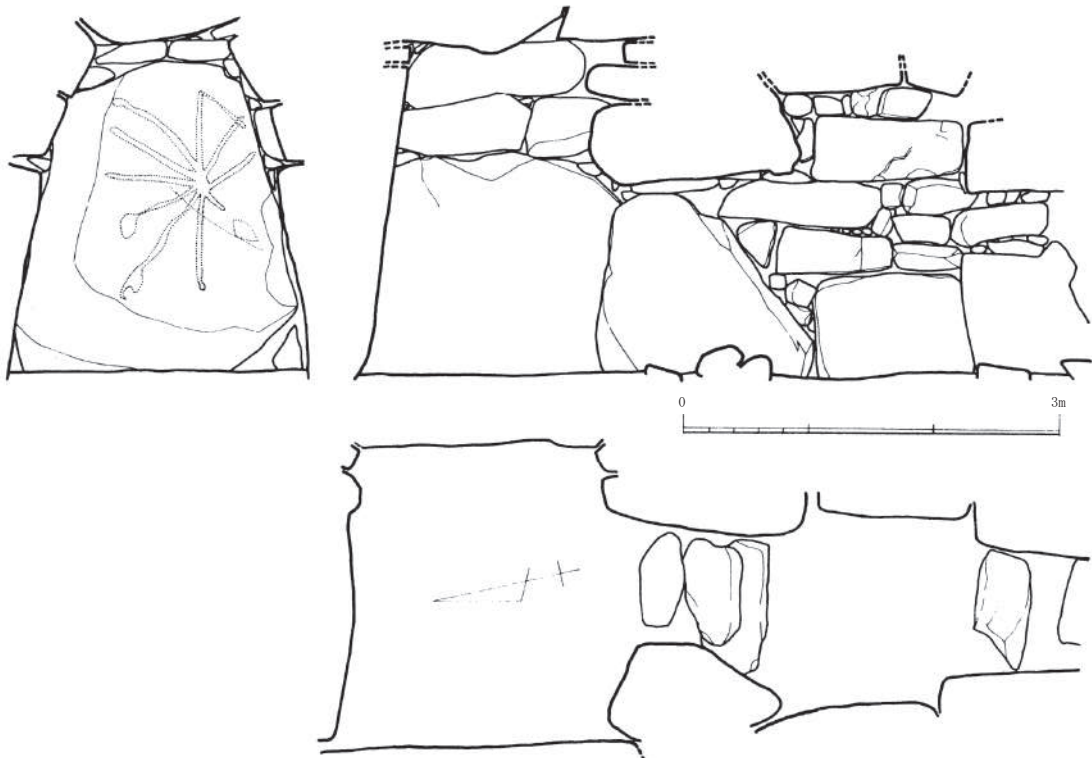


図64 一本松塚古墳石室実測図（1/60）

柵が設置された。

名称 一本松塚（『小倉高等学校考古学部 1950』） 日明一本松塚古墳（『北九州市 1985』） 一本松塚古墳（『教育社 1985』） 日明・一本松塚古墳（「小田富士雄 1988」） 一本松塚古墳（指定名称）

所在地 北九州市小倉北区日明

指定（古墳）北九州市指定史跡 昭和 48 年 3 月 22 日、（出土品）北九州市指定有形文化財（考古資料）昭和 48 年 3 月 22 日

墳丘 円墳 直径 15m

主体部 横穴式石室（複室・両袖・南向きに開口、花崗岩・一部変成岩）現存長 6.35m（羨門部は完存せず）、後室長 2.0m、後室幅 2.3m、後室高 2.5m

装飾 後室奥壁の中央よりやや右寄りに幅 5 cm ほどの朱線が上下に引かれ、これを中心として、放射状に右に 3 本、左に 5 本、計 10 本の放射状朱線文様が認められる。右側壁にも塗朱の痕跡が認められたが、文様を構成するものなのか単なる塗朱かは判断されていない。

顔料 赤（『講談社 1973』 斎藤忠） 朱（『北九州市 1985』） 朱（『小倉高等学校考古学部 1988』 小田富士雄）

遺物 土師器・須恵器・武器・武具・馬具・装身具（北九州市立自然史・歴史博物館）

年代 6 世紀末～7 世紀初頭

調査歴 昭和 25 年 9 月 小倉高校考古学部による発掘調査

整備歴 昭和 48 年度 墳丘裾部擁壁および石室入口整備

平成 11 年度 石室入口側柵設置

平成 27 年度 石室入口改築

現況 石室入口の保存整備工事等を実施して現状保存

図面等 昭和 25 年 石室実測図、前室遺物出土状態図

（写真計測）九州歴史資料館 2024. 2. 6 計測

写真 九州歴史資料館 1976 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 5 点



図 65 発見当時の一本松塚古墳



図 66 発見当時の一本松塚古墳石室入口

九州歴史資料館 1976 撮影 35mm カラー
リバーサル 8 点

九州歴史資料館 1980 撮影 4 × 5 カラー
リバーサル (※要確認)

九州歴史資料館 1991. 3. 19 撮影 35mm
カラーリバーサル (奥壁・遠景)

九州歴史資料館 2024. 2. 6 撮影デジタル
写真データ (奥壁)

H14 北部九州装飾古墳画像 D B 5 点
(No. 0072・0073・No. 0590～0592)

模 型 北九州市立自然史・歴史博物館に
実物大レプリカ (2002 年製作)

文 献 小倉高校考古学部 1950『まが
たま』2 25 年度市内遺跡調査中間報
告

関家敏正 1952「小倉市日明一本松塚
調査の報告」『まがたま』3 小倉高等
学校考古学部

坂上喜克 1957「日明一本松再調査」『ま
がたま』8 小倉高等学校
考古学部

北九州市教育委員会 1976
『北九州市の埋蔵文化財』
北九州市文化財調査報告
書第 16 集

北九州市史編さん委員会
1985『北九州市史 総論
先史・原史』北九州市
森貞次郎 1985『装飾古墳』
教育社

小田富士雄 1988「日明・一
本松塚古墳調査報告」『ま
がたま』福岡県立小倉高等
学校創立八十周年記念 福
岡県立小倉高等学校考古学
部



図 67 一本松塚古墳奥壁

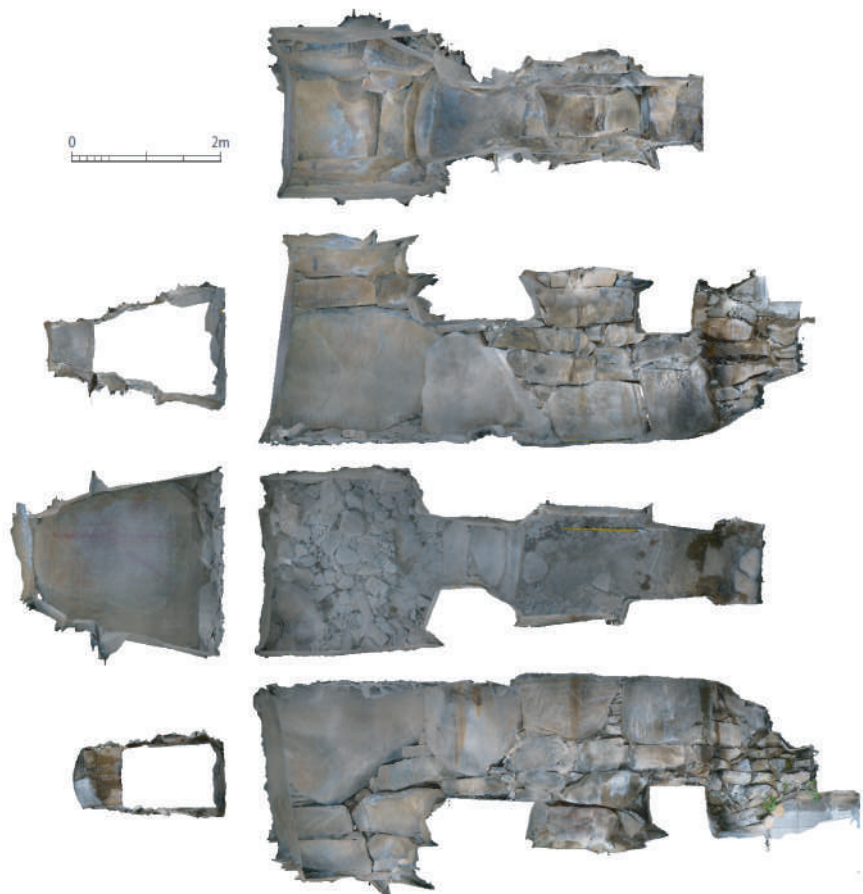


図 68 一本松塚古墳石室正射投影画像 (1/100)

10 相坂（あいさか）横穴群第 14 号墳 11 相坂（あいさか）横穴群第 15 号墳

立地 福岡県の北端、北九州市の洞海湾奥部から 1.5 km ほど西側に位置する、線刻を施文した横穴墓である。遠賀川下流域右岸に沿って形成された、海拔 50m 前後の遠賀丘陵地と呼ばれる古第三紀層低丘陵に立地しており、洞海湾へと注ぎ込む江川を北側に見下ろす崖面にある。

経緯 発見は古く、『福岡縣 1934』では島田寅次郎が実見した県内の横穴 11ヶ所の一つとして「遠賀郡折尾町本城鵜巣相坂の横穴」の報告がある。

発見に至る詳細は不明だが、昭和 9 年より以前に開口し発見に至ったものと思われる。当時は装飾のある横穴墓の存在が注目され始めた頃であり、「但し後人の戯に刻したりと認むべきもの多く一々信じ難し」と慎重な姿勢を示しながら、相坂横穴で確認された線刻画については「古朴稚拙の人物陰刻画」

であり「人形の外縦横無意味の線若干あり、何れ文務省の鑑定を請ふ事となれり」と評価する。

文中には本城横穴（相坂横穴群）甲室・乙室の副葬品出土状況、ならびに芹田氏見取図と記載のある他 2 基の横穴墓副葬品出土状況の図が掲載される。その他、羨道または羨門外の通路から複数の須恵器が出土したことや、「貝の化石を納めた土師器高坏」出土についても報告がある。

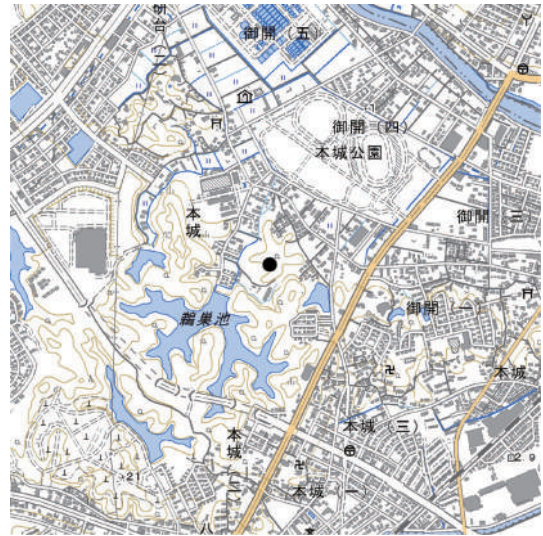


図 69 相坂横穴群位置図 (1/25,000)



図 70 相坂横穴群分布図 (1/600)

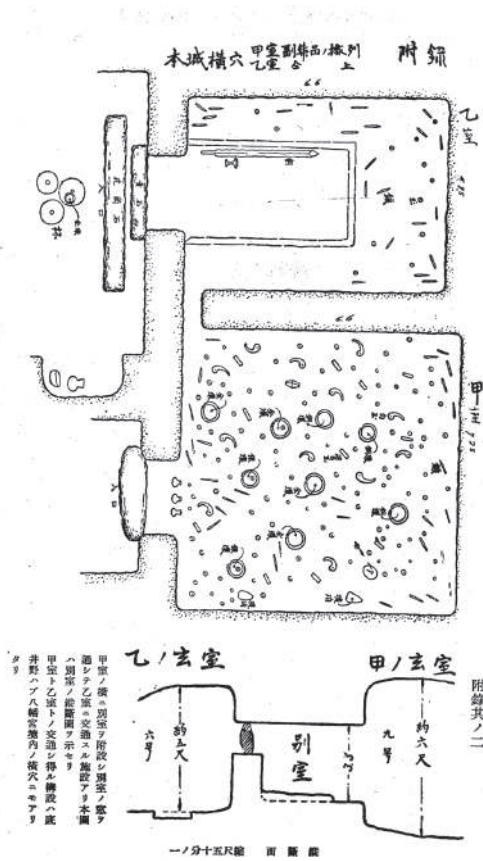


図 71 「本城横穴甲室副葬品ノ配列 乙室全上」
(『福岡縣 1934』)



図 72 「遠賀郡本城横穴ノ壁画」
(『福岡縣 1934』)

昭和 9 年に報告されて以降、土地所有者により遺物が採集、保管されていたが、平成元年に北九州市に対して所有者が採集品の寄贈を申し出たことが発端となり、北九州市教育委員会では平成 2 年 10 月から平成 7 年 2 月まで、計 5 次に及ぶ範囲内容確認調査を実施した。この時の調査では、昭和 9 年報告の線刻画がその後見失われていたため、その再発見と、新たな装飾の発見が目的とされた。

確認調査の結果では 17 基の横穴墓が調査され、さらに周辺の分布調査によって横穴墓群の数は全体で 38 基に及ぶことが分かった。

第 4 次調査で調査対象となった第 14 号墳では、玄室内壁面に線刻画が確認された。線刻画中に比較的鮮明な人物像が確認されたことや、明らかに後世の追刻とみられる線刻があることから、昭和 9 年



図 73 第 14 号墳玄室上線刻画 (鳥等)



図 74 第 14 号墳玄門右上線刻画 (人物)

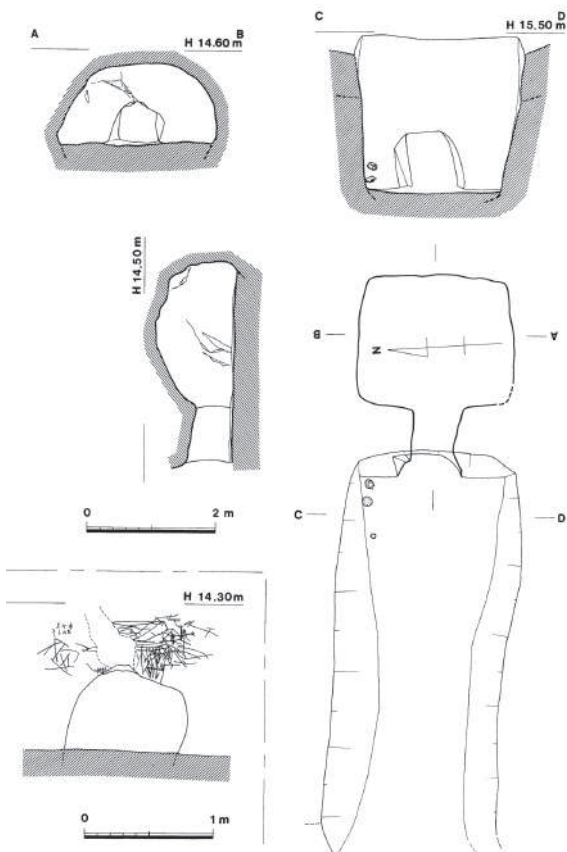


図 75 第 14 号墳線刻画実測図 (1/60・1/120)

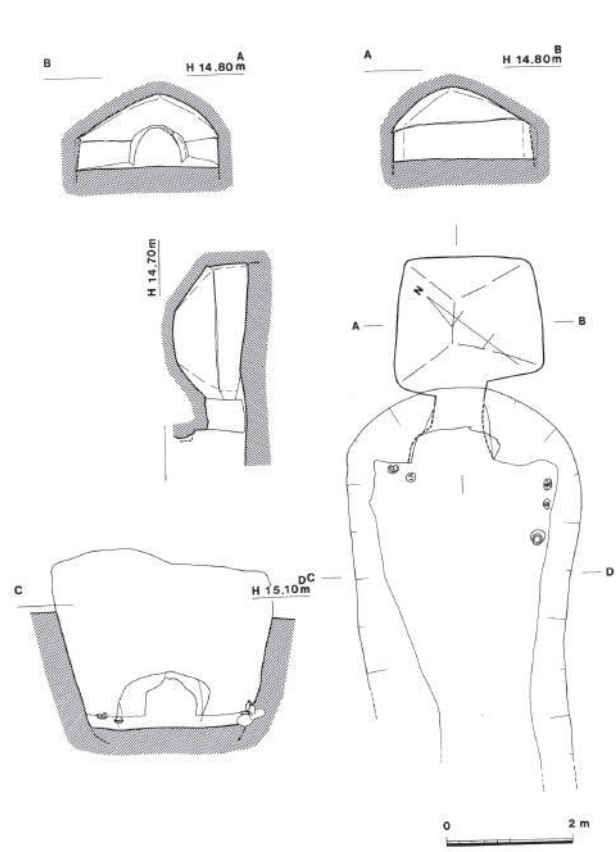


図 76 第 15 号墳実測図 (1/120)

に発見された線刻のある横穴墓はこの第 14 号墳とみられる。

第 15 号墳は、第 4 次調査時にはじめて線刻の存在が確認された横穴墓である。従って、現在までに相坂横穴墓群で確認された装飾横穴墓は 2 基を数える。

名称 鵜巢相坂の横穴・本城横穴 (『福岡縣 1934』)

相坂横穴群第 14・15 号墳 (『北九州市教育委員会 1996』)

所在地 北九州市八幡西区大字本城

〈第 14 号墳〉

主体部 横穴墓 (平面隅丸方形、ドーム形天井、両袖式玄門、玄室上に平坦面形成) 全長 9.35m、玄室幅 2.15～2.4m、玄室奥行 1.9～2.1m、玄室高 1.3m

装飾 玄室内壁面に線刻。特に玄門上方壁面が著しく、それが天井部まで及ぶ。左側壁にも線刻が確認できるが、明らかに後世の追刻も混在する。

玄室上方には無数の陰刻線が入る。判断できる内容は右上の人物像、その左側の鳥、人物像と鳥の間の下方の木葉、剥落部左側の魚である。左側の魚は若干タッチが深く後世の追刻の可能性も



図 77 第 14 号墳玄室天井線刻

ある。右側の人物像は比較的鮮明で、四角の顔の輪郭に目鼻口、胴部、両手を表現する。両手には指まで確認できる。左側の鳥は右を頭とする横向きである。その他、天井では斜格子状の表現も見られ、家屋内部の一部を示す可能性がある。

遺物 昭和9年 須恵器・土師器・武器・装身具（北九州市教育委員会）

第4次調査 須恵器（北九州市教育委員会）

年代 6世紀後半

〈第15号墳〉

主体部 横穴墓（平面隅丸方形、寄棟状屋根形天井、両袖式玄門）全長8.8m、玄室幅2.0～2.35m、玄室奥行1.8～2.1m、玄室高1.2m

装飾 玄室内壁面に線刻。縦縞模様や格子模様、強いタッチで縦から斜め線を陰刻で表現する。明らかに後世の追刻も存在し、縦模様等の中にも強いタッチの沈線があることから、後世のものと混在する可能性がある。玄門の上方等の天井部にも同様の文様が認められる。

遺物 須恵器（北九州市教育委員会）

年代 6世紀後半～末

調査歴 昭和9年頃 土地所有者により発見。墓室および副葬品出土状況見取図作成。遺物は土地所有者が保管後、平成元年に北九州市教育委員会に寄贈。

平成2～7年度 第1～第5次調査（北九州市教育委員会）

現況 発掘調査後、埋戻して現状保存

図面等 墓室および副葬品出土状況見取図、線刻画拓本（『福岡縣1938』）

平成2～7年度 横穴墓群分布図、14号墳実測図、線刻画実測図（北九州市教育委員会）

写真 北九州市教育委員会平成2～7年度撮影 35mmカラーリバーサル・モノクロ

文献 福岡縣1934「福岡県の横穴」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第九輯

北九州市教育委員会1976『北九州市の埋蔵文化財』北九州市文化財調査報告書第16集

北九州市史編さん委員会1985『北九州市史 総論 先史・原史』北九州市

北九州市教育委員会1996『相坂横穴群』北九州市文化財調査報告書第69集



図78 第15号墳線刻画（格子）



図79 第15号墳玄門左上線刻

12 下吉田（しもよしだ）古墳群第2号墳

13 下吉田（しもよしだ）古墳群第4号墳

立地 下吉田古墳群は福岡県の北東端、企救半島山地と呼ばれる山稜の南西側で、狭い平野部を隔てた独立山塊に位置する後期の群集墳である。標高226mを最高所とする鳶ヶ巣山の南麓、標高8～80mの緩斜面にあり、眼下には曾根潟が広がっている。

昭和45年当時には38基が確認され、のちに東西800m、南北150mの範囲にA～Jの10支群、総数61基が確認された。本古墳群を含む半島西南部の、貫川と竹馬川によって形成された曾根沖積地と周辺丘陵部は、遠賀川流域、紫川流域と共に北九州市域における一大遺跡の群在地として知られる。

経緯 昭和45年9月3日から10日までの間、北九州市教育委員会が実施したのが最初の発掘調査である。この時にはA・D支群の5基（1・4・6・10・15）が調査された。

昭和55年1月、下吉田団地造成工事に先立ち確認調査が行われ、14基の古墳が確認された。同年3月に4基の調査（第一次調査）、翌56年7月から12月に公園用地内の10基（第二次調査）の発掘調査が行われ、新たに検出された10基を含めて57年4月まで（第三次調査）調査が実施された。公園予定地については計画変更が行われ、約30基の古墳が現地でも保存されることとなった。

現状保存されている古墳群のうち、第2号墳と第4号墳については近年、住民らによって装飾古墳の可能性が指摘されたため、今回、九州歴史資料館が現地確認と写真計測による記録作成を実施した。

名称 下吉田古墳群第2・第4号墳

所在地 北九州市小倉南区大字吉田

〈第2号墳〉

墳丘 円墳（径12.6m）

主体部 横穴式石室（複室 南側に開口、砂岩・花崗岩・変成岩） 現存長8.2m、後室長3.2m、後室幅2.3m、後室高2.1m（床面土砂堆積）

装飾 奥壁と両側壁に円文・同心円文が確認でき



図80 下吉田古墳群位置図 (1/25,000)

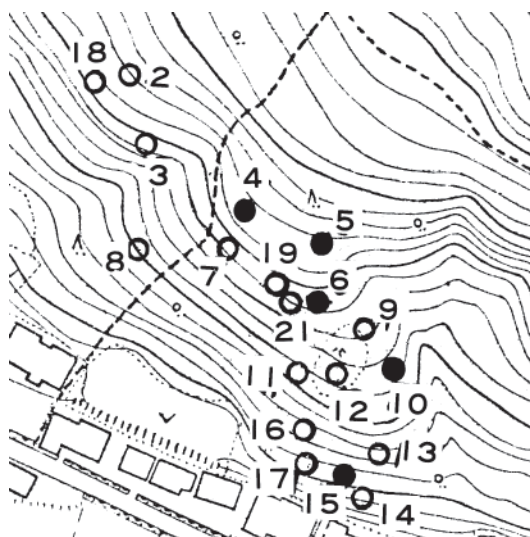


図81 下吉田古墳群分布図 (1/2,500)



図82 第2号墳後室

る。施文方法については、敲打によるものと思われるが、明確に敲击窪めたような痕跡が認められる訳ではない。

奥壁鏡石では単円文・同心円文が6～7点認められる。奥壁左側の下から120 cmの位置に、直径20 cmの二重同心円文が1点、奥壁右側の下から80～130 cmの位置に、径15～25 cm、単円または二重同心円文が4点確認できる。その他、中央付近にも単円文を描いたように見える箇所が複数あるが、不明瞭である。

左側壁にも不明瞭だが文様を描いたように見える箇所がある。横幅3m、高さ1.1m程の巨大な腰石の玄関部に近い位置に、横90 cm、縦60 cmの大きさで横方向の波状文様と不明瞭な同心円状の文様が見える。

年代 6世紀後半～7世紀初頭

〈第4号墳〉

墳 丘 円墳（径17.8m）

主体部 横穴式石室（複室 南側に開口、砂岩・花崗岩・変成岩） 全長6.8m、後室長2.7m、後室幅1.9m、後室高1.8m（床面土砂堆積）

装 飾 奥壁と右側壁に施文が認められる。施文方法については敲打によるものと思われるが、明確に敲击窪めたような痕跡が認められる訳ではない。

右側壁腰石には横長の花崗岩が用いられており、その平坦面全体に多数の円文が認められる。

奥壁に接する端部から幅170 cm、床面から20～100 cmの範囲にわたって、径6～8 cmの中央を塗りつぶした円文（珠文）が、縦横方向の筋を揃えて配列される。施文範囲は腰石表面

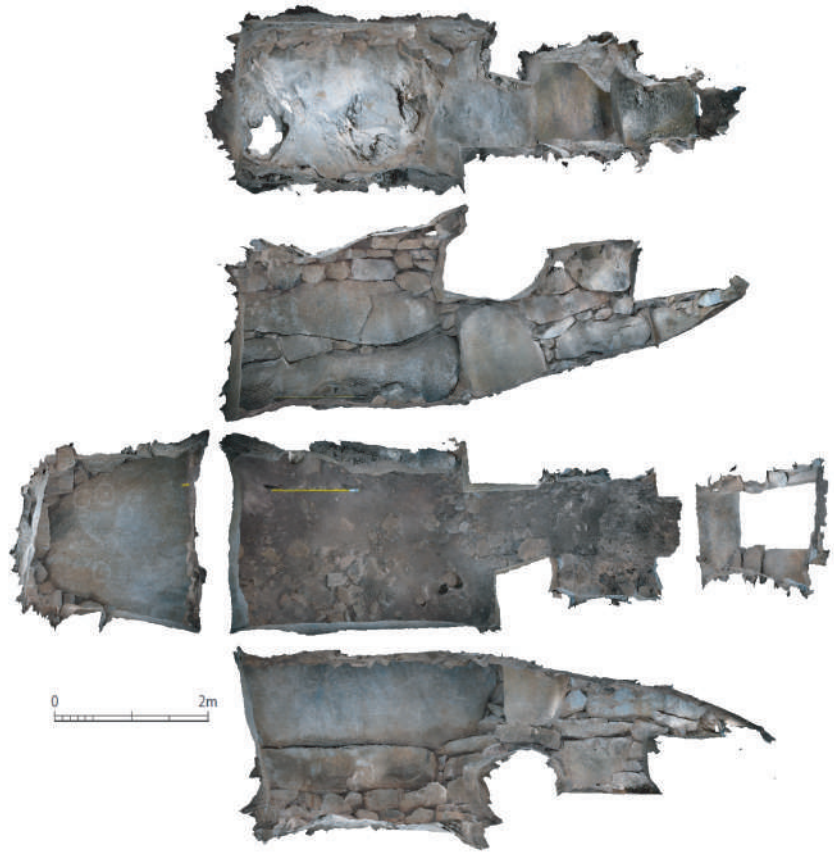


図83 第2号墳石室正射投影画像（1/100）



図84 第2号墳奥壁



図85 第2号墳後室左側壁



図 86 第 4 号墳後室右側壁



図 87 第 4 号墳奥壁（昭和 45 年）

の平坦面部分にのみ行われており、表面に起伏のある玄門部側には認められない。

奥壁は横幅 190 cm、縦幅 110 cm の大型の石を使用しており、その右上と左上端に、右側壁と同様の円文が複数認められる。施文範囲は全面に及ぶようにも見えるが不明瞭である。

年代 6 世紀後半～7 世紀初頭

調査歴 昭和 45 年 A・D 支群中 5 基の発掘調査（北九州市教育委員会）
昭和 55～57 年 下吉田団地造成工事に伴う確認調査（第一～第三次調査）（北九州市教育文化事業団）

現況 調査後、開口した状態で現状保存

図面等 古墳群分布図・墳丘測量図・

石室実測図（北九州市教育委員会）

（写真計測）九州歴史資料館 2024. 2. 6 計測

写真 北九州市教育委員会昭和 45 年調査時撮影写真

北九州市教育文化事業団昭和 55～57 年調査時写真

九州歴史資料館 2024. 2. 6 撮影デジタル写真データ

文献 北九州市教育委員会 1972 『小迫窯跡・下吉田古墳群 - 図録篇 - 調査報告』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 9 集

北九州市教育委員会 1976 『北九州市の埋蔵文化財』北九州市文化財調査報告書第 16 集

北九州市教育文化事業団 1983 『下吉田古墳群』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 21 集

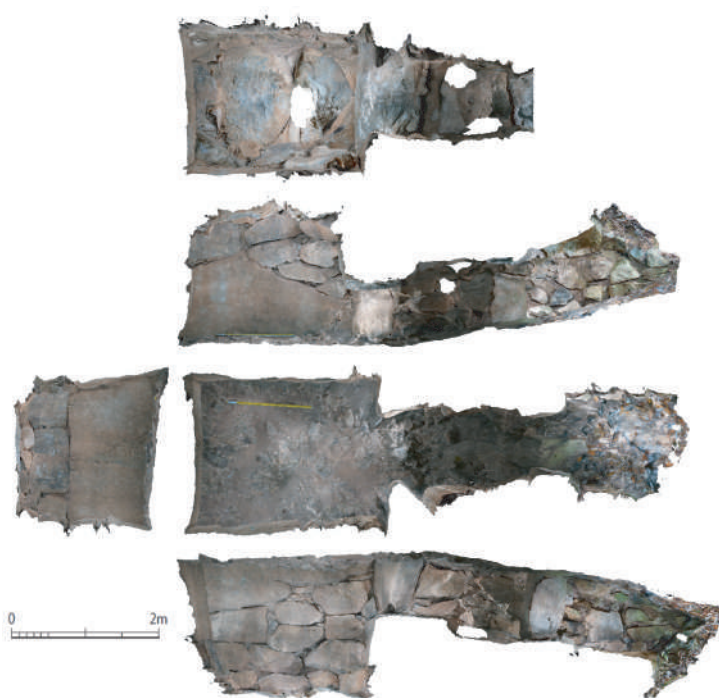


図 88 第 4 号墳石室正射投影画像（1/100）

14 水町（みずまち）A 13－I 号横穴墓
 15 水町（みずまち）B 18－I 号横穴墓

立地 福岡県の中中部、遠賀川と彦山川とが交わる周辺に、直方平野と呼ばれる沖積平野が形成される。水町遺跡はその南東端に位置し、彦山川の支流で福智山系に源を発する福地川の左岸丘陵斜面に形成される。

遠賀川流域一帯には第三紀層の硬質砂岩層の露頭が多くみられ、その崖面を掘削して横穴墓が造営される傾向にあるため、県内でも有数の横穴墓密集地として知られる。水町横穴墓群もその一つで、西向きに突き出した丘陵先端部の標高 20～30m の北側・南側斜面に横穴墓を造営しており、現在までに 70 基以上が確認されている。

経緯 昭和 41 年、直方市立直方第三中学校教諭の佐々木務を中心に、すでに開口していた 2 基の横穴墓（当時、第八・九号横穴墓、現水町 A12・A13-I 号横穴墓）の発掘調査が行われた。その時の調査では、横穴墓数 15 基と記載がある。

平成 5 年 9 月、土取工事計画に際して直方市教育委員会が付近の事前地形測量と確認調査を実施し、最低でも 30 基以上が群集する市域最大規模の横穴墓群であることを確認した。その

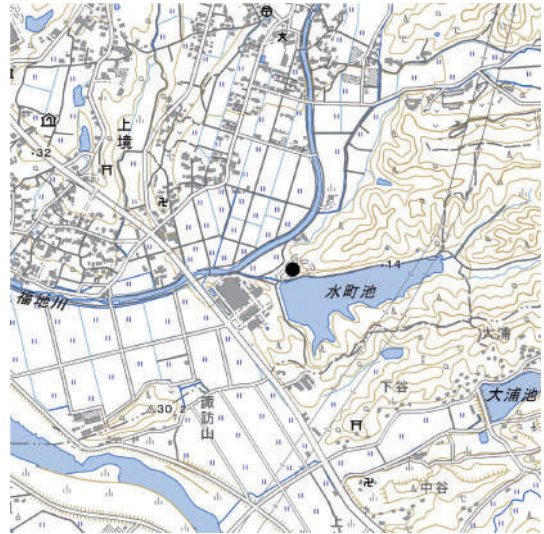


図 89 水町遺跡群位置図 (1/25,000)

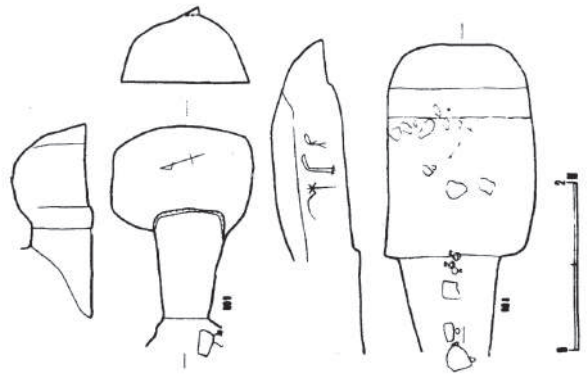


図 90 「水町横穴墓群 8・9 号」(現、水町 A12・A13-I 号横穴墓) (『直方市 1971』)



図 91 水町遺跡群遺構配置図 (1/600)

後、翌平成6年度から緊急調査を実施。その結果、横穴墓群の重要性が確認されたため、市では横穴墓群全体の保護を図ることとし、平成7・8年度に範囲内容確認調査を実施した。

A12号横穴墓については昭和41年調査の調査時点で線刻が把握されており、『直方市1971』にもその旨の報告がある。平成6～8年度の調査では、B18-I号横穴墓にも線刻があることが新たに確認された。



図92 水町遺跡群全景

名称 水町横穴群（『直方市1971』） 水町遺跡群（『直方市教委1993』）

所在地 直方市大字上境

指定 福岡県指定史跡 平成12年3月27日

〈A13-I号横穴墓〉

主体部 横穴墓（複墓室、羨門部に排水溝・基底部に飾り縁、玄室はアーチ形天井、屍床を彫り込んだかのような構造、両側壁と前壁に軒先線、玄室前半部の右側壁下に排水溝）全長3.92m・玄室長2.5m・玄室幅1.8m・玄室高0.96m

装飾 玄室左側壁を大きく利用して線刻を行っており、大きく4箇所に分かれる。右端は弓状を呈し、弧が左側に配置される。中央右側は鎌状を呈すが下端部に横線があり、刃にあたる部分のモチーフは右端のものと同じであろう。中央左側は縦線に×を表現する。左端は上向きの弧を表現するが下部は不明瞭である。全体的に力強いラインで線刻され、中央右側の鎌状のものは深さ1cm、幅3cm、右端で深さ5～6cmを測る。

遺物 昭和41年調査時に須恵器出土（直方市教育委員会）

年代 7世紀前半頃

〈B18-1号横穴墓〉

主体部 横穴墓（主墓室、羨門部飾り縁、羨門天井石、床面中央に浅い排水溝、玄室はアーチ形天井、四周に軒先線、四壁沿いに排水溝）全長3.5m 玄室長2.45m 玄室幅2.1m 玄室高1.05m

装飾 羨道部左壁に方形、弧線で複数のモチーフが重

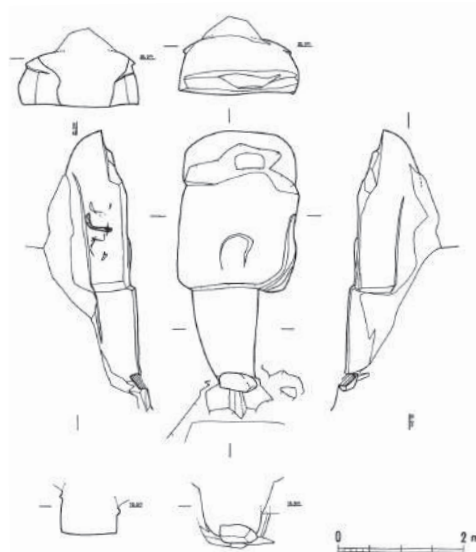


図93 A13-I号横穴墓実測図（1/120）

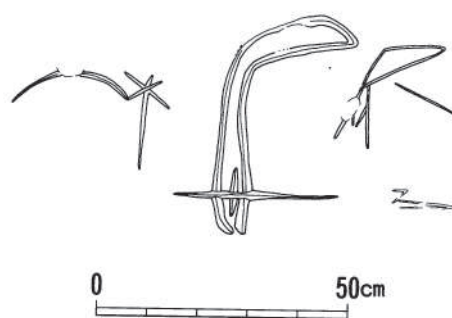


図94 A13-I号横穴墓線刻実測図（1/15）



図95 A13-I号横穴墓線刻

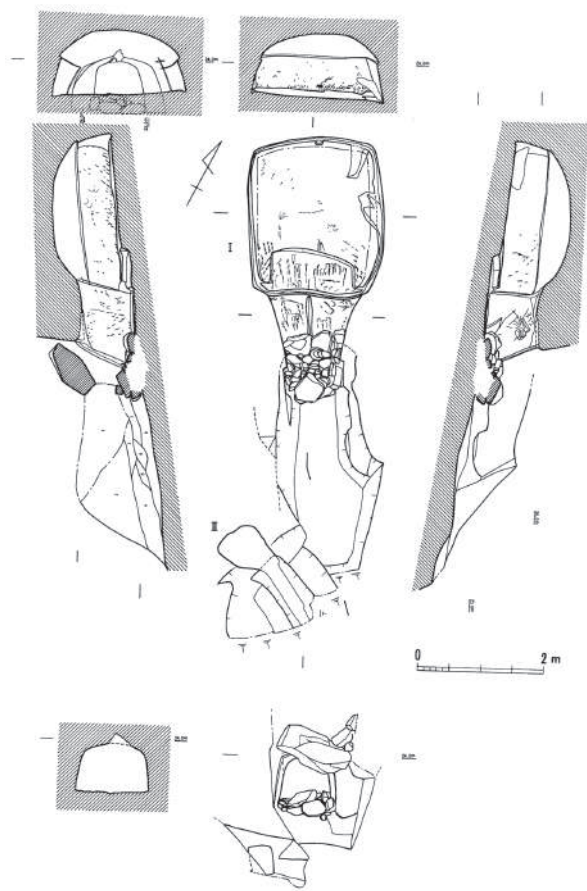


図 96 B18 号横穴墓実測図 (1/120)

複して描かれており、水鳥のようにも見える。
遺物 墓道覆土中から須恵器・土師器（直方市教育委員会）

年代 7世紀前半

調査歴 昭和41年（1966）直方市立直方第三
中学校教諭を中心に第八・九号横穴墓の発掘調査
（現・水町A12・A13- I号横穴墓）

平成6～8年度 第1次～第3次調査

整備歴 平成8～10年度 保存整備事業（土
留整備・公園整備・ガイダンス施設設置）

現況 保存整備工事後、現状保存

図面等 昭和41年調査 第八・九号横穴墓実測図（直方市教育委員会）

第1～3次調査 横穴墓群位置図・墓室実測図、他（直方市教育委員会）

写真 平成6～10年度事業写真（35mm カラーリバーサル・モノクロ）（直方市教育委員会）

文献 直方市史編さん委員会 1971『直方市史』上巻 直方市

直方市教育委員会 1993『直方市内遺跡詳細分布調査報告書』

直方市教育委員会 1997『水町遺跡群』直方市文化財調査報告書第20集

直方市教育委員会 2002『水町遺跡群整備事業報告書』直方市文化財調査報告書第23集

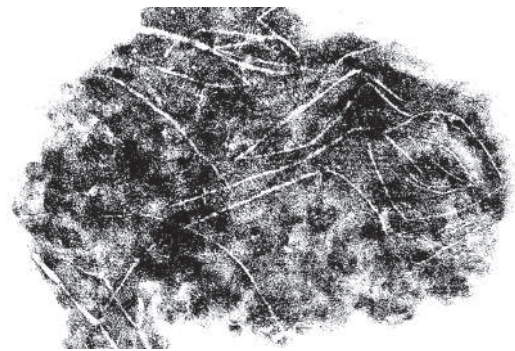


図 97 B18 - I号横穴墓線刻拓影 (1/6)

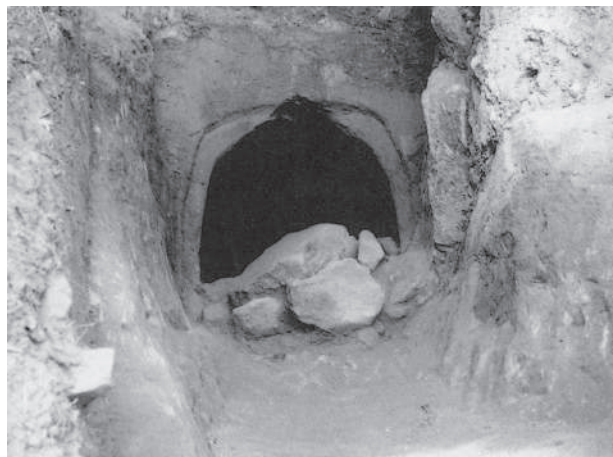


図 98 B18 号横穴墓羨門

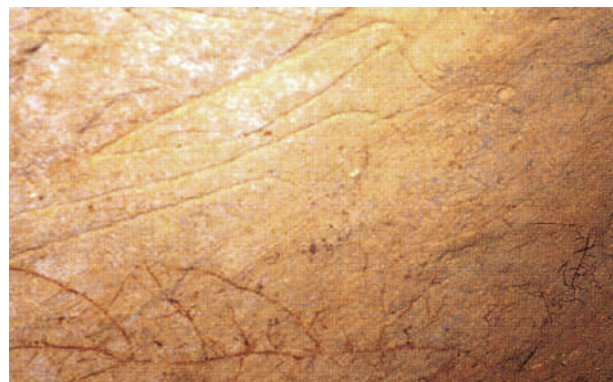


図 99 B18 - I号横穴墓羨道線刻

16 垣生羅漢百穴（はぶらかんひゃっけつ）Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓

17 垣生羅漢百穴Ⅲ A 地区第 2 号横穴墓

18 垣生羅漢百穴Ⅲ A 地区第 3 号横穴墓

19 垣生羅漢百穴Ⅲ A 地区第 4 号横穴墓

立地 垣生羅漢百穴は福岡県の北部、遠賀川中流域左岸にある。遠賀川の沖積作用によって形成された、遠賀平野と呼ばれる広大な平野部の中にある、長さ 1.5 km、幅 1 km 程の独立低丘陵上に立地する。羅漢山丘陵と呼ばれるこの低丘陵地は新生代第三紀層の砂岩によって形成されており、本横穴群をはじめ複数の横穴墓群が点在するため、「垣生丘陵横穴群」とも称される。同一丘陵の約 1 km 南側には瀬戸横穴墓群がかつて所在し、さらに遠賀川を挟んで対岸の南西 1 km には土手ノ内横穴墓群が位置していた。

丘陵周辺は宅地造成が進んでいるが、垣生羅漢百穴を含む垣生神社周辺一帯は往時の自然景観をよく留めており、都市公園「垣生公園」として環境保全が図られている。

経緯 横穴墓群としてはかなり早い段階から知られており、『筑前国続風土記』には「垣生村羅漢」として紹介され、「羅漢山と云小山あり。其側に岩窟三あり。…奥の間に多く石佛を安置す」とある。同様の記述は『拾遺』『附録』『太宰管内志』にもみられる。

「柴田喜八 1923」では羅漢山の横穴について「今口を開いて居るものが總て六個、開口せぬものも二、三個あるらしい」とし、第一號墳・第二號墳については実測図の掲載とともに詳細な内容の記載があるが、装飾に関する記述はみられない。線刻系装飾古墳としての認識はこれより以降のことである。

『中間市 1978』では、「垣生丘陵横穴群」中の「垣生・羅漢山横穴墓」40 基について群構成が整理され、そのうちⅢ A 群第 1 号横穴（柴田喜八 1923 報告の第一號墳）については「永く開口していたために壁面が傷み、線刻壁画は後世の心ない加筆によって荒らされ」とある。

平成 11・12 年度に中間市教育委員会が実施した範囲内容確認調査では、Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓（『中間



図 100 垣生羅漢百穴位置図 (1/25,000)

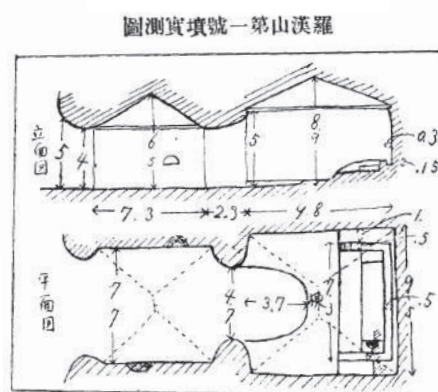


図 101 「羅漢山第一號墳實測圖」（柴田喜八 1923）」



図 102 垣生羅漢百穴（昭和 30 年代）

市 1978』Ⅲ A 群第 1 号横穴墓)をはじめ、Ⅲ A 地区第 2・3・4 号横穴墓で線刻壁画の可能性が指摘された。

名称 垣生村羅漢 (『筑前国続風土記』)

垣生羅漢山の横穴群 (『柴田喜八 1923』)

垣生羅漢百穴 (1957 福岡県指定史跡指定名称)

垣生・羅漢山横穴群 (『中間市 1978』)

羅漢山横穴墓 (『講談社 1985』)

垣生羅漢山横穴群 (『中間市教育委員会 2001』)

所在地 中間市垣生

指定 福岡県指定史跡 昭和 32 年 8 月 13 日

「垣生羅漢百穴」

〈Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓〉

主体部 墳丘のある横穴墓 (複室構造・屋根形天井・壁面に軒先線表現・左右壁面に棚状掘り込み・玄室奥壁に屍床・枕表現) 墳丘径 18.2m、墓室全長 7.7m、玄室長 3.2m、玄室奥壁幅 3.2m、玄室高 2.7m、前室長 2.2m、前室幅 2.75m

装飾 平成 11・12 年度の調査では、玄室右側壁に船の線刻、左側壁に月の線刻が確認された。線刻の幅・深さは両方とも同様である。明らかに後世の追刻を受けており、本来の線刻かどうか判断できなかったようである。

〈Ⅲ A 地区第 2 号横穴墓〉

主体部 横穴墓 (屋根形天井、壁面に軒先線表現、主屍床、排水溝、左右壁に棚状掘り込み、羨門に飾縁の痕跡) 墓室全長 3.8m、玄室長 1.75m、玄室幅 2.0m、玄室高 1.38m。

装飾 平成 11・12 年度の調査では、羨道右壁に人物の線刻が確認された。

〈Ⅲ A 地区第 3 号横穴墓〉

主体部 横穴墓 (屋根形天井、壁面に軒先線表現、左右壁面に棚状掘り込み・主屍床・枕表現、副屍床・枕表現、墓道削平) 墓室全長 5.2m、玄室長 2.7m、玄室幅 2.65m、玄室高 1.85m、羨道長 1.45m、羨門幅 0.62m、羨門高 0.85m。

装飾 平成 11・12 年度の調査では、主屍床前面に船・人物の線刻が確認された。

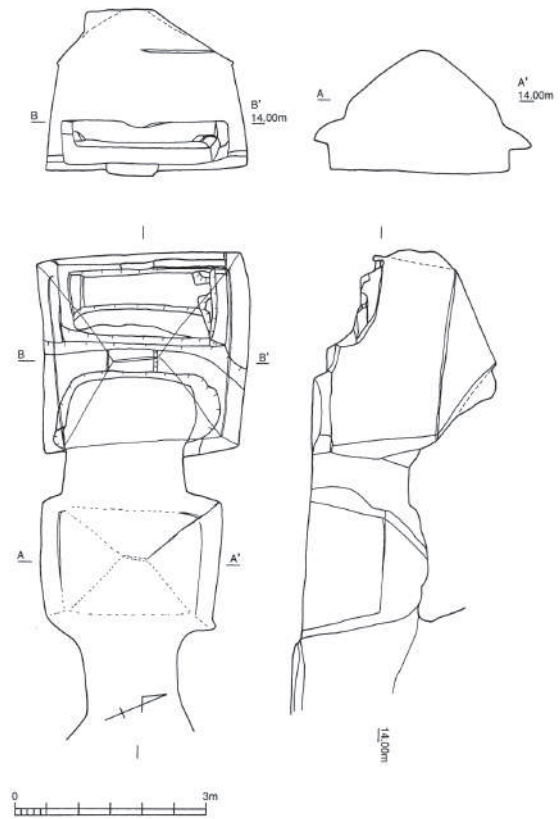


図 103 Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓実測図 (1/120)



図 104 Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓全景



図 105 Ⅲ A 地区第 1 号横穴墓玄室右側壁

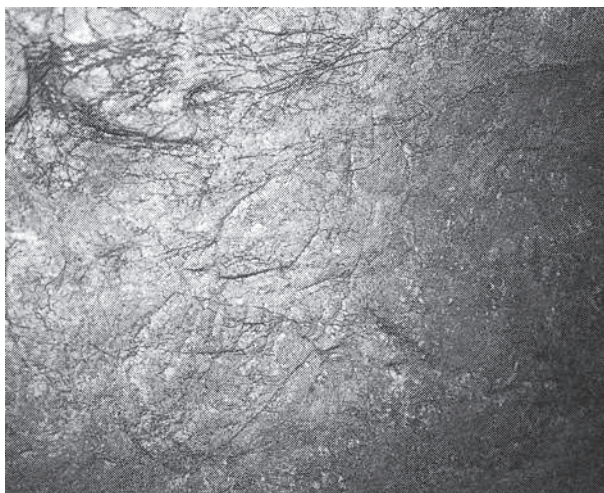


図 106 Ⅲ A 地区第 2 号横穴墓羨道部右側壁



図 107 Ⅲ A 地区第 3 号横穴墓屍床前面

〈Ⅲ A 地区第 4 横穴墓〉

主体部 横穴墓（屋根形天井、壁面に軒先線表現、主屍床・枕表現、副屍床・枕表現、羨門上部崩落）墓室全長 6.12m、玄室長 3.1m、玄室幅 3.15m、玄室高 1.78m、羨道長 1.1m、羨門幅 0.7m。

装飾 平成 11・12 年度の調査では、玄門上部に鳥の線刻が確認された。

遺物 Ⅲ A 地区第 1・2 号横穴墓については出土遺物がなく、「其他の三墳」から多数の須恵器や土師器が出土したことが記される。

『中間市 1987』には、他支群横穴墓から出土した須恵器・土師器・装身具に関して、実測図と共に報告がある。（中間市教育委員会）

平成 11・12 年度調査 他の横穴墓から須恵器出土（中間市教育委員会）

年代 6 世紀後半～7 世紀後半（墓群造営開始期は 5 世紀末～6 世紀初頭と推定される）

調査歴 平成 11・12 年度 中間市教育委員会による範囲内容確認調査

現況 開口状態で現状保存。後世の追刻等により装飾は不明瞭である。

図面等 大正 12 年 柴田喜八が第一號墳（Ⅲ A 地区第 1 号横穴）の墓室実測図作成

昭和 53 年 市史刊行に際し、Ⅲ A 群第 1 号横穴（Ⅲ A 地区第 1 号横穴）の墓室実測図作成

写真 九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル「羅漢山Ⅲ A-1」他、19 点

中間市教育委員会平成 11・12 年度調査時撮影写真（中間市教育委員会）

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 8 点（No. 0593～0600）

文献 柴田喜八 1923「筑前国底井野の横穴群」『考古学雑誌』第十三卷第五号

中間市史編纂委員会 1978『中間市史』上巻 中間市

中間市教育委員会 2001『垣生羅漢山遺跡群』中間市文化財調査報告書第 3 集



図 108 Ⅲ A 地区第 4 号横穴墓玄門天井部

20 瀬戸（せと）横穴墓群第 14 号横穴

立 地 福岡県の北部、遠賀川中流域左岸の独立低丘陵南側斜面に立地する。垣生羅漢百穴が所在する羅漢山丘陵から谷を挟んだ南側、1 kmほど離れた位置にある。

経 緯 最初の調査は昭和 25 年、すでに開口していた 1 号横穴の調査を鞍手高校郷土部が実施し、出土品の収集を行った。その後、住民による採土に伴って 2・3 号横穴が発見された。

昭和 31 年、横穴のある本丘陵地が鉱害復旧工事のための採土の対象となり、掘削に伴って横穴が確認され市へと通報された。昭和 31 年 9 月 23 日に地元の名和洋一郎、黒野肇、船津常人らが調査した時には舌状丘陵部にあった 1～7 号横穴は破壊され、採土中の崖面には 11～13 号横穴が開口していた。この時、崖上に円形盛土を持ち羨門部を石積で門状に飾った 14 号横穴を発見、直ちに発掘調査が行われた。

14 号横穴は古くに盗掘を受けていたが壁面の状態は良好で、墓室に彩色壁画が確認されたため、直ちに羨道が密閉され工事が中止された。

中間市教育委員会では同年 10 月 31 日に埋蔵物発見届を提出、11 月 8 日に古墳発見届を県文化財保護委員長宛て提出し、14 号横穴を含む丘陵地を市文化財として保存することが決定していたが、昭和 32 年 2 月 16 日に同丘陵東側の採土のため岩盤爆破が行われたところ、その余震で 14 号横穴が崩壊し、消滅に至った。現在、瀬戸横穴墓群が所在した丘陵自体は残っているが、確認された横穴墓は全て残っていない。

名 称 瀬戸横穴群第 14 号横穴 瀬戸第 14 号横穴（『中間市 1978』） 瀬戸口横穴墓（『森貞次郎 1985』）

所在地 中間市瀬戸

主体部 横穴墓（単室、屋根形天井、垂木表現、崖上に墳丘、屍床、枕表現、排水溝、羨門部石組）
全長 5m、墓室長 2.5m、墓室幅 2.5m、高さ 1.55m、羨道長 2.5m、幅 0.7～0.8m、高さ 0.8～0.9m。

装 飾 墓室の正面奥壁と左右両側壁に、彫刻と彩色の手法を併用して描画される。奥壁は正面に東向きの馬と、その上に立ち上がって東上方にむけてまさに矢を放とうとする武人の姿を



図 109 瀬戸横穴群位置図 (1/25,000)

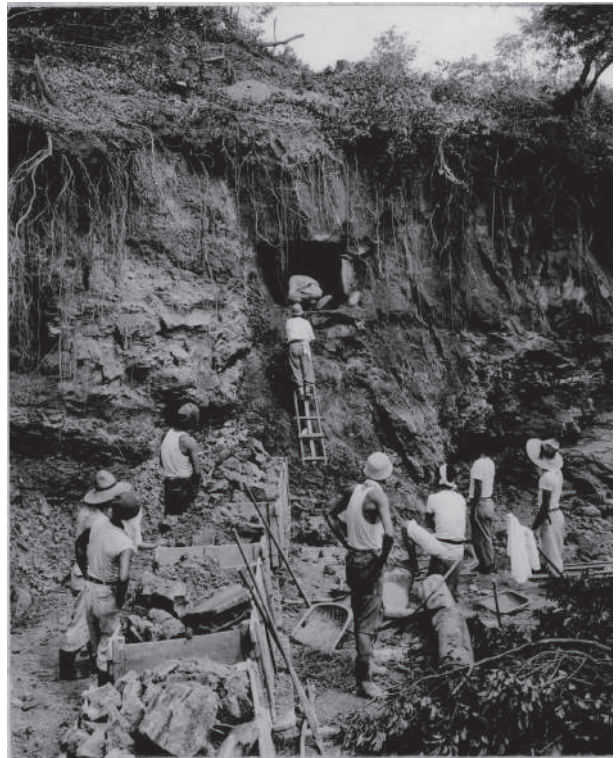


図 110 調査風景遠景

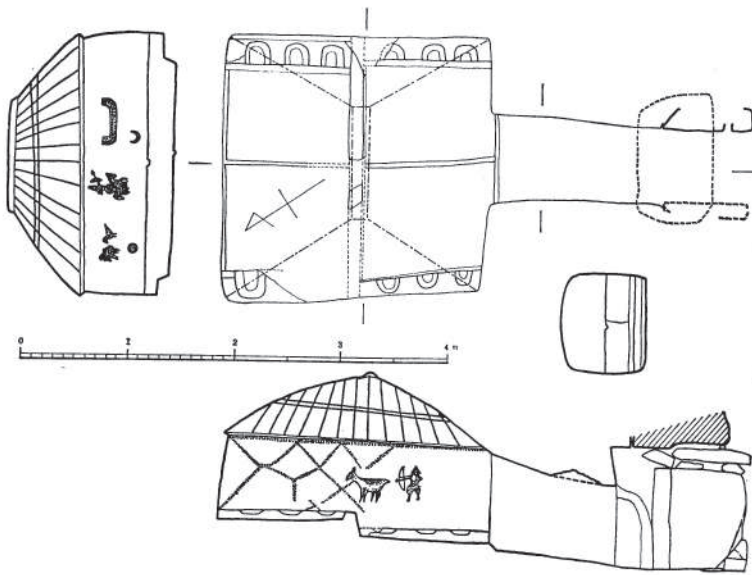


図 111 瀬戸横穴群第 14 号横穴実測図

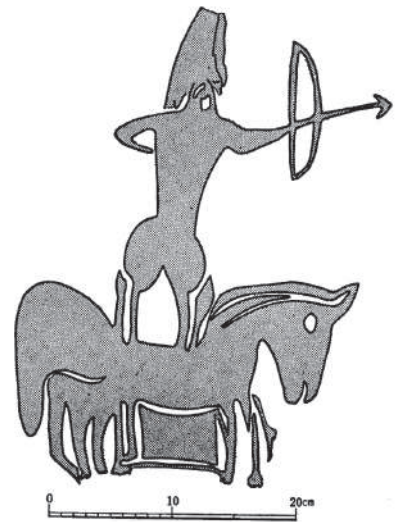


図 112 奥壁中央騎射武人図

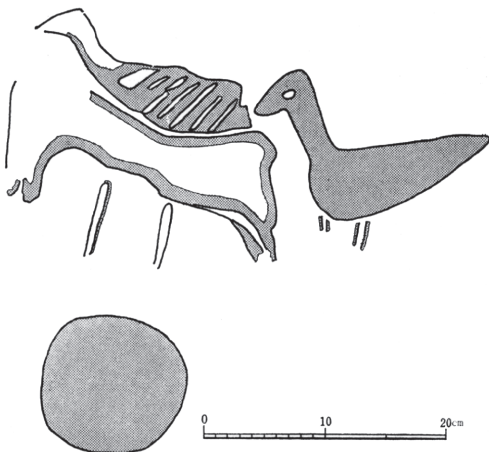


図 113 奥壁左側日輪・鳥獣図

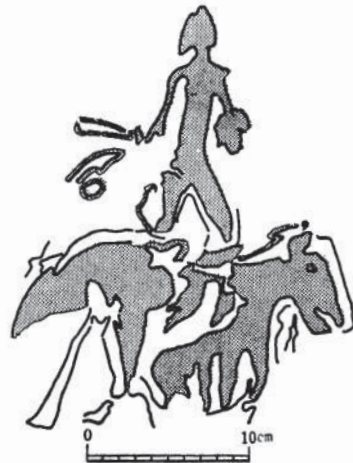


図 114 西壁人物・馬図

描く。その左には西向きの鳥獣を 3 点、その下に円文を配している。中央の騎射武人の右側には、両端が上方にあがった一艘の船と、その下に上向きの弧状文様を配す。

東壁中央には北向きの鹿かと思われる獣、その後ろ（南側）に弓矢を構えて追う人物を描く。右側壁のその他の空間には朱線による格子状文様を描くが、これが壁面の南側にまで及んでいるかどうかは明らかにできていない。

左側壁は一部剥落していたが、北向きの馬の上に両手両足を上げた正面観の人物を描いている。これを乗馬した構図とみるか、人物と馬とが直結しない構図とみるかは判断できていない。この左側壁の空間にも朱線による格子状文様が描かれていたと記憶されている。

これらの壁画は画題の周囲を外から削り込んで、画題の部分が一種の浮彫りとみられるように彫刻し、さらに必要に応じて画題の内部や周囲に線刻手法を加えて具象化し、画題内部や外部の

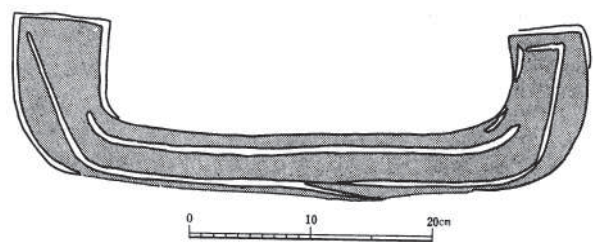


図 115 奥壁右側船図

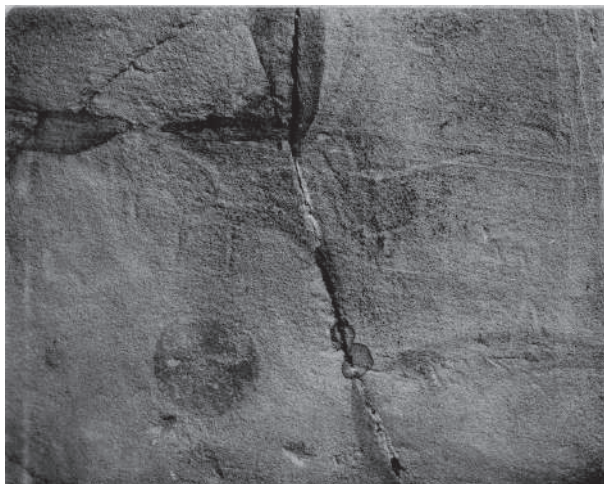


図 116 図文拡大



図 117 垂木表現拡大

線刻周囲を赤色で彩色して仕上げるという手法がとられている。

遺物 採土工事中の発見のため副葬品は不用意に持ち出されたとある。耳環（銀環）1、鉄鏃 3 種類、墓室から馬具が出土。

他の横穴墓からは土器（須恵器坏・壺・甗・提瓶・平瓶、土師器碗・高坏・脚付壺）、装身具（耳環）、武器（大刀・鉄鏃）、工具（刀子）、馬具が出土。（中間市教育委員会）

年代 6 世紀末

調査歴 昭和 25 年、鞍手高校郷土部による調査（1 号横穴）

昭和 31 年、地元郷土史家（名和洋一郎、黒野肇、船津常人）による調査（小田富士雄実測）

現況 調査後、近隣の岩盤爆破による余震により崩壊、消滅した。

図面等 昭和 31 年調査時の横穴墓群配置図・墓室実測図（『中間市 1978』掲載、14 号横穴墓実測図の青焼図を中間市教育委員会が保管）

写真 中間市 1978『中間市史』上巻に調査時撮影写真掲載

朝日新聞社提供紙焼（パネル大）4 点（調査風景遠景、図文拡大、垂木表現拡大、図文と調査者）、その他モノクロ紙焼 20 点（中間市教育委員会）

模型 中間市歴史民俗資料館に墓室模型

文献 佐々木武彦 1978『古代への旅人—名和洋一郎の生涯—』

小田富士雄 1957「福岡県遠賀郡瀬戸装飾横穴」『史淵』第七十四輯 九州史学会

中間市史編纂委員会 1978『中間市史 上巻』 中間市



図 118 図文と調査者

21 竹原（たけはら）古墳

立地 竹原古墳は福岡県の北側、遠賀川の支流の一つである犬鳴川の中流域左岸にあり、犬鳴川支流の山口川と黒丸川によって挟まれた標高約 60m の丘陵端部南側斜面に位置する。丘陵東端部には斜面を一部開削する形で諏訪神社があり、その境内に接している。眼下には若宮盆地が開け、市街地の福丸地区からは 1.5 km 西側にある。付近には八幡塚古墳、剣塚古墳、高野第 1 号墳など首長墳の分布が確認されている。

経緯 竹原古墳に隣接する諏訪神社は嘉吉二年(1442)鎮座、文龜年中(1501～04)に社殿・拝殿を再建、その後、天明年中(1781～89)に神殿、天保二年(1831)に神殿・拝殿を再建した記録が残る。これらの境内地造営が目的で、古墳の東方から南方の 1/3 以上は長い年月にわたって採土され、境内地拡張に使用されたい。

昭和 31 年(1956)3月、神社の相撲土俵改造のため新たに採土が行われた際に石室上石が露出、神社神官や地域住民、学校教員、九州考古学会員の清賀義人らによって 3 月 18 日に発掘が行われ、装飾古墳であることが確認された。その後、連絡を受けた若宮町教育委員会(当時)は福岡県教育委員会に連絡、県教育委員会を介して県文化財調査委員の森貞次郎に調査が委嘱された。発掘調査届には発掘担当者として福岡高等学校教諭 森貞次郎の名が記され、助手として清賀義人の名前もある。

発掘調査は 4 月 26 日から 30 日にかけて、石室内清掃と実測、壁画の模写が行われた。この調査で奥壁だけでなく前室奥袖石の両脇に朱雀と玄武と思われる壁画も発見され、壁画はセロファンを当てて上からなぞって複写された。

昭和 31 年 5 月 10 日には、若宮町長から文化財保護委員会委員長宛て史跡指定申請書が提出され、翌年 2 月 22 日に国指定史跡に指定された。町では指定後の昭和 32 年 12 月 27 日から保存施設設置工事に着手、翌 33 年 4 月に煉瓦造り平屋建てで照明施設と金網を設置し、見学可能な保存施設が完成した。また同年中に日下八光らが模写を行っており、そのこと自体が新聞で報道された。



図 119 竹原古墳位置図 (1/25,000)



図 120 竹原古墳墳丘測量図 (1/400)

竹原古墳保存の経緯は、カビや菌類等、石室内環境の変化への対処の経緯でもある。昭和34年2月12日にはカビの駆除について若宮町教育委員会（現、宮若市教育委員会）から福岡県教育委員会宛て陳情書が提出され、石室内のほとんどに白カビが発生したこと、処々にキノコ類も発生し、模写終了後に消毒を行ったがその効果がないこと、壁画への悪影響が懸念されるため緊急に駆除を測り、保存に万全を期す旨であること、等が記される。昭和50年にはガラスサッシで石室入口を密閉、ホルマリン・クレゾールによる消毒の甲斐もあつてか、カビの発生は沈静化をみせていたが、平成10年に再度カビが発生したため、それ以降は定期点検と定期的消毒を実施しながら維持・沈静化に努めている。

昭和54年度に土地の公有化、55・56年度に墳丘周辺の大規模な保存整備工事を実施した。その後、経年による変化に伴い平成26年度に竹原古墳整備計画策定委員会を設置、保存整備計画の策定を経て、平成29年度から令和元年度にかけて保存整備工事が実施された。

名称 竹原古墳

所在地 宮若市竹原

指定 国指定史跡 昭和32年2月22日

墳丘 円墳（直径17～18m、南側からの見かけの高さ5m）

主体部 横穴式石室（複室構造・両袖式石室、石棚、南西向きに開口、花崗岩が主体で他に珪岩・頁岩・礫岩石材使用）全長6.7m、奥室長2.7m、幅2.2m、高さ3.0m

装飾 奥室腰石中央部と前室奥壁左右の袖石に彩色による文様が描画される。

奥壁の壁画は腰石の中央ほぼ1㎡の広さのなかに赤と黒を用いた図柄がおさめられる。左右両端に翳を対照的に配し、下端には内向きの波形文を二つずつ配す。翳の黒い扁円形の輪郭は太い平筆で数筋にわけて一気に描いた痕を残し、内部の放射状黒線は赤で縁取られる。

蕨手文は黒色で描かれており赤色で縁取られる。その内側には馬に似た怪獣、その左下に引馬の人物、馬の下に船、怪獣の左横にも船、怪獣の下には底辺を右側一列に揃える形で縦方向に連

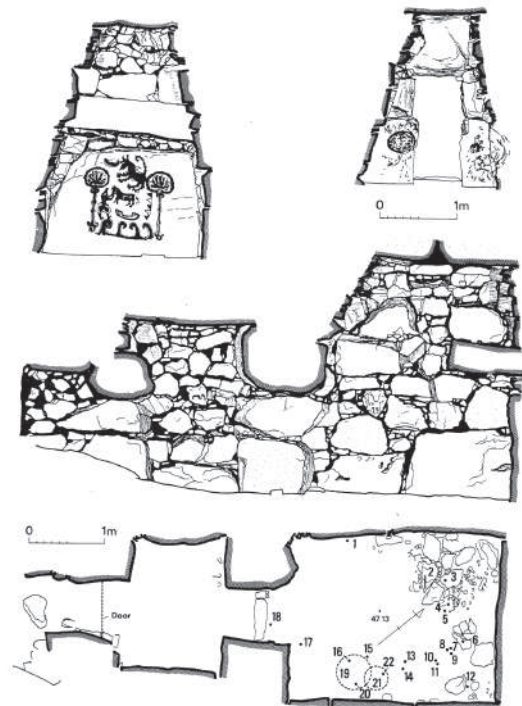


図121 竹原古墳石室実測図（1/100）

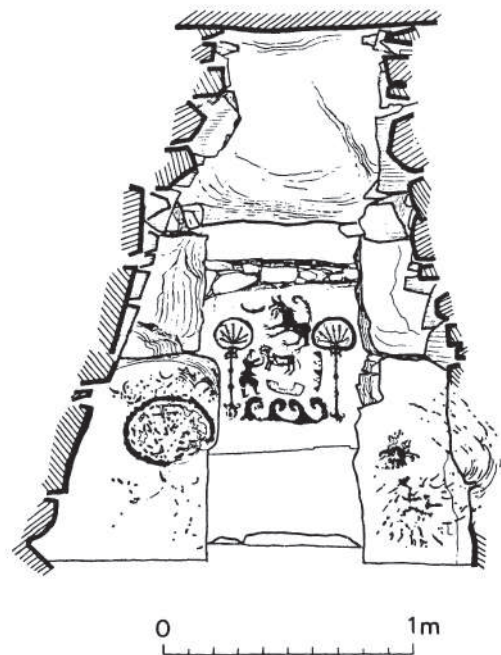


図122 入口から見た前室・後室の壁画（1/30）

続三角文を描いている。黒で描いた怪獣と馬はいずれも主体部に赤で棘状の表現があり、さらに怪獣は尾、髪に黒い棘状突起をあらわし、角をもち目・長い舌を赤で描いているが、特に四肢の大きな鉤爪が赤で鋭く描かれていて、竜をあらわす。左下の馬を引く人物は顔に目鼻の表現を略しておりシルエット風に描かれる。船のうち左上のものは小舟であるのに対し、下方の大形の船は屋形を有しており舳艫の立ち上がり大きい。右側翳の内側の縦方向の連続三角文は通例とは異なり軸がやや湾曲している。

前室奥壁右側の前面には左向きの鳥とみられる図像がある。剥落が著しいが、尾翼を頭上近くまであげた状態は朱雀とみられる。これに対して、左側には翳の扁円形の部分に似たものを中心とその周囲に渦文状曲線文があり、剥落が著しく明確ではないが玄武の図像ではないかとみられる。玄室奥壁と前室左右側壁に描かれた壁画は、中国の四神思想の流れをくんで描かれたものと解釈が行われている。

一方で、昭和44年に九州大学金関丈夫教授が提唱した「龍媒信仰説」も良く知られている。これは、中国古代の駿馬誕生説話の龍媒信仰に基づき、水辺に牝馬を牽いて水中の龍馬をおびき、その種を得ようとする場面を表したものである。波形文や左上の小舟により水辺の情景を設定し、舟に乗った馬司とみられる人物と牝馬、龍馬が牝馬に種を宿そうとして襲いかかっ



図123 竹原古墳入口（昭和31年）



図124 竹原古墳奥壁・玄門部両袖石



图 125 竹原古墳奥壁

ている姿を表している。龍馬の出現を人目に触れないために、神具である翳を配し、斎場の標幟とみられる五色の旗が立っているというものである。

顔料 赤・黒（2）（「山崎一雄 1951」）

遺物 昭和31年3月発見時出土品は宮若町公民館に保管（一部紛失）。須恵器・武器・工具・馬具・装身具・鏡（宮若市教育委員会）

年代 6世紀後半

調査歴 昭和31年（1956）3月18日 九州考古学会員清賀義人、地域住民らによる発掘調査

昭和31年4月26～30日 県文化財調査委員森貞次郎に委嘱して石室内実測等

昭和55・56年度 整備に伴う墳丘確認調査

平成29～令和元年度 整備に伴う墳丘裾部・周辺確認調査、法面鋤取り

整備歴 昭和32年度 保存施設設置（煉瓦造り平屋建、鉄筋コンクリート屋根）

昭和50年度 前室入口にガラスサッシ設置、風除室設置、盛土補修等

昭和56年度 墳丘削平面石積工事、樹木伐採、植栽、出入口柵設置

平成29年度 樹木伐採・剪定、墳丘保護盛土、コグマザサ植栽

平成30年度 樹木伐採・剪定、石積改修、墳丘保護盛土、観察施設改修

令和元年度 樹木伐採、石室内照明改修、排水路設置、フェンス・柵・門扉改修

現況 保存整備工事後、現状保存

図面等 昭和31年4月調査時実測図、壁画セロファン複写（森貞次郎寄贈資料・福岡大学考古学研究室）

（写真計測）（石室）宮若市教育委員会 2016.9.20・26 （墳丘）宮若市教育委員会 2016.12.7

写真 藤本四八撮影 4×5 カラーリバーサル「朱雀の彩画」（前室奥壁）2A1点

同「馬を引く人などの彩画」（後室奥壁細部）AB2点

同「朱雀の彩画」（前室奥壁）1A～C・1D・2B・2C・2E・2F 8点

同「出土品」1・2 2点

九州歴史資料館 1976 撮影 4×5 カラーリバーサル 24点、カラーネガ 6点

九州歴史資料館 1980 撮影 4×5 カラーリバーサル 8点

九州歴史資料館 1998 撮影 4×5 カラーリバーサル 7点

九州歴史資料館 4×5 カラーリバーサル 36点



図126 奥壁文様拡大



図127 竹原古墳解説板パネル（昭和57年）

- 九州歴史資料館 6×9 カラーリバーサル・ネガ（奥壁）1点・（奥壁拡大）13点
九州歴史資料館 6×7 カラーネガ（奥壁）16点・（奥壁拡大）4点
九州歴史資料館 1976 撮影 35mm カラーリバーサル 25点
九州歴史資料館 1980.11 撮影 35mm カラーリバーサル 19点
九州歴史資料館 1997 撮影 35mm カラーリバーサル 50点
九州歴史資料館 撮影 35mm カラーリバーサル 5点
九州歴史資料館 35mm カラーネガ棒焼付（奥壁）13点・（奥壁翳拡大、他）14点
九州歴史資料館（82.11 撮影）35mm カラーリバーサル 31点
九州歴史資料館（85～97 石山撮影）35mm カラーリバーサル・ネガ 72点
九州歴史資料館（2002～2004 石山撮影）35mm カラーリバーサル 181点
H14 北部九州装飾古墳画像データベース 23点（No. 0049～0071）・11点（No. 0579～0589）・2点（No. 1332・1333）・5点（No. 1363～1367）
- 映像** 宮若市教育委員会・RKB映画社 2020「竹原古墳 解説映像」
- 模写** 日下八光 現状模写・復元模写4点（国立歴史民俗博物館）
- 模型** 根岸競馬記念公苑内馬の博物館に実物大模型（昭和52年、日本中央競馬会（JRA）により奥壁の壁画レプリカ製作 京都科学標本株式会社（現、株式会社京都科学））
宮若市文化財収蔵・展示・交流センター宮若トレッジに実物大模型
北九州市立考古博物館で実物大模型作成（昭和54年12月28日 北九州市立自然史・歴史博物館）
桂川町王塚装飾古墳館に1/5模型
熊本県立装飾古墳館に1/5模型
北九州市立考古博物館で出土馬具レプリカ作成（昭和55年9月9日 北九州市立自然史・歴史博物館）
- パネル** 九州国立博物館 パネル3点（奥壁：高158×幅198、朱雀：高127×幅102、玄武：高さ127×幅102）
九州歴史資料館 パネル4点（奥壁：高108×幅134、奥壁：高166×幅206、朱雀：高106×幅86、玄武：高106×幅86）
宮若市教育委員会 解説板パネル1点（高140×幅180）田中孝典作・昭和57～平成29年度まで観察室内に設置
- 文献** 森貞次郎 1957「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」『美術研究 194号』のち森貞次郎 1983『九州の古代文化』六興出版に所収
森貞次郎 1968『竹原古墳』中央公論美術出版 美術文化シリーズ
金関丈夫 1969「竹原古墳奥室の壁画」『MUSEUM』215号 のち金関丈夫 2006『発掘から推理する』岩波現代文庫 社会 130 岩波書店所収
若宮町教育委員会 1982『竹原古墳 - 竹原古墳保存修理事業概要報告 - 』若宮町文化財調査報告書第4集
若宮町史編さん委員会 2005『若宮町誌』上巻 若宮町
宮若市教育委員会 2020『国史跡竹原古墳保存整備事業報告書』

22 損ヶ熊（そんがくま）1号墳

立地 損ヶ熊1号墳は、福岡県の北側、遠賀川支流の一つである犬鳴川の中流域右岸にあり、笠置山（標高425m）を山頂に北側へと派生する、山稜の端部に位置する。付近は若宮盆地在が唯一東側へと開口し、丘陵が南北から犬鳴川へと迫る場所である。同一丘陵には損ヶ熊、東向原古墳群と呼ばれる10数基からなる後期群集墳が形成され、損ヶ熊1号墳は群中で最も北端に占地する。

経緯 平成6・7年度に若宮町教育委員会が実施した、地域改善対策農業基盤整備事業（第8向田地区）、農林業地域改善対策事業（浦谷地区）に伴う発掘調査で発見された装飾古墳である。この場所には既に古墳群の所在が知られていたため、記録保存発掘調査の対象となった。損ヶ熊1号墳は調査対象となった古墳群中で唯一、墳丘が残存する遺存状態の良い古墳だった。石室内の検出に際して奥壁腰石に赤色顔料が認められ、格子状の文様であることが確認されたため、装飾古墳として現状保存の措置が講じられることとなった。

平成12年3月に福岡県の史跡に指定、その後、平成20年度に羨道部の復旧と石室・墳丘の保護を目的とした保存整備工事が行われた。

名称 損ヶ熊1号墳

所在地 宮若市原田

指定 福岡県指定史跡 平成12年3月27日

墳丘 円墳（直径16～21m 高さ5.6m）

主体部 横穴式石室（複室・両袖・北東向きに開口・花崗岩）全長7.4m、玄室長3.0m、幅1.9～2.0m、玄室高1.9m、玄門部幅0.8m）

装飾 奥壁腰石の上半部に彩色による幾何学文様が描かれる。文様は赤色顔料を使用した直線によって描かれており、横線4本と縦線6本で格子状の文様を描き、そのほぼ中央に×字状に交差する2本の斜線を大きく描く。

顔料 赤（『若宮町教委2003』）

遺物 石室内は既に盗掘されていたが、前室床面



図128 損ヶ熊1号墳位置図 (1/25,000)



図129 損ヶ熊1号墳全景

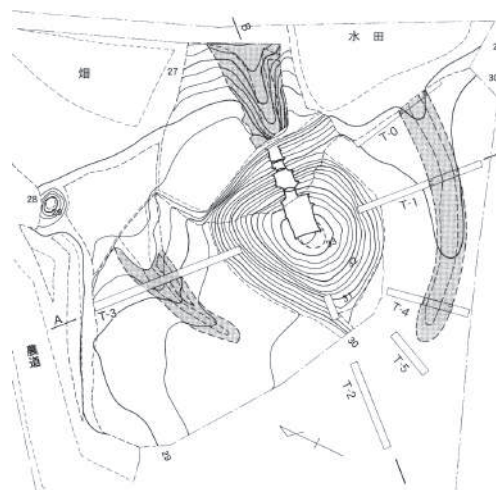


図130 損ヶ熊1号墳墳丘測量図 (1/600)

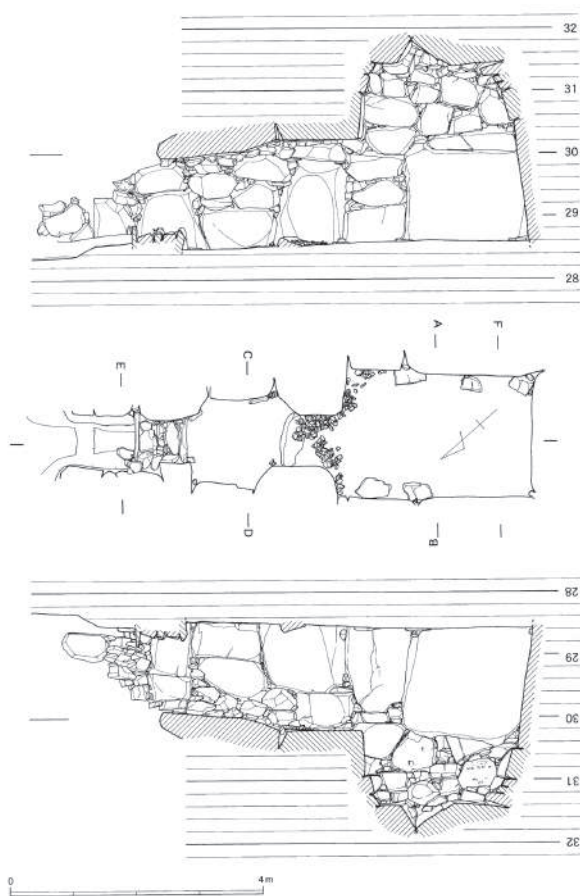


図131 損ヶ熊1号墳石室実測図(1/120)

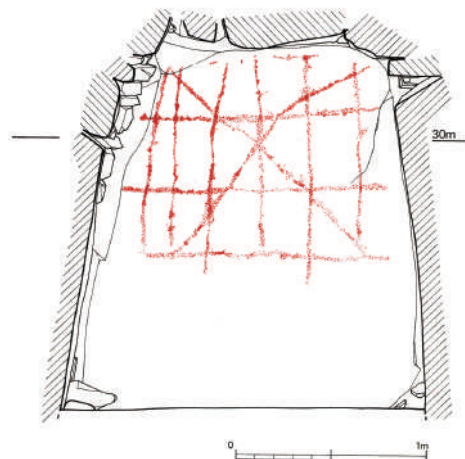


図132 損ヶ熊1号墳奥壁実測図(1/40)



図133 損ヶ熊1号墳奥壁

を中心に多数の土器類が原状を留めた状態で出土した。また玄室埋土からも金属器や装飾品が出土した。出土遺物は須恵器・土師器・武器・工具・装身具(宮若市教育委員会)

年代 6世紀末～7世紀初頭

調査歴 平成6・7年度 若宮町教育委員会による発掘調査

整備歴 平成20年度 墳丘盛土復元、羨道部改修、扉設置

平成21年度 大雨による法面崩落箇所の補修工事

令和3年度 歪み補修のため入口框ドア取替、保護壁(土壁)の崩落箇所修理

現況 保存整備工事後、現状保存

図面等 平成6・7年度 発掘調査時に作成(宮若市教育委員会)

写真 九州歴史資料館1998撮影4×5カラーリバーサル6点

九州歴史資料館1997撮影35mmカラーリバーサル19点

宮若市教育委員会1994・1995年度調査時撮影写真(宮若市教育委員会)

H14 北部九州装飾古墳画像データベース7点(No.0104～0106、0644～0647)

文献 若宮町教育委員会1998『原田遺跡群 概報』若宮町文化財調査報告書第14集

若宮町教育委員会2003『原田遺跡群I』若宮町文化財調査報告書第17集

若宮町2005『若宮町誌』上巻

- 23 古月（ふるつき）横穴2号墓
- 24 古月横穴6号墓
- 25 古月横穴9号墓

立地 古月横穴群は、福岡県の北部、遠賀川の支流の一つで遠賀平野を南北に流れる、西川の中流域左岸にある。西山山系から東側へと八手状に派生する丘陵端部に位置し、周辺は宅地開発等によって旧状を留めておらず現状では独立丘陵に近い景観を呈する。横穴墓群は標高22mを最高所とする丘陵の南側、標高13～15mの崖面に造営される。

経緯 発見は古く、大正15年（1926）7月に松樹林の伐採によって発見、土地所有者により発掘が行われ、多数の副葬品が掘り出された。同年9月には内務省史蹟考査官柴田常恵と福岡縣史蹟係島田寅次郎が現地を視察、昭和2年には福岡県の委嘱を受けた鞍手中学校長石塚常彦が調査を実施し、その内容を『筑紫史談』第参拾九集、『福岡縣1928』に「古月百穴」として報告した。

この時点で確認された横穴墓数は13基を数え、そのうち第二號（2号墓）・第七號（7号墓）には「壁及屋根裏の諸處に、鋭利なる刃物の先端にて陰刻したる壁画を認め」、第九號（9号墓）においては「其奥壁に限り、朱線を以て幾何学的の形を書けり」と、線刻と彩色の両方がある点を付記している。なお、一覧表には第六號（6号墓）にも「右側壁に陰刻の線状壁画あり」とある。



図134 古月横穴群位置図（1/25,000）

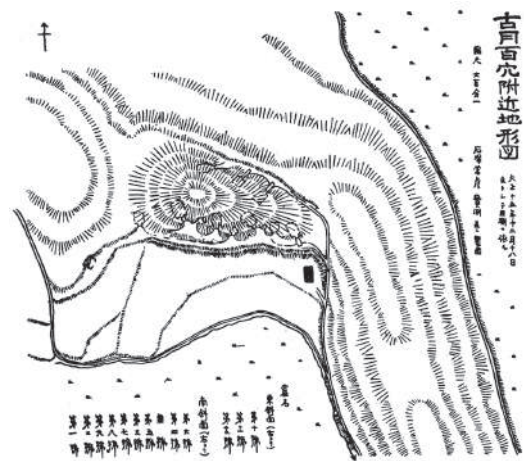


図135 「古月百穴附近地形図」（『福岡縣1928』）

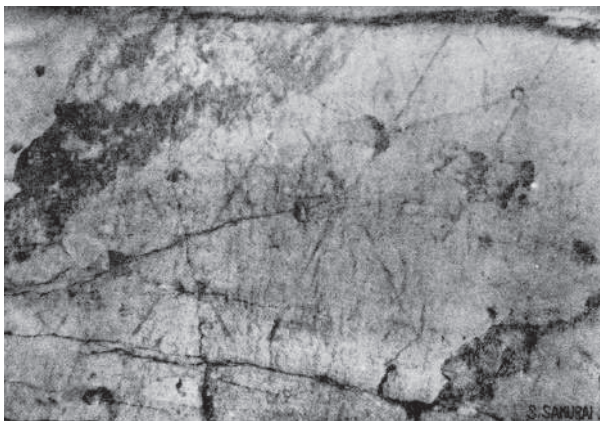


図136 「壁画（其一）」（『福岡縣1928』）



図137 「壁画（其三）」（『福岡縣1928』）

昭和7年に国史跡に指定、昭和49年3月には鞍手町誌編纂のため9号墓内装飾の実測図作成と写真撮影、14～17号墓の実測図作成が鞍手町によって行われた。

昭和52年には指定地外にて横穴墓が不時発見され、昭和55年に横穴墓の所在と範囲の確認を目的とした発掘調査を県教育委員会が実施、その結果を受けて、昭和61年5月に指定範囲の追加指定が行われた。

平成6～15年度には、史跡の保存修理と環境整備のための現況把握を目的とした発掘調査、および保存修理事業を鞍手町教育委員会が実施したが、この時の調査では7号墓に線刻を確認することはできなかった。保存修理事業は平成9・10年度に計画策定が行われ、翌11年度から15年度にかけて遺構表面保護や園路整備、ガイダンス設置等が行われた。特に横穴墓特有の地盤の脆弱さに起因する破損・劣化対策として、墓室入口部の補強・開閉方法については工夫が図られている。平成17年3月には壁面崩落等、毀損が発生した。

平成26～30年度には、経年劣化に伴って墓道修理や樹木整備、解説サイン張替や散策路舗装等が実施、平成30年7月豪雨に伴う土砂災害に対しては、同年度中に災害復旧工事が実施された。

名称 古月百穴 (『福岡縣 1928』)

古月横穴 (指定名称)

所在地 鞍手郡鞍手町大字古門

指定 国指定史跡 昭和7年10月19日 昭和61年5月26日 (追加指定)

<2号墓>

主体部 横穴墓 (二段屍床、枕状切り込み、屋根形天井・軒先線表現・寄棟表現、羨門底石架構、南向きに開口) 玄室長 2.05m、玄室幅 2.09～2.12m、玄室高 1.38m

装飾 玄室内左側壁、羨道部左壁、前壁に線状に刻まれた文様が描かれる。

玄室内左側壁中央より玄門に向かって4ヶ所に、いずれも斜めの格子状文様が刻まれるが、奥壁より3ヶ所目の

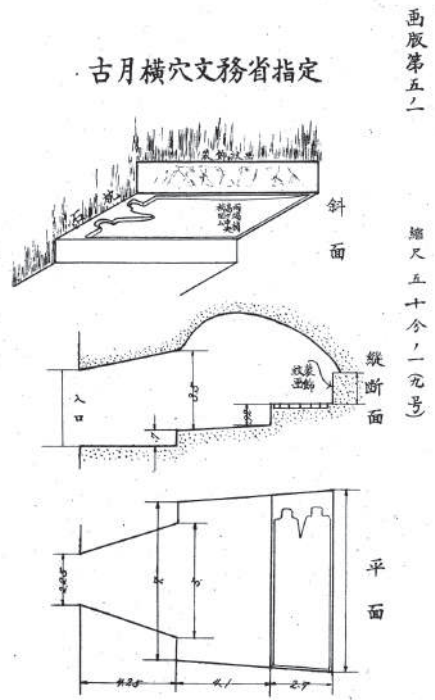


図138 「古月横穴9号」(1/100) (『福岡縣 1934』)

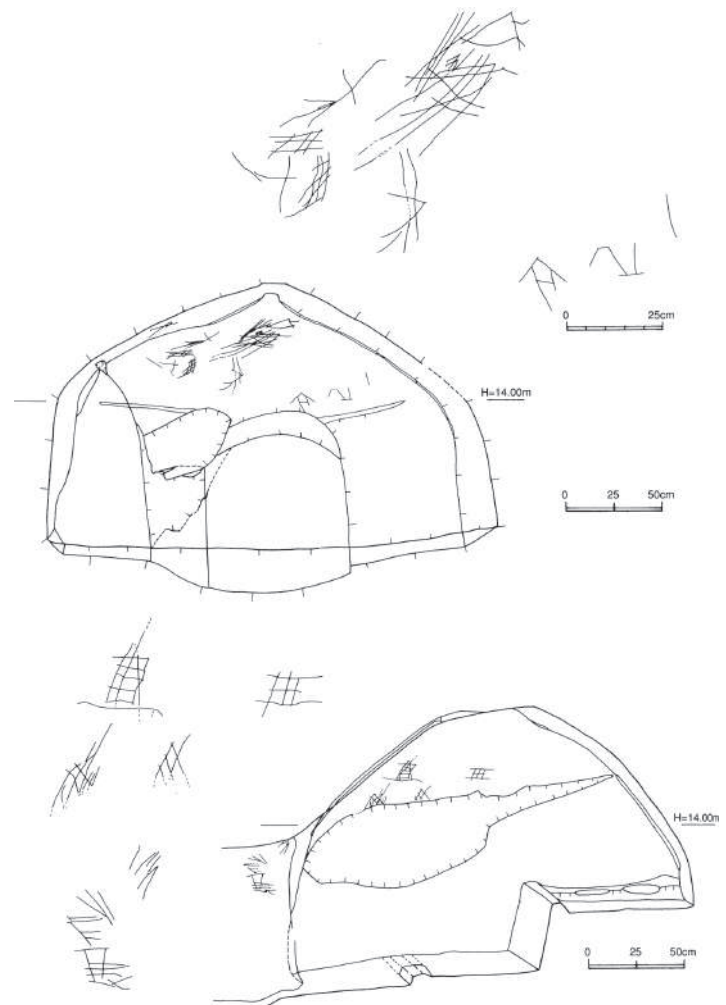


図139 2号墓玄室内装飾文様実測図 (1/20・1/40)



図 140 2号墓玄室左側壁



図 141 2号墓玄室前壁

文様は他と比べて線が浅く刻まれていることから、後世の落書きの可能性が高い。他の線刻は幅 1.2mm、深さ 4～5mm で線刻の断面は逆三角形である。

羨道部左側壁で確認した 3ヶ所の線刻は風化しているが比較的しっかりしており、幅 3～5mm、深さ 1mm 前後。線刻の断面は逆三角形である。

前壁上部の 2ヶ所に線刻がある。天井付近の線刻の一部は『福岡縣 1928』では動物（牛）と解釈されている。また、右側壁側には左壁にも確認された斜め格子の線刻が 2つみられ、いずれも幅 2～4mm、深さ 0.1～1mm を測る。

遺物 『福岡縣 1928』では玄室内から装身具・須恵器、羨道部から土師器・須恵器の出土が記される。鞍手町教育委員会が実施した発掘調査では装身具・須恵器坏・土師器が出土。

年代 6世紀末～7世紀初頭

<6号墓>

主体部 横穴墓（単室・ドーム状天井・寄棟表現・壁際排水溝、羨門部庇石架構、南向きに開口）玄室長 2.29m、玄室幅 1.72～1.73m、玄室高 1.16m

装飾 奥壁左壁側と左側壁奥壁側に人為的に彫り込まれた線状の掘り込みがある。

奥壁左隅の線刻は床面より 6～50 cm の範囲（標高 10.23～10.69m）で確認され、幅 1 cm、深さ 5mm～1 cm でやや縦方向に傾いた線で彫り込まれている。

左側壁の線刻は床面より 24～50 cm の範囲（標高 10.31～10.68m）で確認され、奥壁と同様に幅 1 cm、深さ 5mm～1 cm でやや縦方向に傾いた線で彫り込まれている。

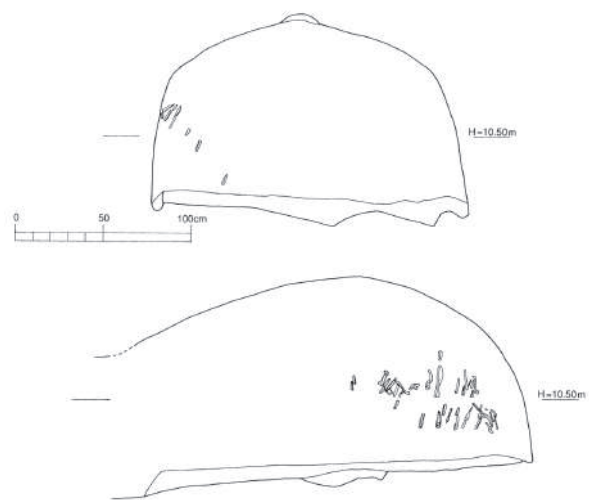


図 142 6号墓玄室内装飾文様実測図 (1/40)



図 143 6号墓玄室左側壁

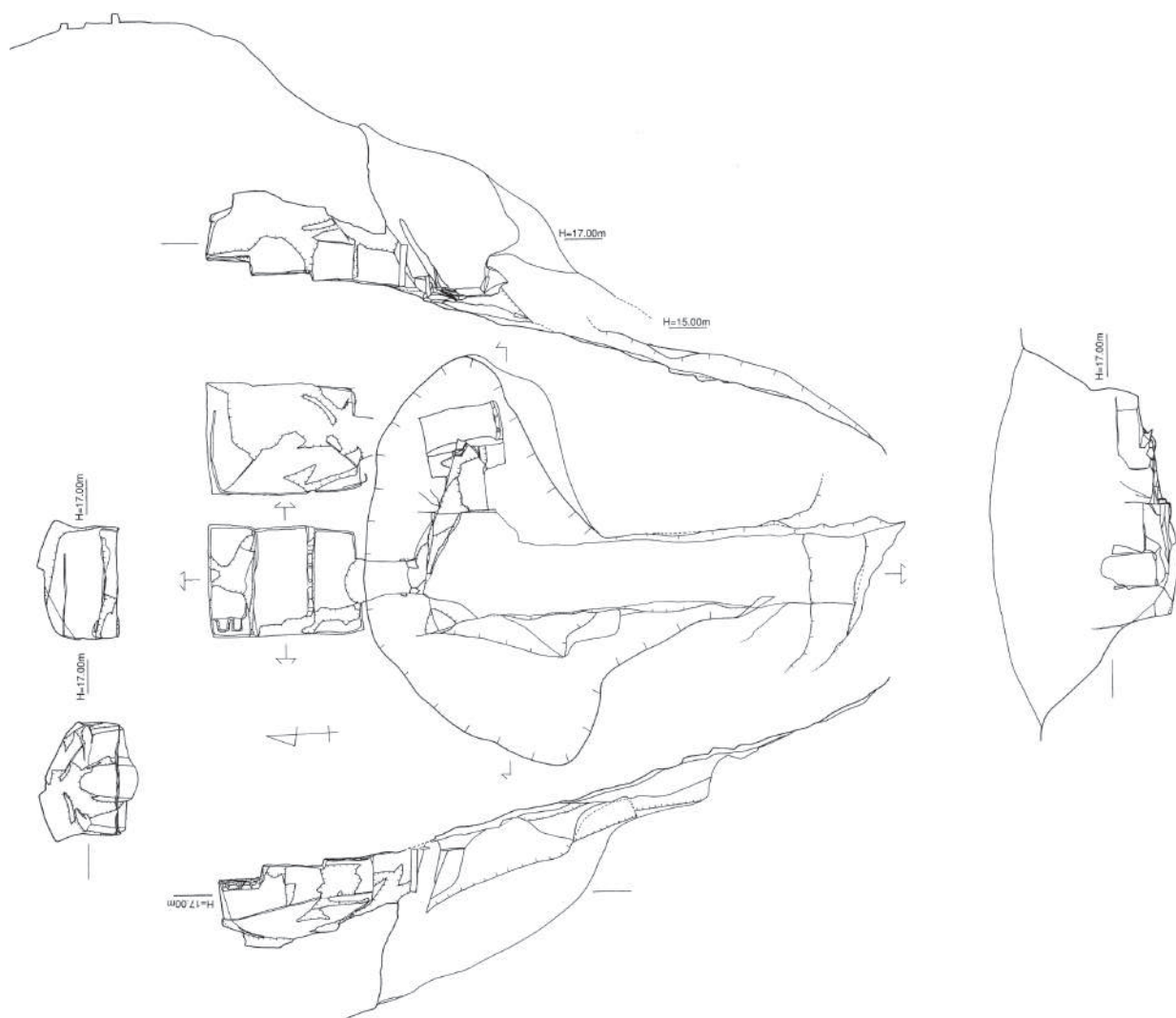


図 144 9号墓実測図 (1/160)

遺物 『福岡縣 1928』では玄室から装身具、玄門部付近・羨道部から須恵器が出土。鞍手町教育委員会の発掘調査では墓道から須恵器、玄室内から土師器・須恵器。

年代 6世紀末～7世紀初頭

〈9号墓〉

主体部 横穴墓（墳丘盛土、単室、二段屍床、枕状切り込み、屋根形天井、軒先線表現）玄室長 3.33m、奥壁幅 2.46m、玄室高 1.62m

装飾 奥壁・左側壁・屍床前壁に朱色で描画。奥壁は軒先線より下部、標高 17.52m から 17.06m の範囲で、ほぼ奥壁幅いっぱいに描かれる。左側壁の文様は奥壁につながる。50～60度の角度で立ち上がる斜めの線が格子状に描画され、下部と中央部に格子状の文様を区切る線が平行に描かれる。左壁の文様はやや奥壁より前壁に向かって下降みだが、ほぼ屍床面に平行に描かれている。奥壁側屍床前壁に朱色の痕跡が認められたが文様構成は不明。松本清張が「朱色で描いた土壁の簡単な三角連続模様」と表現したのはこの横穴墓の文様を指すものと思われる。

顔料 朱（石塚常彦 1926）朱（『鞍手町教委 2004』）

遺物 『福岡縣 1928』では玄室内から馬具・武器・装身具、玄門付近から土師器・須恵器、羨

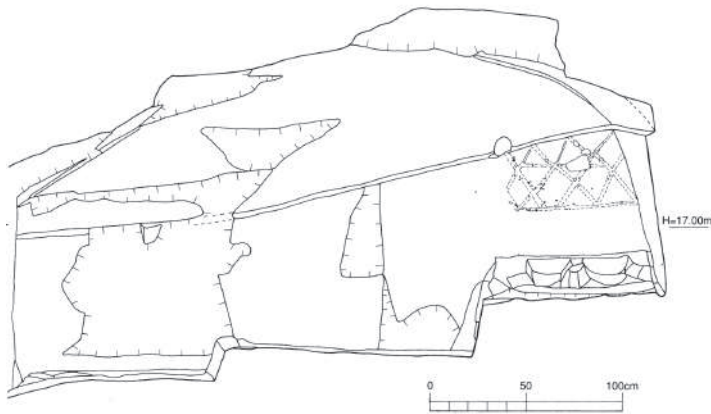
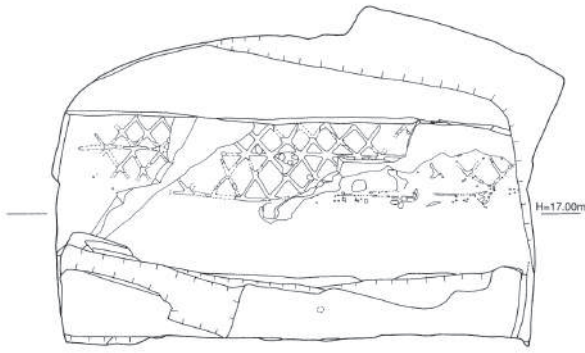


図 145 9号墓玄室内装飾実測図 (1/40)



図 146 9号墓墳丘



図 147 9号墓奥壁

道部から土師器・須恵器の出土が記される。鞍手町教育委員会の発掘調査では墳丘上や墓道から須恵器・土師器、玄室から装身具・須恵器・土師器が出土した。

年代 6世紀後半～7世紀初頭

調査歴 大正15年7月 土地所有者により発掘、出土品の採集

昭和2年 福岡県の委嘱を受け、鞍手中学校長石塚常彦が発掘調査、墓室内実測

昭和55年3月 指定範囲拡張のため範囲内容確認調査実施、地形図作成（福岡県教育委員会）
平成6～15年度 保存修理・環境整備のための発掘調査（鞍手町教育委員会）

整備歴 平成6～15年度 古月横穴保存修理事業（「古月横穴整備委員会」設置）

平成26～30年度 古月横穴保存整備事業

平成30年度 災害復旧事業（平成30年7月豪雨で被災）

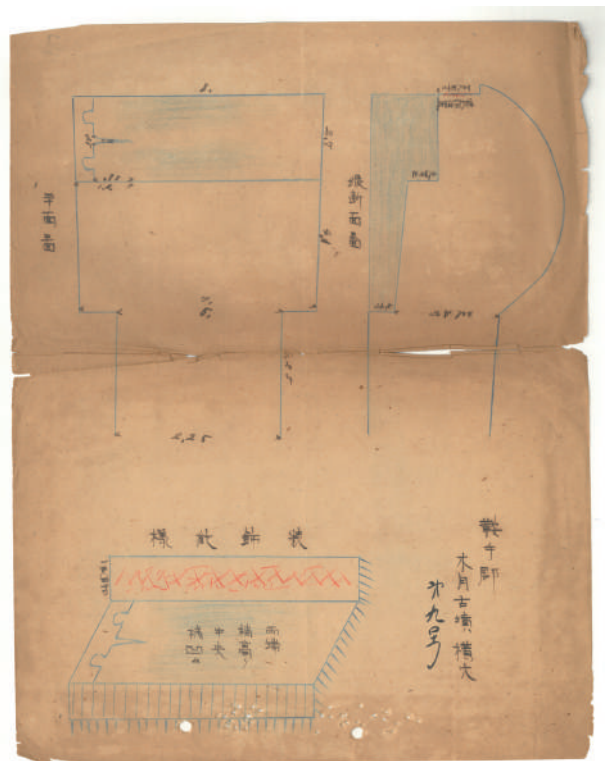


図 148 9号墓実測図 (昭和6年)

現況 保存整備工事後現状保存

図面等 昭和2年調査時作成図(『福岡縣 1928』『鞍手町 1974』に掲載)

昭和55年福岡県教育委員会調査実測図(鞍手町教育委員会)

平成6～15年度発掘調査時作成図・整備関係図(鞍手町教育委員会)

写真 九州歴史資料館 1977 撮影 4×5 カラーリバーサル 7点

九州歴史資料館 1996 撮影 4×5 カラーリバーサル 10点

九州歴史資料館 撮影 4×5 カラーリバーサル「古月横穴」3点

九州歴史資料館 6×7 カラーネガ「屍床」4点

九州歴史資料館 1977.11.18 撮影 35mm カラーリバーサル 7点

九州歴史資料館 1996.9.12 撮影 35mm カラーリバーサル 37点

九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル「古月9号」外観・奥壁天井、他 19点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 6点 (No.0074～0079)・4点 (No.0601～0604)・2点 (1368・1369)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1点 (古月9号横穴 高107×幅127)

文献 石塚常彦 1926「鞍手郡古月の百穴」『筑紫史談』第参拾九集

福岡縣 1928「第1篇古月横穴」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三輯

福岡縣 1934「福岡県の横穴」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第九輯

松本清張 1973「装飾古墳の図像様式」『遊古疑考』新潮社

鞍手町史編集委員会 1974『鞍手町誌』上巻 鞍手町

鞍手町教育委員会 2004『国指定史跡古月横穴－保存整備及び遺構確認・発掘調査報告－』鞍手町文化財調査報告書第15集

鞍手町教育委員会 2019『国指定史跡 古月横穴－保存整備事業報告書－』



図 149 古月横穴外観 (昭和40年代)



図 150 現在の古月横穴群

(3) 小郡市・朝倉市郡地域

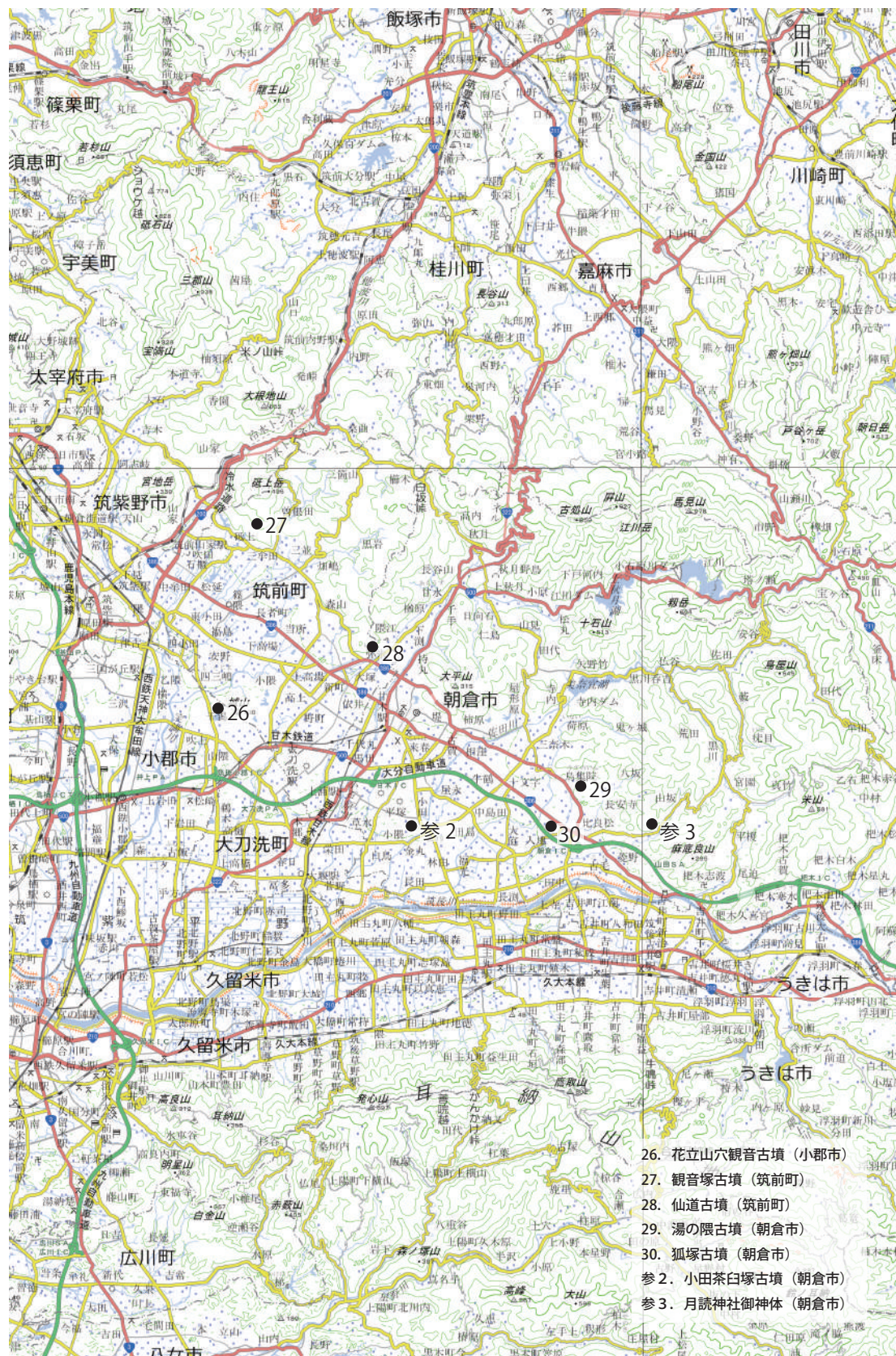


図 151 小郡市・朝倉市郡地域分布図 (1/200,000)

26 花立山穴観音（はなたてやまあなかんのん）古墳

立地 福岡県の中中部、宝満川中流域左岸の独立峰である花立山（130.6m）の西麓に、石室墳総数 300 基をはじめ、多数の横穴墓群からなる花立山古墳群が位置する。穴観音古墳は花立山古墳群中の一基で、群中唯一の前方後円墳である。

経緯 『筑後将士軍談』には「干潟村古墳」として、傍らに古石仏のある古墳の記述があり、これが本古墳を指すものと思われる。

近世には既に開口していたようだが、保護に向けた取り組みが進んだのは昭和 50 年代になってからのことである。昭和 51 年に「花立山古墳」として小郡市の史跡に指定、翌昭和 52 年に久保山教善を中心とする地元有志や学生による民間主導の「花立山調査実行委員会」が初めて花立山古墳群（この時の調査では花立山南麓古墳群）の分布調査を実施（第



図 152 花立山穴観音古墳位置図 (1/25,000)

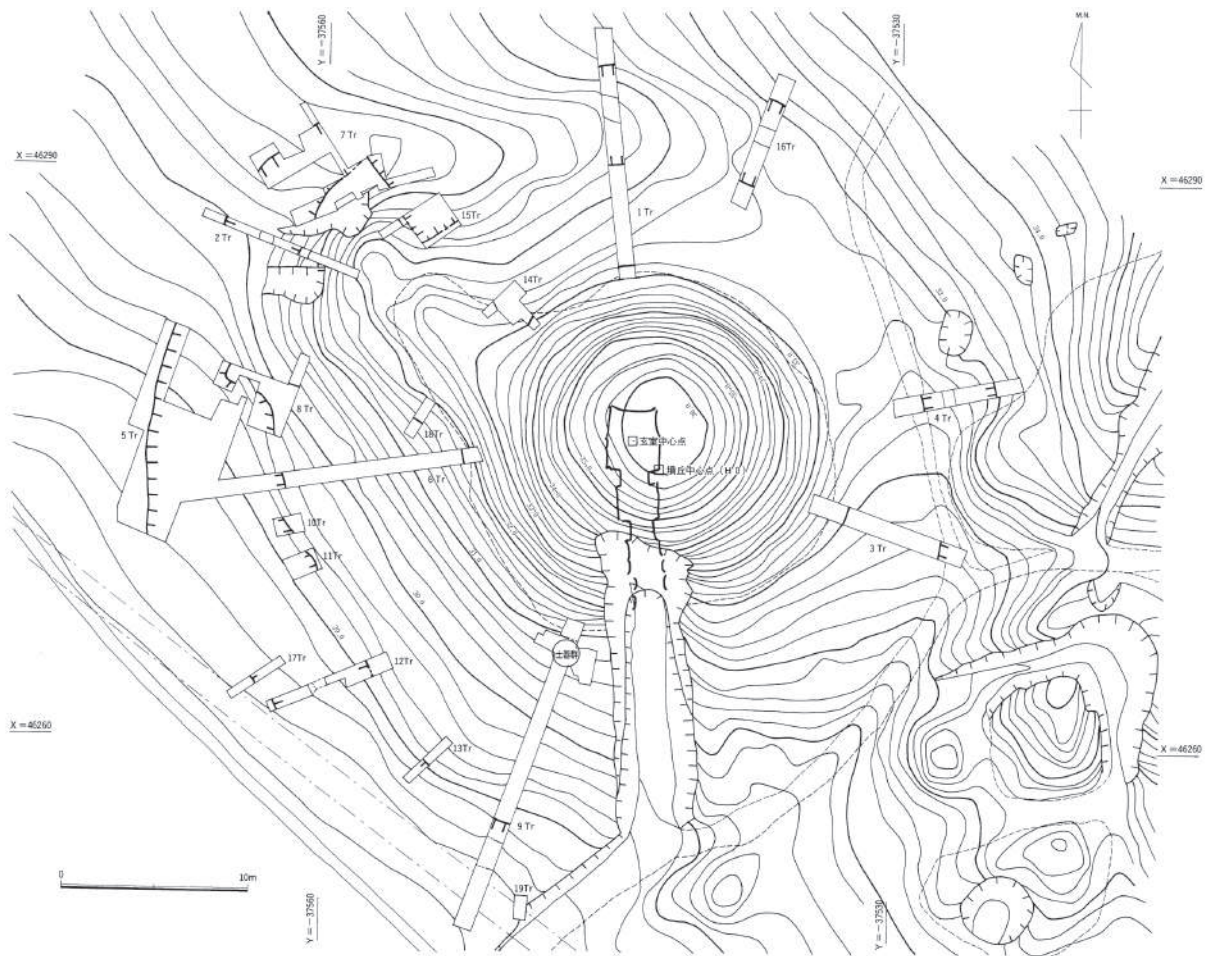


図 153 花立山穴観音古墳墳丘測量図 (1/400)

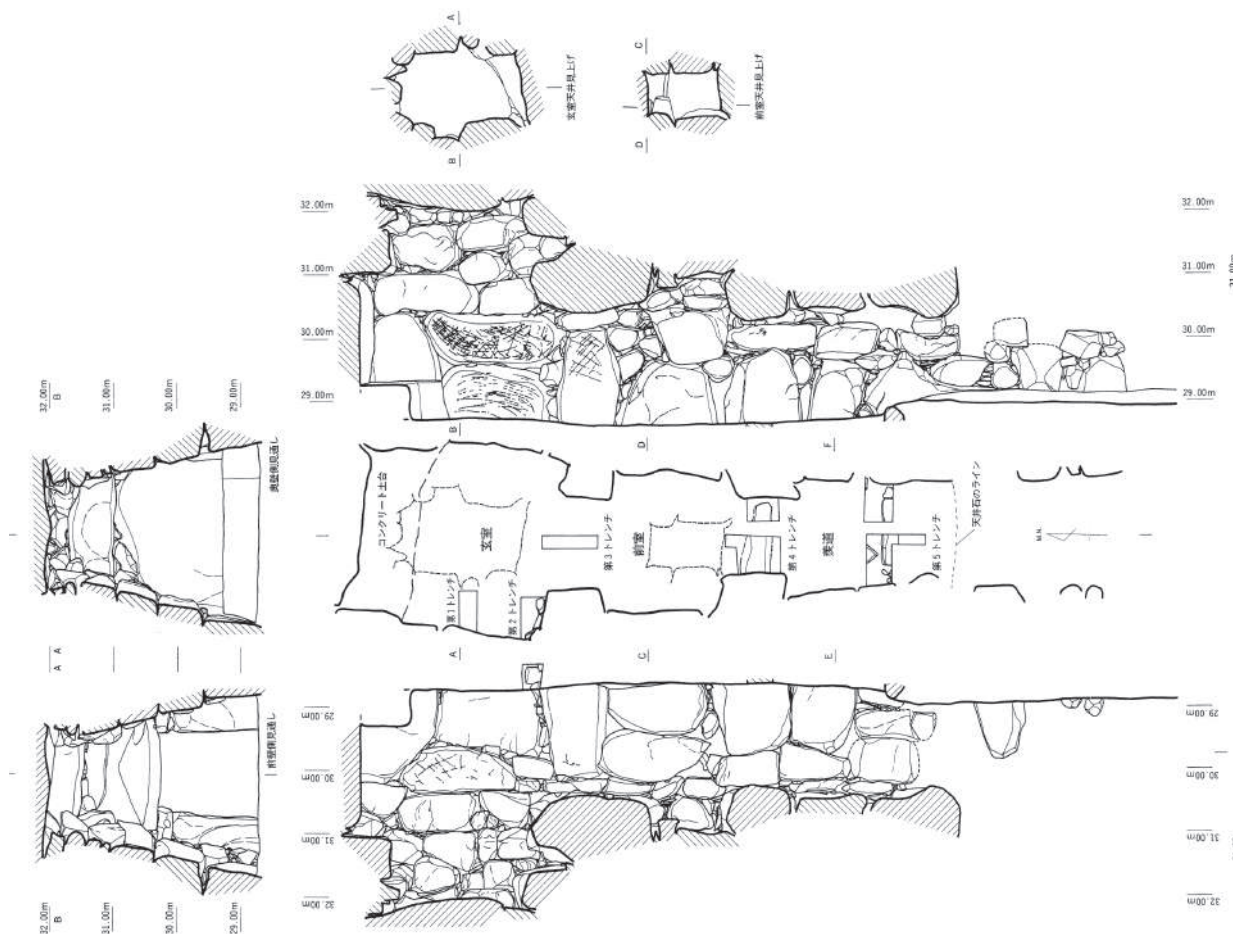


図 154 花立山穴観音古墳石室実測図 (1/120)

一次調査)、その結果、215基の古墳が確認された。この時に、併せて穴観音古墳（当時は花立山古墳）の墳丘測量調査、ボーリング調査、石室実測調査が行われた。

同実行委員会により昭和53年に行われた第2次調査では、古墳群の踏査や線刻の拓本採取が行われた。この時の調査で古墳総数は291基に達し、その後公刊された報告書では花立山古墳の新たな墳丘測量図、線刻壁画実測図とともに花立山古墳線刻壁画の詳細が報告され、装飾古墳として周知されることとなった。

小郡市教育委員会では平成16～18年度の間、福岡大学と共同で本古墳の保護を目的とした調査を実施することとなり、墳裾の確認や石室内のためのトレンチ調査、および線刻壁画の拓本採取等を実施した。これらの調査所見を踏まえて平成19年2月には福岡県の史跡に指定され、同時に名称も地域呼称を重視して「花立山穴観音古墳」に変更された。

名称 干潟村古墳 (『筑後将士軍談』)

花立古墳 (穴観音さん) (『福岡縣 1929』)



図 155 石室入口と墳丘



図 156 石室全景



図 157 玄室左側壁



図 158 玄門左袖石線刻

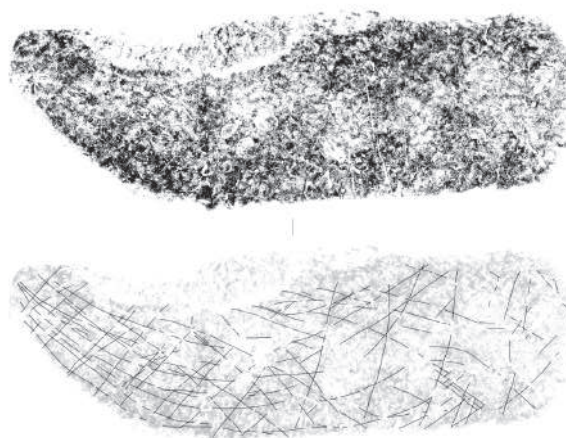


図 159 線刻拓影

花立山古墳（1976 小郡市史跡指定名称） 花立山穴観音古墳（2007 福岡県史跡指定名称）

所在地 小郡市干潟城山

指 定 福岡県指定史跡 平成 19 年 2 月 5 日

墳 丘 前方後円墳（全長 33m、後円部径 21.5m、前方部幅 11.8m、墳丘高 5.6m）

主体部 横穴式石室（複室・南側に開口・花崗岩石材使用）全長 12.3m、玄室長 3.1m、玄室幅 2.9m、玄室高 3.45m

装 飾 玄室壁面 3 石 4 面、玄門袖石 2 石 3 面、前門袖石 1 石 1 面の計 6 石 8 面に線刻がある。

玄室・玄門の線刻画は上下・左右・斜行などの線刻が壁石単位の施される。格子文が基本となるが、仔細に見ると上下に平行線を配して二方向からの斜行線を加えたもの、斜格子文、上下に平行線を重ねたもの、垂直線に二方向からの斜行線を加えたもの等に分けることができる。

前門袖石の線刻画は他とパターンが異なるため、追葬時の追刻等の可能性が想定されている。

遺 物 平成 16・17 年度トレンチ調査で須恵器出土。

年 代 7 世紀初頭

調査歴 昭和 52 年（第 1 次調査）周辺分布調査、墳丘測量図・石室内実測図（花立山調査実行委員会）

昭和 53 年（第 2 次調査）周辺分布調査、墳丘測量図・線刻壁画拓本（花立山調査実行委員会）

平成 16・17 年度（福岡大学と共同調査）墳裾部・石室内トレンチ調査、線刻拓本作成

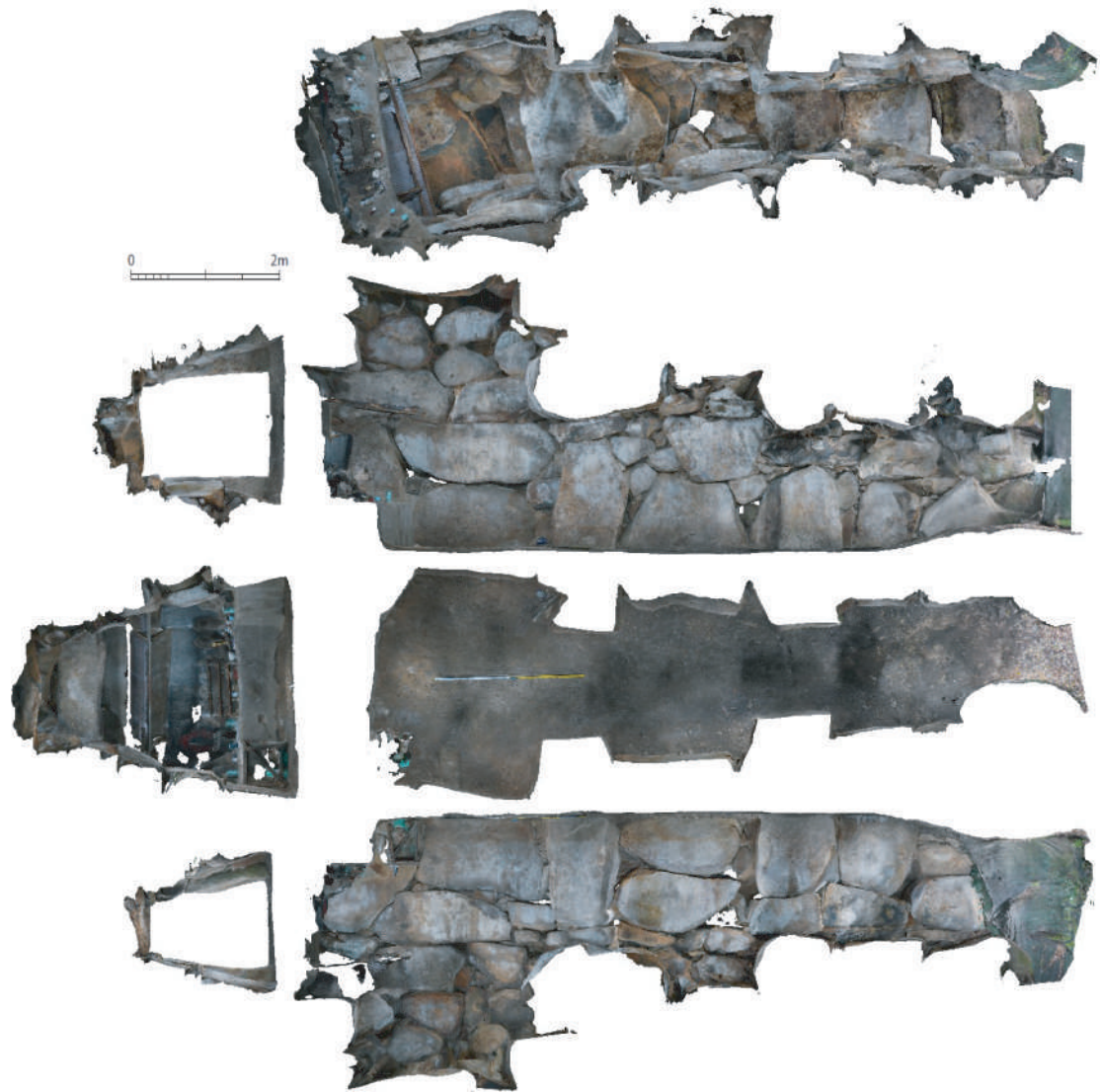


図 160 花立山穴観音古墳石室正射投影画像 (1/100)

現況 トレンチ等を埋戻した後、現状保存

図面等 昭和 53・57 年度 墳丘測量図・石室実測図・線刻壁画実測図作成 (花立山調査実行委員会)

平成 16・17 年度 墳丘測量図・石室実測図・線刻壁画拓本作成 (小郡市教育委員会)

(写真測量) 九州歴史資料館 2023. 4. 11 計測

写真 平成 16・17 年度調査時 6×7 モノクロネガ・カラーリバーサル (小郡市教育委員会)

平成 16・17 年度調査時 35 mm モノクロネガ・カラーリバーサル (小郡市教育委員会)

九州歴史資料館 2023. 4. 11 撮影デジタル写真データ

文献 花立山調査実行委員会 1978 『遺跡を民衆の手に』

花立山調査実行委員会 1982 『遺跡を民衆の手に』

小郡市史編集委員会 2001 『小郡市史』 第四巻 小郡市

小郡市教育委員会 2006 『花立山古墳調査概報』 小郡市文化財調査報告書第 213 集

小郡市教育委員会・福岡大学考古学研究室 2007 『花立山穴観音古墳』 小郡市文化財調査報告書第 219 集

27 観音塚（かんのんづか）古墳

立地 観音塚古墳は福岡県の中中部、筑後川中流域の右岸にある。三郡山系を構成する一つ、砥上岳から南側に派生する山稜の中位に占地する。山裾に分布する砥上山麓古墳群とは一線を画した高所にあり、標高は150mを測る。古墳からは平野部を一望することができる。

経緯 古墳の発見は古く、『筑前国続風土記拾遺』には「観音塚」について「石面に観音の梵字」がある石窟と紹介する。しかし、装飾に関する記載はみられず『筑前国続風土記附録』もほぼ同じ内容である。

『福岡縣 1933』には、縣嘱託の島田寅次郎の教示により福岡高等学校教授の玉泉大梁が九州帝国大学文学部学生の鏡山猛と共に昭和7年2月4日に実地調査を行い、その成果を「朝倉郡「砥上山観音塚古墳」の調査」としてまとめ、報告を行っている。ここには当時はまだ筑前地域において他の装飾古墳の発見事例が知られていなかったため、筑前の装飾古墳として注意すべきとする旨が強調される。『朝倉高校史学部 1969』には坂本真鈴が大正15年に現地調査を行った際の報告がある。

その後、公的な発掘調査等は実施されていないが、平成7年3月31日には夜須町（現、筑前町）の文化財として指定され、保護が図られるようになった。

名称 観音塚の石窟（『筑前国続風土記拾遺』）

観音塚石窟（『筑前国続風土記附録』）

砥上山観音塚（『福岡縣 1933』）

観音塚古墳（『夜須町 1991』）

所在地 朝倉郡筑前町砥上

指定 筑前町指定史跡 平成7年3月31日

墳丘 円墳（径13m、高3.5m）

主体部 横穴式石室（三室構造・南側に開口・花崗岩使用）全長8.6m、玄室長1.8m、玄室幅2.3m、玄室高1.6m

装飾 玄門部右袖石外側と奥壁に赤色顔料を用いて描画される。

奥壁には船、人物らしき文様、星状の文様が描か

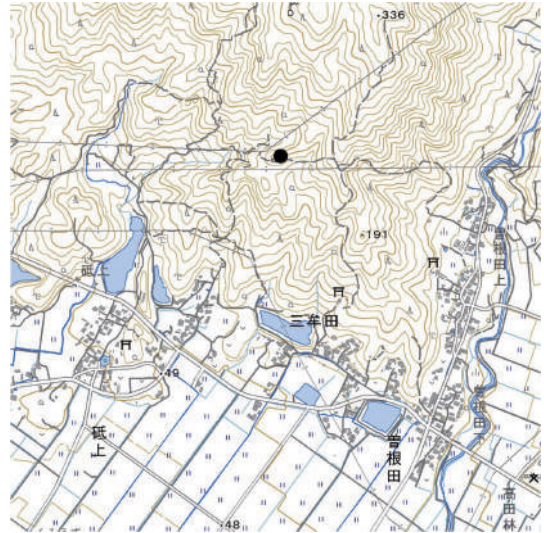


図 161 観音塚古墳位置図 (1/25,000)

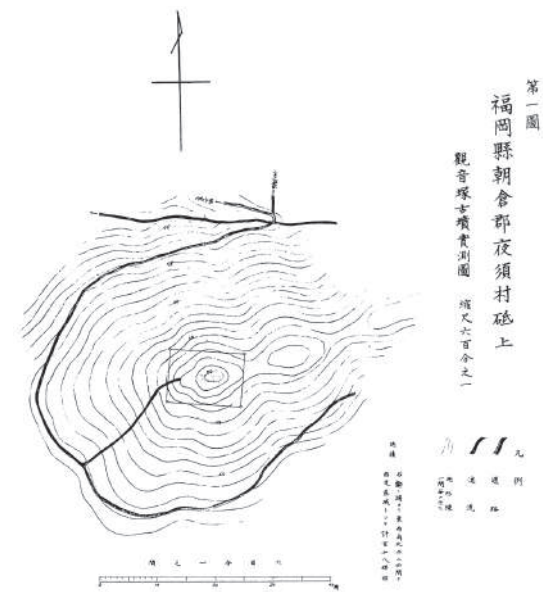


図 162 観音塚古墳墳丘測量圖 (1/1,200) (『福岡縣 1933』)



図 163 観音塚古墳遠景

第一 観音塚壁画見取图

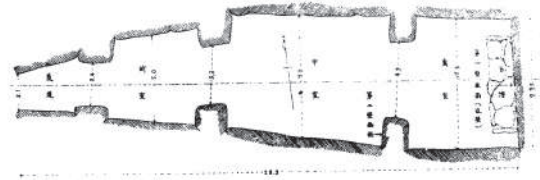


图 164 「観音塚壁画見取图」(『福岡縣 1933』)

图二第

廣西塚古観堂上流村須夜
園別其部石

圖面平一第



圖新観一第

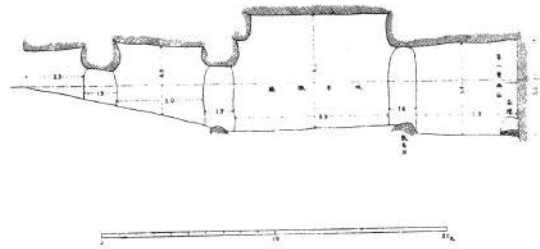


图 165 「石室実測图」(『福岡縣 1933』)

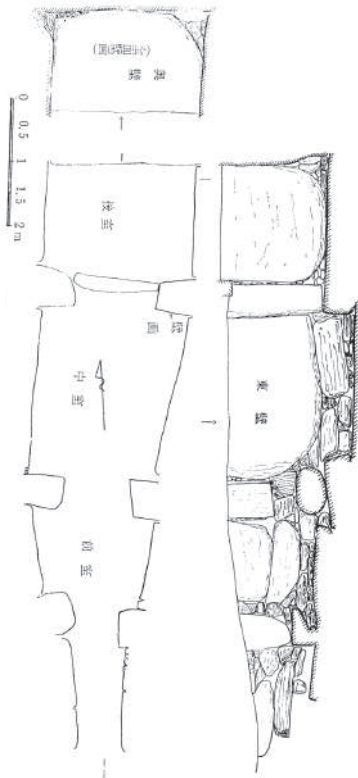


图 166 石室実测图 (1/120) (『朝高史学部 1969』)



图 167 袖石拡大



圖 168 觀音塚古墳後室



圖 169 觀音塚古墳奧壁

れている。玄門部右袖石には同心円文、船らしき文様などが見える。

公的な発掘調査等を経たおらず、描画図文の解釈には不明な点が多い。

顔 料 赤 (『福岡県 1933』)

赤 (『平凡社 1964』森貞次郎)

赤 (『講談社 1973』斎藤忠)

赤 (『夜須町 1991』)

遺 物 『福岡県 1933』時点で既に盗掘のためほぼ不明となっていた。わずかに前室から土師器・須恵器片の出土が知られる。

年 代 7世紀中頃

現 況 開口・現状保存

図面等 墳丘周辺測量図・石室実測図・壁画実測図 (『福岡県 1933』)

(写真計測) 九州歴史資料館 2023. 4. 11 計測

写 真 九州歴史資料館 1980 撮影 4×5 カラーリバーサル 6 点、カラーネガ 3 点

九州歴史資料館 1981. 3. 18 撮影 35mm カラーリバーサル 15 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 30 点

九州歴史資料館 2023. 4. 11 デジタル写真撮影データ

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 3 点 (No. 0256 ~ 0258) ・ 12 点 (No. 0850 ~ 0861)

文 献 青柳種信 1814 ~ 『筑前国続風土記拾遺』

加藤一純他 1799 『筑前国続風土記附録』

福岡県 1933 『史蹟名勝天然記念物調査報告書』 第七輯 (史蹟の部)

福岡県立朝倉高等学校史学部 1969 『埋もれていた朝倉文化』

夜須町史編さん委員会 1991 『夜須町史』 夜須町

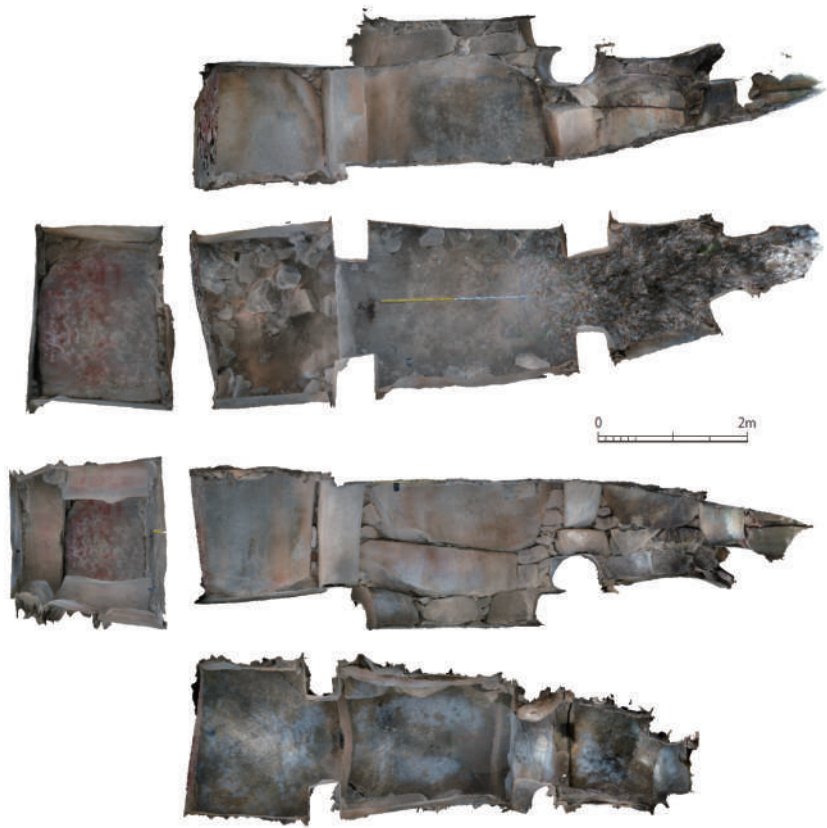


図 170 観音塚古墳石室正射投影画像 (1/100)



図 171 観音塚古墳近景

28 仙道（せんだう）古墳

立地 仙道古墳は福岡県の中郡、筑後川中流域右岸にある。筑紫山地を構成する古処山系の一つ、目配山から南に派生する阿弥陀ヶ峯丘陵の端部に位置しており、現況では周囲に水田が広がる立地景観を呈する。

経緯 県営圃場整備事業の実施に先立ち昭和52年度に確認調査を実施したところ、墳丘はほとんど削平されて原形を留めず、周溝も埋没して地表からは確認できない程度だったが古墳の所在が確認されたため、同年中に三輪町教育委員会により発掘調査が実施された。

発掘調査の結果、墳丘や周溝から馬・人物などの形象埴輪片や円筒埴輪片が出土し、石室は大きく損壊した状態だったが、壁面の全面に彩色壁画が確認された。その後、古墳の重要性から事業者との間で保存に向けた協議調整が実施された。昭和53年5月に国の史跡に指定され、古墳は装飾の保護に配慮する形で埋め戻しが行われた。

三輪町教育委員会では平成5年度から古墳の整備構想に着手し、平成7～9年度に保存修理のための発掘調査を実施、発掘調査と併行して平成9～12年度に整備事業を実施した。現在は古墳公園として公開活用に使われている。

名称 仙道古墳（『三輪町教委2001』）

所在地 朝倉郡筑前町久光

指定 国指定史跡 昭和53年5月6日

墳丘 円墳（径52m、現高2.5m）大きく損壊、二重周溝（外周径49m）

主体部 横穴式石室（複室・南西側に開口・緑泥片岩・片麻岩・花崗岩石材使用）大きく損壊、現存長3.1m、玄室奥壁側幅2.6m、玄室玄門側幅2.4m、玄室長2.9m

装飾 現存する壁面全面に施文する。奥壁は円文と同心円文、三角文と蕨手文が赤色で施文される。文様の配置に規則性は見出せない。

左側壁は三角文や円文を赤色で、不整形を緑色で施文しており、やはり規則性は見出せない。

右側壁は、奥壁近くで同心円文を6つ、二段に配置しており、この部分だけは規則的である。

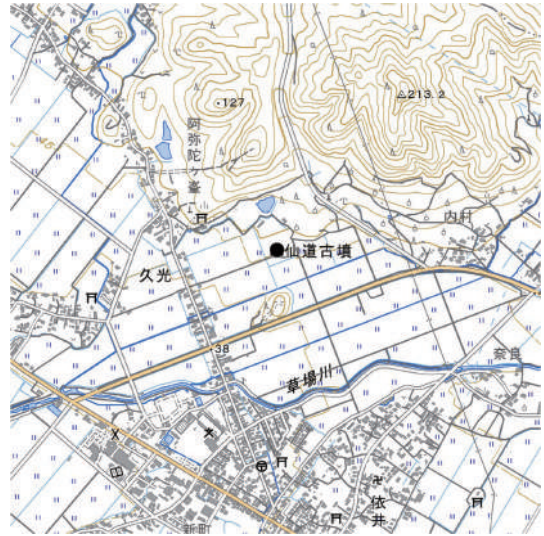


図172 仙道古墳位置図 (1/25,000)

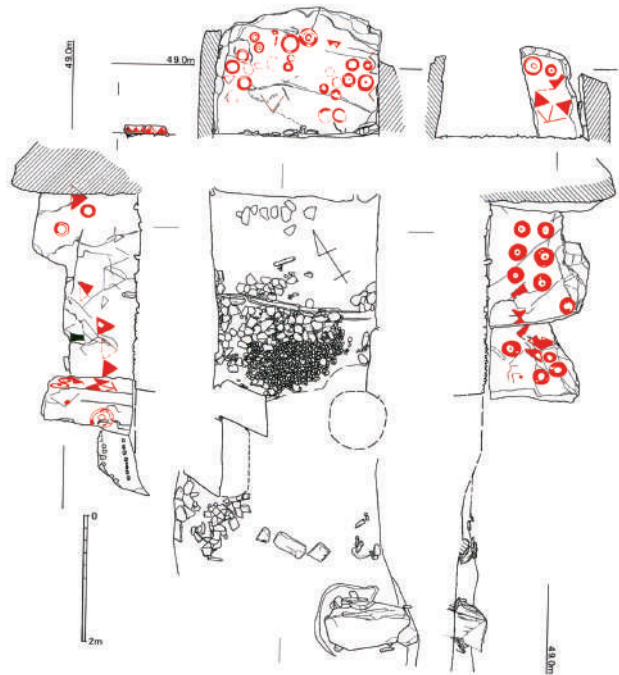


図173 仙道古墳石室実測図 (1/120)

同じ右側壁内には円文や不整形を無作為に配置し、また三角文を相対して配置する。これらはすべて赤色で描かれている。玄門側の左側壁は三角文や円文、同心円文が赤色で施文される。左玄門にも同心円文や三角文が赤色で描かれる。

顔 料 赤・緑（三輪町教育委員会 2001）

遺 物 墳丘・周溝から埴輪（盾持武人埴輪・柵形埴輪、他）、石室内等から装身具・須恵器・土師器・武器等

年 代 6世紀後半

調査歴 昭和52年度 農業基盤整備事業に伴う確認調査・発掘調査（三輪町教育委員会）

平成7～9年度 保存修理に伴う発掘調査（三輪町教育委員会）

整備歴 昭和52年度 石室内は保護策を講じて埋戻し、保護覆屋を架構して墳丘保護

平成7～12年度 石室保護施設設置後、墳丘復元、古墳公園整備、石室レプリカ設置

現 況 石室保護施設設置後、墳丘復元。古墳公園として整備活用に使われる。

図面等 昭和52年度 周辺地形測量図・墳丘測量図・石室・壁画実測図作成（筑前町教育委員会）

平成7～9年度 整備関係実測図作成（筑前町教育委員会）

写 真 九州歴史資料館 1977 撮影 4×5 カラーネガ 9点・カラーリバーサル 21点

九州歴史資料館 撮影 4×5 カラーリバーサル 3点

九州歴史資料館 1977 撮影 35mm カラーリバーサル 48点

九州歴史資料館 2001. 5. 25 撮影 35mm カラーリバーサル（保存施設、調査時）13点

九州歴史資料館 撮影 35mm カラーリバーサル 12点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 30点（No. 0241～0255・0835～0849）

模 型 古墳公園内に実物大模型（一部推定復元）

パネル 九州歴史資料館 パネル 1点（107×127）

文 献 三輪町教育委員会 2001 『国指定史跡 仙道古墳－発掘調査及び保存修理事業報告書－』三輪町文化財調査報告書第10集

筑前町町史編さん委員会 2016 『筑前町史』上巻 自然環境・原始・古代・中世・近世 筑前町



図 174 仙道古墳石室奥壁



図 175 仙道古墳石室左側壁

29 湯の隈（ゆのくま）古墳

立地 湯の隈古墳は福岡県の中郡、筑後川中流域の右岸にある。古処山系最高所の馬見山（978m）から南側に向かって派生する山稜の先端部、標高60mに位置しており、眼下に両筑平野を一望できる。

経緯 江戸時代から既に開口しており、『筑前国続風土記』には「湯隈の後の山の上に石窟あり。内の廣さ十畳敷許、入七間許あり」とある。『拾遺』『附録』も同様だが、これらに装飾に関する記述はない。

『朝倉高等学校史学部1969』には、「宮地嶽古墳群」中の一つで彩色壁画のある「宮地嶽古墳」として紹介される。奥壁と玄門左柱には「私（執筆：高山明）が子供の頃には無理しないでも赤色を帯びた彩色で同心円が見えていたが、現在では余程注意してみなければならぬほど薄れている」とある。

名称については現在、本古墳から北に300m、同一丘陵の最高所にある前方後円墳との名称の混乱を避ける意図から、北側の前方後円墳を「宮地嶽古墳」、南側にある装飾古墳を「湯の隈古墳」と呼称している。

名称 湯ノ隈の後の山の石窟（『筑前国続風土記』）
湯隈古墳（古賀益城1963『あさくら物語』）
宮地嶽古墳（『平凡社1964』）
湯の隈装飾古墳（指定名称）
湯の隈古墳（『朝倉町2000』）

所在地 朝倉市宮野

指定 朝倉市指定史跡「湯の隈装飾古墳」昭和44年12月3日

墳丘 円墳（径約17m、高4m）

主体部 横穴式石室（複室構造・南西側に開口・安山岩主体石材使用）全長10.0m、後室長4.5m、後室幅4.0m、高2.7m

装飾 『平凡社1964』には「後室右壁の1石に2個の赤色の同心円があり、奥壁左下方に黒色の円文がみえる」とある。『朝倉町2000』では「かすかに右側壁に円文が3つ確認できる程度」とある。

顔料 赤・青（『福岡県1954』原田大六談）
朱（『古賀益城1963』）
赤・黒（『平凡社1964』）
赤・緑（『講談社1985』）
赤（『朝倉町1986』）



図176 湯の隈古墳位置図（1/25,000）

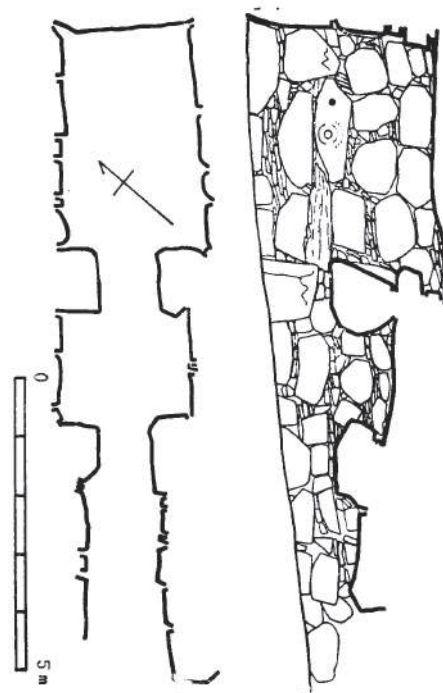


図177 湯の隈古墳石室略測図（1964『装飾古墳』）



図178 湯の隈古墳奥壁

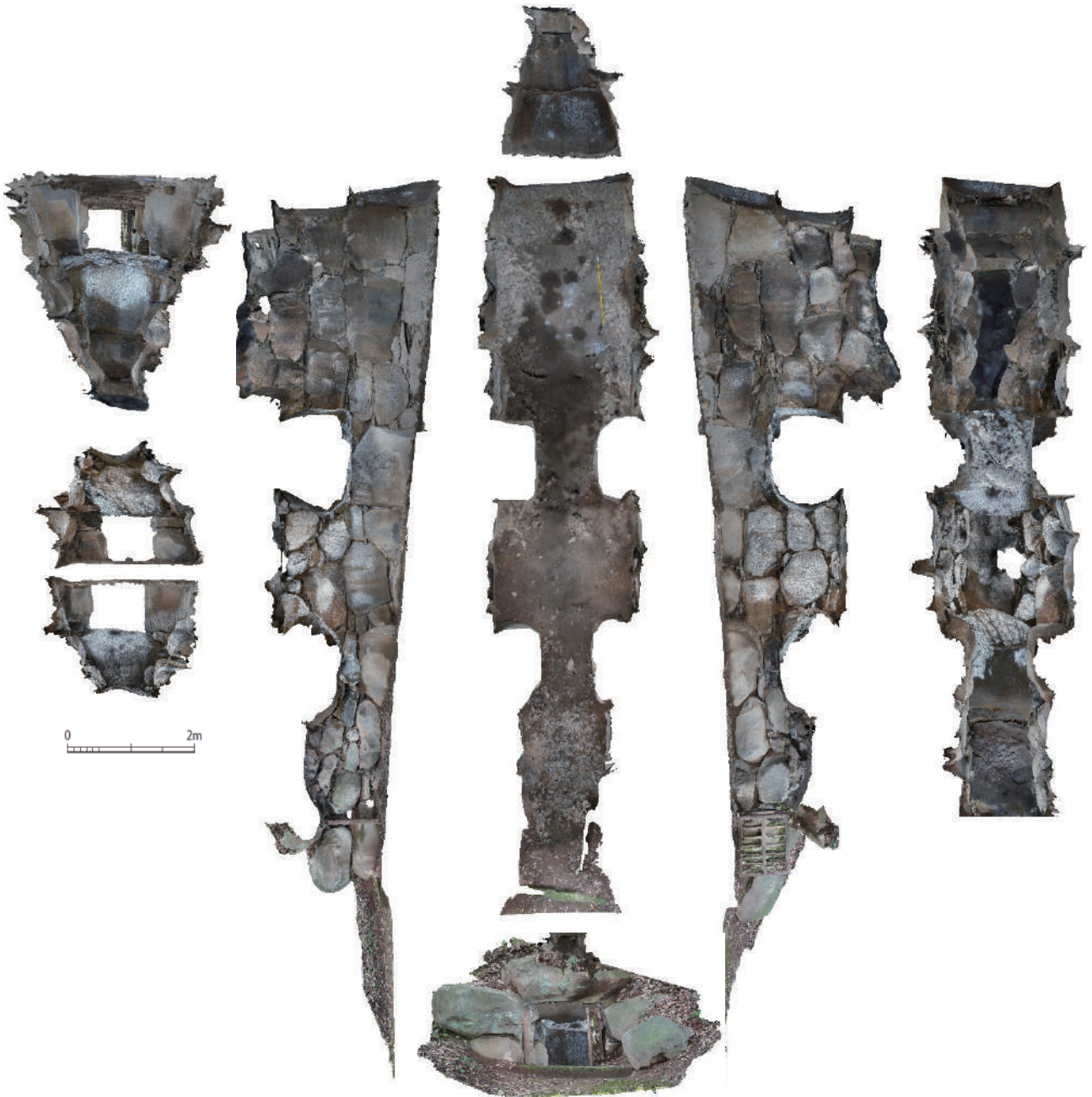


図 179 湯の隈古墳石室正射投影画像 (1/100)

年 代 6 世紀後半

現 況 石室入口に鉄柵を設置して保存

図面等 石室略測図 (『平凡社 1964』) 森貞次郎略測

(写真測量) 九州歴史資料館 2023. 5. 11 計測

写 真 九州歴史資料館 1980 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 4 点、35mm カラーリバーサル 16 点

九州歴史資料館 2002. 9. 10 撮影 35mm カラーリバーサル「石室内、他」3 点

九州歴史資料館 2023. 5. 11 撮影デジタル写真データ

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 2 点 (No. 0239・0240)・5 点 (No. 0830～0834)

文 献 平凡社 1964『装飾古墳』小林行雄編

福岡県立朝倉高等学校史学部 1969『埋もれていた朝倉文化』

朝倉町史刊行委員会 1986『朝倉町史』朝倉町

朝倉町教育委員会 2000『朝倉町の古墳と埴輪』朝倉町文化財調査報告書第 9 集

30 狐塚（きつねづか）古墳

立地 福岡県の中中部、筑後川中流域右岸にある。古処山系の南に派生する山稜からさらに南側へと伸びた洪積台地の縁辺部にあり、西側は筑後川の支流の一つ、荷原川の浸食作用によって深く開析された谷地形に面している。

経緯 古墳の存在は古くから知られていたようだが、昭和26年頃以降に土地所有者によって墳丘の採土が行われたらしい。昭和27年初頭に朝倉高等学校教官の古賀精里の元に連絡があり、3月20日、同校史学部の生徒が古墳外形の略測図を作成している。その後、大福小学校PTA郷土調査委員会の協力を得て古賀が調査を進め、前室床面から多数の副葬品出土を見るに及んで九州大学の鏡山猛に連絡。5月23日に鏡山と県教育庁出張所の担当が現地を訪れ、25日には鏡山の代わりに渡辺正気が現地を訪問し古賀と共に調査を担当した。

昭和27年頃までは中央頂部がやや窪んだ円墳としての形状を留めていたが、昭和28年10月には墳丘の北半部が頂部から2m程が掘削されたようである。この時点で天井部は羨道の一石を除いて取り去られ、側壁の上半も失われていたが、奥壁や左右側壁に線刻壁画が確認された。

調査後、出土品は地元大福村の所管となり、のち朝倉町（現、朝倉市）の所管となった。古墳は現状保存され、昭和30年に県の史跡に指定された。昭和31年3月には大福小学校PTA中町分室の手により覆屋（第一次）設置、昭和50年3月には説明版が設置された。

昭和61年頃には覆屋の老朽化が目立つようになり、朝倉町教育委員会では平成元・2年度に石室・周溝の発掘調査を実施、平成3・4年度に覆屋を設置（第二次）し、平成8年度に覆屋内部に説明版を設置した。その後、平成14年度には墳丘復元・石室保護工事を実施し、現在に至る。

名称 狐塚古墳（『福岡県1954』）

所在地 朝倉市入地

指定 福岡県指定史跡 昭和30年3月5日



図180 狐塚古墳位置図 (1/25,000)

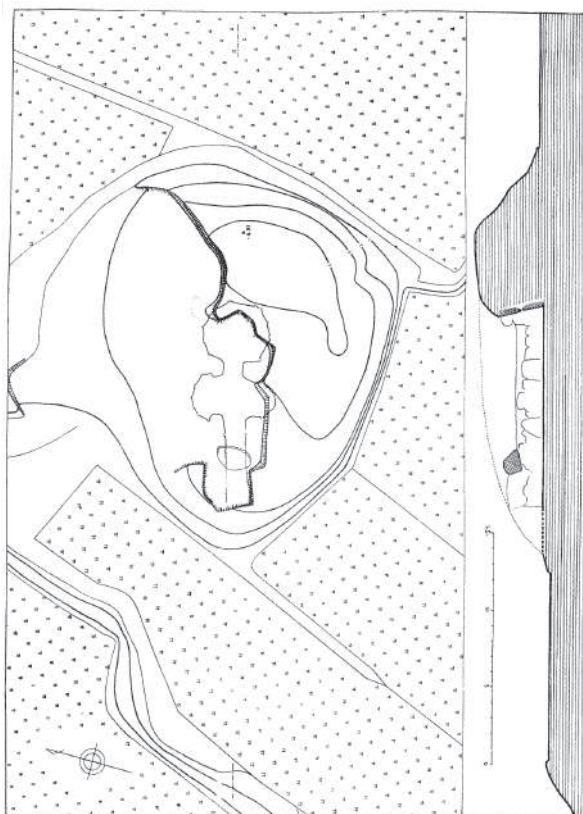


図181 狐塚古墳外形実測図 (1/500)

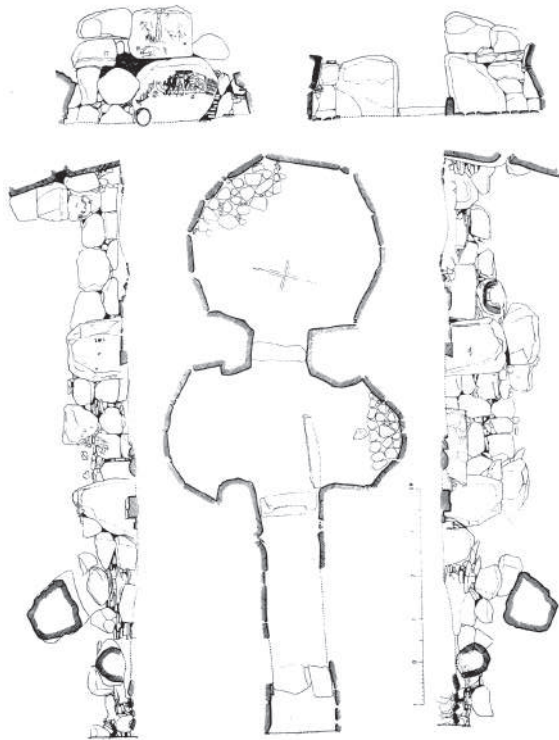


図 182 狐塚古墳石室実測図 (1/250)



図 185 第一次保存施設 (昭和 40 年代頃)

墳 丘 円墳 (径 23 ~ 26m)

主体部 横穴式石室 (複室・胴張、西側に開口、玄室に敷石、羨道部と前室との境に扉の柱を嵌入した枢のある敷石、大半が安山岩で一部雲母片岩石材使用) 現況全長 13m、奥室径約 4.2m

装 飾 奥壁と側壁、玄門部左右、羨道部左側壁に線刻による装飾が見られる。

奥壁中央やや上寄りにゴンドラ形の船が描かれる。左下や上部鏡石にも画題不明の線刻画がある。東側側壁には線刻と敲打による船、その左上から右下には木葉状の線刻が描かれ、櫂もしくは檣と考えられる。西側側壁には平面調整は行われていないが前面に研磨調整が行われ、そこに

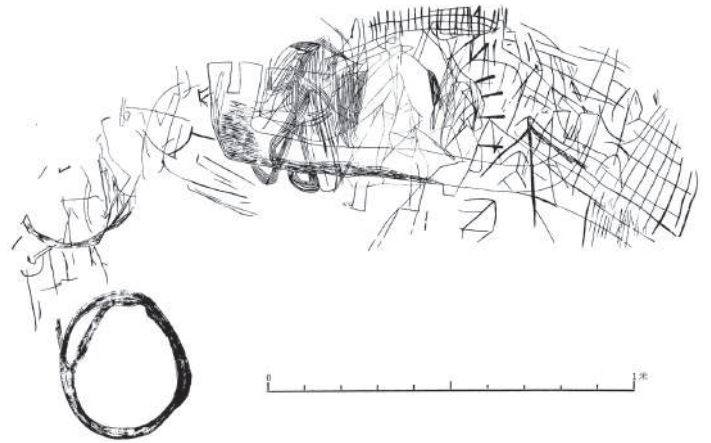


図 183 奥室奥壁下部大石面模写図



図 184 奥室北側壁面模写図

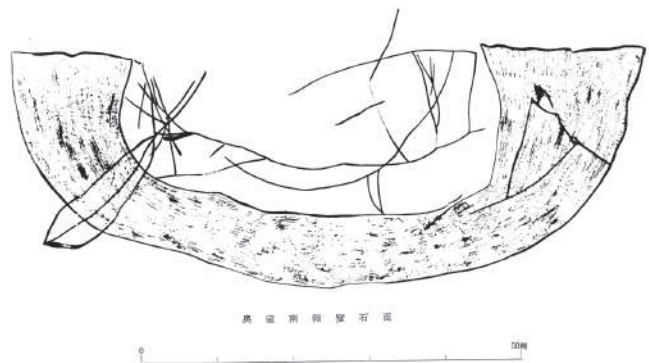


図 186 奥室南側壁石面模写図

船が描かれる。船体の両端に線刻があり、それぞれ櫂または櫓の可能性はある。

玄門部右袖石には動物状の線刻が描かれる。頭部が左を向いた有蹄類状の動物で、頭部と胴部を一筆書きで表し、頭部上面より2本の沈線が伸びる。胴部下面からは5本の沈線が伸びる。左袖石には同心円文を直線で八等分する画題と、その上下には動物様の画題が描かれている。

遺物 昭和27年調査時に多数出土。後室から装身具・鉄釘、前室から装身具・鉄釘・武器・馬具・須恵器、古代・中世土器等（朝倉市教育委員会）

年代 7世紀前半

調査歴 昭和28年 大福村小学校PTA郷土調査委員会主催、大福村文化財保護委員会賛助、朝倉高校古賀精里・九州大学渡辺正気調査担当
平成元・2年度 覆屋設置に伴う発掘調査（朝倉町教育委員会）

整備歴 昭和31年度 覆屋設置事業（第一次）
昭和50年度 説明版設置

平成3・4年度 覆屋整備事業（第二次）

平成8年度 覆屋内説明板設置

平成14年度 墳丘復旧・石室修復

平成26年度 覆屋外壁に説明版設置

現況 覆屋設置・墳丘復元等を実施して保存
図面等 墳丘測量図、石室実測図、線刻壁画模写図（九州歴史資料館）

平成元・2年度調査図（朝倉市教育委員会）

（写真計測）九州歴史資料館 2023.5.11 計測

写真 九州歴史資料館 1980撮影4×5カラーリバーサル6点

九州歴史資料館 35mmカラーリバーサル24点

熊本県立装飾古墳館 2001.5.17撮影4×5カラーリバーサル20点

九州歴史資料館 2023.5.11撮影デジタル写真

H14北部九州装飾古墳画像データベース16点
(No.0233～0238・0820～0829)

パネル 九州歴史資料館 1点(80×110)



図187 石室全景



図188 現在の保存施設



図189 奥壁全景

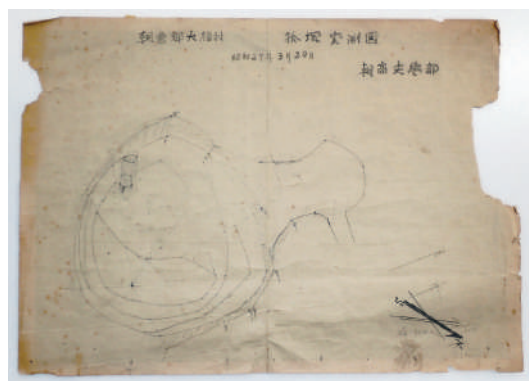


図190 古墳略測図（昭和27年）

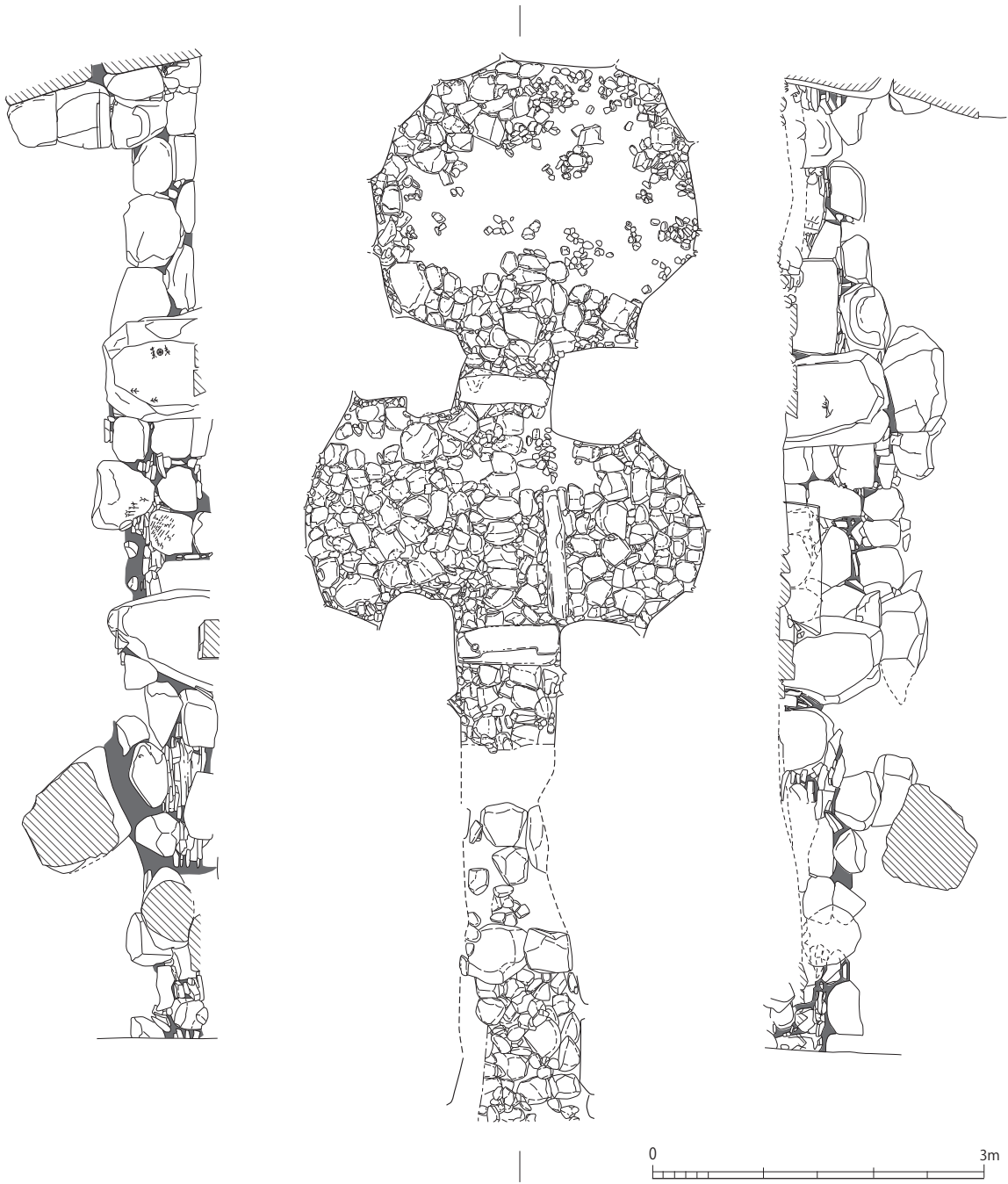


图 191 狐塚古墳石室実測图 (1/60)



図 192 装飾文様拡大①



図 193 装飾文様拡大②

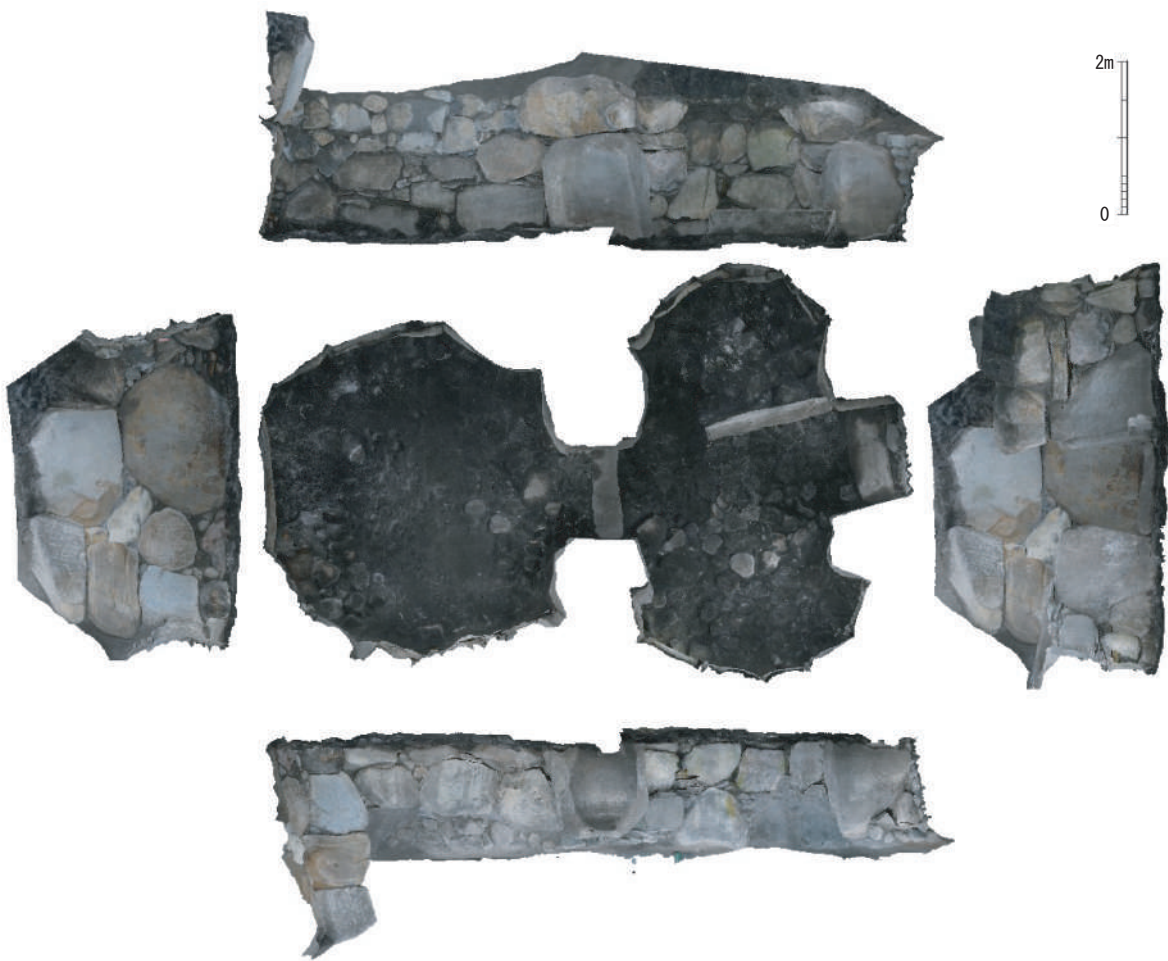


図 194 狐塚古墳石室正射投影画像 (1/100)

文 献 福岡県 1954 『福岡県文化財調査報告書 第十七輯 (二分冊の一)』
古賀益城 1963 『あさくら物語』
福岡県立朝倉高等学校史学部 1969 『埋もれていた朝倉文化』
朝倉町史刊行委員会 1986 『朝倉町史』 朝倉町
朝倉町教育委員会 2000 『朝倉町の古墳と埴輪』 朝倉町文化財調査報告書第 9 集

(参考2) 小田茶臼塚（おたちょうすづか）古墳

立地 小田茶臼塚古墳は福岡県の中中部、筑後川中流域右岸にある。古処山系の南に派生する山稜からさらに南側へと伸びた洪積台地の一つ、小石原川と佐田川の浸食作用によって形成された舌状台地上に立地しており、近隣には弥生時代の甕棺墓群や丹塗磨研土器群の出土で有名な栗山遺跡や、低地の多重環濠集落として知られる平塚川添遺跡、三角縁神獸鏡が出土したことで知られる神蔵古墳など、弥生・古墳時代の著名な遺跡が分布する。

本古墳はこの舌状台地の南東端部近くに位置する。付近は平坦な地形が広がっており、標高は28m前後を測る。集落内の一画にあり、古墳の墳丘上にはかつて神社の社殿が置かれていた。

経緯 古くから知られていたらしく、『筑前国続風土記』には「是むかし耶蘇の徒を埋めし所也」とあり、また『筑前国続風土記拾遺』には「くるす塚 ちやうす塚ともいふ」とある。

かつて小田と小隈の集落間は、小田茶臼塚古墳の墳丘に沿って迂回するなど、俗に「七曲り」と称されるほど道路が曲がっていた。昭和3年4月、この道路を直線にするため道路工事が起工された際に後円部南側の墳丘が削平され、石室東南壁が破壊された。当時、朝倉中学校教諭の坂本真鈴が通報を受けて現地へと赴きその状態を記録し、出土した四環鈴に関する報告を『考古学雑誌』に発表した。当時の状況は朝倉高校史学部『埋もれていた朝倉文化』に詳細な報告がある。

これによれば、現地へ赴いた際には既に石室の前半は破壊され、「玄室の前方に斜に立っている巨石（天井石か界石か不明）の面には朱色に塗られ、その面に×形または図形の幾何学的陰刻が施されているのを発見した」とある。また、「作業中に前方に顛落したが、その装飾ある面が表になるように落としてもらった。顛落後みると、以上の陰刻の他に指先で押した程度の凹みが沢山施されているのを発見した」とある。この時点で小田茶臼塚古墳は「筑前に於ける陰刻による装飾古墳の初見」として広く喧伝され



図 195 小田茶臼塚古墳位置図 (1/25,000)

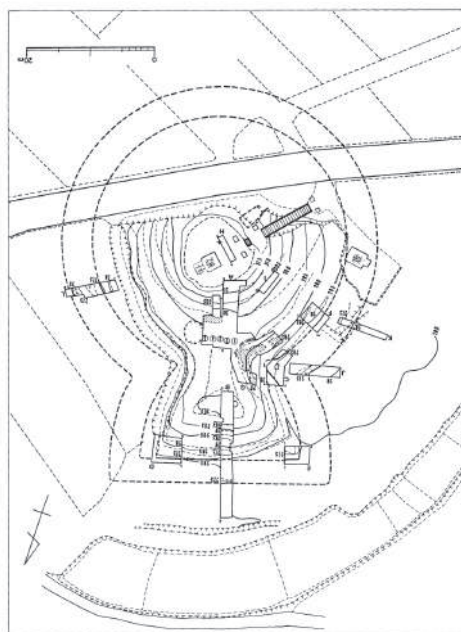


図 196 小田茶臼塚古墳墳丘測量図 (1/1,200)



図 197 小田茶臼塚古墳現況

たらしく、『吉岡鐵臣 1929』では、同年中に発見された豊前国唐原村下唐原の装飾古墳（穴ヶ葉山古墳）を報告する中で、小田茶臼塚古墳の線刻図文発見について触れている。

その後暫くの間、注目を集める機会はなかったが、昭和 49 年・50 年には朝倉高校史学部 0B によって古墳の墳丘測量図作成や石室実測図作成等が行われ、昭和 53 年には甘木市（現、朝倉市）教育委員会による範囲内容確認調査が行われた。この時の調査で刻線のある石材について詳細な観察が行われ、「線刻が施された範囲は、片面のほぼ全面特に天地の両端ギリギリまで達しているので、右側壁前半の腰石として若干埋めこんで立てられたとの推定に誤りがなければ、設置以前に刻されたと思われる」という推察が行われている。さらに、「石室構築時にこれらの刻線がさほどの意味を持っていなかったのではないかと思われるフシがある」として、図形の意味・目的が不明である点に加えて、加飾を目的としたとは考えにくい点や、設置後は見えなくなる部分にまでも線刻が施されている点が挙げられている。このような理由から、ここでは「装飾古墳の加飾法とは異なっており、同列に扱うには問題がある」との分析が行われ、装飾古墳ではないものとして取り扱われるようになった。

名称 くるす塚（『筑前国続風土記』）
 くるす塚・茶臼塚（『筑前国続風土記拾遺』）
 茶臼塚古墳（『朝倉高校史学部 1969』）
 小田茶臼塚古墳（『甘木市教委 1979』）

所在地 朝倉市小田

指定 国指定史跡 昭和 54 年 9 月 4 日

墳丘 前方後円墳（全長 54.5m、後円部径 39.7m、前方部長 14.5m、前方部幅 25m）

主体部 横穴式石室（単室・奥壁と併行して屍床・南西方向に開口）現存長 4.5m、玄室長 3.6m、奥壁幅 2.23m、高 1.45m

装飾 発見時、既に原位置を移動していたが、右側壁前半の腰石と推察される。刻線は浅い直

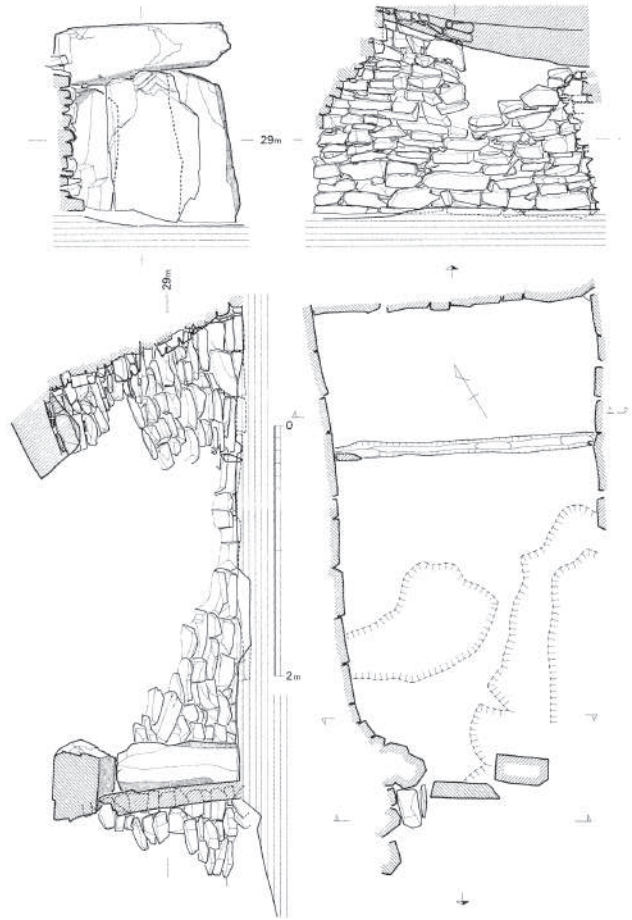


図 198 小田茶臼塚古墳石室実測図（1/60）



図 199 玄門閉塞石と石室右側壁の線刻石

線であり、図形は大部分を大小様々で方向も一定しない×印が占める。この他に、×印を長方形で囲ったものが1ヶ所、井桁状、N(Z?)、直線のみなどがあるが、いずれも直線数本からなる単純な図形である。重複部分は少なく、密度は上半部中央が濃く、右下部分は希薄である。これらの刻線の図形自体の意味するものは不明である。

遺物 昭和3年4月の工事で短甲・衝角付冑・装身具・四環鈴・馬具等が出土（一部を除き甘木歴史資料館）

昭和53年8月、範囲内容確認調査で円筒埴輪、須恵器大甕等出土（朝倉市教育委員会）

年代 5世紀中頃(5世紀後半まで追葬)

調査歴 昭和3年4月、工事で石室前半が損壊、朝倉中学校教諭坂本真鈴による調査

昭和49・50年 朝倉高校史学部OBによる墳丘測量・石室実測・遺物実測等

昭和53年度 甘木市教育委員会による範囲内容確認調査

現況 石室・線刻のある石材は埋め戻して現状保存

図面等 昭和27年 朝倉高校史学部墳丘測量図（九州歴史資料館）

昭和49年度 墳丘測量図（鉛筆トレース図）（九州歴史資料館）

昭和53年度 墳丘測量図、石室実測図、線刻拓本作成（朝倉市教育委員会）

写真 甘木市教育委員会1978調査時撮影写真（朝倉市教育委員会）

文献 吉村鐵臣1929「豊前国唐原村下唐原発見の装飾古墳に就て」『史蹟名勝天然記念物』第四集第二号 史蹟名勝天然記念物保存協会

坂本真鈴1933「環鈴について」『考古学雑誌』第23巻第10号 日本考古学会

朝倉高校史学部1969『埋もれていた朝倉文化』

甘木市教育委員会1979『小田茶臼塚古墳』甘木市文化財調査報告第4集

甘木市史編さん委員会1982『甘木市史』上巻

甘木市史編さん委員会1984『甘木市史資料』考古編

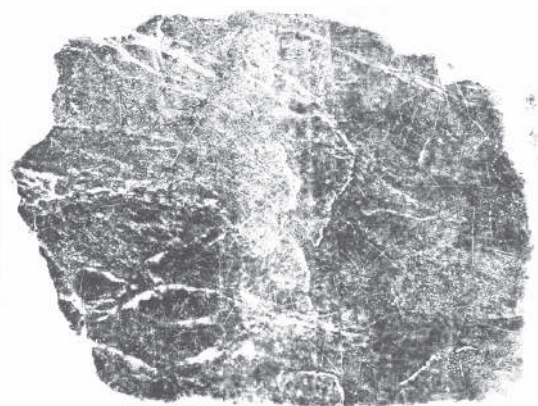


図200 線刻壁画拓影

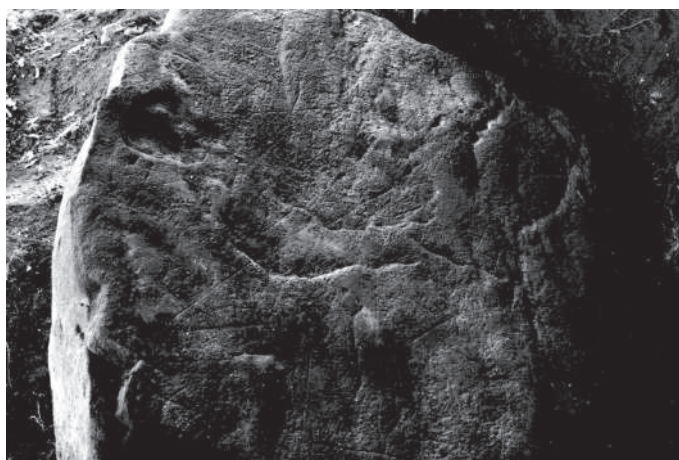


図201 線刻壁画

(参考3) 月読神社（つくよみじんじゃ）御神体

立地 月読神社が置かれる上須川地区は福岡県の中中部、筑後川中流域右岸にある。古処山系の南に派生する山稜の先端部付近に位置しており、西側には筑後川へと注ぐ妙見川が流れ、また南側には筑後川の沖積平野が広がっている。

一帯には上須川古墳群、妙見川を挟んだ対岸の東側には妙見古墳群が展開しており、後期から終末期の群集墳が数多く確認されている場所である。神社の眼下に位置する上須川遺跡でも水田面下から墳丘を削平された古墳が複数基見つかり、従来はさらに多くの古墳群が広がっていたものと思われる。月読神社が明治24年以前に鎮座していたとされる「字原ノ前」にも、かつて古墳が存在していた可能性がある。

経緯 近世地誌類には記載が無いが、社殿内の掲書には「月弓神社は古来より字原ノ前に鎮座ありしも僻地にして信神の者の不便少なからざるを以て当納有志者相謀り明治二四年三月当所に移し□せて拝殿新築のことを企図し諸方信者寄進募り翌二五年三月□切を告ぐ即ち寄進人名左の如し…」とあり、明治24年3月に原ノ前（朝倉市須川字原ノ前）から現在地に移設したことを記す。

令和4年9月19日に月読神社御神体が装飾古墳の石材ではないか、との通報が寄せられ、朝倉市文化財担当が現地を確認、その結果、敲打による装飾古墳石材の可能性を想定するに至った。御神体脇には須恵器提瓶2点が置かれているが、因果関係は不明である。

名称 月読神社御神体

所在地 朝倉市須川

装飾 月読神社御神体として奉斎されている高さ1.1m、幅1.2mの花崗岩石材の正面に、敲打技法によると思われる単円文が3点確認される。円文の大きさは径20～30cm程度、線の幅は2～3cm程度を測る。

調査歴 令和4年9月20日、朝倉市教育委員会文化財担当が現地を確認

現況 月読神社御神体として社殿に安置

図面等 (写真計測) 九州歴史資料館 2023.5.2計測

写真 九州歴史資料館令和6年5月2日撮影デジタル写真データ



図202 月読神社位置図 (1/25,000)



図203 月読神社御神体

(4) 久留米・うきは地域

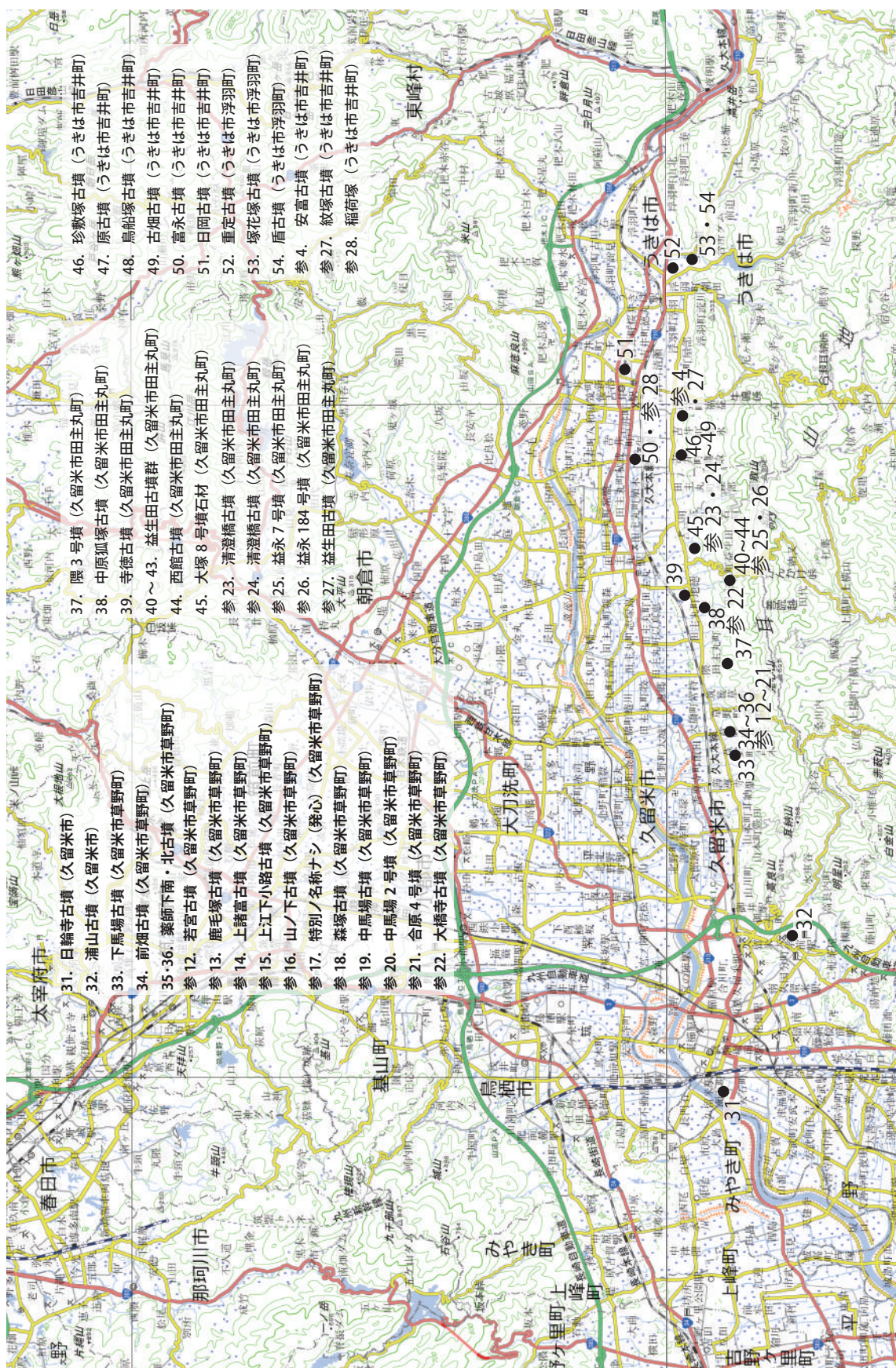


図 204 久留米・うきは地域分布図 (1/200,000)

31 日輪寺（にちりんじ）古墳

立地 日輪寺古墳は筑後川の中流域から下流域へと移行するあたりの左岸にある。一帯には勾配の少ない沖積平野が広がっており、古墳から筑後川までは200m程しか離れていない。標高12mの独立低丘陵上に立地し、現在は日輪寺の境内にある。

経緯 久留米城下にあるため早くから周囲の市街地化が進み、前方部南東側は早い時期に削平されてしまったようである。日輪寺は元来、久留米城の東南にあったが、城域拡張に際して元和年間（1615～1624）中に現在地に移転され、古墳上に観音像が安置された。これがのちに安徳天皇の御陵という伝説の所以となっただけではない。

明治45年3月30日、上部に置かれていた観音堂が暴風雨により倒壊した際に石室が確認された。その時の石室内の様子や副葬品、石枕の発見状況などに関する記述書の内容は『福岡県1925』に詳述がみられる。石室内には彫刻・彩色された装飾が確認され、石枕はその後、日輪寺住職から東京帝室博物館（現、東京国立博物館）に寄贈された（『考古学雑誌第五卷第四号』『筑紫史談第二集』）。

その後、大正5年に観音堂を新築した際、破損していた石室も修繕され、石室内へと降りられるように改変が加えられた。この時に大きく原形が失われたようだが、それ以前の大正3年9月当時の石室内を記録した実測図が残っている。改変前の石室や副葬品の状況、装飾の仔細については『京大1917』に詳細な報告がある。

古墳はその後、大正11年（1922）に国史跡に指定され保護が図られた。昭和35年には石室保護の覆屋が設置された。

名称 日輪寺古墳（『京都帝國大學文學部1917』）

日輪寺古墳（指定名称）

所在地 久留米市京町

指定 国指定史跡 大正11年3月8日

墳丘 前方後円墳（全長約50m、円筒埴輪）前方部はほとんど削平され、西側くびれ部をわずかに確認することができるのみである。主軸長約27m、前方部幅15m、後円部径21m、高さ約3.6m。

主体部 横穴式石室（単室・短

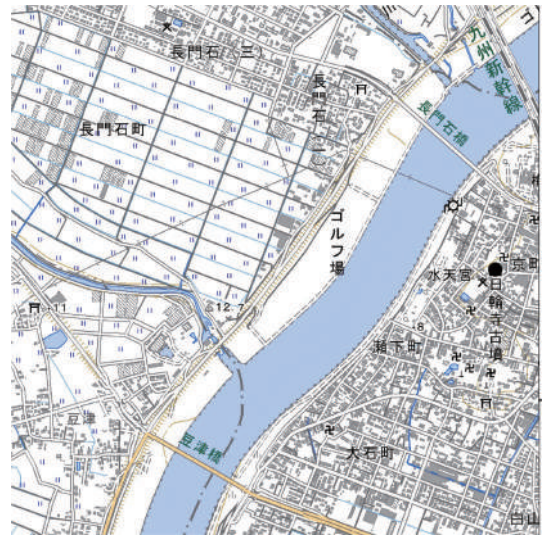


図205 日輪寺古墳位置図 (1/25,000)

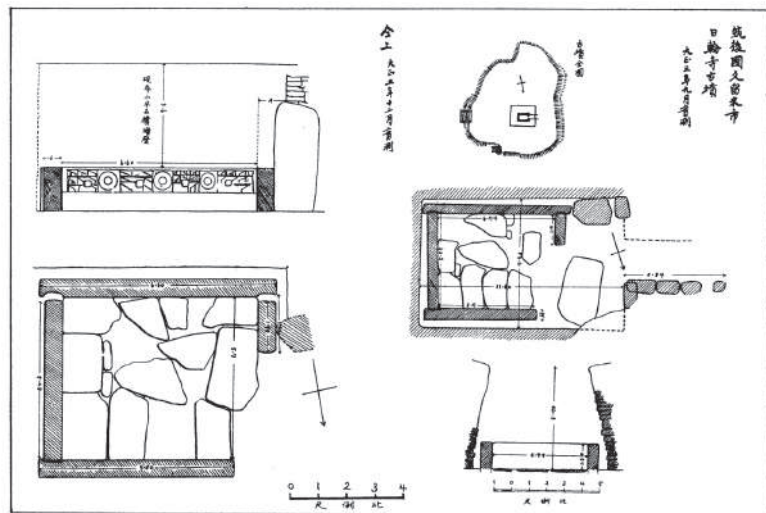


図206 「筑後國久留米市日輪寺古墳」
（『京都帝國大學1917』）



図 207 日輪寺古墳墳丘測量図 (1/500)

羨道・西側に開口・片岩の板状石材の割石積み・石室内四壁に阿蘇凝灰岩製板石の石障) 石室長 3.1m、石室幅 2.3m、石障長 2.0m、石障幅 1.7m、高さ 0.5m。入口部分から左側は開口時すでに欠損していたようである。

装飾 石障の内側、奥壁と左右両壁の上半の三方に、鍵手文と同心円文とを交互に配置した線刻による装飾文様がある。線刻は細いが彫りが深く、文様にやや浮き彫りの感じがある。鍵手文は直線を三本ないし五本組み合わせたものである。右壁の鍵手文帯には四個の方柱状の突起が造り出されている。彩色は赤色のみで剥落が著しいが、同心円外側や鍵手文中央の線内に赤色顔料が確認されている。石室側壁面にも全体に亘って赤色顔料塗布が行われたものと推察される (『京都帝國大學文學部 1917』)。

なお、『京都帝國大學文學部 1917』には、早い段階で観音堂前に移動された天井石と推測される楕円

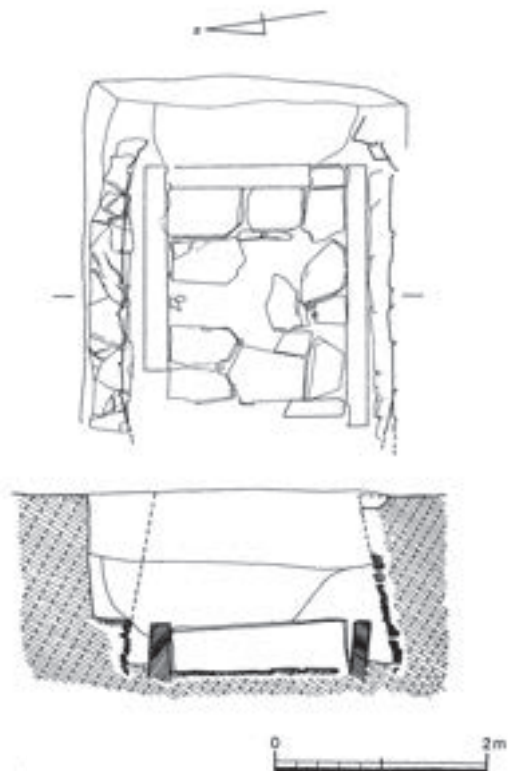


図 208 日輪寺古墳石室実測図



図 209 「久留米市日輪寺古墳石室柳壁彫刻模様拓本」(『京都帝國大學 1917』)

形石材の、一側面から裏面にわたって斜十字や十字形、直線の線刻が観察された、とある。ここでは、この文様は意味をなすものではなく近時の戯刻と考えられるが、古いものであるようにも見えるため、一考を要する、という趣旨が記されている。

顔 料 赤 (『京都帝國大學文學部 1917』)

赤 (「山崎一雄 1951・1974」)

遺 物 明治 45 年石室内発見石枕 (東京国立博物館)、埴輪・土師器・須恵器・装身具・武器・大正 5 年発見仿製四獣鏡 (臨濟宗日輪寺)

年 代 5 世紀末～6 世紀初頭

調査歴 明治 45 年 石室開口、副葬品・石室内石障裝飾発見

大正 3 年 京大調査 (石室実測)

大正 5 年 石室内一部掘削・石室改変

昭和 40 年以前 石室実測 (小田富士雄作図)

整備歴 大正 5 年 石室修繕・一部改変

昭和 35 年 保存施設 (覆屋設置)

昭和 50 年 石室石積み補修、保存施設防水工事、墳丘封土補修

現 況 保存整備工事後、現状保存

図面等 昭和 40 年頃 石室実測図 (久留米市教育委員会)

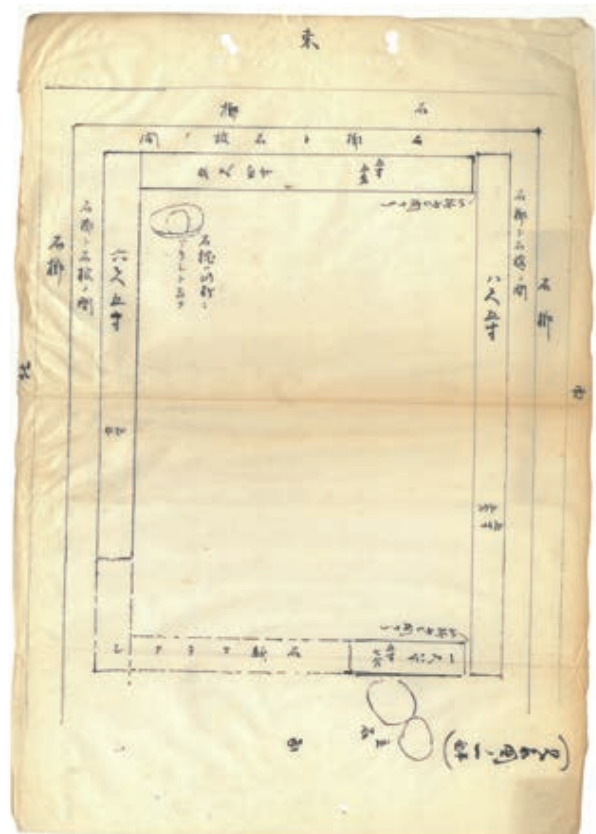


図 210 石室見取図

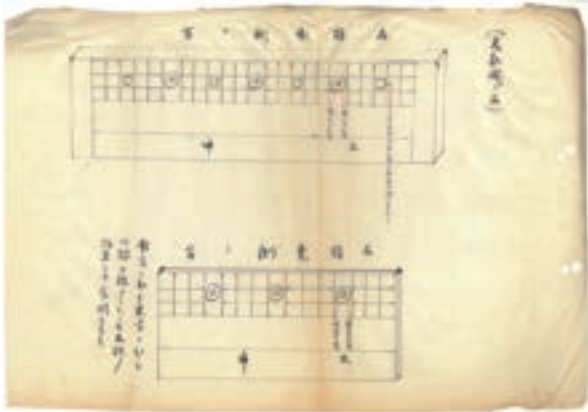


図 211 石障裝飾図



図 212 石室全景 (昭和 50 年)



図 213 玄室右側壁石障

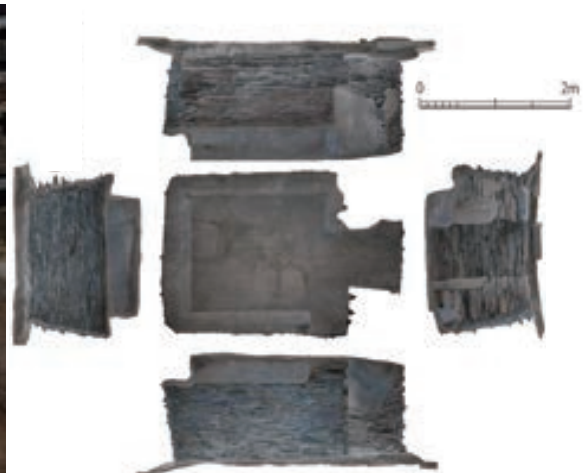


図 214 日輪寺古墳石室正射投影画像 (1/100)

大正 3 年頃 石室内石障拓本 (北西・北東・南東) 4 点 (東洋文庫梅原資料)

(写真計測) 九州歴史資料館 2024. 1. 11 計測

写 真 九州歴史資料館 1975 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 10 点、カラーネガ 2 点

九州歴史資料館撮影 4 × 5 カラーリバーサル「右石障」5 点

九州歴史資料館 6 × 7 カラーネガ「石室全景」8 点、「右側壁」3 点

九州歴史資料館 1975 撮影 35mm カラーリバーサル 29 点

九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル「石室全景」等 9 点

熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 21 撮影写真 4 × 5 カラーポジ 1 点、モノクロ 1 点

九州歴史資料館 2024. 1. 11 デジタル写真データ

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 12 点 (No. 0223 ~ 0226、0805 ~ 0809、1429 ~ 1431)

模 写 日下八光 玄室内左・奥・右石障 (模写) 3 点 (国立歴史民俗博物館)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1 点 (高 107 × 幅 134)

文 献 高川鐵馬 1914「日輪寺の古墳に就て」『筑紫史談』第貳集

考古学会 1916「久留米日輪寺発掘石枕」『考古学雑誌』第五卷第四號

京都帝國大學 1917『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝國大學文學部考古學研究報告第一冊

福岡縣 1925『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

久留米市史編さん委員会 1994『久留米市史』第 12 卷 資料編 (考古) 久留米市

32 浦山（うらやま）古墳

立地 筑後川下流域の南側、耳納山地の西端にあり、高良川の開析によって形成された東西に細長くのびる丘陵の頂部に位置する。近くには石櫃山古墳や藤山甲塚古墳といった中期の首長墓が築かれる。

経緯 明治元年頃（一説には安政最初）、彦山の記念碑建立のための石材採取が目的で石室・石棺が開口され、その時には人骨や刀剣類が発見されたらしい。10年後に再度発掘された時には装身具等が発見されたが病を得たため中止したと伝えられる。大正6年に再度発掘が行われた際に石棺内の彫刻文様が発見された。

大正7、8年に京都帝國大學文學部考古學研究室が実施した九州の装飾古墳調査では、肥後の装飾古墳を中心に調査が行われたが、これらと共に浦山古墳も調査の対象となり、墳丘や石室、石棺に関する詳細な検討が行われた。石棺に関しては復元模型が製作され、構造に関する事項も報告されている。石棺内部の直弧文装飾や赤色顔料の比較検討、直弧文の拓本採取も行われた。

その後、昭和26年6月に国の史跡に指定され、昭和37年度に保存施設が設置された。昭和42年には大規模な墳丘毀損が発生して大きな問題となったが、その後は保全が図られている。

名称 上津荒木村二軒茶屋の古墳（『京都帝國大學文學部1919』） 上津荒木浦山古墳（別称二軒茶屋古墳）（『福岡県1925』） 浦山古墳（王塚）（『福岡県1928』） 浦山古墳（『平凡社1964』）

所在地 久留米市上津町

指定 国指定史跡 昭和26年6月9日

墳丘 前方後円墳（全長約60m、葺石・円筒埴輪列）後円部径約40m、高6m、前方部幅約20mの帆立貝式前方後円墳、前方部の大部分は削平

主体部 横穴式石室（緑泥片岩割石の小口積み、北西に開口、羨道部は閉塞、内部に妻入横口式家形石棺）長2.8m、幅1.5m、高2.0m

装飾 石棺内側に陰刻による線刻文様を施文する。石棺は阿蘇凝灰岩を使用し、屋根は寄棟形に加工、両側に各二個の環状縄掛突起を造り出す。蓋の全長1.6m、幅1.0m。棺身は一回り大きい底石の上に乗せ、四壁および底部はそれぞれ一枚石を組み合わせる。石棺入口にははめ込み扉



図 215 浦山古墳位置図 (1/25,000)

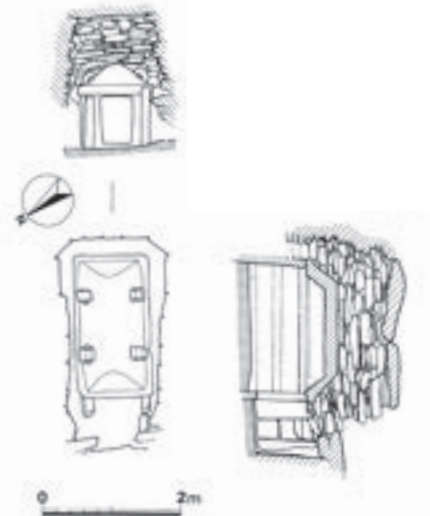


図 216 浦山古墳石室・石棺実測図 (1/135)

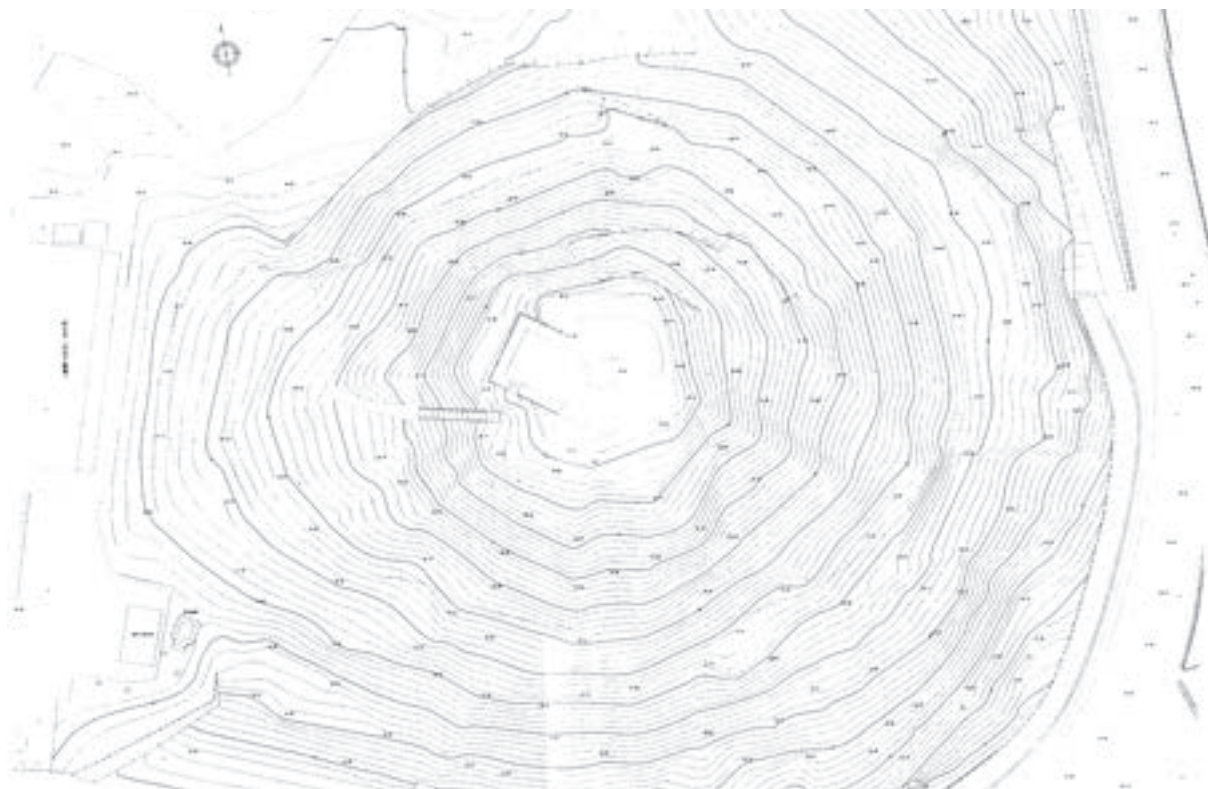


图 217 浦山古墳墳丘現況測量図 (1/500)

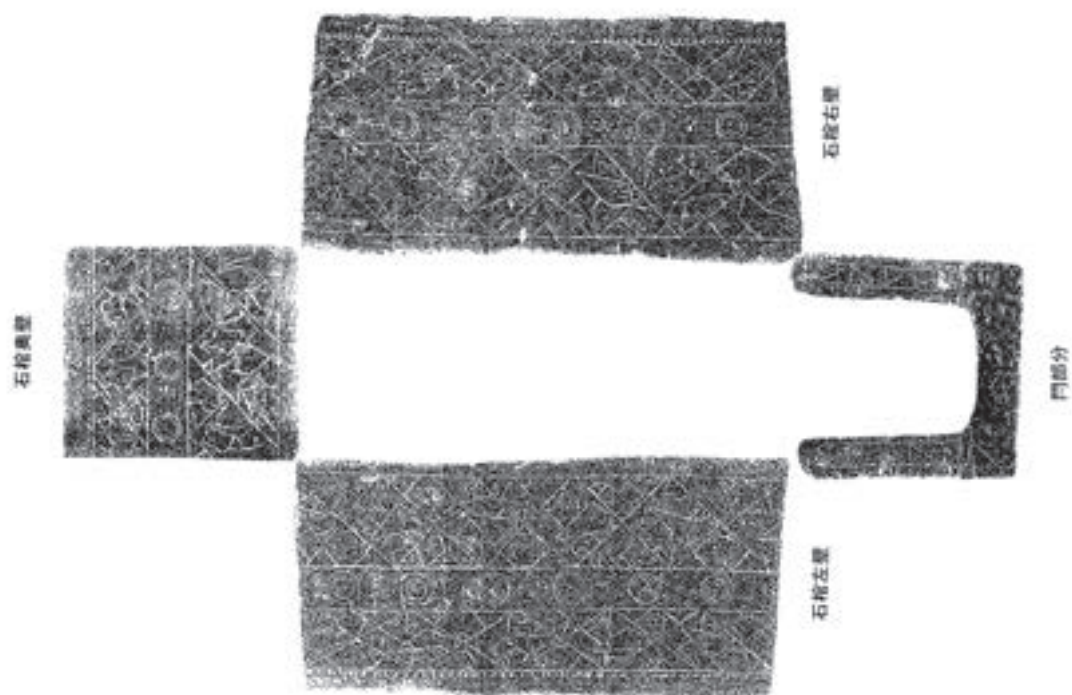


图 218 浦山古墳石棺拓影



図 219 浦山古墳遠景 (昭和 26 年)

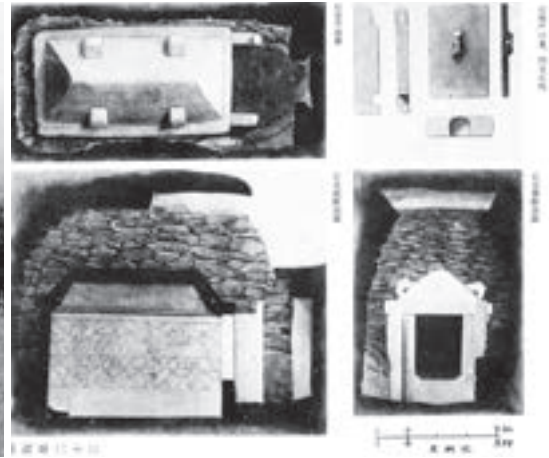


図 220 「石室及石棺」(『京都帝國大學1919』)

と門を持つ。

石棺の内法は底面で長さ約 1.8m、幅約 0.8m、高さ約 1.0m。内部には陰刻文様が施文される。『京都帝国大学文学部 1919』では直弧文の各部を彩色しており「恰も（熊本県）井寺古墳のそれと相似たり」として赤色彩色部分の図が示されているが、『久留米市 1994』では「一面に赤色顔料が塗布され」と、赤色顔料塗布に関しては認識が異なる。文様は奥壁と左右両側壁が三段に区画され、同心円文帯を挟んで上下に直弧文が配される。直弧文の配置には計画性が見られる。前壁内外面と門には鍵手文が線刻される。奥壁に接して、中央を頭形に削り取られた石枕が置かれている。



図 221 保存施設設置前 (昭和 37 年)

顔 料 赤 (『京都帝国大学文学部 1919』)、赤 (色調からベンガラと判断) (「永嶋正春 1999」)

遺 物 副葬品は伝わっていない。「彩色せらるる石枕の存在」の記載がある (「島田寅次郎 1923」)。よく分からないが、勾玉・金環・刀剣・甲冑が出土したと伝えられている (『久留米市史』12 卷)。くびれ部や前方部付近採集土器の報告がある。

年 代 5 世紀後半

調査歴 大正 7、8 年 墳丘測量、石棺実測、線刻文様拓本 (『京都帝國大學 1919』)

整備歴 昭和 37 年度 開口部に保存施設設置

現 況 保存整備工事後、現状保存

図面等 大正 7、8 年 石棺拓本 2 点、年代不詳前方後円墳実測図 (東洋文庫梅原資料)

昭和 7 年 1 月石棺実測図青焼 (九州歴史資料館)

昭和 22 年作成浦山古墳実測図 1/200 トレース図 (東洋文庫梅原資料)

墳丘測量図 (『福岡県高等学校教職員組合 1951』)

昭和 39 年 1 月 5 日付拓影 (古賀寿) (久留米市教育委員会)

平成 15 年 1 月に墳丘空中写真測量図作成 (久留米市教育委員会)

(写真計測) 九州歴史資料館 2024. 1. 11 計測
写真 京都帝國大學文學部考古學研究室
 撮影写真 (『京都帝國大學文學部 1919』)
 昭和 37 年覆屋設置前・建設時 35 mmモノク
 ロ (久留米市教育委員会)
 九州歴史資料館 1977 撮影写真 4×5 カラー
 リバーサル 17 点・カラーネガ 3 点
 九州歴史資料館 4×5 カラーリバーサル「石
 棺外観」1 点・「内面奥壁」5 点
 九州歴史資料館 1977. 11. 10 撮影 35mm カラー
 リバーサル 30 点
 九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル
 「奥壁縦位置」他 10 点
 熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 21 撮影写真 4×
 5 カラーポジ 7 点・モノクロ 6 点
 久留米市撮影 6×7 カラーポジ・デジタル
 九州歴史資料館 2024. 1. 11 デジタル写真データ
 H14 北部九州装飾古墳画像データベース 16
 点 (No. 0227 ~ 0232・0810 ~ 0819)

模写 日下八光 石棺内面 (模写) 1 点 (国
 立歴史民俗博物館)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1 点 (高 133
 ×幅 106)

文献 京都帝國大學文學部 1919『九州に於け
 る装飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研
 究報告第三冊

島田寅次郎 1923「筑後地方に於ける古墳 (上) (廣
 義)」『筑紫史談』第参拾集

福岡縣 1925『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報
 告書』第一輯

福岡縣 1928『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報
 告書』第三輯

福岡県高等学校教職員組合 1951『北九州古文化
 図鑑』第二輯

本村豪章 1993「筑前浦山古墳出土の須恵器」『考
 古論集 潮見浩先生退官記念論文集』

久留米市史編さん委員会 1994『久留米市史』第
 12 卷 資料編 (考古) 久留米市



図 222 石棺外観



図 223 石棺内壁文様拡大



図 224 浦山古墳石室・石棺正射投影画像 (1/100)

33 下馬場（しもばば）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸に位置する。東西に直線上に延びる耳納山地の北麓には地形に沿うように水縄活断層が続いており、切り立った断層崖が形成される。北側にはなだらかな扇状地形が続き、九州最大の平野である筑紫平野に移行する。

本古墳は標高 40m の複合扇状地上位に立地する。東側 1 km には前畑古墳があり、他に現在は消滅している薬師下南・薬師下北古墳がかつてあった。また、付近の群集墳とともに吉木古墳群を形成し、その盟主的存在でもある。

経緯 開口時期は不詳だが、遅くとも大正 6 年までには開口し、その当時の観察所見が「水野真澄 1917」によって詳細に報告されている。報告には前室左壁・右壁の彩色壁画の他、「奥壁の右には三個の同心円あり。此物尤鮮明に見ゆ。其中にある円の色彩を示せば赤を中心核として略同じ幅に樺・青・赤・樺・青と重ねたり。」とあり、当時は図柄が鮮明に見え、赤・青・樺（赤味を帯びた黄色）の三色が視認されていたことが分かる。

『福岡縣 1925』には石室内に装飾のある古墳として幾つかの古墳が挙げられているが、その中の一つに「吉木下馬場古墳」の名がみえる。ここには（附）として大正 13 年に浦山古墳と同時に仮指定が行われたと記される。昭和 19 年に国の史跡に指定された。

国指定時には彩色のある横穴式石室に価値の主眼が置かれたため、墳丘規模や形態については十分な検証を経ないままで保存措置が講じられていた。覆屋設置に伴って事前に羨道部を確認する必要があり、昭和 39 年 3 月に福岡学芸大学久留米分校（現、福岡教育大学）の波多野皖三を調査担当者とする発掘調査が実施された。昭和 40 年 12 月に保護施設設置に伴う工事が行われ、その際には羨道側壁や前室仕切石の存在が確認された。

平成 23・24 年に隣接地にて久留米市教育委員会が確認調査を実施したところ、古墳の周溝が



図 225 下馬場古墳位置図 (1/25,000)

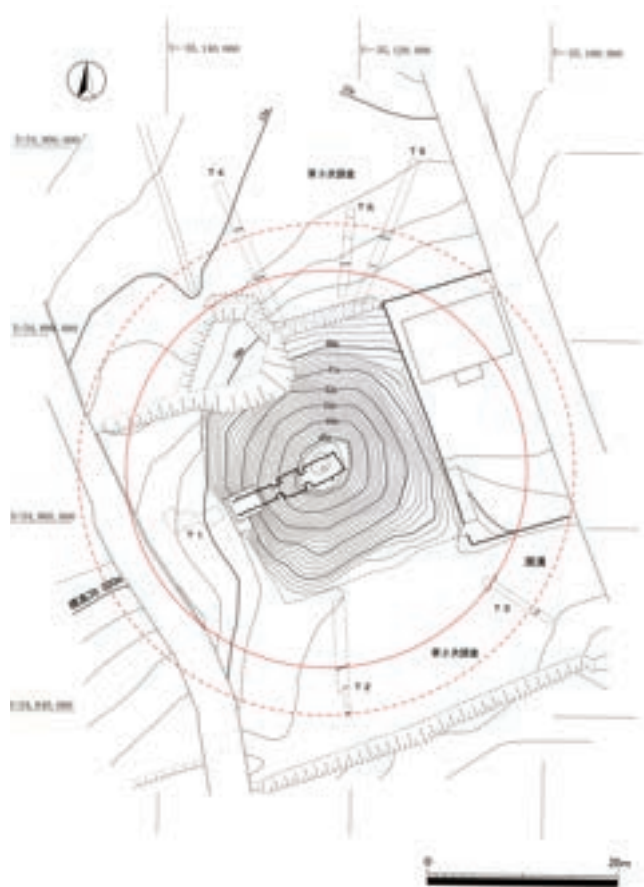


図 226 下馬場古墳墳丘測量図 (1/800)

指定地外に広がることを確認、追加指定により保護が図られた。

名 称 草野町大字吉木字東古墳（「水野真澄 1917」）

吉木古墳（「島田寅次郎 1923」） 吉木下馬場古墳（『福岡縣 1925』）下馬場古墳（指定名称）

所在地 久留米市草野町吉木

指 定 国指定史跡 昭和 19 年 11 月 7 日

追加指定 平成 25 年 3 月 7 日

墳 丘 円墳（直径 42m）墳丘高現状で 5m、二段築成、幅約 5m の周溝を有し周溝を含めた規模は直径 50m。

主体部 横穴式石室（複室・両袖・西南西に開口・耳納山麓産片岩系石材）全長 12.7m、玄室長 4.1m、玄室幅 2.3m、玄室高 2.8m、前室長 3.2m、前室幅 2.3m、前室高 2.1m

装 飾 前室の左右袖石、左右側壁および玄室の奥壁と左右側壁に認められるが、現状では注意深く観察しないと全体の装飾文様を確認することができない。



図 227 石室実測図（「水野真澄 1917」）

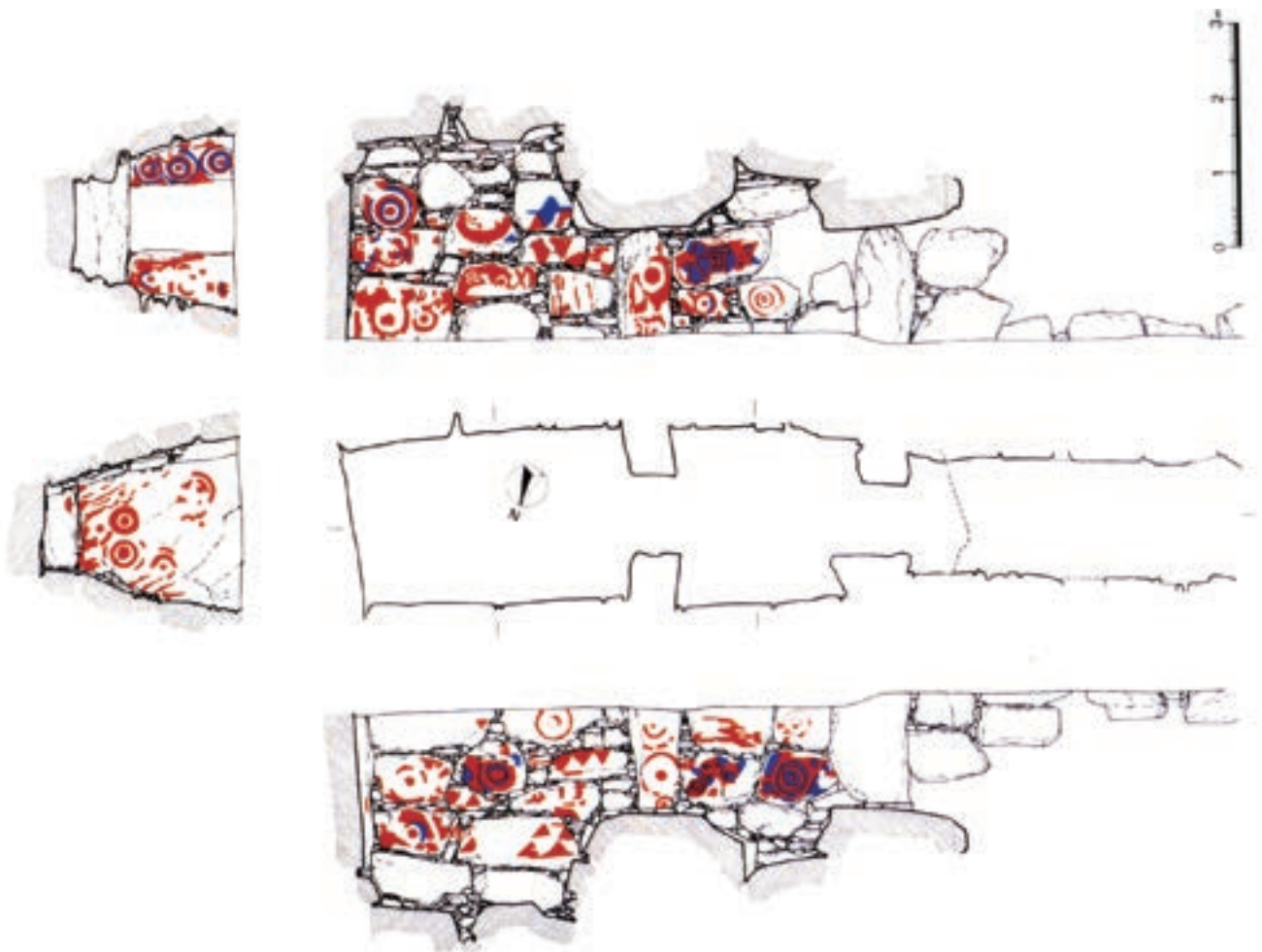


図 228 下馬場古墳石室・装飾実測図（1/100）

彩色には赤（二種類）と青が使用されている。玄室の文様は奥壁に赤の同心円が横に三個直線的に並び、その上下にもそれらしい赤が数個見える。左右両側壁には同心円と三角文が描かれ青色も使用している。右側壁中央部の三段目には船のような形が一つ見える。

前室にも左右両側壁に装飾があり、左側壁には赤・青を交互に配した三重の同心円が描かれ、右側壁には同心円のほかに靱のような四角い文様が見られる。また、玄室の袖石にも左右に同心円、玄室に入る通路面にも左右に同心円が描かれている。

顔 料 赤（「山崎一雄 1951・1974」） 朱・青（『森貞次郎 1972』 2種類）の赤（パイプベンガラ・不純物が入るベンガラ）・青（灰）（「朽津信明 2009」・『久留米市 2014』）

遺 物 石室内からの出土品は伝わっていない。墳裾・周溝から埴輪（久留米市教育委員会）

年 代 6世紀後半

調査歴 大正6年頃 石室内実測（水野真澄）
昭和39年3月 福岡学芸大学久留米分校波多野皖三による発掘調査

昭和40年12月24～26日 鶴久二郎による羨道部発掘調査

平成24年度 第2次調査（久留米市教育委員会 周辺確認調査）

平成25年度 第3次調査（久留米市教育委員会 周辺確認調査）

整備歴 昭和37年（1962） 入口部に扉設置

昭和40年（1965） コンクリート製覆屋設置

現 況 保存整備工事後、現状保存

図面等 「水野真澄 1917」掲載 石室実測図
『朝日新聞社 1967』掲載 水野真澄原図・文様
日下八光補筆図

昭和40年頃 久留米市作成石室内実測図

第2・3次調査時墳丘測量図

（写真計測）基盤研究（A）（1922026）2007.7.18～23計測



図 229 保存施設設置前（昭和40年頃）

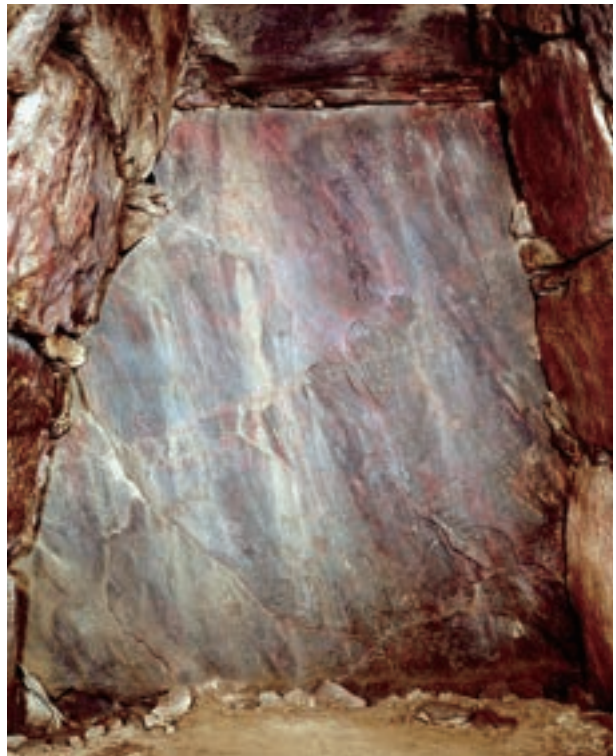


図 230 下馬場古墳奥壁



図 231 装飾文様拡大①

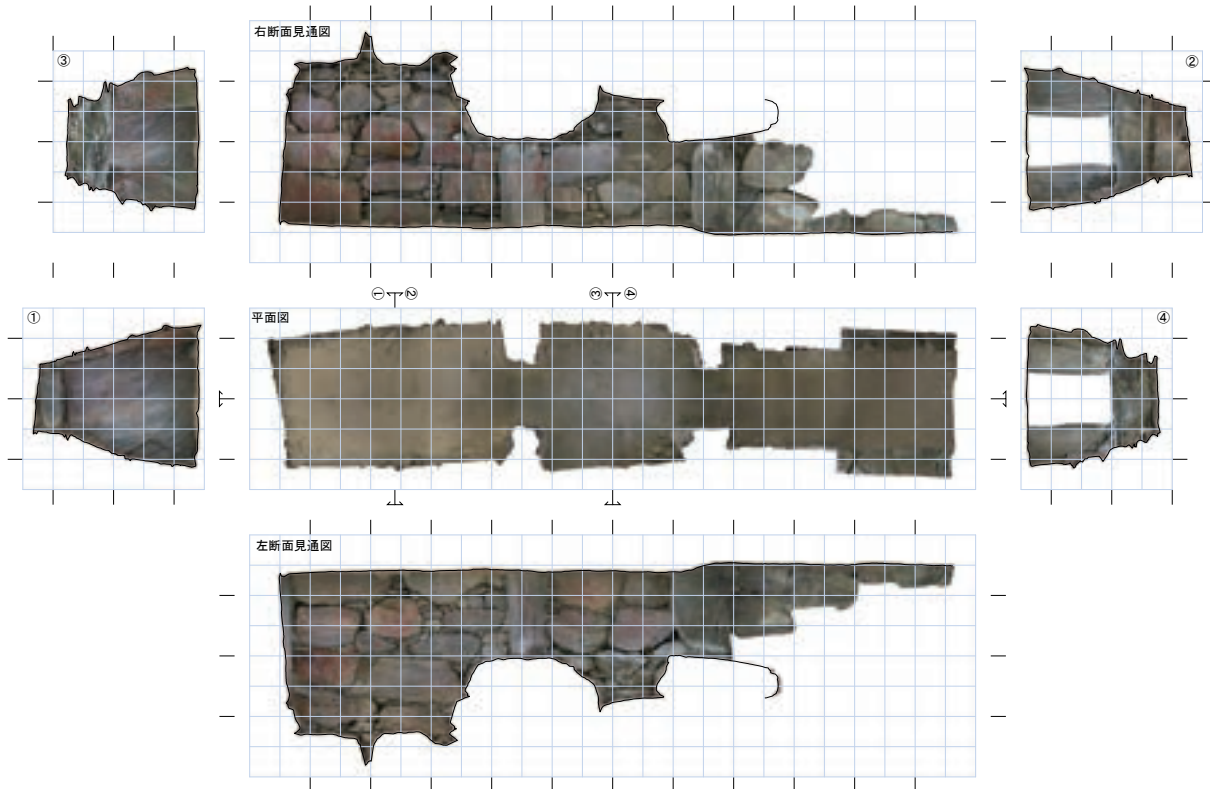


図 232 下馬場古墳石室正射投影画像 (1/120)

写真 久留米市教育委員会に昭和40年保存庫設置以前の35mmモノクロフィルム
九州歴史資料館 1976 撮影 4×5 カラーリバーサル 10点・カラーネガ 2点
九州歴史資料館 1976 撮影 35mm カラーリバーサル 35点
熊本県立装飾古墳館 2001. 5. 22 撮影写真 4×5 カラーリバーサル 15点・モノクロ 6点
久留米市教育委員会第2・3次調査時撮影写真
H14 北部九州装飾古墳画像データベース 25点
(No. 0214 ~ 0222・0789 ~ 0804)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1点 (高109×幅181)

文献 水野真澄 1917「筑前国三井郡草野町大字吉木東古墳」『考古学雑誌』第七卷第五号
島田寅次郎 1923「筑後地方に於ける古墳(上)」『筑紫史談』第参拾集

福岡県 1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

福岡県 1928『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三輯

福岡県高等学校教職員組合 1951『北九州古文化図鑑』第二輯

久留米市史編さん委員会 1981『久留米市史』第1巻 久留米市

久留米市市史編さん委員会 1994『久留米市史』第12巻 資料編(考古) 久留米市

久留米市教育委員会 2014『国指定史跡 下馬場古墳—第2・3次発掘調査報告—』久留米市文

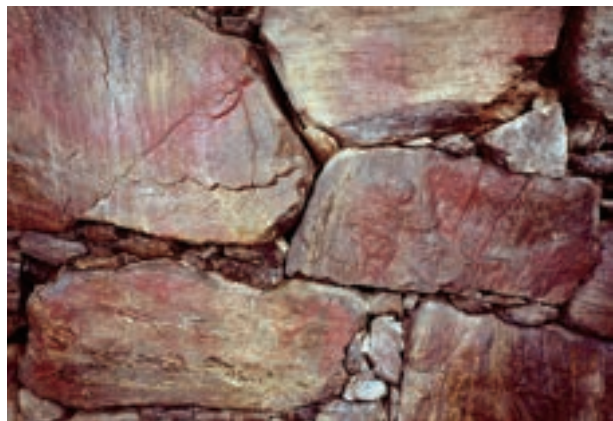


図 233 装飾文様拡大②

化財調査報告書第 349 集

34 前畑（まえはた）古墳

立地 前畑古墳は福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 47m の複合扇状地上位に立地する。西側 1 km には下馬場古墳があり、また近隣にはかつて薬師下北・薬師下南古墳があった。

経緯 開口は古く、『福岡縣 1925』には装飾のある古墳の一つ「草野町前畑」の古墳として掲げられている。『福岡縣 1931』には玉泉大梁により「草野町宮崎邸内装飾古墳」と報告がなされ、石室構造や装飾文様、副葬品などが詳細に記載された。

昭和 38 年に県の史跡に指定された。

名称 草野町所在（第一號）（『福岡縣 1925』）

草野町宮崎邸内装飾古墳（『福岡縣 1931』）

宮崎準一家古墳（『福岡縣 1939』）

夫婦木古墳（『斎藤忠 1952』）

夫婦木 1 号墳（俗称、『久留米市 1994』）

前畑古墳（指定名称）

所在地 久留米市草野町草野

指定 福岡県指定史跡 昭和 38 年 1 月 16 日

墳丘 削平が進む（円墳、径 20m・高 4.5m）

主体部 横穴式石室（複室・両袖・北西に開口・片岩石材使用）全長 8.6m、後室長 3.45m、後室幅 2.15m、後室高 2.4m。

装飾 赤単色で玄室に描画される。

奥壁に同心円文 2 個、右側壁に二重の同心円文と単円文が 3 個ずつ、左側壁に単円文 4 個、玄門袖石の外側にも三重と二重の同心円文、玄門天井石に 3 個の二重同心円文が描かれる。

顔料 赤（「山崎一雄 1974・1987」）

遺物 ほとんどすべてが前室内から出土したらしい。耳環 1 点は玄室から出土。須恵器・装身具・武器・馬具（九州大学総合研究博物館玉泉館旧蔵考古資料）

年代 6 世紀後半～7 世紀初頭

調査歴 昭和 4 年 11 月 23 日 第 1 回調査（玉泉大梁・鏡山猛）、のち数回にわたって調査を実施

整備歴 天井石を土で被覆、墓道に石積み（時期不明）



図 234 前畑古墳位置図（1/25,000）

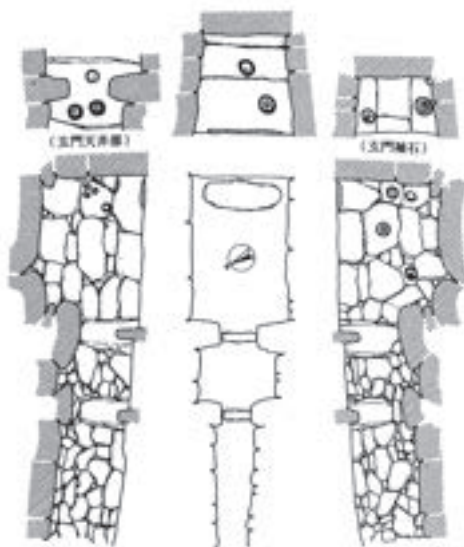


図 235 前畑古墳石室実測図



図 236 前畑古墳石室全景

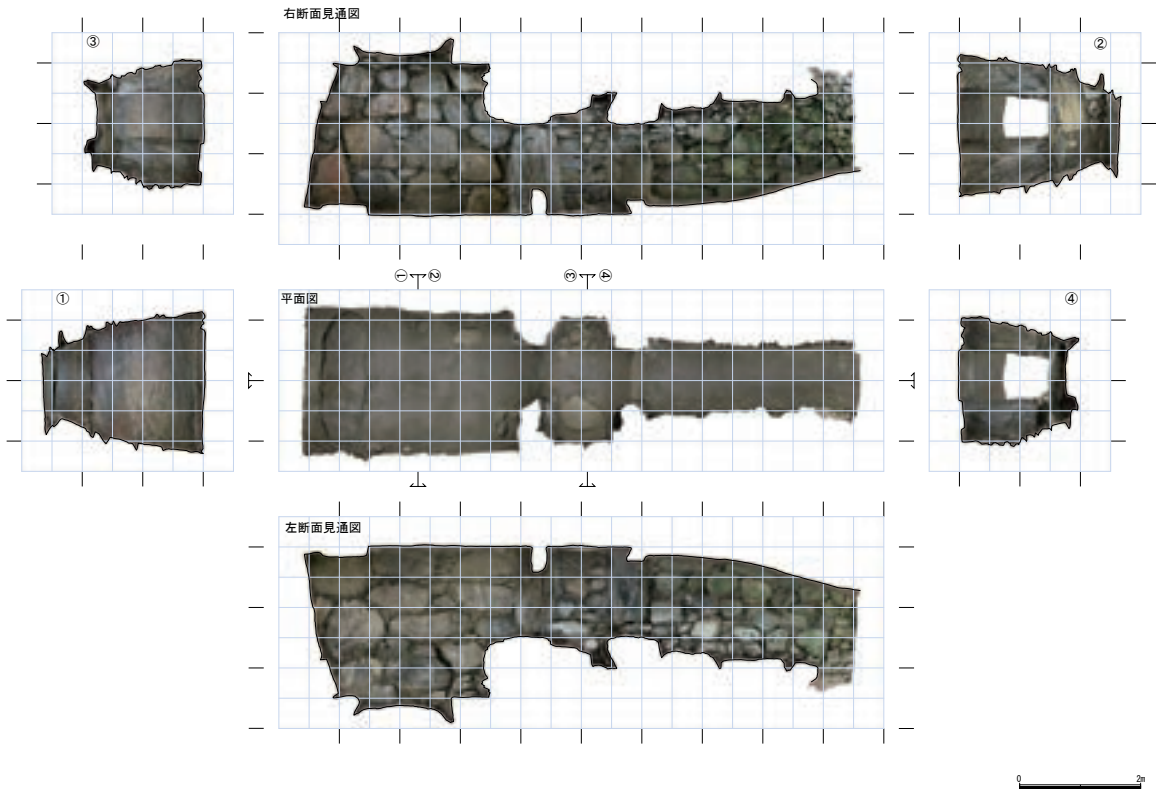


図 237 前畑古墳石室正射投影画像 (1/120)

現況 入口部開口状態で現状保存
図面等 石室実測図 (『福岡縣 1931』)
 墳丘・石室断面図 (『福岡縣 1939』)
 昭和 39 年 8 月 25 日 瀧上米蔵「埋蔵文化財包蔵地調査カード」に石室平面・側面図
 石室実測図 (1994『久留米市史』第 12 卷)
 (写真計測) 基盤研究 (A) (1922026) 2007. 7. 23
 ~ 29 計測

写真 九州歴史資料館 1976 撮影 4×5 カラー
 リバーサル 3 点・カラーネガ 1 点
 九州歴史資料館 1976 撮影 35mm カラーリバーサル
 24 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 7 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 16 点 (No. 0209 ~ 0213・0778 ~ 0788)

パネル 九州歴史資料館パネル 1 点 (高 107×幅 127)

文献 福岡縣 1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

福岡縣 1928『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三輯

福岡縣 1931『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第六輯 (史蹟の部)

福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 (史蹟之部)

久留米市史編さん委員会 1994『久留米市史』第 12 卷 資料編 (考古) 久留米市



図 238 装飾文様拡大

35 薬師下北（やくししもきた）古墳

36 薬師下南（やくししもみなみ）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 50 m の複合扇状地上位に立地した。前畑古墳の南側 60 m に薬師下北古墳があり、さらに薬師下北古墳の南側 20 m には薬師下南古墳があった。

経緯 両古墳とも早くから開口していたらしく、『福岡県 1925』には草野町所在装飾古墳群の第二號・第三號として所在のみ報告されている。『福岡県 1939』には「薬師下古墳第一號第二號」として詳しく取り上げられ、この時はじめて石室実測図の作成等が行われた。報文中には、第二號墳（薬師下南古墳）の騎馬像らしき文様が京都帝国大学の島田貞彦により大正 13 年 1 月に発見され、昭和 4 年 3 月に福岡県によって掲示板（解説版）が立てられ現状保存が望まれていたこと等も記される。

こうした保護対策の甲斐なく、薬師下北古墳は昭和 37 年に果樹園造成のため消滅、昭和 39 年当時は装飾のある石材が数個、現地に残っていた。薬師下南古墳については昭和 30 年代に消滅したらしい。

〈薬師下北古墳〉

名称 草野町所在装飾古墳群第一號（『福岡県 1925』）、薬師下古墳第一號（『福岡県 1939』）
夫婦木第 2 号古墳（俗称、『久留米市史編さん委員会 1994』）

薬師下北古墳（『平凡社 1964』）

所在地 久留米市草野町草野

墳丘 円墳（径 20m、高 4m 『平凡社 1964』）石室西側の封土が削り取られ石室が露出・開口。羨門から出入りするのではなくこの開口部から出入りしていた。北側・東側から見た場合には、円墳としての形状が確認された（『福岡県 1939』）。

主体部 横穴式石室（複室・両袖・西側に開口）全長 8.35m、後室長 3.15m、後室幅 2.3m、後室高 3.05m

装飾 前室の両側壁、後室玄門の内外と天井部、後室各壁と天井の大部分に白土を塗り、その上に赤・青 2 色で円・同心円・三角形・斜線などを描いていた。前室左側壁の腰石に大きな単円、その上部の石に同心円や数個の三角形を描き、その上部から右にかけて赤色を一面に塗っている。右側壁にも数個の単円と同心円がある（『福岡県 1939』）。



図 239 薬師下北・南古墳位置図 (1/25,000)

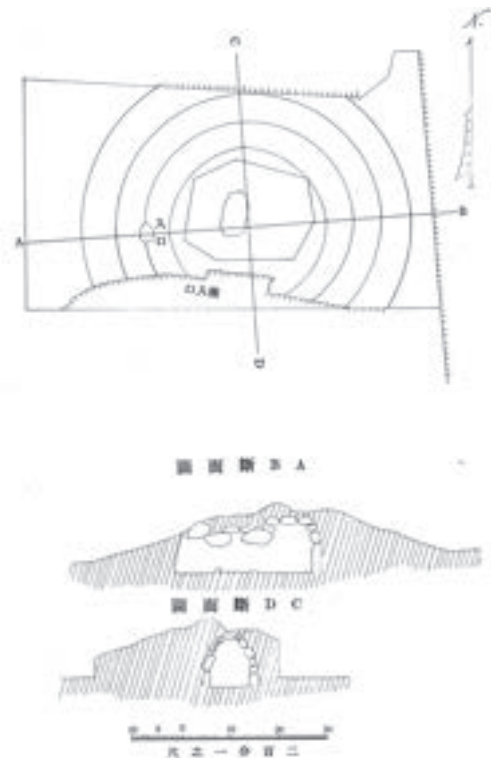


図 240 薬師下北古墳墳丘測量図 (1/300)



図 241 薬師下北古墳（昭和 37 年）

前室奥壁の左右には単円と珠文など、その通路面は赤色を塗布し、その後室側は白土を塗る。後室左壁には石のはしばしに赤が見え、また一部に小同心円 2、3 個、青の珠文、白の動物らしいものの形跡もある。右壁の 2 個の大石には青の平行斜線上に赤の同心円・単円・蕨手文などがあり、別の石に赤い珠文などがある。後壁にも白・赤 2 色で同心円などがあつた。天井にも赤の同心円 5 個と白の同心円らしいものが 3 個あり、もとは三角形らしいものが随所にあつたという（『平凡社 1964』）。

顔 料 赤・青・白（『福岡縣 1939』）赤（「山崎一雄 1951・1974」）

赤・青・白（『平凡社 1964』）

年 代 6 世紀後半

調査歴 昭和 14 年 3 月以前 福岡縣による調査

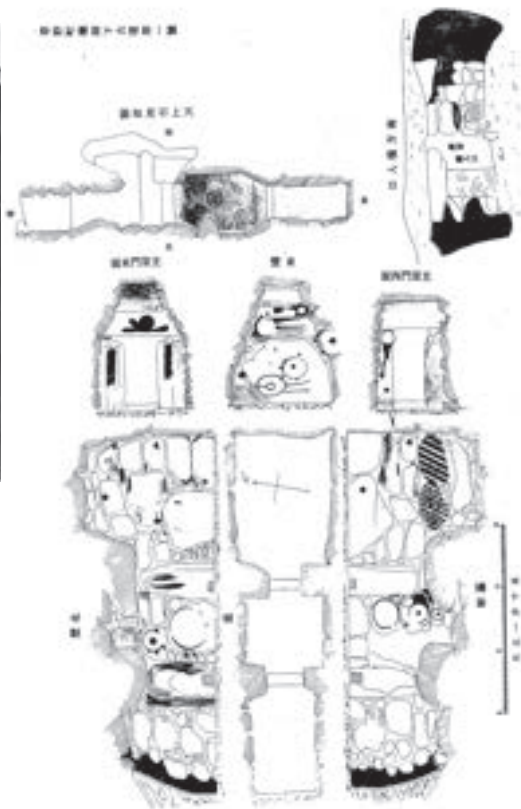


図 242 薬師下北古墳石室実測図（1/100）



図 243 「古墳附近図並ニ内容圖」（大正 13 年 6 月 仮指定のため草野町長宛文書 個人蔵）

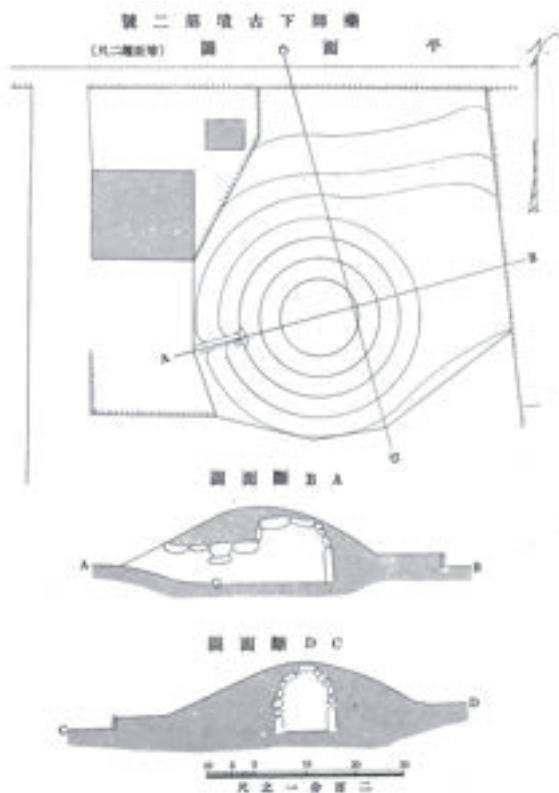


図 244 薬師下南古墳墳丘測量図 (1/300)

現況 昭和 37 年消滅

図面等 昭和 14 年 3 月以前、三叉求積図、墳丘測量図、墳丘断面図、石室・壁画実測図、

写真 石室南西側開口部写真 (『福岡縣 1939』掲載) 破壊前の 1962 年撮影 35mm モノクロ写真 (久留米市教育委員会)

〈薬師下南古墳〉

名称 草野町所在装飾古墳群第二號 (『福岡縣 1925』) 薬師下古墳第二號 (『福岡縣 1939』)

薬師下南古墳 (『平凡社 1964』)

夫婦木第 3 号古墳 (俗称、『久留米市 1994』)

所在地 久留米市草野町草野

墳丘 円墳 (径 17m、高 4m) (『平凡社 1964』) 墳丘は完存していた (『福岡縣 1939』)

主体部 横穴式石室 (複室・西側に開口) 全長 10.45m、後室長 4.1m、後室幅 2.7m、後室高 3.51m

装飾 古拙ではあるが動物 (馬?) に乗れる一人物が、三流の旗を長竿につけて持っているのを描いたものであろう (『島田貞彦 1924』)

不可解な文様が点々と発見される。了解に苦し



図 245 薬師下北古墳石室南側露出部



図 246 薬師下南古墳文様拡大模写

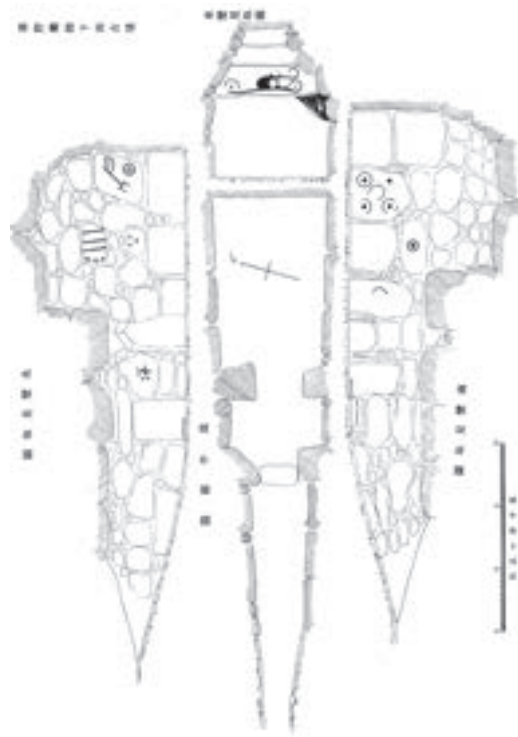


図 247 薬師下南古墳石室実測図 (1/120)



図 248 薬師下南古墳全景

む自由画らしき紋様が認められる。前室北壁には自由画らしきものあり、玄室北壁の巨石には縦に朱線 2、3 条を施し、朱点三個を点描し、他の石にも三個の朱点を認め、東壁の一巨石には旗を掲げた騎馬のような図が見られ、その横には同心円 1 個を描き出している。明瞭な図が消え落ちて不可解化したのであろうか、古墳の壁画であるが故に如何様にも推知される。南壁にも朱の同心円 5、6 個あり、奥壁にも同心円を朱線にて連結したような文様がある（『福岡縣 1939』）。

赤一色の壁画で前室左壁に弧線と珠文を集約したような一つの文様、前室奥壁の右石の通路面に弧線、後室奥壁に赤心のある単円を赤線で連結したようなもの、右壁に 5、6 個の同心円を描く。左壁に縦に赤線 2、3 条と珠文 6 個、同心円 1 個と旗をもった騎馬人物などを描く。また、赤色の三角形が各所に見られた（『平凡社 1964』）。

顔 料 赤（『福岡縣 1939』） 赤（『平凡社 1964』）

年 代 6 世紀後半

調査歴 昭和 14 年 3 月以前 福岡縣による調査

整備歴 昭和 4 年 3 月 福岡縣が解説板設置

現 況 昭和 30 年代に消滅

図面等 昭和 14 年 3 月以前、三叉求積図、墳丘測量図、墳丘断面図、石室・壁画実測図、騎馬像らしき文様拡大模写図

写 真 古墳全景写真（『福岡縣 1939』掲載）

文 献 福岡縣 1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

福岡縣 1928『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三輯

福岡縣 1931『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第六輯（史蹟の部）

福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯（史蹟之部）

久留米市史編さん委員会 1994『久留米市史』第 12 卷 資料編（考古） 久留米市

37 隈（くま）3号墳

立地 隈3号墳は福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高65mの複合扇状地上位に立地する。付近には隈3号墳を含めて後期古墳が5基確認されており、隈古墳群と呼ばれている。東側2.5kmの位置には中原狐塚古墳がある。

経緯 平成9～11年度に田主丸町教育委員会が実施した町内遺跡詳細分布調査の際、装飾が発見された古墳である。

平成12年度に範囲内容確認のための発掘調査が実施され、調査後は露出石材および石室内を保護するために墳丘上をビニールシートで被覆、開口部も密閉するなどの保護措置が講じられ、現在に至る。

名称 隈3号墳（『田主丸町教委2002』）

所在地 久留米市田主丸町中尾



図249 隈3号墳位置図（1/25,000）

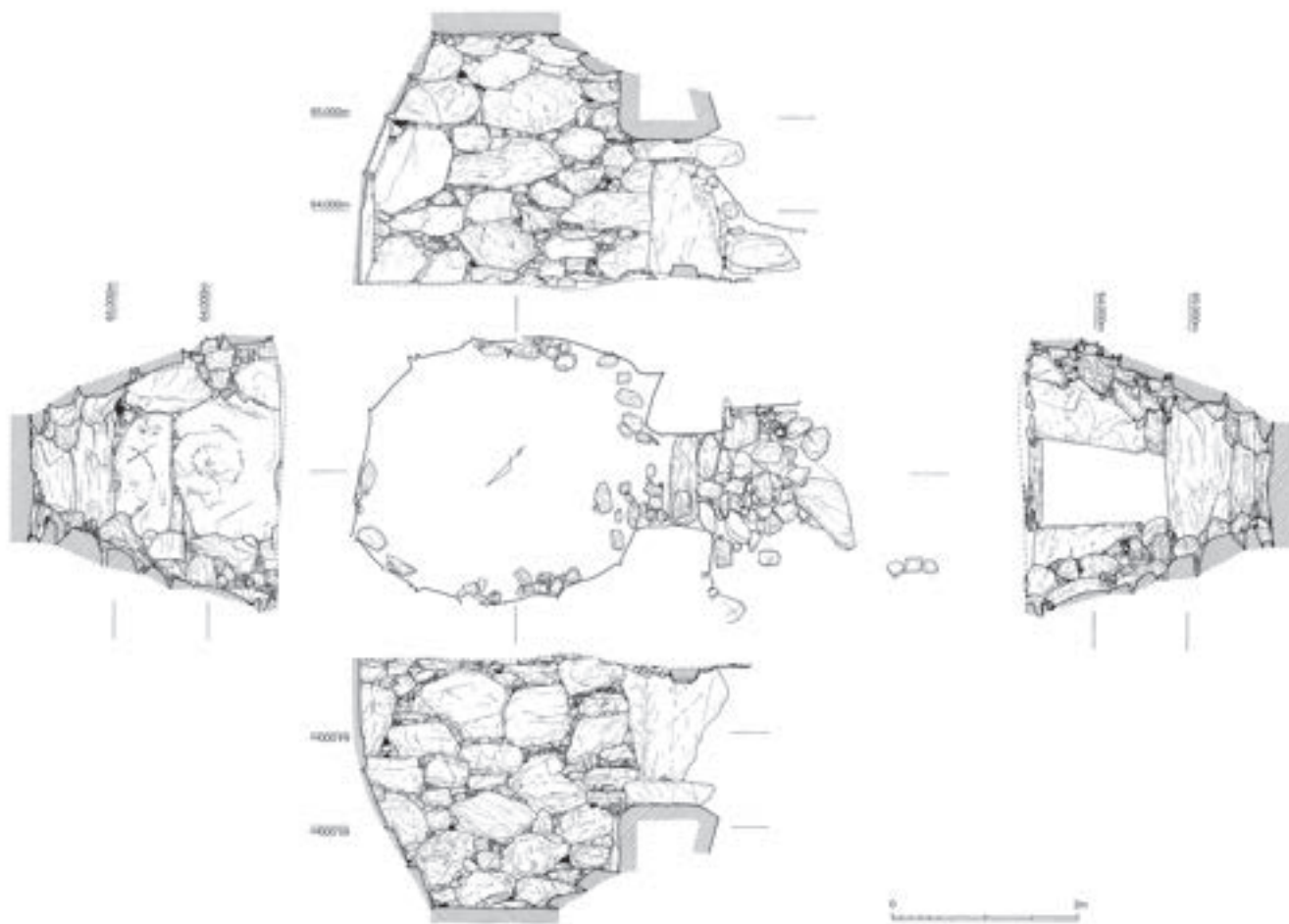


図250 隈3号墳石室実測図（1/80）

墳丘 円墳（径13～16m）

主体部 横穴式石室（単室・南西側に開口・片岩系石材）現存長4.8m、玄室長3.48m、玄室幅2.8m、玄室高2.68m

装飾 奥壁鏡石とその上の石材、および右側壁の奥壁側中段の石材に赤色のみで彩色が行われる。鏡石は中央に同心円文、その下は不明瞭だが同心円の続き、もしくは船の可能性はある。

鏡石上の石材には中央に棹をさす船、その船の上は顔料の剥落が著しく判然としないが人物か何かの紋様がある。船の右側にも顔料の付着が見られ、轆のようにも見えるが明確ではない。

側壁の中断、奥壁鏡石とその上の石材に接する部位の平滑な石材にも顔料が認められたが、図文を理解するまでには至っていない。

顔料 赤（『田主丸町教委2002』）

遺物 平成12年度範囲内容確認調査時に出土。須恵器・土製品（久留米市教育委員会）

年代 6世紀後半

調査歴 平成12年度 範囲内容確認調査（田主丸町教育委員会）

図面等 平成12年度 墳丘測量図・石室・装飾実測図（久留米市教育委員会）

写真 平成12年度撮影6×7カラーリバーサル・モノクロ（久留米市教育委員会）

平成12年度撮影35mmカラーリバーサル・モノクロ（久留米市教育委員会）

文献 田主丸町教育委員会1999『田主丸町遺跡等詳細分布調査報告書』田主丸町文化財調査報告書第12集

田主丸町教育委員会2002『隈3号墳』田主丸町文化財調査報告書第20集

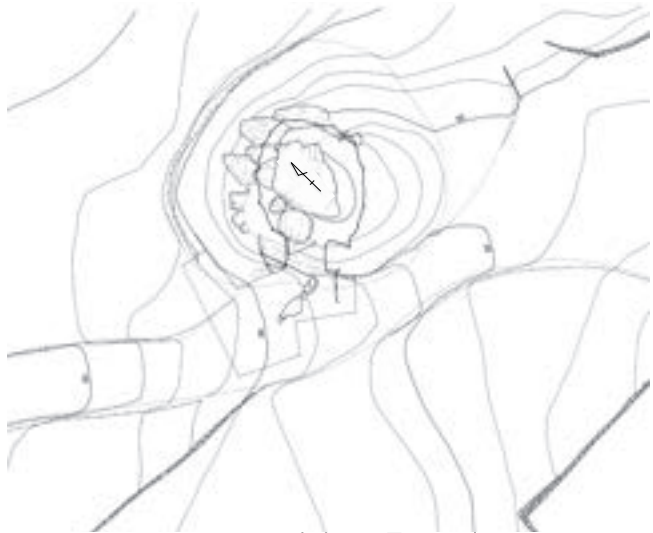


図251 隈3号墳墳丘測量図（1/200）

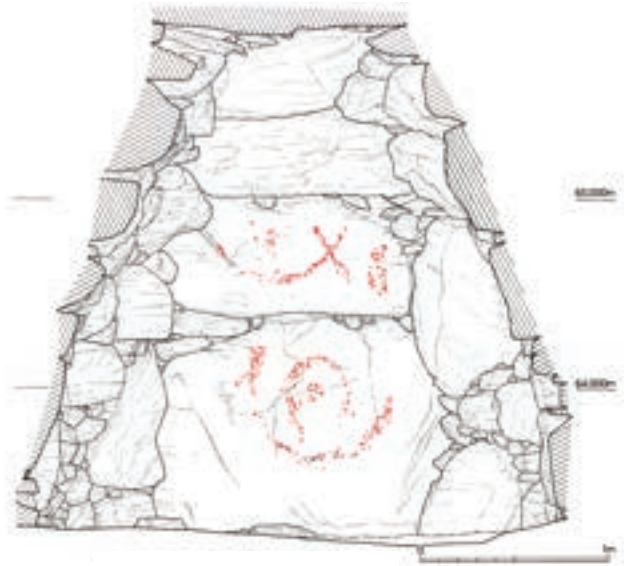


図252 奥壁装飾実測図（1/40）



図253 隈3号墳奥壁

38 中原狐塚（なかばるきつねづか）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 43m の複合扇状地上に立地する。近隣には彩色系装飾古墳の寺徳古墳や西館古墳があり、これらとともに史跡田主丸古墳群を構成する。

経緯 装飾古墳としての発見は古く、「水野真澄 1917」には「知徳古墳」という名称で報告がある。ここには、既に墳丘が失われていることや、彩色文様の具体的内容が石室実測図とともに掲載される。さらに「小松利三郎 1918」では、本古墳から採取された赤色顔料の理化学的分析を行った結果、酸化鉄であることが報告された。『福岡縣 1925』には「竹野村知徳の古墳」として紹介されており、石室天井石が除去されて開口している様子や巨石を用いて羨道部を閉塞している様子がイラストで表現されている。

田主丸町教育委員会では平成 7 年度に本古墳周辺の地形測量を実施、その後、平成 13 年度以降、範囲内容確認のための墳丘周辺トレンチ調査や石室流入土の除去作業を実施、平成 14 年度に石室内の実測作業等を実施した。平成 15 年度には装飾部分の保存調査や露出石材の保護措置を講じ、平成 14 年史跡追加指定・名称変更が行われた。

名称 知徳古墳（「水野真澄 1917」）

竹野村知徳の古墳（『福岡縣 1925』）

中原狐塚古墳（『田主丸町教委 2004』）

所在地 久留米市田主丸町地徳

指定 国指定史跡「田主丸古墳群 中原狐塚古墳」
平成 14 年 3 月 19 日

墳丘 削平が進む トレンチ調査により直径 19m の円墳であることを確認

主体部 横穴式石室（複室・両袖・西側に開口・花崗岩・片岩系石材）全長 11.3m、後室幅 2.75m、後室長 3.35m、後室高 3.5m

装飾 玄室奥壁・左右側壁・玄門部内外面、前室左右側壁・羨門部内外面、羨道左右側壁に彩色が確認され、石室内の全面にわたって描画が行われたようである。剥落等が進んでおり文様が明確ではない部分も多い。顔料は赤 2 色、緑、青（灰）の 4 色が用いられている。



図 254 中原狐塚古墳位置図 (1/25,000)

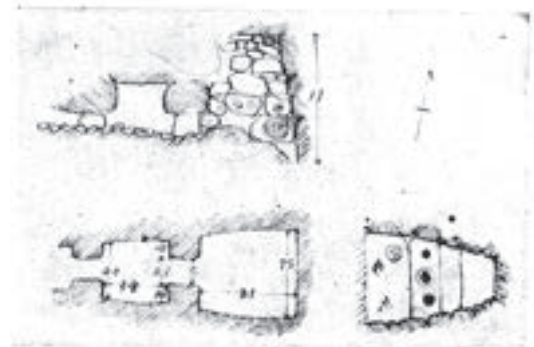


図 255 中原狐塚古墳実測図（「水野真澄 1917」）

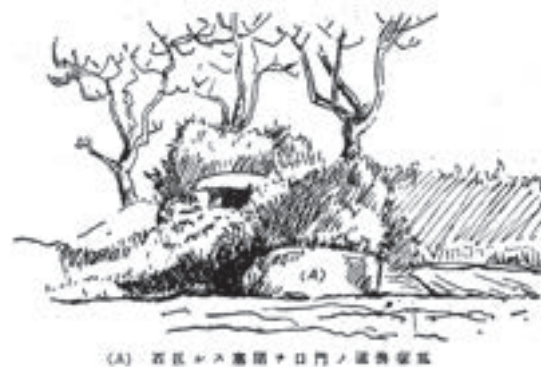


図 256 「狐塚羨道ノ門口ヲ閉塞スル巨石」



图 257 中原狐塚古墳周边測量圖 (1/400)



图 258 奥壁裝飾

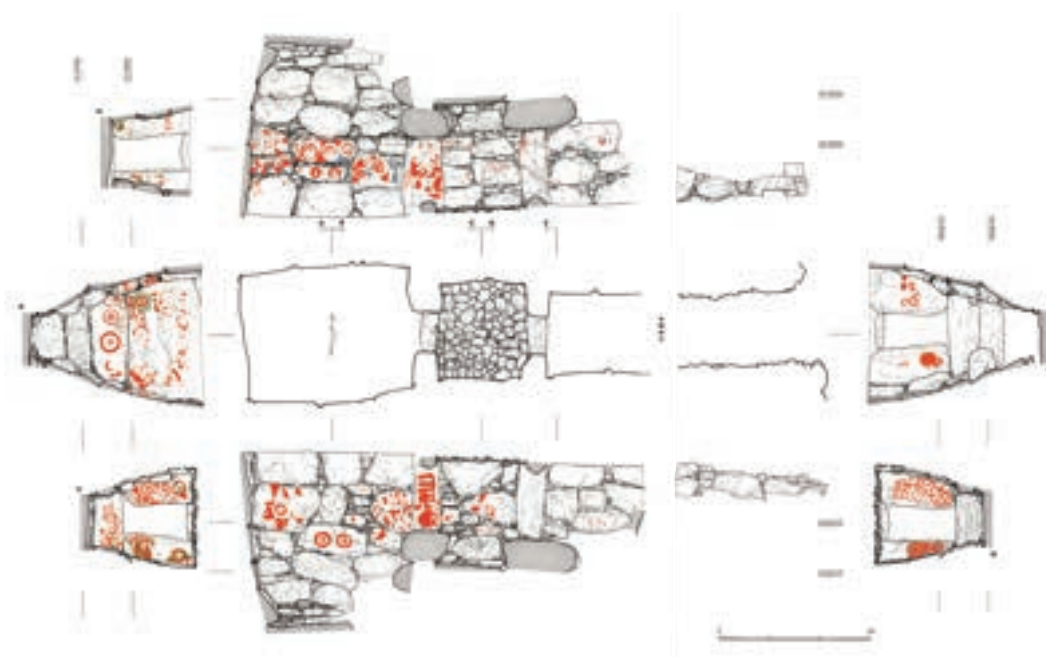


图 259 中原狐塚古墳石室実測圖 (1/150)



図 260 中原狐塚古墳石室正射投影画像 (1/120)



図 261 玄門から奥壁



図 262 玄門前室側右袖石

奥壁には上下三段に並列して同心円文が配され、その空いた空間を埋めるように三角文が配置される。他に人物や靱、鞆も描かれている。玄室右側壁・玄門右袖石には同心円文と三角文、人物、靱、船、玄室左側壁・玄門左袖石にもやはり同心円文・三角文が確認できる。玄門内側には同心円文・三角文・盾、外側には同心円文、三角文・人物・靱・動物が確認できる。前室左右壁にも同心円文・三角文が配置されるが、羨門部内側には同心円文・三角文とともに双脚輪状文が見られるのが特徴的である。羨門部外側には同心円文と人物、羨門部左右側壁には同心円文・人物・動物が確認された。

顔 料 赤・緑（「小松利三郎 1918」）

赤（「山崎一雄 1951・1974」）

赤・青（『講談社 1973』斎藤忠）

赤 2 種類（純粋なベンガラ・不純なベンガラ）、
緑、青（灰色）（『田主丸町教委 2004』）

遺 物 平成 13～15 年度発掘調査時出土。
土師器・須恵器・武器・工具・馬具（久留米市
教育委員会）

年 代 6 世紀後半

調査歴 平成 7 年度 周辺地形測量（田主丸町教育委員会）

平成 13・14 年度 トレンチ調査・石室内流入土除去・石室実測（田主丸町教育委員会）

平成 15 年度 装飾部分補足調査・石室露出部保護・崩落開口部密閉措置

現 況 開口部密閉措置後、現状保存

図面等 石室・装飾実測図（「水野真澄 1917」）

古墳外観スケッチ図（『福岡縣 1925』）

周辺測量図、トレンチ配置図、石室・装飾壁画実測図、正射投影画像（久留米市教育委員会）

写 真 九州歴史資料館 1980 撮影 35 mm カラーリバーサル 18 点

九州歴史資料館 2004 撮影 35 mm カラーリバーサル（遠景・図文拡大、他）7 点

文 献 水野真澄 1917 「筑後国浮羽郡竹野村知徳古墳」『考古学雑誌』第七卷第七号

小松利三郎 1918 「筑後国知徳古墳石槨文様赤色顔料の成分に就て」『考古学雑誌』第九卷第一号

福岡縣 1925 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

福岡縣 1939 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯（史蹟之部）

田主丸町教育委員会 2004 『中原狐塚古墳』田主丸町文化財調査報告書第 26 集



図 263 後室右側壁の連続三角文と舟



図 264 奥壁靱拡大

39 寺徳（じとく）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 34m の複合扇状地上に立地する。近隣には彩色系装飾古墳の中原狐塚古墳や西館古墳があり、これらとともに史跡田主丸古墳群を構成する。

経緯 記録類への初出は『福岡縣 1939』で、ここでは土地三叉求積図や墳丘平面・断面図、石室・装飾実測図が掲載される。石室開口は明治 29 年に遡り、当時発見された副葬品の一部は土地所有者により保管され土器類は羨道入口に再び埋め戻されたが、その後の盗掘により失われてしまったらしい。のちに土地所有者によって開口部が閉鎖され、結果として装飾文様の保護に貢献することとなったようである。

昭和 43 年に国の史跡に指定され、翌年には開口部に鉄扉が設置されたが、この際に羨道部の改変が行われたらしい。昭和 55 年には隣接する県道拡幅工事に伴って墳丘南側の確認調査が行われ、この時の調査で当該箇所には墳丘は残存していないことが確認された。

既存の調査成果では寺徳古墳の石室内の状況把握が十分ではなく、そのため田主丸町教育委員会では宮崎大学の協力を得て平成 9・10 年度に範囲内容確認のための発掘調査を計画、平成 9 年度には墳丘測量と石室内実測、10 年度には墳丘裾部確認のためのトレンチ調査が実施された。

名称 寺徳古墳（『福岡縣 1939』）

所在地 久留米市田主丸町益生田

指定 国指定史跡「寺徳古墳」 昭和 43 年 6 月 11 日

一部解除・追加指定 昭和 61 年 8 月 6 日

追加指定・名称変更「田主丸古墳群 寺徳古墳」 平成 14 年 3 月 19 日

墳丘 円墳（推定墳丘径 18m）葺石

主体部 横穴式石室（複室・両袖・西側に開口・花崗岩、片岩系石材・羨道部削平）石室現存長 10.4m、後室長 3.14m、奥壁幅 2.15m、後室高 3.1m

装飾 玄室奥壁、左右側壁、玄門外側、前室左右側壁、前門左袖内側に赤・緑の二色を使用して彩色壁画が描かれる。

玄室奥壁は中心に上下 2 段、合計で 5 つの同心円文が配される。上位の中心に描かれた大型の



図 265 寺徳古墳位置図 (1/25,000)

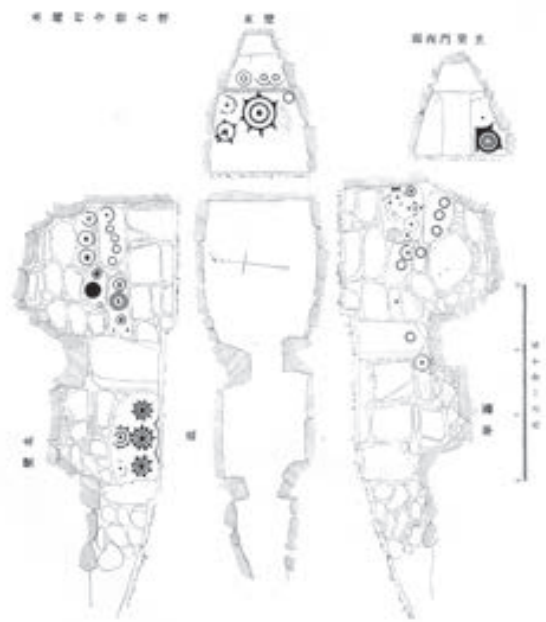


図 266 寺徳古墳石室実測図 (1/100) (『福岡縣 1939』)

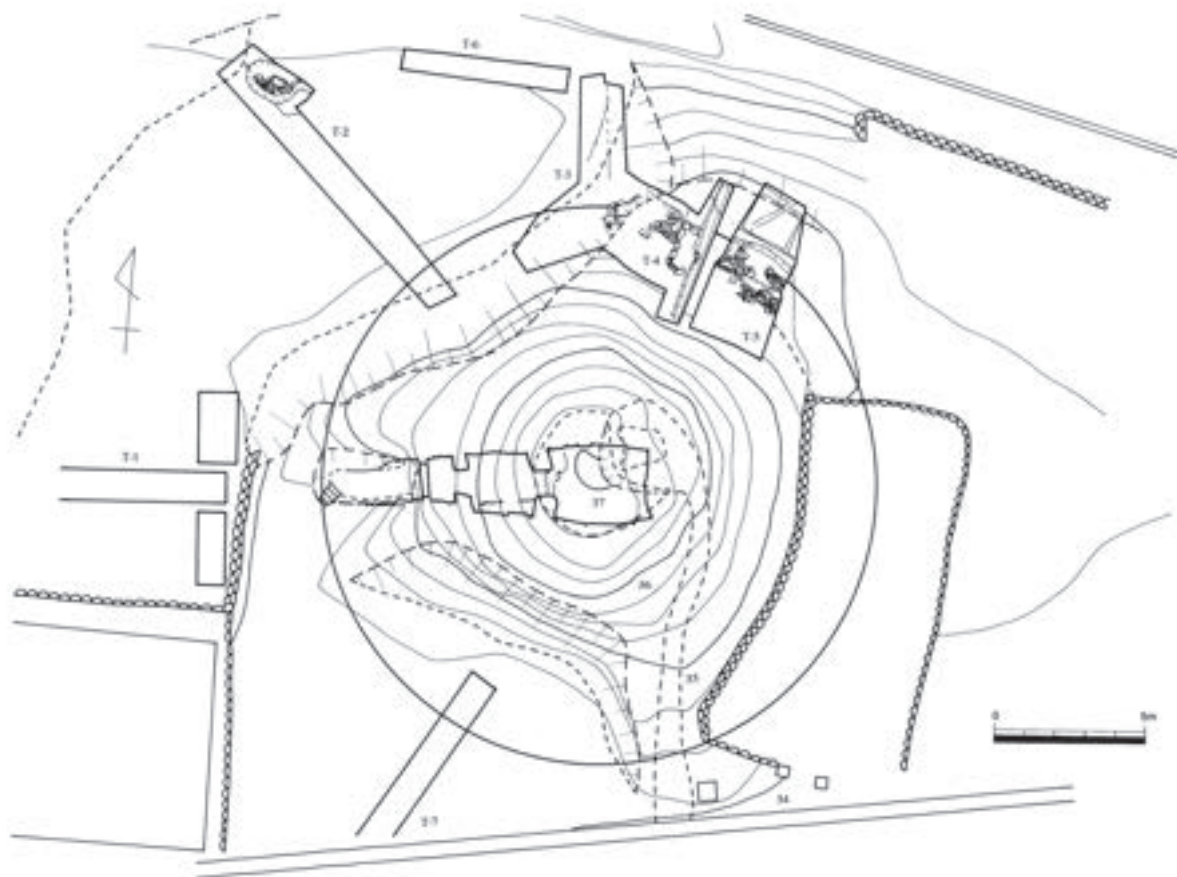


图 267 寺德古墳墳丘測量図 (1/250)

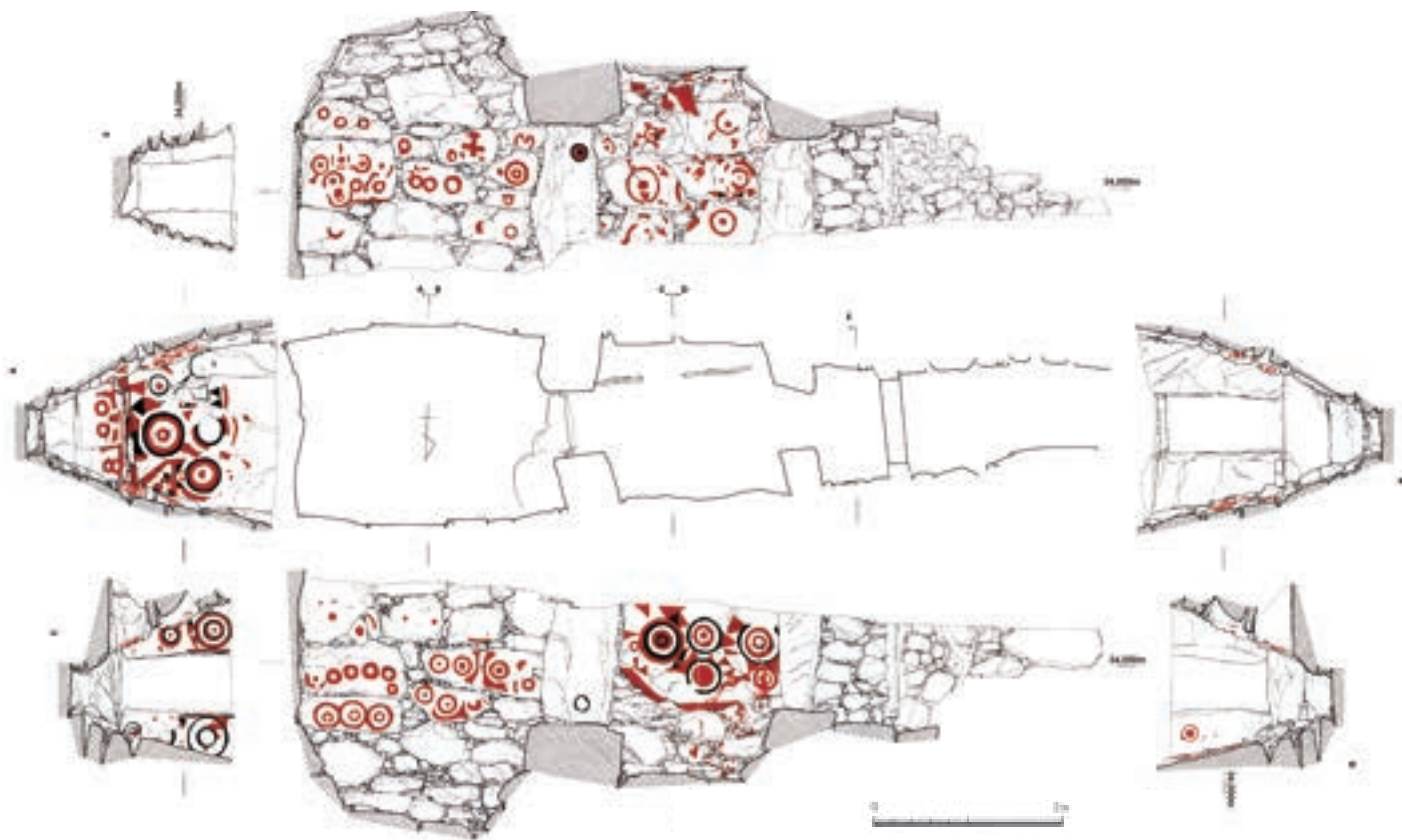


图 268 寺德古墳石室実測図 (1/80)

同心円文は空白の部分を加えると六重の文様構成となる。下半部は剥落・退色が著しく不明瞭。上方には靱とも考えられる「8」の字状の図文や三角形形状の図文、船のように見える文様もある。

玄室左右側壁は花崗岩石材のため図文の判読が困難だが、同心円文・円文を多用する。玄門袖石上部、玄門前室側にも赤2色・緑・空白による多重の同心円が描かれており、三角文も配置される。前室右側壁には同心円文・円文の他、三角文や不明図文がある。図文には歪みが確認されるため、フリーハンドによる描画と推察される。前室左側壁にある、表面を平滑に整えられた大型石材には同心円文5、円文1、三角文20が数えられる。彩色には赤・緑が用いられ、三角文は連続ではなくランダムに配置されるが、同心円はコンパスを使用して正円に描画され、6重や5重に構成されるなど、奥壁と類似して緻密な描画構成が確認される。

顔 料 赤・緑（「山崎一雄 1951・1974」）

赤・青・黄（『平凡社 1964』 渡辺正気）

赤・青・黄（『講談社 1973』 斎藤忠）

赤・青・黄（『講談社 1974』 乙益重隆）

赤・緑（「朽津信明・川野邊渉 2000」）

赤・緑（『田主丸町教委 2001』）

遺 物 明治29年（1896）開口時に金環3、勾玉1、管玉1、小玉、丸玉、杏葉、鉄鏃、土器等が発見されたようである（斎藤忠 1965『古墳壁画』

日本原始美術5 講談社）。出土品の一部については土地所有者が保管していた。平成9年度調査時に田主丸町教育委員会に寄贈された際、寄贈資料と発掘調査出土品とが接合し、間違いなく本古墳出土であることが証明された（久留米市教育委員会）。

平成10年度の発掘調査時、須恵器・馬具・武器出土。その他、範囲内容確認トレンチ内から甕棺墓、小形仿製鏡鋳型出土（久留米市教育委員会）。

年 代 6世紀後半

調査歴 明治29年 石室内より馬具・須恵器・玉類等採取

平成9年度（第1次調査）墳丘・石室実測（田主丸町教育委員会）

平成10年度（第2次調査）墳丘周辺トレンチ調査（田主丸町教育委員会）

整備歴 昭和44年度 鉄扉設置



図 269 寺徳古墳奥壁



図 270 右側壁装飾文様拡大

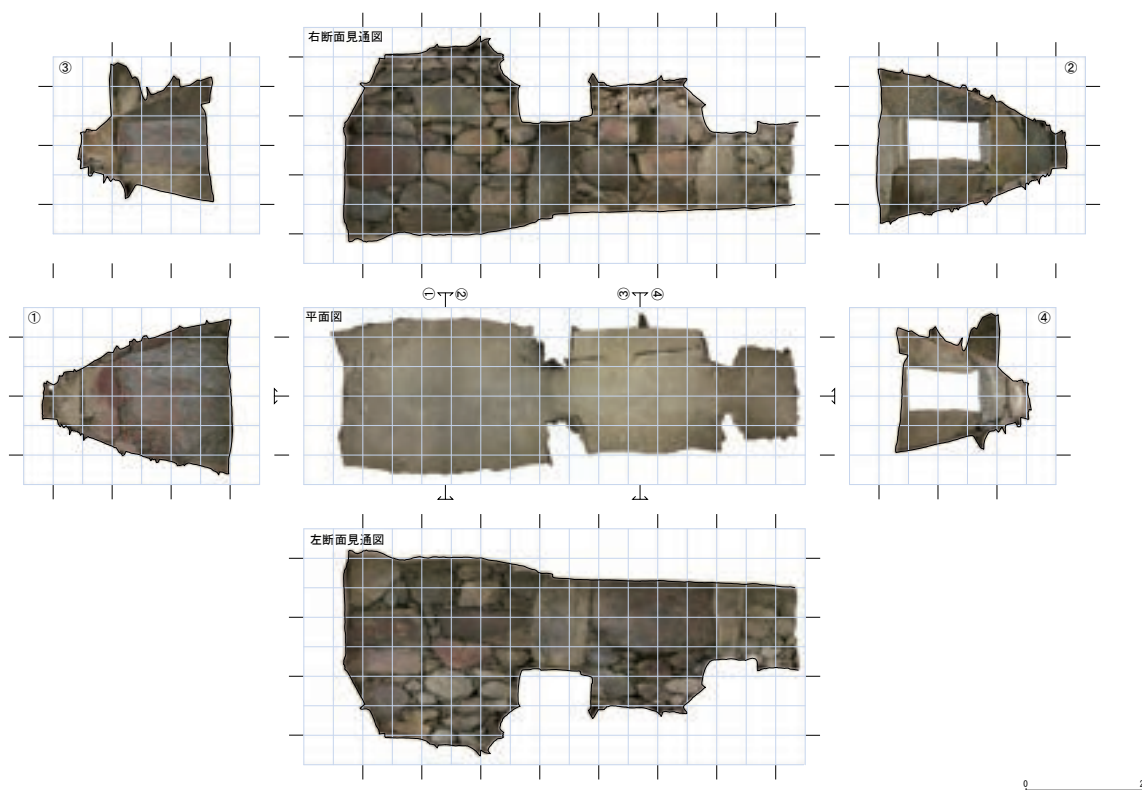


図 271 寺徳古墳石室正射投影画像 (1/120)

平成 9 年度 説明板設置

現況 入口部に鉄扉設置後、現状保存

図面等 昭和 14 年以前 三叉求積図、墳丘平面図・断面図、石室・装飾実測図 (『福岡縣 1939』)

昭和 39 年 石室実測図 (『福岡縣 1939』原図、森修正)

昭和 42 年 石室実測図 (『福岡縣 1939』原図、日下補正)

昭和 59 年当時の古墳周辺地形図 (福岡県文化財保護課指定資料)

平成 9・10 年度 墳丘測量図・石室実測図・壁画実測図 (久留米市教育委員会)

(写真計測) 基盤研究 (A) (1922026) 2007. 7. 31 ~ 8. 6 計測

写真 九州歴史資料館 1976 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 18 点・カラーネガ 1 点

九州歴史資料館 6 × 9 カラーリバーサル (奥壁 1 点、図文拡大 9 点)

九州歴史資料館 1980. 11. 14 撮影 35mm カラーリバーサル 14 点

九州歴史資料館 1984. 6 撮影 35mm カラーリバーサル 35 点

九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル 42 点

熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 17 撮影 4 × 5 カラーポジ 10 点、モノクロ 3 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 58 点 (No. 0197 ~ 0208、No. 0761 ~ 0777、No. 1353 ~ 1362、No. 1410 ~ 1428)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1 点 (177 × 156)

模型 寺徳古墳石室模型 (1/25) 平成 14 年頃、田主丸町教育委員会製作

文献 福岡縣 1939 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 (史蹟之部)

田主丸町教育委員会 2001 『国指定史跡 寺徳古墳』田主丸町文化財調査報告書第 18 集

- 40 益生田（ますおだ）古墳群 益永（ますなが）支群 9 号墳
- 41 益生田古墳群 益永支群 18 号墳
- 42 益生田古墳群 浮羽工業高校考古学同好会調査古墳
- 43 益生田古墳群 A 群 12 号墳

立地 益生田古墳群は福岡県の南部、筑後川中流域左岸にある。耳納山地北麓にある複数の扇状地地形の一つ、益生田地区の扇状地斜面上にある古墳群に対して益生田古墳群という総称が与えられている。この益生田古墳群は、緩傾斜面の標高 70 m 付近から耳納山地中腹の標高 200 m 付近にまで広がっており、益生田 A～D 群および益永支群によって構成される。消滅した古墳も含めると現在までに 150 基弱の古墳が確認されている。西側 400 m には、群中に彩色系装飾古墳の西館古墳を含む、麦生古墳群がある。



図 272 益生田古墳群位置図 (1/25,000)

経緯 田主丸町内に多数の古墳が存在することは以前からよく知られており、寛延 2 年 (1749) 『寛延記—久留米藩庄屋書上—』では江戸時代中期に 1,053 基の塚穴 (古墳) があつたとされる。その後、古墳群所在地は果樹や園芸作物栽培の場所として開墾され、昭和 28 年の西日本水害時には防水施設に使用するために古墳が破壊され石材が搬出された、等の経緯がある。

益生田古墳群の発掘調査は、昭和 43 年に浮羽工業高校考古学同好会による調査が最も早い段階のものである。報告事項の中に「白い同心円文」に関する記述があり、久留米市教育委員会では敲打技法による同心円施文の可能性を推測している。なお、ガリ版刷りで印刷された同報文中には、古墳の所在地を「田主丸町益生田字益永 (五万分の一「久留米」の東端より 10.8 cm、北端より 3 センチ)」と表現しており、この記述に従えば益生田 A 群の南側約 50 m 付近に所在したことになるが、現在この付近に古墳は確認されていない。

昭和 40 年代に福岡県教育委員会が実施した田主丸町 (現、久留米市) 内所在古墳の悉皆調査では、益生田古墳群・益永古墳群が「益永古墳群」と総称され、194 基の記載がある。調査カードに記載された「益生田古墳」名の古墳には彩色系装飾古墳に関する記述があり、調査を担当した金子文夫による石室略測図も残る。

昭和 55 年、古墳群の一部を造成して畑地にする計画があり益永支群中の 1 基が未調査のまま破壊される出来事が発生、そのことがマスコミにも報道されたこともあって文化財に対する地域住民の注意が喚起される契機となった。その後、益永古墳群第 1 号墳 (現、益永支群第 3 号墳) と益生田古墳群 A 群 13 基の発掘調査が実施され、益生田古墳群 A 群の 13 基については現状のまま保存されることとなった。現時点で、益生田古墳群では計 5 次、益永支群では計 3 次に亘る発掘調査が実施されている。

令和 2 年、益生田古墳群 A 群付近で発生した開発事業に先立ち久留米市教育委員会が当該地域

の試掘確認調査を実施したところ、益生田古墳群A群12号墳奥壁で敲打による装飾の可能性のある施文を確認し、調整の結果、本古墳を含む付近一帯の古墳群24基を「田主丸古墳群 益生田古墳群」として国の史跡に追加指定し、現状保存することとなった。なお、この時の調査報告時に益永古墳群は益永支群として、益生田古墳群A～D群と共に益生田古墳群中に含まれることとなった。また、既に消滅した古墳も含めて個々の古墳番号の整理が行われた。



図 273 益永支群9号墳文様拡大(昭和44年)

所在地 久留米市田主丸町益生田

指 定 国指定史跡「田主丸古墳群 益生田古墳群」 令和6年10月11日

〈益生田古墳群 益永支群9号墳〉

名 称 益生田古墳群 益永支群9号墳(『久留米市教委2024』)

主体部 横穴式石室

装 飾 敲打による施文(昭和41年11月23日「埋蔵文化財包蔵地調査カード」に「装飾あり」と記載がある。

現 況 消滅

写 真 昭和41年11月23日「埋蔵文化財包蔵地調査カード」裏面に石室開口部モノクロ紙焼き写真が貼付される。

文 献 「昭和41年度埋蔵文化財調査カード」

〈益生田古墳群 益永支群18号墳〉

名 称 益生田古墳(金子文夫昭和29・37「埋蔵文化財包蔵地調査カード」)

益生田古墳(『田主丸町教委2002』)

益生田古墳(『埋蔵文化財研究集会2002』)

益生田古墳群 益永支群18号墳(『久留米市教委2024』)

主体部 横穴式石室(石棚、全長4.7m、玄室長3.2m、玄室幅2.1m)

装 飾 赤・青の顔料を用いて玄室奥壁・左右側壁に施文を行う。

奥壁鏡石には中央の上下に二つの大きな同心円文が描かれる。上下とも赤色顔料で三重に描かれており、部分的に青色による着色もある。鏡石の右側

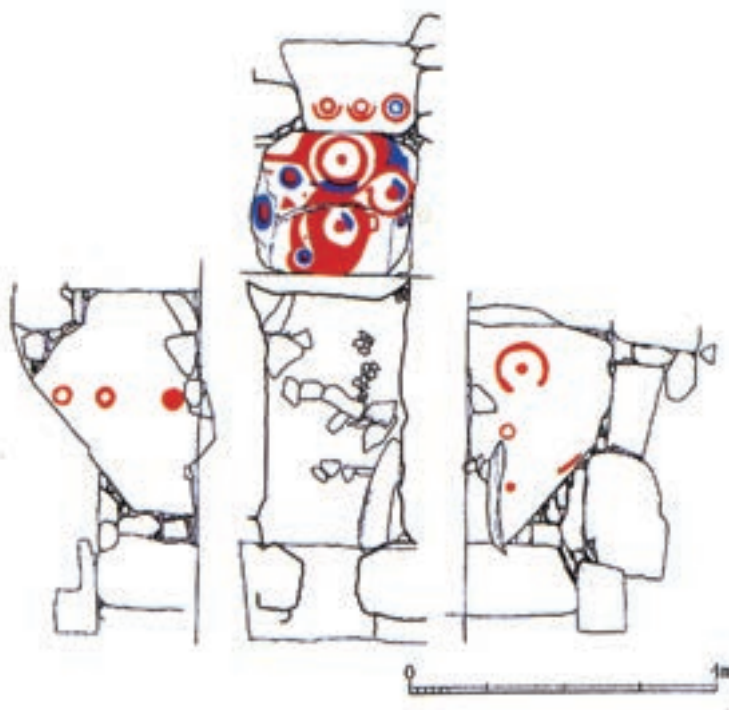


図 274 益永支群18号墳石室実測図

には赤色で二重の同心円文が1点、左側には青色で単円文が3点描かれる。左側の3点の単円文は中央を赤色で塗りつぶしている。

奥壁鏡石上部の石材には横並びで3点の二重同心円文が描かれる。剥落によるものか、一部で描画が途切れている。右側の同心円文は内側の円文を青色で、外側の円文を赤色で描く。

左側壁の中央付近には、縦方向に並んだ円文を描く。上位の2点は単円文で、下部の1点は中心を塗りつぶして描かれる。右側壁は奥壁に近い位置に二重の同心円文を赤色で、それ以外の場所にもやはり赤色で小さな単円文や塗りつぶした円文を描く。

年代 6世紀末～7世紀初頭

現況 昭和20年頃、石材採取のため損壊を受け天井石が失われたようである。昭和29・37年埋蔵文化財包蔵地調査カード作成時には現存していたが、その後消滅。

図面等 昭和29年9月20日、昭和37年1月11日「埋蔵文化財包蔵地調査カード」に挿図あり

文献 久留米市教育委員会2024『田主丸古墳群Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第449集

〈浮羽工業高校考古学同好会調査古墳〉

名称 浮羽工業高校考古学同好会調査古墳（「浮羽工業高校考古学同好会1968」）

主体部 横穴式石室（複室・西向きに開口）全長7.0m、後室長3.3m、後室幅3.2m、高3.6m。

装飾 「浮羽工業高校考古学同好会1968」の記述によれば、「後室、南東部約1.7mのところにある白い同心円」という記述があり、実測図にも同心円らしき表現がある。「同心円は一個だけでなく、もっと多くありそうだがはっきりしているのは一個だけで、あとはぼけたようになってはっきりしない」と記されており、同心円文が複数存在した可能性についても言及がある。

これらの記述内容から『久留米市教育委員会2024』では、本古墳について、白色との表現から敲打技法により施文されたものではないかと推測している。

年代 6世紀後半

調査歴 昭和43年5月8日～8月28日 浮羽工業高校考古学同好会による調査

現況 消滅

文献 「浮羽工業高校考古学同好会1968」ガリ版刷り冊子

久留米市教育委員会2024『田主丸古墳群Ⅲ』

久留米市文化財調査報告書第449集

〈益生田古墳群 A群12号墳〉

名称 益生田古墳群 A群12号墳（指定名称）

指定 国指定史跡 令和6年10月11日

墳丘 円墳（径14m）

主体部 横穴式石室（複室構造・南西方向に開口・花崗岩・片岩石材使用）全長7.3m、後室長3.4m、後室幅2.3m、後室高2.8m

装飾 玄室鏡石の上石に敲打による装飾が確認された。他の箇所には確認されていない。

文様は、格子状の文様と円文、同心円文、人



図275 浮羽工業高校考古学同好会調査古墳石室実測図（1/120）

物像3体である。向かって左側に円文を2つ、右側に人物像3体を施文する。ざらついた岩肌の花崗岩表面に敲打によって刻まれており、僅かに窪んで見える。鑿のような工具で敲いたような円状の小さな窪みが観察できる箇所もある。窪みは径2cm程の大きさに、工具をずらしながら連続して敲いている。

左端の円文は中央に敲打の痕跡があり、同心円文と理解される。左から二つ目の円文は円弧ではなく直線を組み合わせることで円を表現しており、歪な形状である。格子状の文様は人物像と



図 276 A 群 12 号墳奥壁

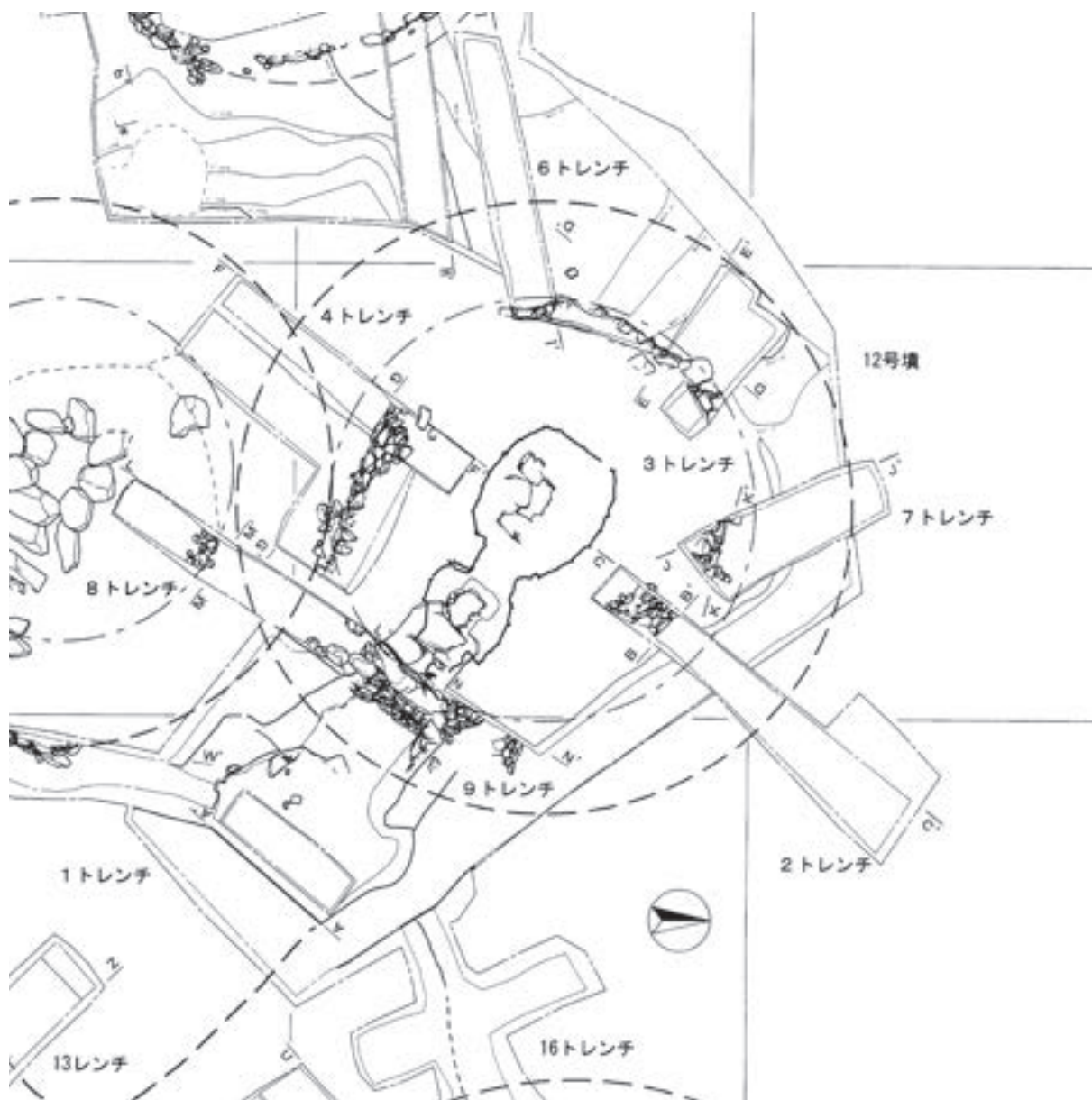


図 277 益生田 A 群 12 号墳平面図 (1/150)

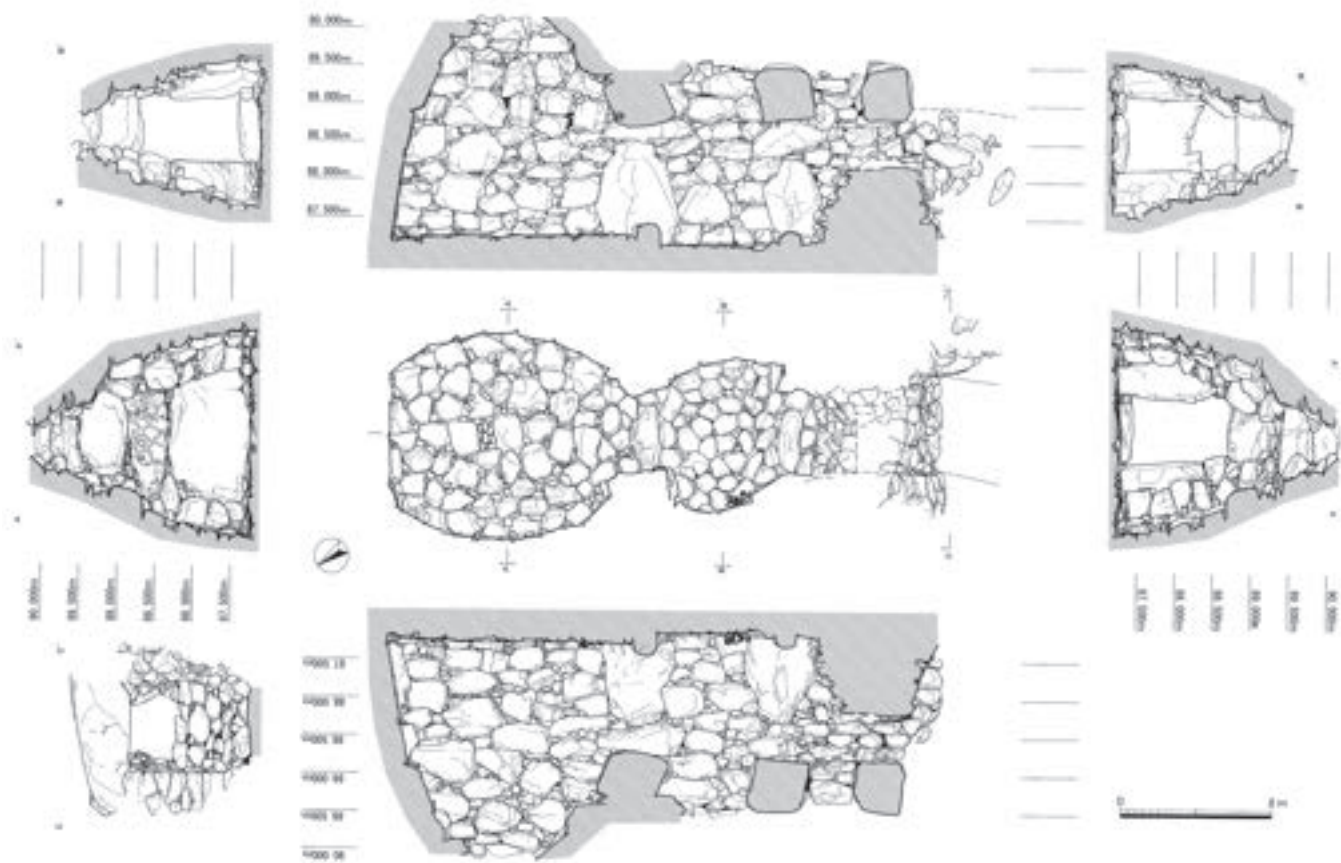


图 278 益生田 A 群 12 号墳石室実測図 (1/100)

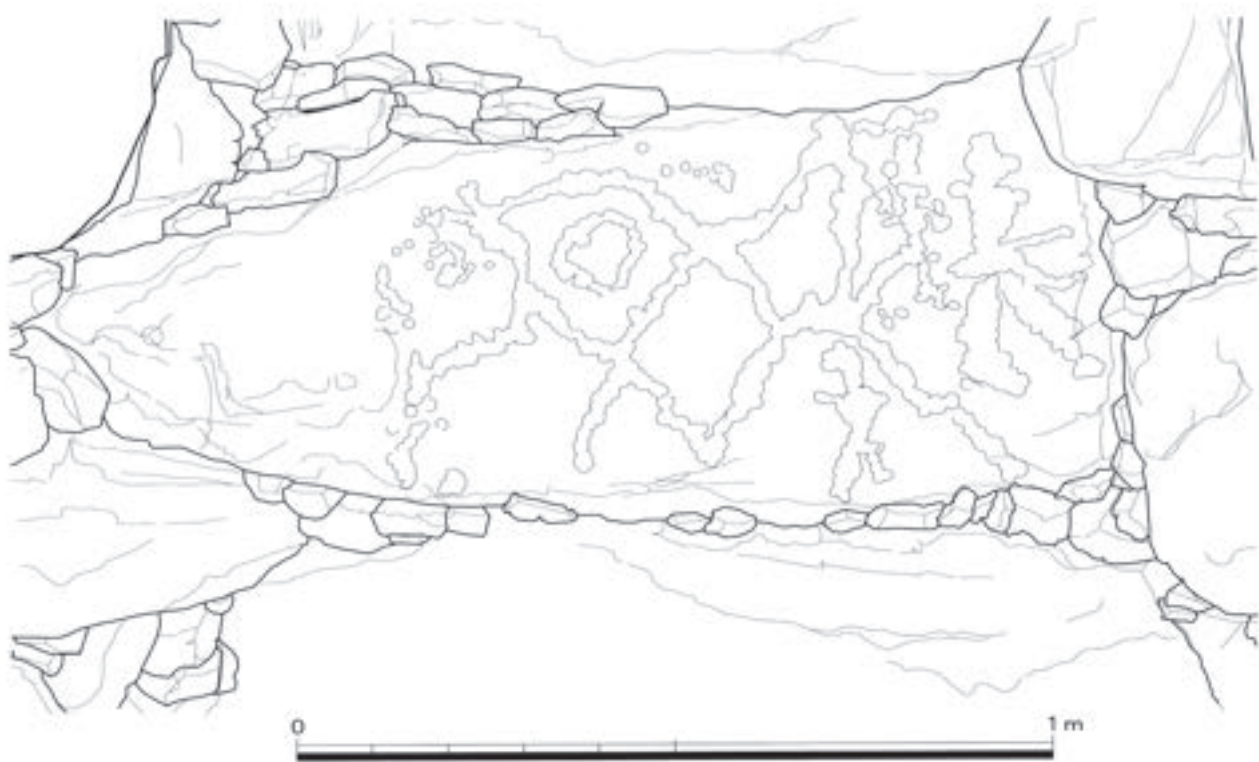


图 279 益生田 A 群 12 号墳裝飾詳細実測図 (1/10)



図 280 益生田 A 群 12 号墳石室正射投影画像 (1/120)

円文を避けて配置されており、ほぼ全面を埋めるように施文される。

人物像 3 体はともに右を向き、足をやや開いた状態で描写される。左下の人物像の頭部表現は縦長で、何かを被っているようにも見える。中央の人物像も両手足を広げ、頭部が縦長で何かを被る表現を行っている。右足にあたる部分が直線的に描かれており、足を開いて中腰になっているようにも見える。右端の大きな人物像は、右足の脛と思われる部分が太く表現されている。足の上、人物像で言えば腰の付近に横方向の線が重複して描かれる。



図 281 装飾拡大

遺物 玄室から装身具、武器、羨道部・墓道から須恵器・土師器

年代 7 世紀初頭

調査歴 令和 2～5 年度 開発に先立つ試掘確認調査（久留米市教育委員会）

図面等 周辺地形図・墳丘測量図・石室実測図・壁画実測図・壁画光拓本
（写真計測）九州歴史資料館 2023. 5. 11 計測

写真 久留米市教育委員会令和 2～5 年度調査時撮影デジタル写真データ

文献 寛延二年（1749）『寛延記－久留米藩庄屋書上－』久留米郷土研究会 1976『久留米史料叢書〔三〕』所収

久留米市教育委員会 2024『田主丸古墳群Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第 449 集

44 西館（にしのだて）古墳

立地 西館古墳は福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高84mの複合扇状地上位に立地する。近隣には麦生古墳群や益生田古墳群、益永古墳群など後期の群集墳が集中しており、本古墳は17基の古墳からなる麦生古墳群を構成する一つである。北側の扇状地中位には寺徳古墳や中原狐塚古墳といった著名な装飾古墳が分布しており、この一帯は装飾古墳が色濃く分布する地域として知られている。

経緯 装飾発見の経緯は比較的新しく、昭和63年（1988）地域の郷土史会員が既に開口していた羨道部から進入、装飾を確認した。その後、田主丸町教育委員会が平成6年に範囲内容確認調査を実施した。

調査後、平成14年には他の装飾古墳等とともに「田主丸古墳群」として国の史跡に指定され、保存活用が図られることとなった。

名称 城内（しろのうち）古墳（「田主丸町文化財専門委員会1989資料」）
西館古墳（『田主丸町教委1996』） 麦生5号墳（西館古墳）（『田主丸町教委1999』）

所在地 久留米市田主丸町益生田

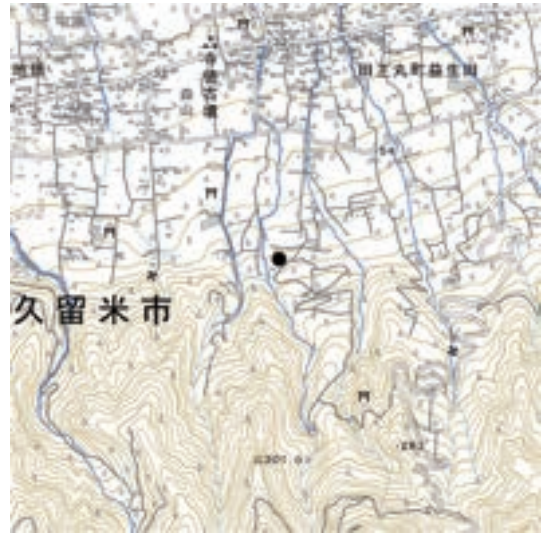


図 282 西館古墳位置図 (1/25,000)

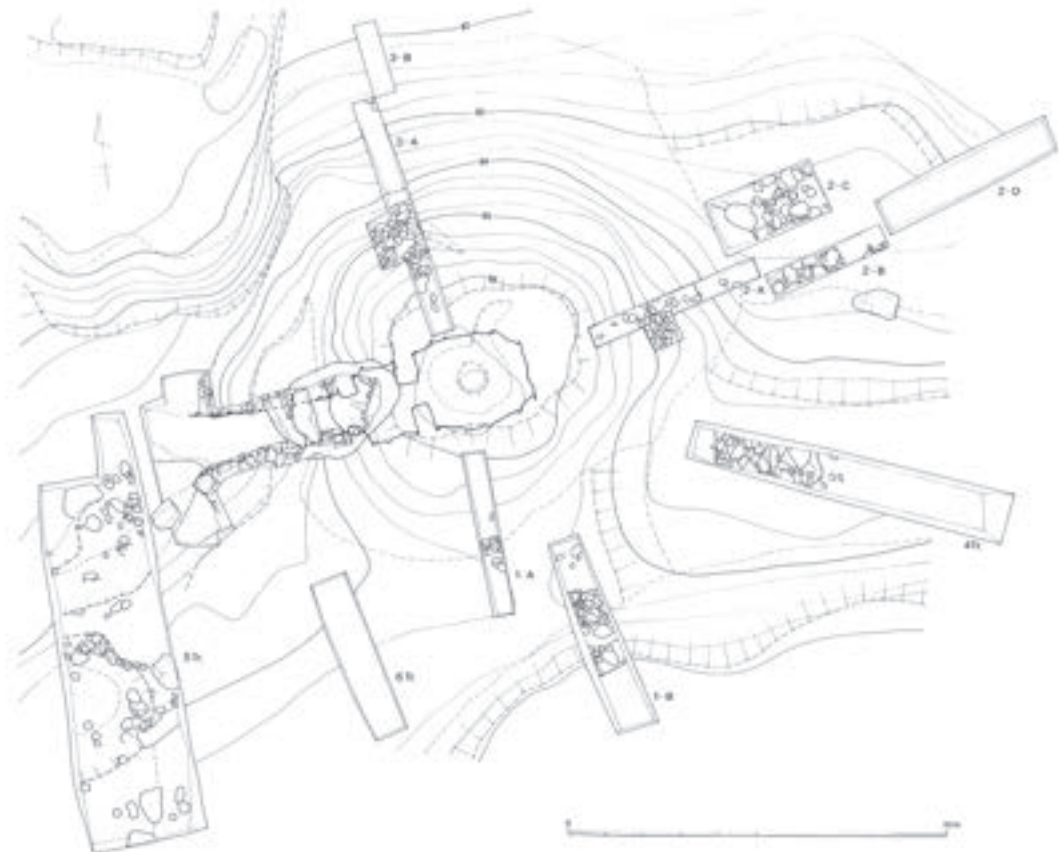


図 283 西館古墳墳丘測量図 (1/200)

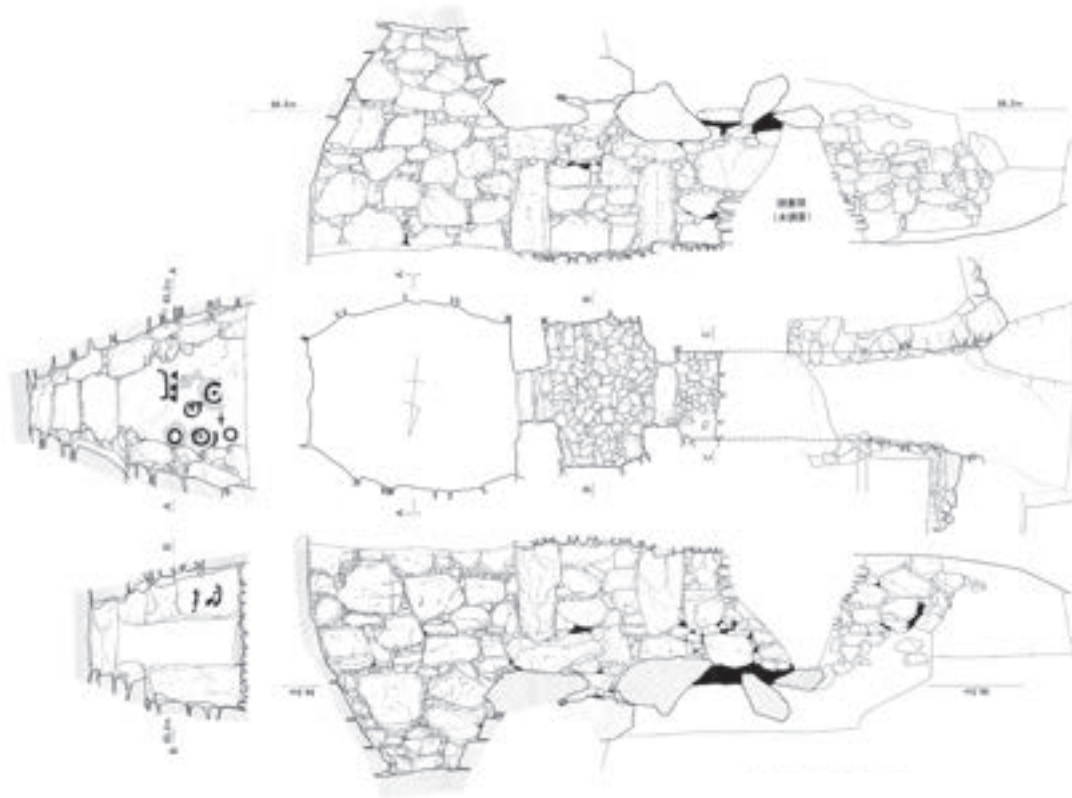


图 284 西館古墳石室実測図 (1/100)



图 285 奥壁裝飾実測図 (1/10)

指 定 国指定史跡「田主丸古墳群 西館古墳」平成14年3月19日

墳 丘 円墳（径10.4～14m、高4.3m、葺石）

主体部 横穴式石室（複室・両袖・西側に開口・花崗岩・片岩石材）全長9.25m、玄室長2.75m、奥壁幅1.35m、玄室高3.0m

装 飾 玄室奥壁鏡石と玄室右袖石の前室側に赤と緑で彩色。顔料の剥落が著しく図柄の判読が困難な場所もある。

奥壁鏡石中心には人物像が赤単色で描かれており、両手を広げ左側には直立した剣のような棒を握り、両足は踏ん張るように開く。頭部には冠の羽根飾りらしき細線が三本広がる。さらに剣状の棒を中心に赤色の円文が巡り、内側は緑色で塗りつぶされる。中心人物像の右上には赤・緑を交互に配した連続三角文があり、その上にはゴンドラ形の船が赤・緑で描かれる。人物像の左側には同心円文が三つ、下方には赤・余白・緑による六重の同心円文を描く。これら同心円文はすべてフリーハンドで描かれている。また中心人物像の下方には赤色で十字文を描いている。

玄門袖石には赤色のみで文様が描かれる。剥落が著しく内容は不明瞭だが、上段はゴンドラ状、下段はゴンドラ上に棹を持つ人物と盾を描いていると解釈されている。

顔 料 赤・緑（『田主丸町教委1996』）

遺 物 平成6年度確認調査時に出土 土師器・須恵器・金属製品、その他

年 代 6世紀後半

調査歴 平成6年度 範囲内容確認調査（田主丸町教育委員会）

現 況 調査後、入口部を閉塞して現状保存

図面等 平成6年度 墳丘測量図・石室・装飾実測図作成（久留米市教育委員会）

写 真 九州歴史資料館1994撮影4×5カラーリバーサル14点

九州歴史資料館1994撮影35mmカラーリバーサル87点

H14北部九州装飾古墳画像データベース21点（No.0306～0310、No.0939～0954）

文 献 田主丸町教育委員会1996『西館古墳』田主丸町文化財報告書第6集

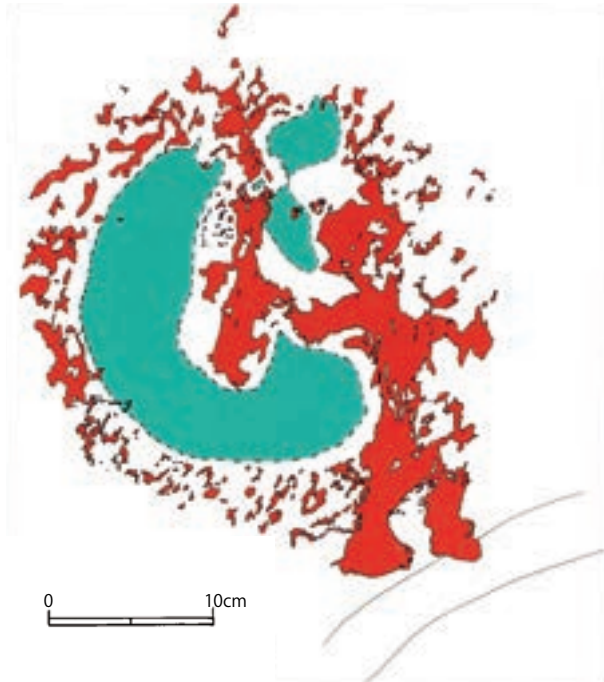


図286 人物像顔料付着状況図（1/5）



図287 西館古墳奥壁

45 装飾古墳石材（大塚（おおつか）8号墳石材）

立地 久留米市役所田主丸支所には、かつて大塚8号墳の横穴式石室を構成していたとされる二つの装飾古墳石材が保管されている。

大塚古墳群は福岡県の南部、筑後川中流域左岸、耳納山北麓の複合扇状地の中位付近、標高50～90mに分布する古墳群である。現在までに9基が確認されており、国史跡の田主丸大塚古墳（3号墳）は群中に所在する全長103mの前方後円墳である。同一谷筋の上流側（南側）には、現在までに70基の古墳が知られる森部平原古墳群（県指定史跡）や、76基の古墳が確認された清長橋古墳群がある。大字石垣字清長橋で発見されたため、かつては「大塚清長橋古墳石材」と報告されたこともあったが、その後の聞き取り調査から現在では大塚8号墳の石材と判断されるようになった。



図 288 大塚8号墳位置図 (1/25,000)

経緯 斎藤忠 1973『日本装飾古墳の研究』記載の「装飾古墳・横穴地名表」に「清澄橋古墳」として記載され、「昭和30年頃破壊消滅、金子文夫氏、森貞次郎氏調査」とあるのは本古墳の事を指すものと思われる。記載事項によれば、清澄（長）橋古墳は複室構造の横穴式石室を主体部とする円墳で、奥壁その他壁面に赤と青の顔料を用いて同心円文・円文・馬が描かれていた。

聞き取り調査によると、昭和30年代頃、庭石採取のために古墳を破壊して福岡市内の宅地に移動したところ障りがあったために元の場所に戻し、その後は放置されていたらしい。装飾の存在を確認した田主丸町教育委員会が昭和の終わり頃に田主丸町中央公民館（当時）内に石材を移動して保管、のちに石材を保護するための覆屋が設置された。

現在では久留米市田主丸町総合支所の屋根がある施設内に移動、シートで被覆した状態で保護が図られている。

移設した石材2点（2点とも奥壁）はその後、平成8年5月29日に「装飾古墳石材」として田主丸町指定有形文化財（現、久留米市指定有形文化財）に指定された。

名称 装飾古墳石材（平成8年5月29日指定名称）

清長橋古墳（埋蔵文化財調査カード1956）

田主丸町中央公民館所蔵の装飾のある石材（『田主丸町1996』）

大塚古墳群8号墳の石材（『田主丸町教育委員会2004』）

所在地 久留米市田主丸町大字石垣

指定 久留米市指定有形文化財（平成8年5月29日）

主体部 横穴式石室（発見当時、石室は既に解体されていたため規模・形状等は不明）

装飾 現在保管中の2点の石材のうち、大型石材については規模や形状から、奥壁を構成していた石材とみられる。短軸1.8m、長軸2.5m、花崗岩の平坦面に赤色顔料を用いて描画される。文様は石材の下端部を除く広範囲に及んで確認され、上方には二重の同心円文1つと単円文2つ

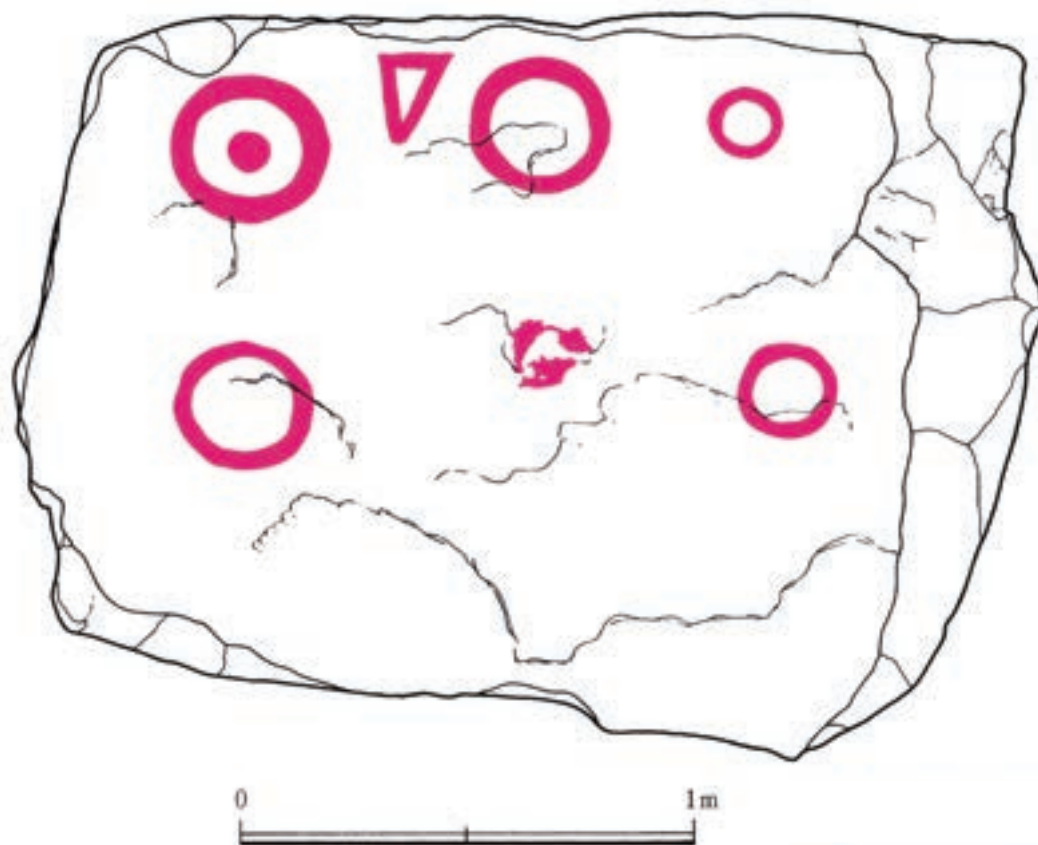


図 289 「装飾古墳石材」実測図 (1/20)

が並列して描かれている。左側の同心円文と中央の単円文との間には小さな三角文が1つ確認される。石材の中央には不明瞭な単円文状の文様があり、その両側には並列して単円文が描かれる。小型石材については、2つの同心円文が確認される。

顔 料 赤 (平成8年5月29日 有形文化財指定時の所見)

年 代 古墳時代後期

現 況 久留米市役所田主丸支所内に保管、ブルーシートで被覆して保護

図面等 装飾古墳石材実測図 (久留米市教育委員会)

文 献 田主丸町史編纂委員会 1996『田主丸町誌 第一巻 ムラとムラびと 上』 田主丸町

田主丸町教育委員会 2003『清長橋古墳群』

田主丸町教育委員会 2004『大塚古墳群 I』

久留米市教育委員会 2014『田主丸大塚古墳Ⅱ－第6・7次調査－』



図 290 「装飾古墳石材」(昭和43年)

46 珍敷塚（めづらしづか）古墳

立地 珍敷塚古墳は福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 43m の複合扇状地形に立地する。付近には後期群集墳が数多く形成されており、その中でも南北わずか 450m 足らずの間にはほぼ直線的に並ぶ 4 基の彩色系装飾古墳については現在「屋形古墳群」と総称されている。珍敷塚古墳は屋形古墳群中で最も北側に位置する。

経緯 うきは市教育委員会が実施した聞き取り調査によると、昭和 25 年 1 月、宅地造成のための整地作業現場にて、爆破解体が行われる寸前の本古墳の奥壁に鮮明な彩色壁画が描かれていることを近隣住民が目にしたのが装飾古墳発見の端緒だったようである。もっとも『福岡縣高等学校教職員組合 1951』によれば、石室自体は藩政時代に破壊されて玄室奥壁と右側壁の最下段のみを残して採石されていたらしい。その住民は爆破中止を要請後、福岡県史跡調査委員（当時）の田中幸夫氏（浮羽女学校教頭）に連絡し、それが端緒となって古墳の現状保存が図られることとなった。なお、「珍敷塚」の字名が古墳名に採用されたのは、装飾古墳であることが確認された昭和 25 年のことようである。

古墳発見後、昭和 28 年には国の史跡に指定され、壁画が描かれた石材の上には木製の覆屋が設置されたが、日光が直射し来訪者が直接接触されるような環境下にあった。古墳に接する県道を通る車の振動や、写真撮影の際の発色を鮮明にするため水を吹きかけたりする行為もあり、それが原因で顔料の剥落がかなり進行してしまった。昭和 43 年には退色が報道関係に大きく取り上げられて問題となり、吉井町（当時）では昭和 44・45 年度に木造平屋建てモルタル瓦屋根の覆屋設置工事を実施した。覆屋内部には昭和 50 年度に装飾石材を密閉するための保存庫が設置され、来訪者はガラス扉越しに壁画を観察することができるように改良された。

平成 10 年頃、保存庫の経年劣化進行が直接の発端となり、吉井町教育委員会では屋形古墳群



図 291 珍敷塚古墳位置図 (1/25,000)



図 292 珍敷塚古墳石室実測図 (1/400)



図 293 珍敷塚古墳奥壁（『北九州市立考古博物館 1983』）

の保存活用方針について検討することとなった。外部有識者による意見聴取も含めて検討された全体計画に基づき、平成 14～平成 16 年度に珍敷塚古墳の範囲内容確認調査が実施され、また調査成果を反映して平成 15 年には指定地の追加指定も行われた。

その後、平成 20 年夏には覆屋内部でカビが大量発生し、うきは市では一般視察の受け入れを急遽中止して応急的な保護対策を講じた。カビの鎮静化確認の翌年度には彩色壁面上のカビ死骸の除去を目的とした修復事業が行われた。

令和 2 年度に内部保存施設内の補強工事（新規躯体の構築）が実施され、令和 5 年度には保存整備のために必要な情報を得るため覆屋内のトレンチ調査が実施された。

名 称 珍敷塚古墳（1950）

所在地 うきは市吉井町富永

指 定 国指定史跡「珍敷塚古墳」 昭和 28 年 3 月 31 日

名称変更「屋形古墳群 珍敷塚古墳」 昭和 61 年 2 月 25 日

追加指定 平成 15 年 8 月 27 日

墳 丘 円墳（推定墳丘径 17～21m）

主体部 横穴式石室（複室とする記録あり・西側に開口・花崗岩・変成岩石材使用）玄室奥壁腰石と右側壁のみ残存。全長約 10.2m、玄室長 3.95m、玄室奥壁幅 1.98m。

装 飾 奥壁と奥壁に接する右側壁基底部に彩色による壁画。右側壁基底部上にある同心円文が描かれた石材は、他から持ち込まれた石材である。

奥壁は花崗岩の大型石材を横置きしており、赤と青（灰）の顔料を用いて描画される。

壁画左側には尖った冠帽を被る人物が船の左側に乗り、櫂を持って船を漕ぐ。船の右側舳先には右向きの鳥が止まる。船の中央に描かれた縦長の箱状の描写は帆または船の構造を表すと言われる。船の上には大型の同心円文が描かれ、同心円文外側の無着色部分には 11 個の列点が描か

れる。

壁画中央には3つの靫が大きく描かれ、左端と中央の靫の間には一対の蕨手文が大きく描かれる。靫の下には5段にわたって壁画の幅いっぱい横線が描かれており、無着色の部分と青色線の部分には赤による列点が描画される。

壁画右側の上方には盾を持つ人物、その下に俯瞰で描いた右向きのヒキガエル、右側には同心円文が描かれる。下方には箱状の描画があり、その上には右向きの鳥もしくは翳、さらにその下方には正面を向いたヒキガエルを描く。また、全体を覆うように描画の上方に弧状の赤線を1条描いている。

顔 料 赤・青（不明瞭）（「山崎一雄 1951・1974」）赤・青（『平凡社 1964』）赤（ベンガラ）・地塗りの部分的灰色～緑灰色（青灰色）（現時点では素材不明、日岡と同じものの可能性）（「永嶋正春 1999」）赤・灰（「朽津信明・川野邊渉 2000」）赤・灰（『うきは市教委 2007』）

遺 物 平成 14～16 年度調査時トレンチから須恵器出土。

年 代 7 世紀前半

調査歴 平成 14 年度 周辺地形測量・範囲確認のためのトレンチ調査（吉井町教育委員会）
平成 16 年度 石室内実測（吉井町教育委員会）

整備歴 昭和 44・45 年度 覆屋建設
昭和 50 年度 保存庫設置

現 況 残存石材保存のための覆屋設置後、現状保存

図面等 石室実測図（浮羽高校考古学部）
石室略測図（『平凡社 1964』森貞次郎計測）
壁画模写図（『平凡社 1964』樋口隆康模写）
石室実測図（『朝日新聞社 1972』森貞次郎実測・福岡大学所蔵）

平成 14～16 年度 周辺地形測量図・石室実測図（うきは市教育委員会）

（レーザー計測）東京大学池内研究室 2012.2 計測
写 真 『福岡縣高等学校教職員組合 1951』に



図 294 奥壁模写（『福岡縣高等学校教職員組合 1951』）



図 295 旧覆屋（昭和 40 年代前半）



図 296 現在の珍敷塚古墳保存施設

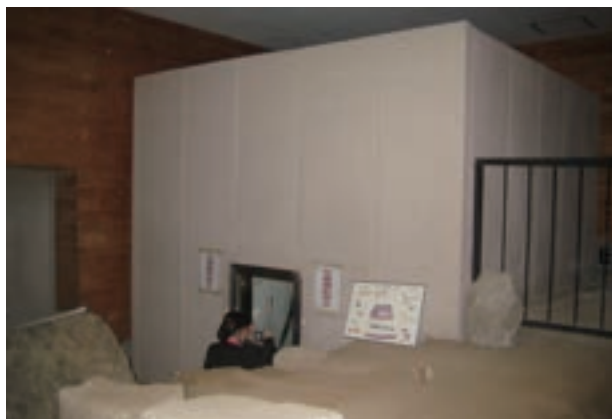


図 297 珍敷塚古墳内部保存施設

壁画モノクロ写真・模写図掲載

藤本四八撮影 4×5 カラーリバーサル「月をあ
らわす蟾蜍の彩画」(奥壁細部) A～C 3点、
同 AB 2点、同「鳥船と靱などの彩画」(奥壁)
A～E 5点、同「太陽と鳥船の彩画」(奥壁細部)
A～D 4点

九州歴史資料館 1976 撮影 4×5 カラーリバー
サル 13点、カラーネガ 2点

九州歴史資料館 4×5 カラーリバーサル 11点、
カラーネガ 1点

九州歴史資料館 6×7 カラーネガ 18点、6×9
カラーネガ 18点

九州歴史資料館 6×9 カラーリバーサル 1点・
カラーネガ 1点・カラー焼付 1点

九州歴史資料館 1966・1967 撮影 35mm カラーリ
バーサル 2点

九州歴史資料館 1997 撮影 35mm カラーリバーサ
ル「奥壁保護施設」等 17点

九州歴史資料館 2001 撮影 35mm カラーリバーサ
ル「保存施設」等 8点

九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル 34点

熊本県立装飾古墳館 2000.5.23 撮影 4×5 カ
ラーリバーサル 3点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 32点
(No.0172～0179、No.0723～0732、No.1348
～1352、No.1387～1395)

うきは市教育委員会保管 4×5・6×7 カラー
リバーサル、紙焼き等

模写 日下八光 現状模写・復元模写 3点(国
立歴史民俗博物館)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1点 (106×
141)・九州国立博物館 パネル 1点 (158×198)

文 献 福岡縣高等学校教職員組合 1951『北九州古文化図鑑』第二輯

うきは市教育委員会 2007『国指定史跡 屋形古墳群』うきは市文化財調査報告書第2集

うきは市教育委員会 2015『国指定史跡 屋形古墳群整備基本計画』



図 298 壁画面の修復作業①(紫外線照射)



図 299 壁画面の修復作業②(クリーニング作業)



図 300 珍敷塚古墳奥壁 e-Heritage 画像

47 原（はる）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 54m の複合扇状地形に立地する。付近には後期群集墳が数多く形成されており、その中でも現状保存が図られた 4 基の彩色系装飾古墳は「屋形古墳群」と総称されている。原古墳は珍敷塚古墳から 110m 南側に位置する。

経緯 昭和 3 年 10 月、古墳の石材を墓石に利用しようとした土地所有者が墳丘を壊し、奥壁を墳丘東方 3 間余の位置に持ち出したところ、体調を崩したために「古墳のたたり」と恐れ、奥壁を元の位置に戻したところ体調が良くなったという伝承がある。奥壁は壁画面を外側に向けた状態で墳裾の付近に据え置かれ、昭和 28・29 年頃には瓦葺の木製覆屋が建てられた。また、開口した奥壁側も石を積んで補修され、戦時中は防空壕にも転用された経緯がある。削平・整地された墳丘頂部や北側裾部には小祠が祀られている。

屋形古墳群を構成する他の 3 基については昭和 28 年に史跡指定が行われたが、本古墳については指定されておらず、そのため昭和 58 年度には写真撮影・実測図作成を主眼とする発掘調査が実施され、その成果に基づき昭和 61 年 2 月に追加指定・名称変更が行われた。

平成 12・13 年度に屋形古墳群の保存活用方針が検討された際には周溝の存在が問題となり、その確認を目的として平成 14 年度に周溝確認のためのトレンチ調査が実施された。平成 16 年度には石室実測図の加筆修正も行われた。

なお、奥壁覆屋は木製扉によって保護が図られていたが、平成 15 年には扉の内側にアクリル板が設置され、保護の改善が図られた。

名称 原古墳（『福岡縣 1939』）

所在地 うきは市吉井町富永

指定 国指定史跡 昭和 61 年 2 月 25 日

追加指定 平成 27 年 10 月 7 日

墳丘 円墳（径約 12.4m、高さ約 3.5m）

主体部 横穴式石室（単室・西側に開口・花崗岩・変成岩石材使用）奥壁が取り外され本来の位置から 5m ほど東側に外向きに移動。破壊された石室は石材積み直して補修。全長 8.9m、玄室長



図 301 原古墳位置図 (1/25,000)

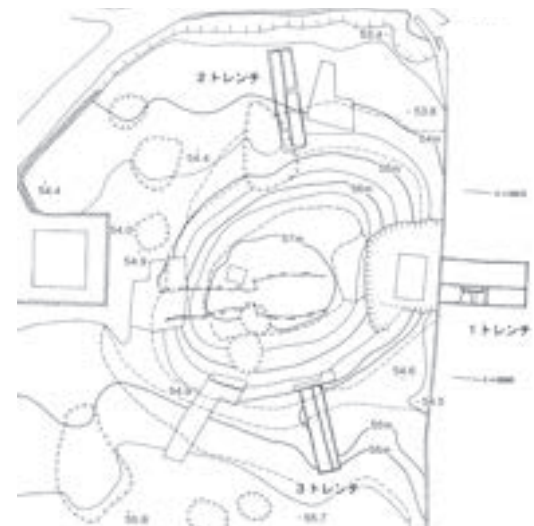


図 302 原古墳墳丘測量図 (1/400)

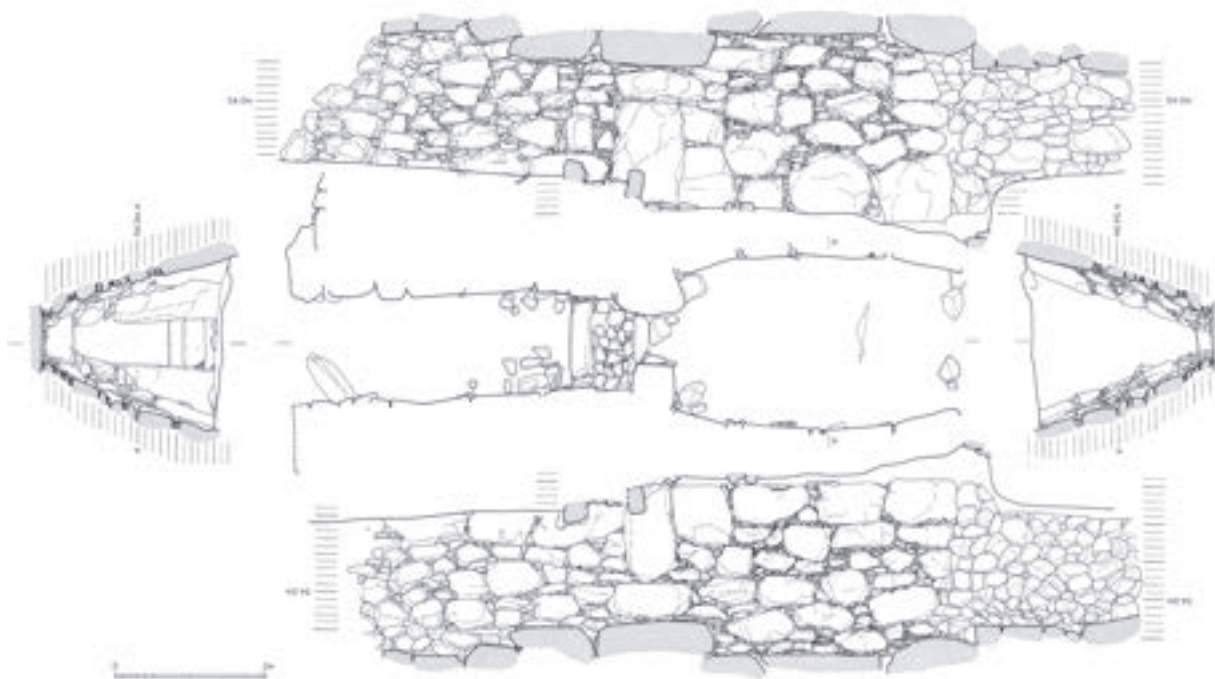


図 303 原古墳石室実測図 (1/100)

3.8m、玄室幅 2.27m、玄室高 2.58m。

装飾 玄室奥壁腰石と、これに接する両側壁東端の合計 7 石に、赤単色による描画が見られる。両側壁には同心円文・円文が描かれており、奥壁左側壁側にも一つ、同心円文を描いた石があったようだが発見直後に失われている。

移動した状態で据えられている奥壁は、しばらく露天に晒された時期もあったためか現状では不鮮明である。描画はほぼ 1.1m 四方に収められており、中央には長さ約 90 cm、高さ約 30 cm の大きなゴンドラ形の船が描かれる。船上の中央右寄りには屋形もしくは棺のような四角いものが描かれ、これには馬ではないかとの異説もある。その右横には、三角状の冑を被った武人が描かれ、また左端には左手に弓、右手に櫂を持った人物が小さく描かれる。過去の模写図では船の右側にもう 1 本の櫂が描かれているが、現在は消失している。

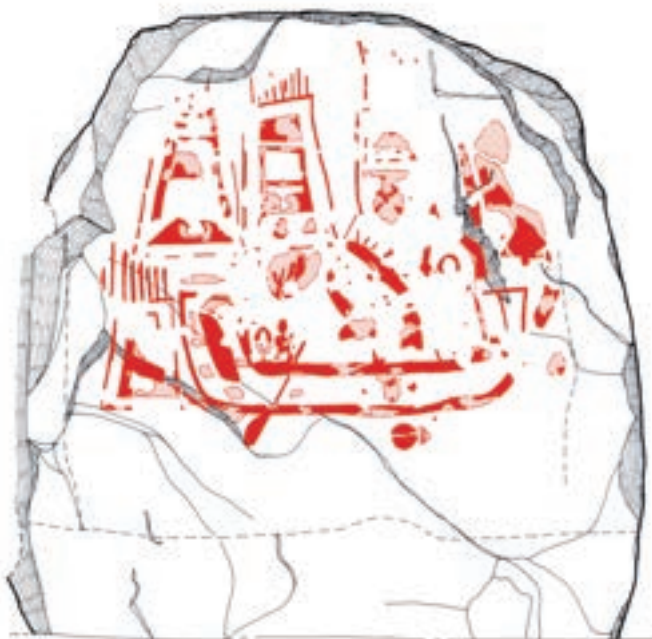


図 304 原古墳奥壁実測図 (1/20)

船の左には 1 点、上方には 2 点の靱が大きく描かれる。左の靱の斜め上方には筒部を外れた位置に 2 条の線が描かれており、刀と靱が表現されているという説もある。中央の靱の右横には「カブトをかぶり盾を持ち刀をさした武人」がいるとされるが、現在は識別することができない。そ

の横に描かれたとされる盾、もしくは鞆とする文様も同様である。船と上段の鞆との間に3つの同心円を復元した模写図があるが、現状では不明瞭で判別することは困難である。

顔料 赤（『山崎一雄 1951・1974』）
赤（『吉井町 1984』） 赤（『うきは市教委 2007』）

遺物 昭和58年調査時に出土。須恵器・土師器・馬具・装身具

年代 6世紀後半

調査歴 昭和58年度 墳丘測量・範囲確認・石室実測（吉井町教育委員会）
平成14年度 周溝確認のためのトレンチ調査（吉井町教育委員会）
平成16年度 石室実測の修正（吉井町教育委員会）

整備歴 昭和28・29年頃 木造瓦葺覆屋建設

平成15年度 観音開き扉内側にアクリル板設置

令和4年度 整備工事（奥壁・石室入口保存施設、園路整備、案内板設置）

令和5年度 墳丘に獣害対策ネット設置

現況 奥壁は石室から抜き取られ墳裾に移動した状態で、その上から覆屋を設置。石室入口は開閉扉のある保存施設を設置。

図面等 三叉求積図・墳丘平面図・墳丘断面図・石室実測図（『福岡縣 1939』）

奥壁模写図（『吉井町 1977』）

墳丘測量図・石室・奥壁壁画実測図（『吉井町 1983』）

墳丘測量図・石室・奥壁壁画実測図（『うきは市教委 2007』）

写真 九州歴史資料館 1976 撮影 4×5 カラーリバーサル 4点、他 4×5 カラーリバーサル 2点

九州歴史資料館 1984 撮影 4×5 カラーネガ 8点

九州歴史資料館 6×7 カラーネガ 3点

九州歴史資料館 1982.3.3 撮影 35mm カラーリバーサル



図 305 原古墳奥壁保存施設（平成10年頃）



図 306 原古墳石室入口

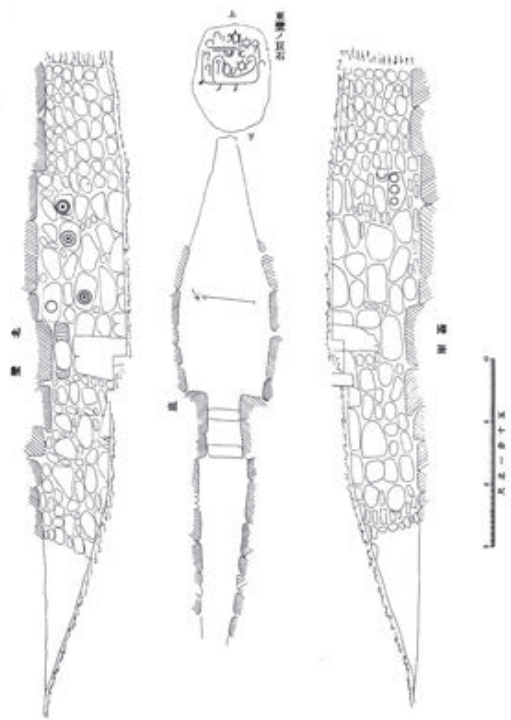


図 307 原古墳石室実測図（1/50）
（『福岡縣 1939』）



図 308 原古墳奥壁



図 309 原古墳石室内

11 点 (外観・石室内)

九州歴史資料館 1983. 9. 29 撮影 35mm カラー
リバーサル 69 点

九州歴史資料館 1991. 9. 22 撮影 35mm カラー
リバーサル 1 点、1997. 9. 19 撮影 カラー
リバーサル 1 点、2001. 6. 5 撮影 35mm カラー
リバーサル (覆屋遠景) 1 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサ
ル 63 点

熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 22 撮影 4 × 5
カラーポジ 3 点、モノクロ 3 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 35

点 (No. 0180 ~ 0188・No. 0733 ~ 0751・No. 1396 ~ 1402)

模写 日下八光 壁画模写 1 点 (国立歴史民俗博物館)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1 点 (107 × 117)・九州国立博物館 パネル 1 点 (127 × 158)

文献 福岡縣 1939『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯 史蹟之部

吉井町史編纂委員会 1977『吉井町誌』第一卷 吉井町

吉井町教育委員会 1984『原古墳』吉井町文化財調査報告書第 2 集

うきは市教育委員会 2007『国指定史跡 屋形古墳群』うきは市文化財調査報告書第 2 集



図 310 原古墳奥壁イラスト (『吉井町 1977』)

48 鳥船塚（とりふねづか）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 63m の複合扇状地形に立地する。付近には後期群集墳が数多く形成されており、その中でも現状保存が図られた 4 基の彩色系装飾古墳は「屋形古墳群」と総称される。

鳥船塚古墳は原古墳から 90m 南に位置する。

経緯 珍敷塚古墳の再確認から間もない、昭和 25 年 3 月に発見された古墳である。同年中に浮羽高校考古学部によって石室の実測が行われたが、その後の開墾によって墳丘と石室の大半が失われ、現状では奥壁腰石とその上部の 1 石だけが現地に残されている。昭和 28 年 3 月には珍敷塚古墳附鳥船塚古墳として国の史跡に指定された。

昭和 58 年頃までは、原古墳のような前室のない観音開きの扉がついた覆屋が建てられていたようだが、現在は前室のある保存施設が設置され、壁画石材と前室との間にはガラス扉が取り付けられている。床面には全面にコンクリートが敷かれ、石材が固定された状態にある。

平成 12・13 年に屋形古墳群の保存活用方針が検討された際には、墳丘の範囲確認が課題となり、平成 14 年度に周辺のトレンチ調査、平成 17 年度に補足調査が行われた。

その後、屋形古墳群全体の整備事業実施に伴って平成 27・28 年度に羨道・墓道部の遺存状況や石室玄門部付近の遺存状況の確認を目的とした確認調査が実施された。

名称 鳥船塚古墳（昭和 28 年指定名称）

所在地 うきは市吉井町富永

指定 国指定史跡「珍敷塚古墳 附 鳥船塚古墳」
昭和 28 年 3 月 31 日

指定名称変更「屋形古墳群 鳥船塚古墳」昭和 61 年
2 月 25 日

追加指定 平成 31 年 2 月 26 日

墳丘 円墳（径 20m）

主体部 横穴式石室（単室・西側に開口・花崗岩石



図 311 鳥船塚古墳位置図 (1/25,000)



図 312 鳥船塚古墳奥壁実測図 (1/30)



図 313 鳥船塚古墳保存施設（平成 10 年頃）

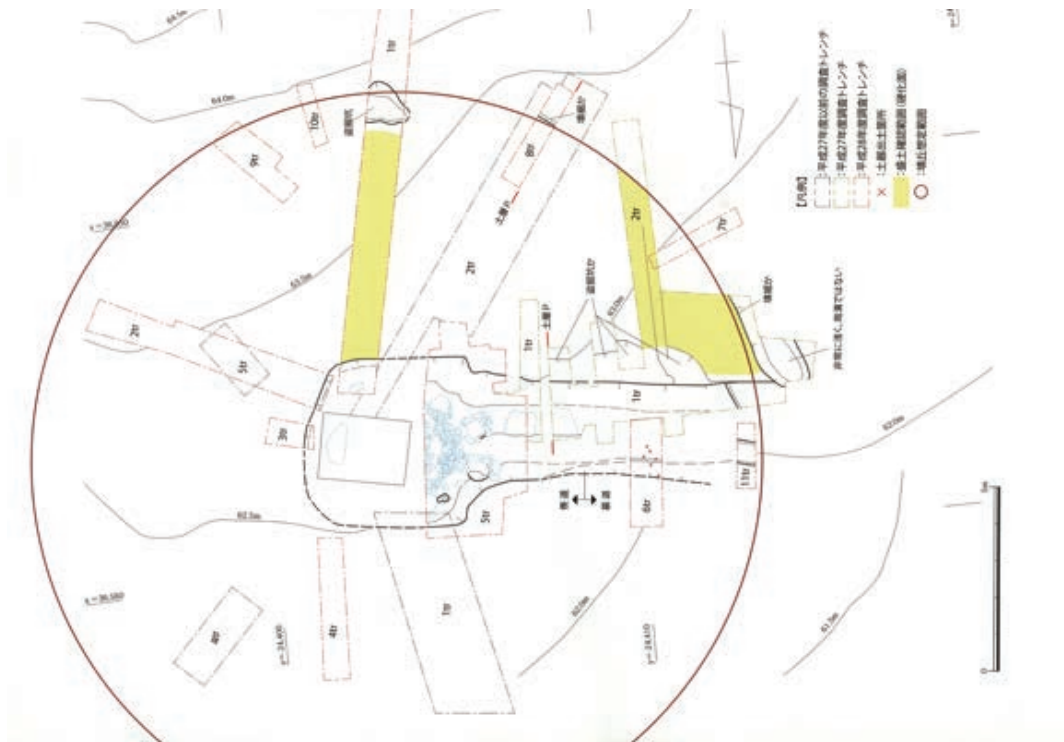


図 314 鳥船塚古墳石室実測図 (1/200)

材使用) 奥壁の腰石とその上の石材のみ残存。全長 6.1m、玄室長 3m、奥壁幅 1.38m、玄室高 1.76m。

装飾 残存する奥壁の 2 石に赤単色で描画される。現状では文様の判別は困難で、一見すると退色が進んでいるようにも見えるが、これは発見時に騒がれるのを嫌った地権者が泥を壁面に塗りつけたことと、壁画の置かれている環境が密閉されておらず比較的乾燥し、壁面に土埃が被覆するためであり、剥落等は進んでおらず保存状態は比較的良好と思われる。しかし図文の内容については判別が困難な状況にある。

上段石材の中央右寄りには盾が 1 点、大きく描かれる。下段右側には、右寄りにゴンドラ形の船を描き、船の左上方には大刀 1 点、靱 2 点がある。船の両端には各 1 羽、右側を向いた鳥が止まり、船上の左寄りには櫂を操る人物が描かれている。人物の頭部は三角形で表現される。船上の両側にはそれぞれ縦方向に 2 本の直線が描かれており、帆または旗を表現すると思われる。また、中央右寄りに描かれた長形状の文様は盾の可能性もある。船の上方には二重の同心円が 1 点描かれており、また船の左側には、やはり頭部が三角形に表現された人物が描かれる。

顔料 赤 (「山崎一雄 1951・1974」) 赤 (『うきは市教委 2007』)

遺物 平成 14・17 年度確認調査時に須恵器出土 (うきは市教育委員会)

年代 6 世紀後半

調査歴 昭和 25 年 2 月 発見時に石室内実測 (浮羽高校考古学部)

平成 14・17 年度 範囲確認調査 (吉井町教育委員会)

平成 27・28 年度 石室・羨道・墓道他、範囲内容確認調査 (うきは市教育委員会)

整備歴 昭和 28 年頃 木造瓦葺観音開き扉覆屋設置

昭和 54 年度 保存施設建て替え

現況 残存石材の保存整備工事後、原位置を留めた状態で現状保存

図面等 石室実測図（「浮羽高校考古学部 1950」）

壁画実測図（『平凡社 1968』樋口隆康原図）

壁画実測図（『朝日新聞社 1967』樋口隆康原図・日下八光補筆）

周辺地形測量図・石室実測図（『うきは市教育委員会 2007』）

写真 藤本四八撮影 4×5 カラーリバーサル「鳥船の彩画」（奥壁）A～C 3点

九州歴史資料館 1976 撮影 4×5 カラーリバーサル 3点、カラーネガ 1点

九州歴史資料館 1984 撮影 4×5 カラーリバーサル 5点、カラーネガ 1点

九州歴史資料館 4×5 カラーリバーサル 4点

九州歴史資料館 6×7 カラーネガ 2点

九州歴史資料館 1982. 03. 03 撮影 35mm カラーリバーサル 26点

九州歴史資料館 1984 撮影 35mm カラーリバーサル 23点（保存工事前）

九州歴史資料館 2001. 6. 5 撮影 35mm カラーリバーサル 2点（保存施設外観・奥壁）

九州歴史資料館 撮影 35mm カラーリバーサル 10点（奥壁）

熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 22 撮影 4×5 カラーリバーサル 1点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 15点（No. 0189～0194、No. 0752～0757、No. 1403～1405）

模写 日下八光 玄室奥壁現状模写1点（国立歴史民俗博物館）

パネル 九州歴史資料館 パネル 1点（108×121）・九州国立博物館 パネル 1点（127×158）

文献 吉井町史編纂委員会 1977『吉井町誌』第一巻 吉井町

うきは市教育委員会 2007『国指定史跡屋形古墳群』うきは市文化財調査報告書第2集

うきは市教育委員会 2018『国指定史跡 鳥船塚古墳 - 史跡屋形古墳群整備に伴う調査』

うきは市文化財調査報告書第25集

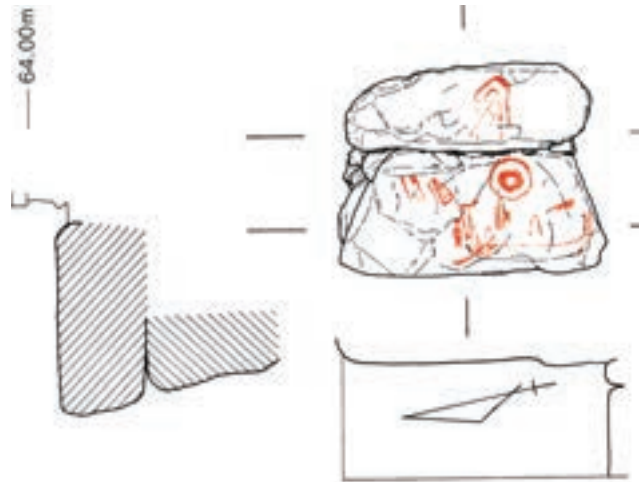


図 315 鳥船塚古墳奥壁実測図（1/40）



図 316 鳥船塚古墳奥壁



図 317 床面の状況

49 古畑（ふるはた）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高 87m の複合扇状地形に立地する。「屋形古墳群」と総称される 4 基の彩色系装飾古墳群の中では南端の最高所に位置しており、鳥船塚古墳からは 170m ほど南にある。

経緯 発見の経緯や時期は不詳だが、珍敷塚古墳が再発見された昭和 25 年から間もない頃に発見されたようである。「屋形古墳群」4 基のうち、本古墳は唯一、墳丘・石室とも完存したままの状態である。石室入口には鉄製枠が取り付けられ、その上をシート等で被覆して石室内の保護が図られているが、鉄製枠取り付け時に入口付近の石が若干積み直されている。昭和 28 年に珍敷塚古墳とともに国の史跡に指定され、現在まで保護が図られている。

昭和 30 年代に浮羽高校考古学部によって発掘調査が行われた際には円筒埴輪列が検出され、形象埴輪も出土した。なお、近隣には 2 基の古墳があったらしいが既に痕跡すら留めていない状態である。その後、石室奥壁の実測が行われたが、本格的な発掘調査は長らく実施されてこなかった。

平成 12・13 年に屋形古墳群の保存活用方針が検討された際に墳丘の範囲確認が課題となり、平成 15 年度に地形測量図作成、15・16 年度に石室内実測、17・18 年度に墳丘周辺のトレンチ調査が実施された。

名称 古畑古墳（指定名称）

所在地 うきは市吉井町富永

指定 国指定史跡「珍敷塚古墳 附 古畑古墳」昭和 28 年 3 月 31 日

指定名称変更「屋形古墳群 古畑古墳」昭和 61 年 2 月 25 日

追加指定 平成 27 年 10 月 7 日

墳丘 円墳（径 20m、高 3m）

主体部 横穴式石室（複室・両袖。南西側に開口・花崗岩・変成岩石材使用）全長 6.16m、玄室中央幅 2.38m、玄室高 2.6m、前室長 1.75m、前室幅 0.74m、羨道幅 0.58～0.75m、羨道高 0.9m。

装飾 奥壁に赤単色で壁画が描かれる。

奥壁の下半に、同心円文を上・中段に各 1 点、下段左右に 2 点並列して描く。円の直径は下段左が最も大きく 60 cm、右が最も小さく 30 cm を測る。すべて中心を塗りつぶしており、下段右の



図 318 古畑古墳位置図 (1/25,000)

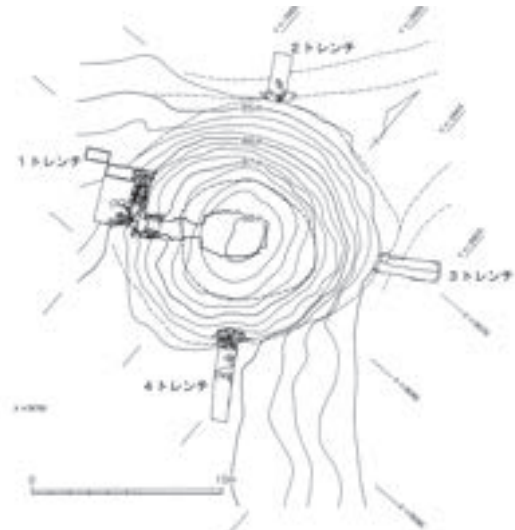


図 319 古畑古墳墳丘測量図 (1/200)

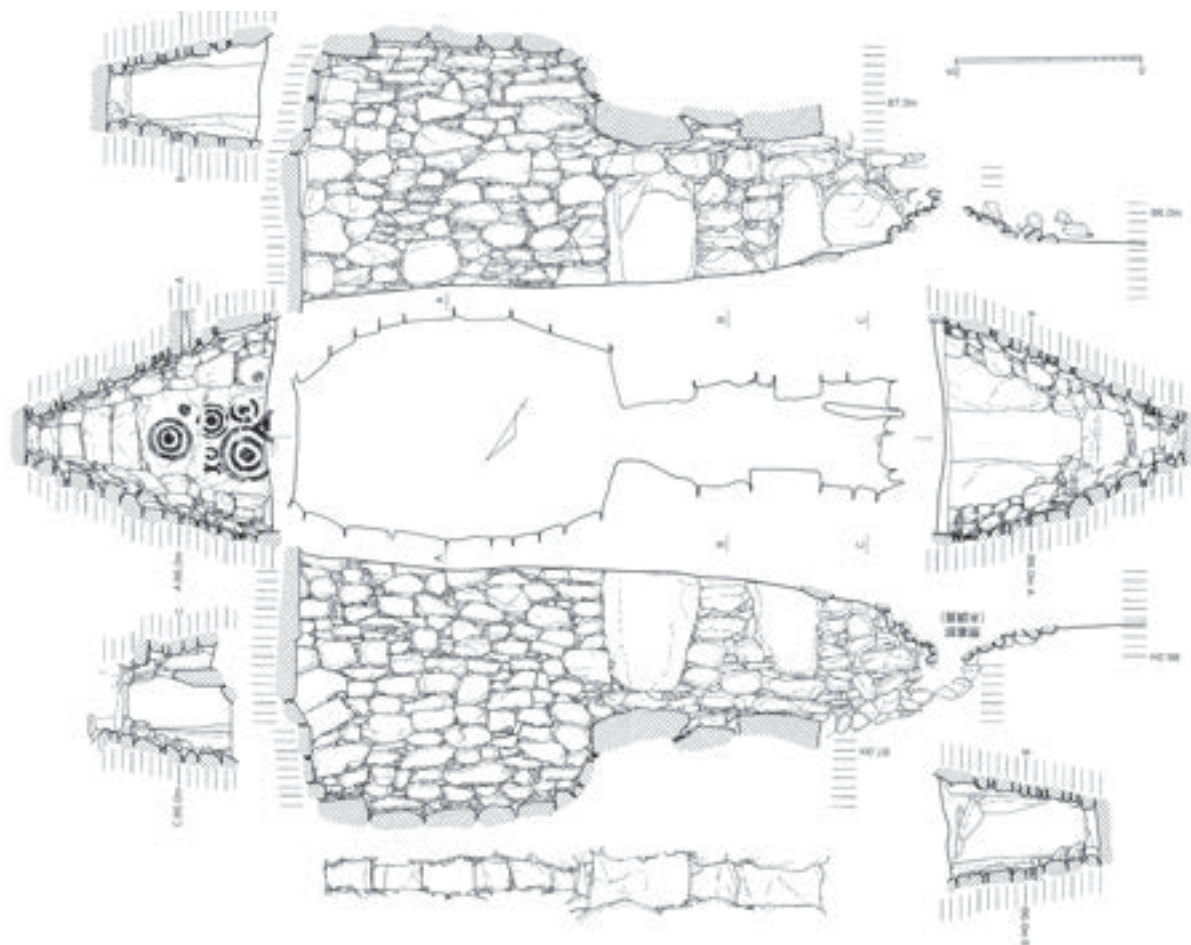


図 320 古畑古墳石室実測図 (1/80)

円文のみ一重、他は幅のある線で二重に円文を取り巻く。下段中央の円文の間には三角文が描かれており、上の同心円文の右下に小円文が描かれるが、この文様は完全な円とならず右下方に小さな突起を持つ。

中央左寄りには両手を広げた小人物が描かれる。人物の右には真上の部分が1/5程欠けた半円形の図像が描かれており、軛を描いたものとも言われる。右側壁の下半にも小円文がある。

石材の表面は平滑ではないが、石の目に沿うような形で手際良く文様が描かれている。なお、右側壁の一部に3箇所ほど、直径1cmにも満たないわずかな痕跡で極微量の赤色顔料の塗布が見られたが、何を意図したものかは不明である。

顔 料 赤（「山崎一雄 1951・1974」）赤（『うきは市教委 2007』）

遺 物 昭和 30 年代に円筒埴輪・形象埴輪出土（浮羽高校考古学部）

平成 17・18 年度確認調査時に土器・埴輪出土（うきは市教育委員会）

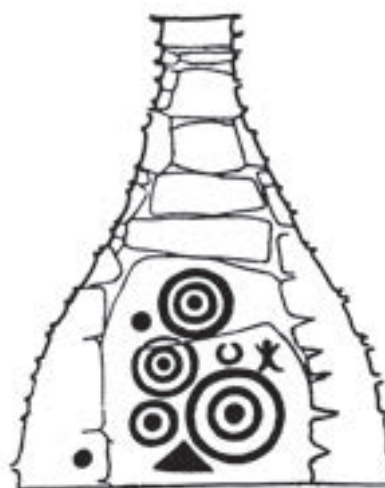


図 321 古畑古墳奥壁イラスト（『吉井町 1977』）

土器（須恵器坏・甕・甕、土師器椀・高坏）、埴輪（円筒埴輪・形象埴輪）（うきは市教育委員会）

年代 6世紀中頃

調査歴 昭和30年代 墳丘周辺発掘調査で円筒埴輪列確認（浮羽高校考古学部）

平成15年度 墳丘周辺地形測量図作成（吉井町教育委員会）

平成15・16年度 石室内実測（吉井町教育委員会）

平成17・18年度 墳丘周辺トレンチ調査（吉井町教育委員会）

整備歴 昭和30年代頃 石室入口に鉄製柵設置、ブルーシートで被覆して保護

現況 入口を閉塞して現状保存

図面等 壁画実測図（『平凡社1964』森貞次郎・渡辺正気原図・小林行雄修正）

壁画実測図（『講談社1965』森貞次郎・渡辺正気原図）

墳丘測量図、石室・壁画実測図（『うきは市教委2007』）

写真 藤本四八撮影4×5カラーリバーサル「同心円の彩画」（奥壁）A～C3点
同「同心円の彩画」（奥壁）C1点

九州歴史資料館1976撮影4×5カラーリバーサル4点、カラーネガ2点

九州歴史資料館4×5カラーリバーサル1点

九州歴史資料館6×7カラーネガ5点

九州歴史資料館1966撮影35mmカラーリバーサル4点

九州歴史資料館1982.3.3撮影35mmカラーリバーサル6点（古墳外観、他）

九州歴史資料館2001.6.5撮影35mmカラーリバーサル2点

九州歴史資料館35mmカラーリバーサル9点

熊本県立装飾古墳館2000.5.24撮影4×5カラーポジ6点、モノクロ4点

H14北部九州装飾古墳画像データベース9点（No.0195・0196、No.0758～0760、No.1406～1409）

模写 日下八光 後室奥壁現状模写1点（国立歴史民俗博物館）

パネル 九州歴史資料館 パネル1点（161×131）九州国立博物館 パネル1点（158×127）

文献 吉井町史編纂委員会1977『吉井町誌』第一巻 吉井町

うきは市教育委員会2007『国指定史跡 屋形古墳群』うきは市文化財調査報告書第2集



図322 古畑古墳奥壁

50 富永（とみなが）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸の標高 27m の微高地上にある。屋形古墳群と同じ大字富永地内だが、珍敷塚古墳から 1,500m ほど北の集落域内に位置する。かつては付近にも幾つかの古墳があったようだが現在では失われている。

竹重稲荷神社の敷地内にあり、外見上は古墳であることを判断できるが墳丘上は竹叢で覆われ、石室の石材は抜き取られており旧状を留めていない。

経緯 『福岡縣 1925』によれば、古墳として認知されたのは 1800 年頃にまで遡る。当初、竹重稲荷神社前に猿田彦神の碑を建てるために古墳天井石を用いようとしたが、この時には中止することになったらしい。

大正 13 年 4 月 28 日に土地所有者が石材入用のため天井石を破碎したところ多数の出土品があり、また彩色壁画が確認されたため、県に対して届出が行われた。なお、発見時の様子は当時の新聞記事にも詳細に記載され、福岡縣嘱託の島田寅次郎は内務省柴田常恵考査官と共に大正 13 年 5 月 28 日に現地を訪れた。

発見時に抜き取られた石材のうち的一片と遺物の一部は、時を置かずして浮羽中学校に運び込まれたらしく、小松眞一はその時の様子を『人類學雑誌』に報告し、また京都大学の島田寅彦は同年中に装飾古墳の新例として『歴史と地理』に発表した。石室石材はこの時点ではほとんど抜き取られて石垣用材として破碎されていたが、積み上げられた破碎石材にも彩色が認められたようである。柴田常恵来訪の際、浮羽中学校の石材と共に彩色のある破碎石材を持ち帰ったことが記載されているが、これらはのちに京都大学人類学教室に一部保管（現在、京都大学総合博物館に「富永古墳石材」として保管中の石材 2 点がこれに該当するものと思われる）、また他の彩色石材のうち 2 点は福岡市立博物館に保管、出土遺物は福富村役場に保管されたとある。

富永古墳についてはその後、既に消滅したものと思われていたが、吉井町教育委員会が平成元年度に実施した遺跡分布調査の結果、今なお墳丘の一部が現地に残っていることを確認した。

名称 福富村竹重の一装飾古墳（「小松眞一 1924」） 富永古墳（『福岡縣 1925』） 稲荷塚（『吉井町 1987』） 富永古墳（『吉井町教委 1990』）



図 323 富永古墳位置図 (1/25,000)

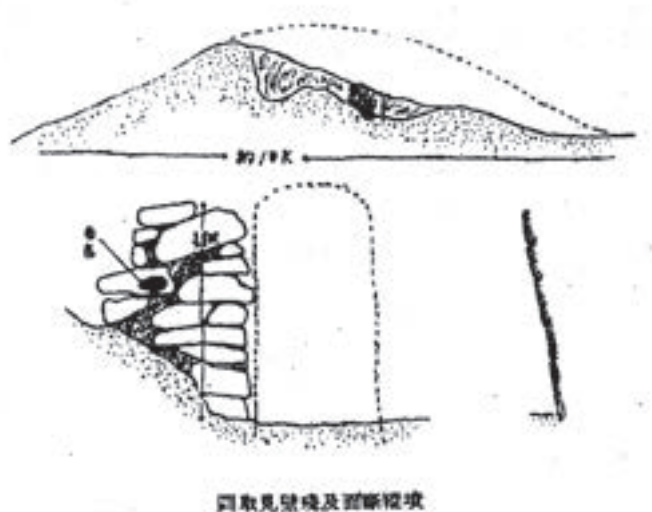


図 324 「富永古墳墳丘断面見取圖」（「小松眞一 1924」）

所在地 うきは市吉井町富永

墳 丘 円墳（径約 18m、高約 5.4m）

主体部 横穴式石室（単室？西側に開口・花崗岩・輝石安山岩・片岩石材使用）全長 9.0m・玄室長 3.6m・幅 2.1～2.4m

装 飾 抜き取られ破砕された石材の観察所見に基づく。へぎ材（板状石材）に複数色で矢筒（鞆？）を描いた石材 2 点（うち 1 点は浮羽中学校旧蔵石材）、赤色顔料で円および直線を描いた石材 2 点、柱状で彩色を行う石材 1 点を確認された。

蓋石（天井石）を構成したとされる石にも同心円文が描かれたというが、既に破砕されていたため実見できなかったらしい（「小松眞一 1924」）。

浮羽中学校旧蔵石材は輝石安山岩で、長さ一尺五寸七分（53 cm）、厚さ一寸（3 cm）～一寸五分（4.5 cm）、中央に輪鼓形を青・白・赤の三色を用いて描き、上部に 6 本の棒状のものが描かれているため矢筒を表現したものと思われる。左右には赤・青を用いて縁取りが行われ、上部には欠失するため全容は不明だが赤色の文様が続けている。

もう 1 点、矢筒を描いた石材は長さ一尺八寸五分（54.5 cm）ないし一尺七寸五分（52.7 cm）、幅四寸五分（13.6 cm）ないし六寸三分（18.2 cm）。（小松眞一 1924）によれば下方に 6 条の脚状のものを描く細長い形状を呈しており、矢筒として認識される。赤色顔料で描かれた形象は三段の区画を有し、最下段の区画中には赤色で円文が描かれ、中位の区画には縦方向に太い 2 本の線を描く。矢筒の右側に尾状に描かれた文様は、矢筒に付着する紐を表現したもので、矢筒の上部は省略されたとみられている。

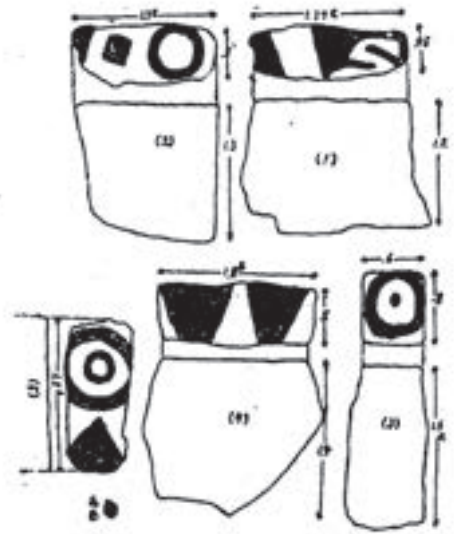


図 325 「石室石材見取圖」（「小松眞一 1924」）

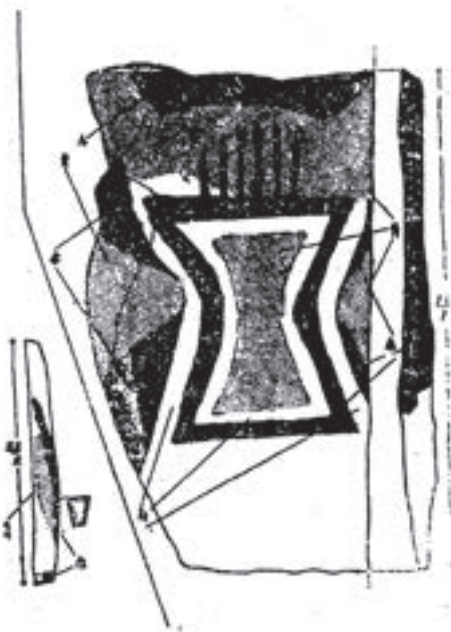


図 326 「彩色板石及柱状石材」



図 327 「彩色板石Ⅱ見取略圖」

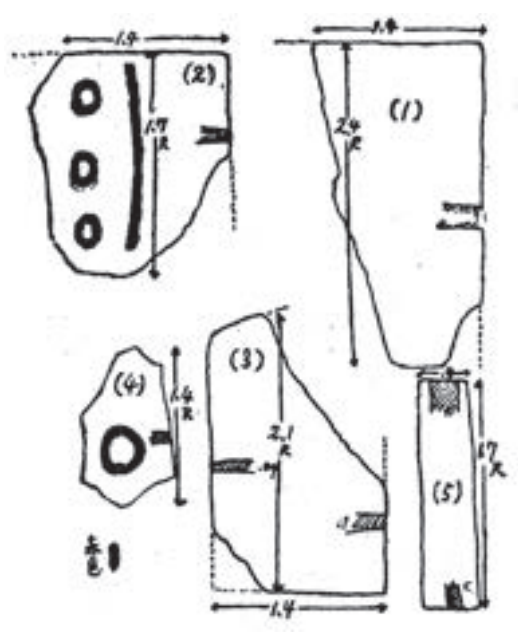


図 328 「彩色板石ⅢⅣⅤ実測略圖」



富永古墳出土須恵器類

図 329 「富永古墳副葬品」(『福岡縣 1925』)



図 330 「福永古墳石材」
(1928 『京都帝國大學文學部陳列館考古圖録』)

その他、柱状の石材には赤・青を用いて描画が行われる。

顔 料 赤・藍青・白? (「小松眞一 1924」)

朱・藍・退色した色彩(白と言う人が多い) (『福岡縣 1925』)

遺 物 大正 13 年発見時に出土。須恵器・武器・馬具・装身具 (『福岡縣 1925』) 出土須恵器の一部が『世界陶磁全集 1 日本古代篇』に掲載。

年 代 6 世紀

調査歴 大正 13 年 5 月 小松眞一が現地調査

大正 13 年 5 月 県史実調査嘱託島田寅次郎・内務省柴田常恵考査官が現地調査

平成元年 遺跡分布調査で墳丘確認(吉井町教育委員会)

現 況 大正 13 年に石材が抜き取られる。墳丘の一部は現状保存。

図面等 墳丘断面図・残存石室断面図・石材見取図(「小松眞一 1924」)

写 真 出土須恵器写真(「小松眞一 1924」)

出土須恵器・鉄器・馬具写真(『福岡縣 1925』)

出土品写真・大正 13 年 5 月 29 日付富永古墳新聞記事写真(『吉井町教委 1990』)

文 献 小松眞一 1924 「福岡縣浮羽郡福富村竹重の一裝飾古墳」『人類學雜誌』第三十九卷四・五・六号

島田貞彦 1924 「筑後に於ける二三の裝飾古墳の新例」『歴史と地理』第十四卷第一號

福岡縣 1925 『福岡縣史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯

浜田耕作 1928 『京都帝國大學文學部陳列館考古圖録』芸草堂出版部

樋口隆康 1958 「須恵器」『世界陶磁全集』1 日本古代篇 座右宝刊行会

吉井町教育委員会 1990 『若宮古墳群 II』吉井町文化財調査報告書第 6 集



図 331 現在の富永古墳

51 日岡（ひのおか）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にある。筑後川から1,200mほど離れた標高30mの沖積平野微高地に、月岡古墳と日岡古墳の二つの前方後円墳が若宮八幡宮境内に並んでおり、日岡古墳から600mほど東にはやはり前方後円墳の塚堂古墳がある。現在、この三つの古墳は「若宮古墳群」と総称されている。

装飾古墳として知られるのは日岡古墳である。周囲を民家や慰霊公園、県道や市道が取り囲んでいる。また墳丘もかなり改変が進んでいるものと思われる。

経緯 日岡古墳の存在は隣接する月岡古墳とともに近世当時から著名な存在で、『太宰管内誌』『筑後将士軍談』にも紹介があるが、この時にはまだ装飾に関する記述はない。

日岡古墳が装飾古墳として知られるようになったのは、明治21年、坪井正五郎による発掘調査とその報告による。坪井は正式な手続きを経て、若宮八幡宮氏子とも協議を済ませた後、後円部の頂部から掘り下げにとりかかったが、この時点ですでに天井石は失われており石室内も盗掘されていたようである。しかし、この発掘によって石室内全面に装飾壁画が描かれていることが明らかになり、坪井はその文様を模写し、のち『東洋学芸雑誌』に「筑前日の岡にて古代紋様の発見」を寄稿、模写図とともに古墳の詳細な内容を報告した。

日岡古墳はこれ以降、古代紋様が描かれた古墳としてその名を知られるようになった。石室の文様は明治34年（1901）に日本で初めて編纂された公式の美術史『稿本日本帝国美術略史』にも日本における「初期の絵画」の代表的存在として重定古墳の彩色壁画と共に挿図入りで紹介された。

大正2年に和田千吉と杉山寿栄男が九



図 332 日岡古墳位置図 (1/25,000)

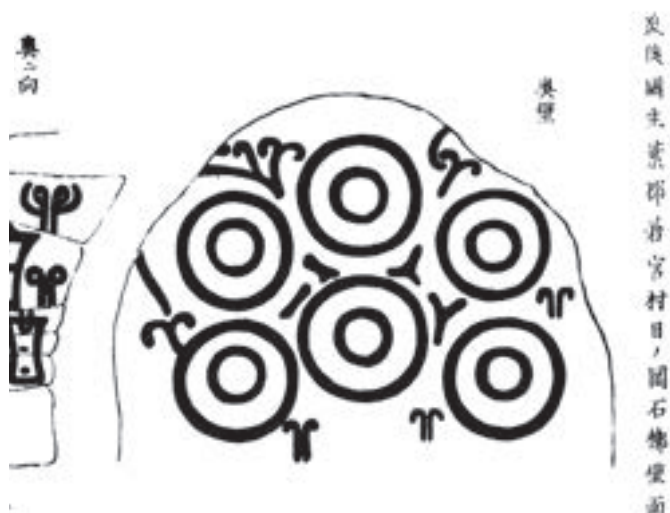


図 333 「日岡古墳奥壁紋様圖」(「坪井正五郎 1889」)

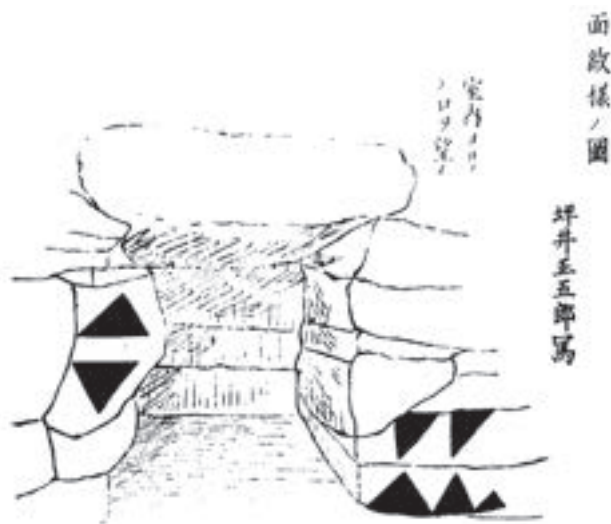


図 334 「日岡古墳玄門部紋様圖」(「坪井正五郎 1889」)



図 335 日岡古墳墳丘測量図 (1/600)

州を旅行した際、杉山が日岡古墳石室の文様を実物大で模写して持ち帰り『考古学雑誌』第四卷第十二号に報告した。この模写は現在、東京国立博物館に保管されている。

『福岡縣 1925』には重定古墳や塚花塚古墳など共に石室内に装飾のある古墳として報告され、その後、昭和 3 年に国の史跡に指定され、同年中に標柱や境界柱設置、天井の開口部を雨水等から保護するため木造瓦葺の覆屋が据え置かれ、石室内装飾の保護が図られた。石室



図 336 日岡古墳近景

上方は現在、石材を他の場所から持ち込んで積み直しが行われているが、この修復は木造覆屋設置に際して行われたものである。木造観音開きの覆屋も昭和 39 年 2・3 月に鉄筋コンクリート平屋建に建て替えられ、開口部周辺もコンクリートで補強された。

吉井町教育委員会では昭和 60～平成元年度に月岡古墳・日岡古墳・塚堂古墳の範囲内容確認調査を実施することとなり、日岡古墳については昭和 62 年～平成元年度に墳丘・石室実測と周辺トレンチ調査が実施された。

現在、覆屋内の開口部周辺には鉄柵が設けられ、見学者は開口部から石室内を覗き込むようにして見学することができる。

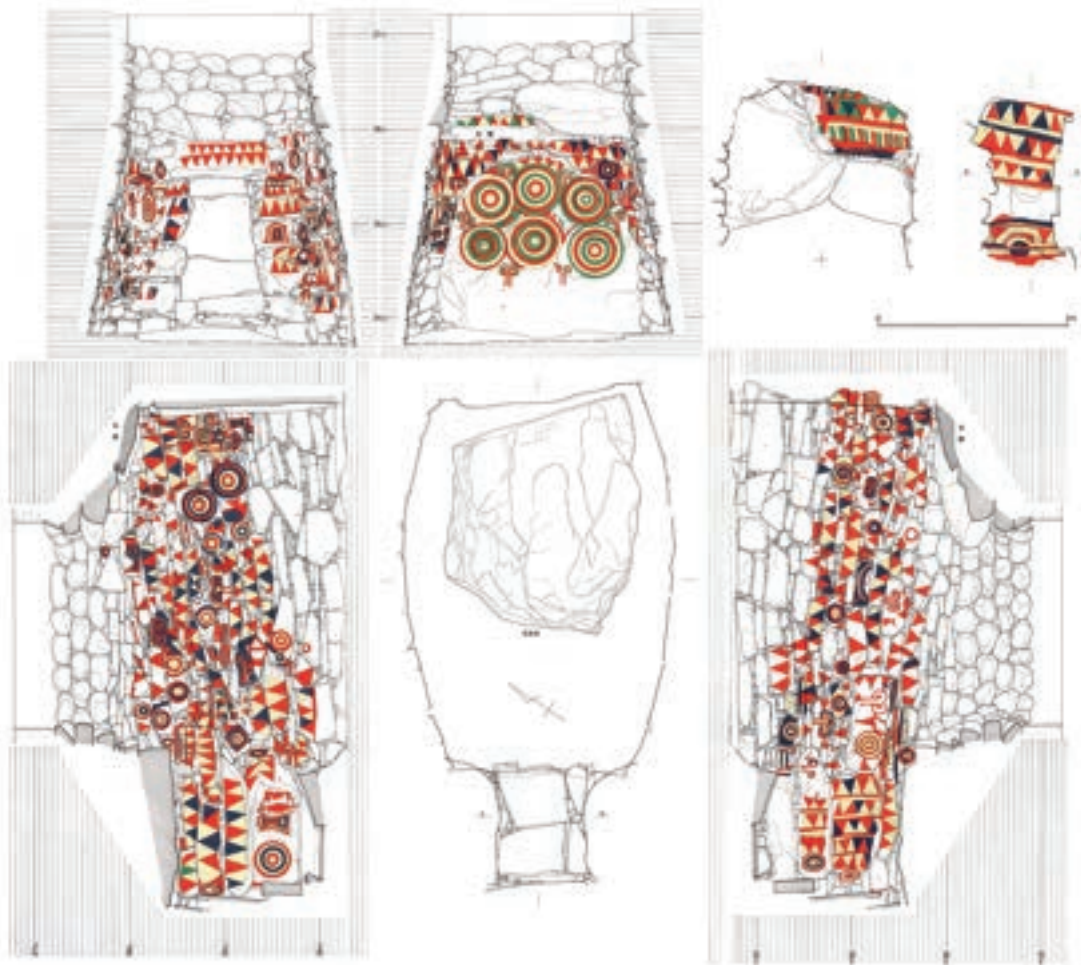


図 337 日岡古墳石室実測図 (1/80)

名称 日の岡・日ノ岡 (「坪井正五郎 1889」) 日ノ岡 (『考古学会 1914』)

日ノ岡 (『福岡縣 1925』) 日岡古墳 (指定名称) 日岡古墳 (『吉井町教委 1989』)

所在地 うきは市吉井町若宮

指定 国指定史跡 昭和 3 年 2 月 7 日

墳丘 前方後円墳 (墳長 74m、後円部高 5m)

主体部 横穴式石室 (単室・胴張長方形・西側に開口・床面に天井石落下・石棚) 玄室長 3.85m、右壁長 4.05m、左壁長 3.8m、奥壁幅 2.1m、前壁幅 1.9m、最大幅 2.85m。

装飾 周壁全面と石棚および玄門部天井石下面に及び、赤・白 (黄)・緑・青 (灰) の 4 色を使い分けて (黄・灰は「朽津・川野邊 2000」)、同心円文・連続三角文等の幾何学文様の他、蕨手文や魚・馬等の生物、盾・靱・大刀等の武具、船等を描く。

奥壁には上下二段にわたって 6 つの大型同心円文が描かれる。この同心円文は各々左右、上下の部分が接しており、6 ヲ所の外郭接点部付近に規則的に蕨手文を配する。同心円文の上部は連続三角文で埋めている。奥壁に使用する色は赤・白 (黄)・青 (灰)・緑の 4 色であるが、鏡石の図柄には青 (灰) 色は使用していない。6 つの大型同心円文は 7 ~ 9 重で赤・白 (黄)・緑の 3 色を使用し、配色は各々異なる。同心円文の大きさは下段右が直径 70 cm で最大である。各同心円



図 338 日岡古墳石室奥壁

文は完全な正円ではない。

蕨手文は、ほぼ左右対称の位置にあり各々描き方が異なる。配色は内側から赤・白・緑の順で統一されている。鏡石の頂部は連続三角文が描かれる。赤・白の2色が使われ、赤色の三角文は下向き、白色は上向きである。

鏡石と石棚の間には連続三角文と一つの同心円文を描く。石棚の前面には赤・白（黄）・緑の3色で連続三角文を描く。下面は赤の直線で縦と横に大きく区画し、中央より壁側は大・小の連続三角文を描いてその間を緑の直線で区画する。

右側壁には連続三角文をびっしりと描き、所々に同心円文・蕨手文・船等を描く。色調は赤・白（黄）・青（灰）である。三角文は正三角形に近い二等辺三角形が基本である。一部に平行四辺形が混じる。同心円文は奥壁ほど大型ではないが、その直径は奥壁鏡石の同心円文が祖形となるようで、寸法の上では完形が見出せる。赤を基調的な色彩として描いている。蕨手文は4つ描かれており、いずれも奥壁よりも寸法が大きく、各々の形状・寸法は異なる。船は右側壁のほぼ中央に、内側から青（灰）・赤・白（黄）の順で三重弧を描いて船の本体とし、右下に赤い2本線で櫂を表現する。船外は全面に青（灰）を塗る。また、右側壁にはその他、鳥または獣とされる図文や、帯状の文様が描かれていると指摘する報告もある。

左側壁は基本的には右側壁と同様だが図柄に武具が加わり、同心円文を多用するといった相違がある。色調は赤・白（黄）・緑・青（灰）の4色がみられる。

奥壁際に赤・白（黄）・青（灰）・緑を用いて靱を大小2点、靱と並んで把を上を靱尻を下に向けた大刀1点が赤・白（黄）・青（灰）で描かれ、玄門よりには馬が、壁中央の上位には魚が描かれている。主文様は奥壁際に集中しており緑色もこの付近の文様にしか使用されていない。また、前壁際隅角部に積まれた石材には、青色の帯状文に挟まれた連続×印文がある。

右側壁同様、左側壁にも連続三角文が多い。正三角形に近い二等辺三角形を基本形とし、寸法に統一性はなく主に赤・白（黄）で描かれ、青（灰）も使用されるが緑は見られない。右壁同様、複数の積石にわたって描く場合もある。同心円文は右壁と同様、奥壁に描かれた同心円文と寸法上の関係がみられる。蕨手文には大型・小型があるが右壁のように大きなものは描かれていない。緑色を使用しない点は左右側壁で共通する。

魚は頭を左（前壁側）に向けて赤・青を使用して描かれる。馬は左（前壁側）に向いて赤1色で描かれる。その周囲は青色で埋められる。なお、壁の下位および奥壁に接する部分で床面から0.8mの高さまでは左右両壁面とも描画がない。

前壁にも連続三角文が多用され、右壁側の前壁には蕨手文が、左壁側の前壁には盾が描かれる。楣石には連続三角文のみが描かれる。玄門部の左右両壁と天井下面にも壁画が見られる。右壁側は連続三角文と同心円文が赤・白（黄）・青（灰）で描かれる。左壁側は連続三角文・同心円文・盾が赤・白（黄）・青（灰）・緑で描かれる。

天井石は赤・白（黄）・青（灰）の3色を使用して、二重の帯状の線で分割して連続三角文を描く。
顔 料 赤・緑（『山崎一雄 1951・1974』） 赤・青・黄（『平凡社 1964』 森貞次郎） 赤・白・青・緑（『吉井町教委 1989』） 赤（ベンガラ）・白・緑（淡青灰色:銅系ではない天然鉱物の粉末）・青（『永嶋正春 1999』） 赤・黄・灰・緑（『朽津信明・川野邊渉 2000』）

遺 物 石室内からの出土遺物は伝わっていない。昭和62～平成元年度調査時にトレンチ内から円筒埴輪出土。

年 代 6世紀前半

調査歴 明治21年（1888）石室内発掘調査（坪井正五郎）

昭和62～平成元年度 墳丘測量・石室実測・墳丘周辺トレンチ調査（吉井町教育委員会）

整備歴 昭和3年 木造瓦葺井戸枠状の覆屋設置（現在、後円部端に移設）

昭和39年3月 鉄筋コンクリート製覆屋設置

平成30年度 サギ営巣被害抑止のため墳丘樹木間伐



図 339 右側壁文様



図 340 玄門部天井石

現況 石室天井部に開口した状態で覆屋設置、現状保存

図面等 壁画模写図（「坪井正五郎 1888」）

壁画模写図（「杉山寿栄男 1913」）

「日ノ岡古墳、月ノ岡古墳立地地形図」

1924. 4. 7・8 測量（東洋文庫梅原資料）

「前方後円墳実測図」 1948. 4 森貞次郎実測

（トレース図）（東洋文庫梅原資料）

「横穴式石室実測図」 1923. 4. 6 測図、

1956. 7. 29 追加記録（東洋文庫梅原資料）

墳丘測量図（『平凡社 1964』森貞次郎）

石室実測図（『朝日新聞社 1972』森貞次郎・小田富士雄）

墳丘測量図、石室・壁画実測図（『吉井町教委 1989』）

（レーザ計測）東京大学池内研究室 2007. 1 計測

（写真計測）九州歴史資料館 2024. 2. 21 計測

写真 1923年4月6日石室内撮影写真（東洋文庫梅原資料）

1935年10月25日石室内撮影写真（東洋文庫梅原資料）

横穴式石室玄室奥壁の壁画写真 1929年藤田亮策撮影（東洋文庫梅原資料）

横穴式石室玄室奥壁の壁画写真 池上年撮影寄贈（東洋文庫梅原資料）

その他、横穴式石室内の写真（東洋文庫梅原資料）

藤本四八撮影 4×5 カラーリバーサル「幾何学的文様の彩画」（前壁）A 1点、「幾何学的文様の彩画」（前壁）B1点、「盾と同心円の彩画」（通路左側）1点、「連続三角文の彩画」（奥壁上部）1点、「同心円の彩画」（奥壁）1点

九州歴史資料館 1975 撮影 4×5 カラーリバーサル 17点・カラーネガ 4点

九州歴史資料館 1979 撮影 4×5 カラーネガ 1点

九州歴史資料館 1987 撮影 4×5 カラーリバーサル 19点

九州歴史資料館 4×5 カラーリバーサル 31点、モノクロ 1点、カラーネガ 1点

九州歴史資料館 6×7 カラーネガ 18点

九州歴史資料館 6×9 カラーリバーサル 7点

九州歴史資料館 1966 撮影 35mm カラーリバーサル 11点

九州歴史資料館 1986 撮影 35mm カラーリバーサル 12点

九州歴史資料館 35mm カラーリバーサル 91点

九州歴史資料館 2024. 2. 21 撮影デジタル写真データ



図 341 日岡古墳旧保存施設



図 342 現在の保存施設



図 343 日岡古墳石室正射投影画像 (1/100)

熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 23 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 21 点、モノクロ 6 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 68 点 (No. 0149 ~ 0171、No. 0685 ~ 0722、No. 1345 ~ 1347、No. 1383 ~ 1386)

模写 日下八光 現状模写・復元模写 10 点 (国立歴史民俗博物館保管)

パネル 九州歴史資料館 パネル 2 点 (「奥壁」108 × 134・「奥壁」148 × 186)

九州国立博物館 パネル 2 点 (「奥壁」158 × 198・「中から」128 × 102)

模型 桂川町立王塚装飾古墳館に 1/5 スケール石室模型

文献 坪井正五郎 1889 「筑後日ノ岡の石槨内面模様」『東洋學藝雑誌』第六卷第八八号 (『日本考古学選集』3 所収)

東京帝室博物館 1916 『稿本日本帝國美術畧史』

考古学会 1914 「筑後日ノ岡の石槨内面模様」『考古学雑誌』第四卷第十二號

工芸美術研究会 1926 『上代文様集』(カラー挿図は京都帝國大學文學部蔵 池上年模写図)

福岡縣 1925 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

吉井町教育委員会 1989 『若宮古墳群 I』吉井町文化財調査報告書第 4 集

吉井町教育委員会 1990 『若宮古墳群 II』吉井町文化財調査報告書第 6 集

52 重定（しげさだ）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、標高51mの独立低丘陵上に立地する。重定古墳から50m南西には大型円墳の楠名古墳があり、また500m南東にはやはり装飾古墳の塚花塚古墳がある。さらに周辺には法正寺古墳や屋次郎丸古墳などの前方後円墳が分布しており、これら首長墓系列に属する古墳群については、朝田古墳群と総称される。

経緯 石室および装飾壁画の発見は古く、一説によれば江戸時代初期に開口し、椀貸しの言い伝えもあったとされる（『浮羽町1988』）。伊能忠敬の第八次調査（九州第二次）では文化九年九月六日に朝田村字重定の塚穴を訪れており、「穴の口より奥まで七間五寸、奥横高八尺、長二間、シキリ厚二尺…」と石室内の細かな計測に関する記載がある。ここには彩色壁画に関する記載はないが、平田篤胤が文政二年に記した『神字日文伝附録 疑字篇』では「筑後ノ國石窟ノ文字」として生葉郡上宮田村の石窟（重定古墳）にある壁画文様を取り上げているが、ここでは彩色文様としてではなく「神代の文字と云ひ傳ふとぞ」と古代の文字の可能性のあるものとして、靱や同心円の文様を図とともに紹介するが「慥かに文字とも思ひ定めがたし」と懐疑的に捉えている。

秋月藩の大蔵種教が記した『小図小言』にも文政八年（1825）三月に模写した重定古墳の描画図文の記載があるが、同心円や靱の図文を神代の文字と理解し説明を行ったものである。

久留米藩士の矢野一貞が記した『筑後将士軍談』では「宮田村古墳」として重定古墳を取り上げ「上宮田村重定名窟上図」（古墳外観）と「窟中朱像」（石室・装飾壁画模写図）の二つの図を掲げた。ここでは神代文字であることを否定し、岩戸山古墳石人の靱と対比させながら、描画の目的を詳述している。

明治23年、井上喜久次は『東京人類学会雑誌』に「石槨中ノ紋様に就テ」を发表、ここで坪井正五郎の日岡古墳発掘調査の成果や石人山古墳の武装石人を引き合いにしながら重定古墳の文様を「同時時代に於て葬祭に用ゆる一種の模様」とし、平田の古代文字説を否定した。

大正11年には、隣接する楠名古墳と併せて「楠名重定古墳」として国の史跡に指定された。「福岡縣1926」には「楠名重定古墳」として取り上げ、矢野一貞の模写図にて紹介を行うが、この時点で既に「朱象明確を欠き数量分明ならず」と退色が目に見えて進行したことを記している。



図 344 重定古墳位置図 (1/25,000)



図 345 重定古墳「古窟文字」（文様）
（「大蔵種教1825」）



图 346 「上宮田村重定名窟上圖」(1853『筑後將士軍談』)

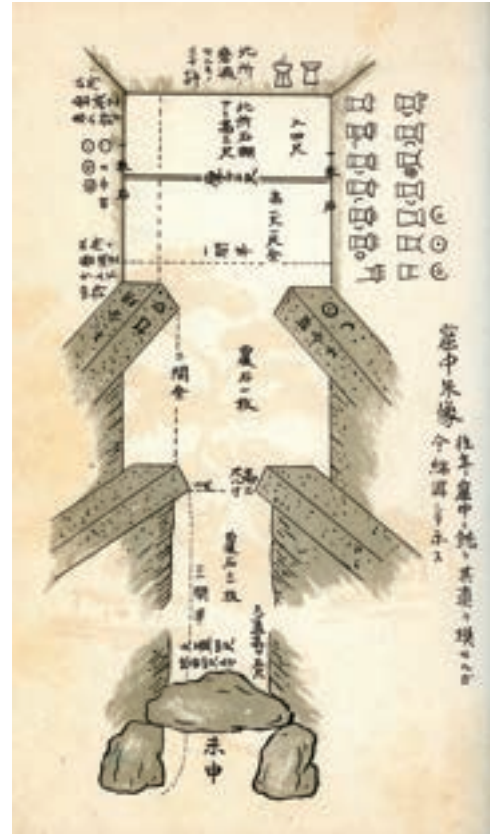


图 347 「窟中朱像」(1853『筑後將士軍談』)



图 348 重定古墳墳丘測量圖 (1/600)

その後、戦時中には防空壕として使われ、石室内で焚火したことが原因で天井部分は煤で黒くなり、戦後も人々の進入によって落書きや顔料の剥落が進んだらしい。昭和34年11月には文化財保護委員会委員長宛て、重定古墳・塚花塚古墳の劣化進行が懸念されるため復元模写を実施するよう陳情した文書事績がある。

昭和36年には浮羽町（当時）により入口部の保護施設が設置され、昭和52年度には石室密閉のための保存施設が設置された。

昭和37年には日下八光が石室内の模写絵を製作しており、復元図中の1枚が現在、うきは市立浮羽歴史民俗資料館内に展示されている。

名称 生葉郡上宮田邑石窟・上宮田重定名古窟（大蔵種教1825「小図小言」）

宮田村古墳（矢野一貞1853『筑後将士軍談』）

楠名・重定古墳（1922指定名称）

楠名重定古墳、朝田重定の古墳（福岡縣1926）

浮羽郡御幸村朝田古墳（福岡縣1939）

重定古墳（浮羽町教育委員会1993）

所在地 うきは市浮羽町朝田

指定 国指定史跡「楠名・重定古墳」大正11年3月8日

墳丘 前方後円墳（本来の全長約80m、現況全長51m、後円部径44m、高さ8.5m）

主体部 横穴式石室（複室構造・南側に開口・石棚・変成岩石材使用）石室全長15m、玄室長3.7m、玄室幅3.4m、玄室高3.8m、

装飾 大半は赤、一部緑の顔料を用いて描画される。玄室奥壁右側には上・中・下の三段に靱が描かれており、そのうち中段左側の靱のみ内面を緑色で塗りつぶす。玄室右側壁の腰石には上下二段にそれぞれ7つの靱を列状に配しているように見える。それぞれの靱の間には単円文もしくは小さな同心円文を配す。また、靱の上には同心円文を列状に配している。玄室左側壁にも靱や同心円の描画があるが不鮮明。玄門部内外面にも同心円を基本とした描画がある。



図 349 羨道部より後室を望む



図 350 重定古墳奥壁



図 351 後室右側壁

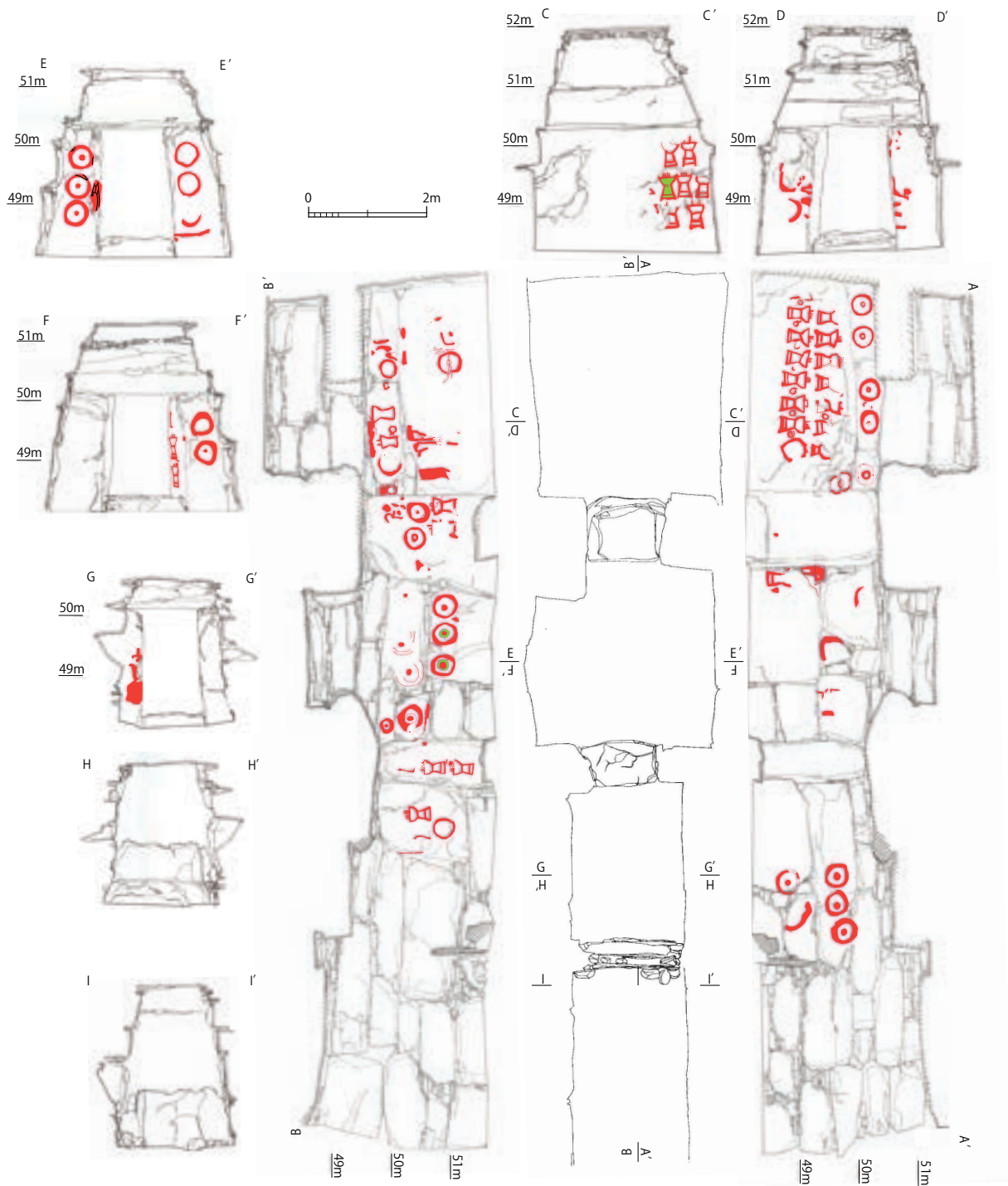


图 352 重定古墳石室実測图 (1/100)

前室右側壁は顔料の剥落が著しく文様は不鮮明だが、一部に靱を描いたと思われる描画が確認できる。左側壁には複数の同心円文が描かれており、その中には緑色を用いた文様も確認できる。前門部は左側にのみ描画が認められる。羨道部は右側壁に複数の同心円文、左側壁には靱と円文が確認できるが、特に左側壁については文様が不明瞭である。

顔 料 赤（「山崎一雄 1951・1974」）

赤・緑（『平凡社 1964』森貞次郎）

朱・緑・鼠〜薄墨（『朝日新聞社 1967』日下八光）

赤・青（『講談社 1973』斎藤忠）

赤・緑（『浮羽町教委 1993』）

遺 物 江戸時代の椀貸し伝説があるが、その当時の出土品は伝えられていない

昭和 52 年石室羨道部入口流入土を除去した際に須恵器・装身具が出土

年 代 7 世紀前半

調査歴 昭和 62 ～平成 5 年度 墳丘測量・石室実測（浮羽町教育委員会）

昭和 52 年度 石室入口に覆屋設置

現 況 石室入口に覆屋設置後、現状保存

図面等 石室模写図（『平田篤胤 1819』）

石室模写図（『大蔵種教 1825』）

墳丘外観・石室模写図（『矢野一貞・村上量敏 1853』）

石室・装飾壁画実測図（『平凡社 1964』梅原末治原図・森貞次郎修正）

楠名・重定古墳周辺図（『講談社 1965』小田富士雄実測）

石室実測図・奥壁・側壁文様（『朝日新聞社 1967』梅原末治原図・日下八光補筆）

奥室奥壁文様（『朝日新聞社 1972』日下八光原図）

石室・装飾壁画実測図（森貞次郎 1985『装飾古墳』石山勲・小田富士雄原図）

墳丘測量図・石室・壁画実測図（『浮羽町教委 1993』）（羨道部右側壁の施文場所が一部ズレ）
（写真計測）基盤研究（A）（1922026）2007. 10. 16 ～ 24 計測

写 真 藤本四八撮影 4 × 5 カラーリバーサル「靱の彩画」（後室右壁 部分）1 点

同「楠名重定」 1 点

九州歴史資料館 1976 撮影 4 × 5 カラーネガ 2 点、カラーリバーサル 15 点

九州歴史資料館 1988 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 20 点

九州歴史資料館撮影 6 × 9 カラーリバーサル 10 点



図 353 日下八光「後室右側壁模写絵」（昭和 37 年）



図 354 装飾文様拡大

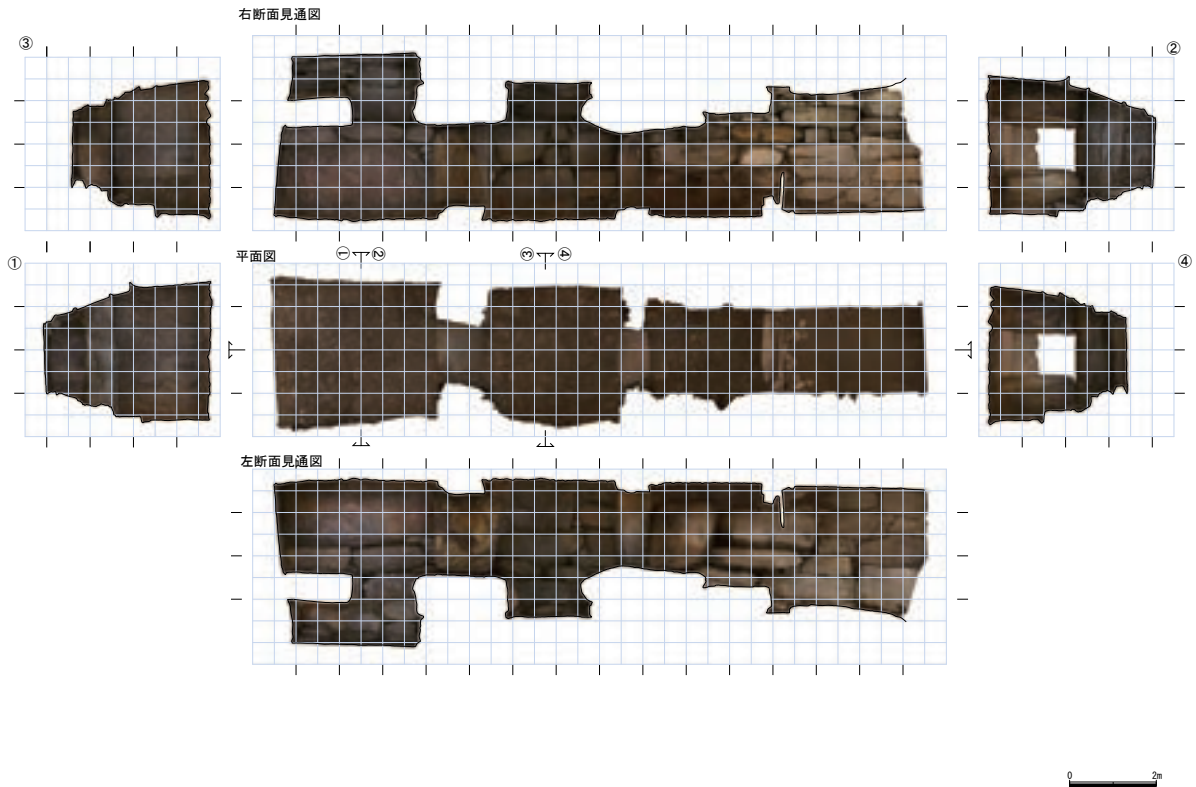


図 355 重定古墳石室正射投影画像 (1/160)

九州歴史資料館 1966 撮影 35mm カラーリバーサル 2 点

九州歴史資料館 1988. 10. 25 撮影 35mm カラーリバーサル 59 点

九州歴史資料館 2001. 10. 12 撮影 35mm 「外観」 カラーリバーサル 7 点、

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 「石室」 他 66 点

熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 16 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 13 点、モノクロ 5 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 66 点 (No. 0118 ~ 0148、No. 0659 ~ 0684、No. 1339 ~ 1344、No. 1379 ~ 1382)

模写 日下八光 現状模写・復元模写 14 点 (国立歴史民俗博物館・浮羽歴史民俗資料館)

パネル 九州歴史資料館 パネル 1 点 (137 × 187) ・九州国立博物館 パネル 1 点 (127 × 158)

文献 佐久間達夫校訂 1998 『伊能忠敬 測量日記』第四巻 九州第二次の一 大空社

平田篤胤 1819 『日文傳附録 疑字篇』名著出版 1978 『新修平田篤胤全集第十五巻』所収

大蔵種教 「小図小言」甘木市 1984 『甘木市史資料』考古編所収

矢野一貞 1853 『筑後将士軍談』筑後遺籍刊行会 1927

井上喜久次 1890 「石槨中ノ紋様ニ就テ」『東京人類学会雑誌』第六巻第五十六號

浜田耕作 1907 「佛教以前の日本美術」『國華』第 205・第 206 号 (『日本美術史研究』所収)

島田寅次郎 1923 「筑後地方に於ける古墳 (上)」『筑紫史談』第参拾集

福岡縣 1925 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

福岡縣 1939 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第十三輯史蹟之部

浮羽町史編集委員会 1988 『浮羽町史』上巻 浮羽町

浮羽町教育委員会 1994 『朝田古墳群概報』浮羽町文化財調査報告書第 10 集

53 塚花塚（つかはなづか）古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、耳納山地から北側に派生し隈上川が形成する丘陵の端部、標高 60m の微高地上に立地する。重定古墳から 500m 南東にあり、朝田古墳群を構成する古墳の一つである。

経緯 古墳の発見は古く、明治 26 年に古墳西側を通る道路を開削した際に開口、多数の副葬品が出土したとある『浮羽町 1988』。大正 11 年に国史跡に指定された後は、装飾古墳を代表する一つとして島田貞彦 1924「筑後に於ける二三の装飾古墳」『地理と歴史』第十四卷第一號や、工芸美術研究会 1926『上代文様集』に挿図で紹介された。

『福岡縣 1925』では石室内の槲障（閉塞石？）が所有者宅の小川に架けられていることや、前室袖石に二つの孔があり、本来は扉を開閉する機能を有していたことなどが記される。また、奥壁文様の模写図も掲載される。その後、昭和 36 年には石室開口部を保護するための覆屋が設置、昭和 52 年度には石室内密閉工事が施工され石室内の保護が進められた。

昭和 62 年から平成 5 年度にかけて浮羽町教育委員会が実施した朝田古墳群の調査では、墳丘測量図と石室実測図の作成が行われた。また、古墳西側の道路改良に伴って平成 12 年度に福岡県教育委員会が隣接地の発掘調査を実施したが、古墳に直接関連するものは検出されなかった。

名称 ウーズカ（明治以前の伝承）塚鼻古墳（「島田貞彦 1924」）塚花塚古墳（指定名称）

所在地 うきは市浮羽町朝田

指定 国指定史跡 大正 11 年 10 月 12 日

墳丘 円墳（径 30m、高 6m）

主体部 横穴式石室（複室構造・両袖式・玄室若干胴張り・羨道部削平・西側に開口・変成岩石材使用）全長 8.5m、玄室奥壁幅 2.0m、玄室幅 2.9m、玄室高 3.5m

装飾 赤と緑の顔料を用いて、主に奥壁鏡石に描画が行われる。鏡石の中央上方には二つの単円が横に接続する形で描かれ、さらにその下方にも同様に二つの単円文がある。その間を通るように直線が配されており、新芽を思わせるような独特の蕨手文を構する。直線のみ赤色で描かれ、直線の縁や単円文は緑色の顔料で描かれる。また、左右や下方にもやや不鮮明だが同様の意匠の



図 356 塚花塚古墳位置図 (1/25,000)



図 357 「塚鼻古墳奥壁装飾模様」
（島田貞彦 1925）」

蕨手文が描かれているようである。

中央の蕨手文のすぐ左側には大きめの二重同心円文が緑色で描かれ、その中央は赤色で塗りつぶされる。中央左側にも同心円文状の描画があるが、不鮮明である。

下段には二重の大きな同心円文が三つ、横方向に並ぶように緑色で描かれており、そのうち左側の同心円にのみ赤色の縁取りがある。その下段には緑色を多用して一部赤色による連続三角文が描かれるが、これらは不整列である。

玄室左側壁には赤色で描かれた二重同心円文が一つ、右側壁には赤・緑で描かれた二重同心円文が二つ確認できるが、それ以外の箇所には描画は認められない。玄門部袖石や前室にも壁画は認められず、描画は奥壁とその両側付近に集約するようである。

顔 料 赤・緑（『山崎一雄 1952・1974』）

赤・青（『平凡社 1964』 森貞次郎）

赤・青・緑（『講談社 1973』 斎藤忠）

赤・青・緑（『講談社 1974』 乙益重隆）

赤・緑（『浮羽町教委 1993』）

遺 物 明治 26 年開口時に金銅張四脚壺・径五寸の銀鋌鉄具多数、鉄鏃・轡・大刀・玉類・須恵器大甕等が出土したが現存しない。

昭和 46 年、石室清掃時に銀象嵌柄頭が出土（うきは市教育委員会）

年 代 6 世紀後半

調査歴 平成 3 年度 墳丘測量図作成（浮羽町教育委員会）

平成 4 年度 石室・壁画実測（浮羽町教育委員会）

整備歴 昭和 52 年、開口部に覆屋設置

現 況 開口部に鉄筋コンクリート製覆屋設置

図面等 奥壁実測図（『福岡縣 1925』）

奥壁実測図（『平凡社 1964』 森貞次郎原図）

石室実測図（『講談社 1965』 渡辺正気・古賀寿・松岡史実測）

墳丘測量図・石室実測図・壁画実測図（『浮羽町教委 1993』）

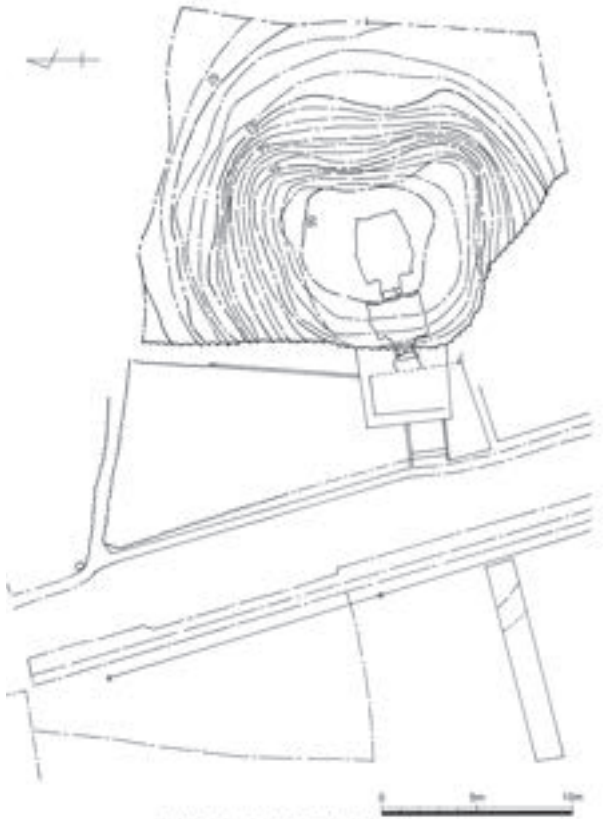


図 358 塚花塚古墳墳丘測量図（1/400）



図 359 塚花塚古墳奥壁

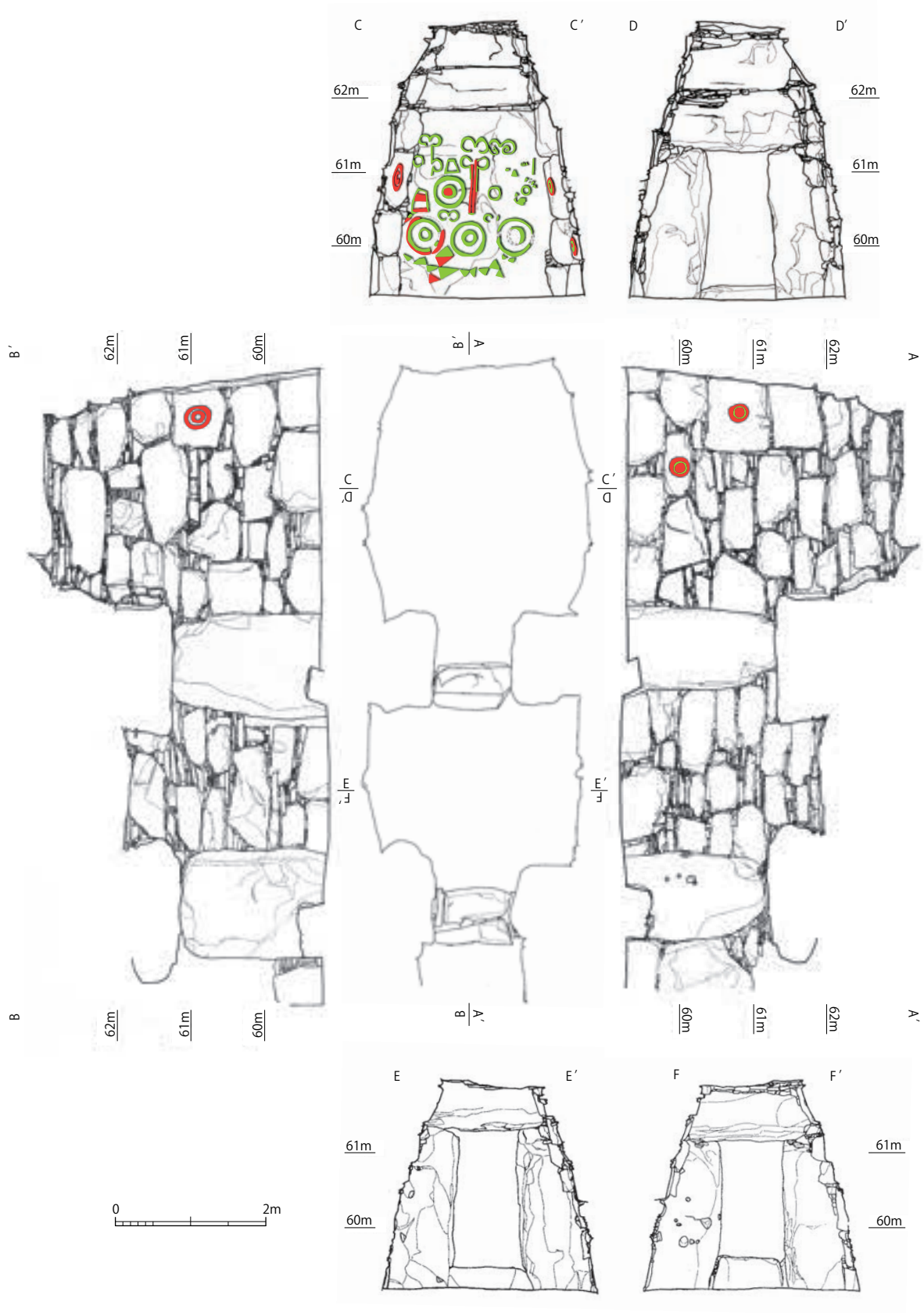


图 360 塚花塚古墳石室実測图 (1/80)



図 361 塚花塚古墳奥壁・左側壁拡大



図 362 奥壁文様拡大



図 363 古墳現況

(写真計測) 基盤研究(A) (1922026) 2007. 10. 10 ~ 15 計測

写 真 九州歴史資料館 1976 撮影 4 × 5 カラーネガ 3 点、カラーリバーサル 9 点

九州歴史資料館 1992 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 13 点

九州歴史資料館撮影 4 × 5 カラーリバーサル 4 点

九州歴史資料館撮影 6 × 7 カラーネガ 15 点

九州歴史資料館撮影 6 × 9 カラーネガ・カラーリバーサル 9 点

九州歴史資料館 1966 撮影 35mm カラーリバーサル 2 点

九州歴史資料館 1992 撮影 35mm カラーリバーサル 53 点

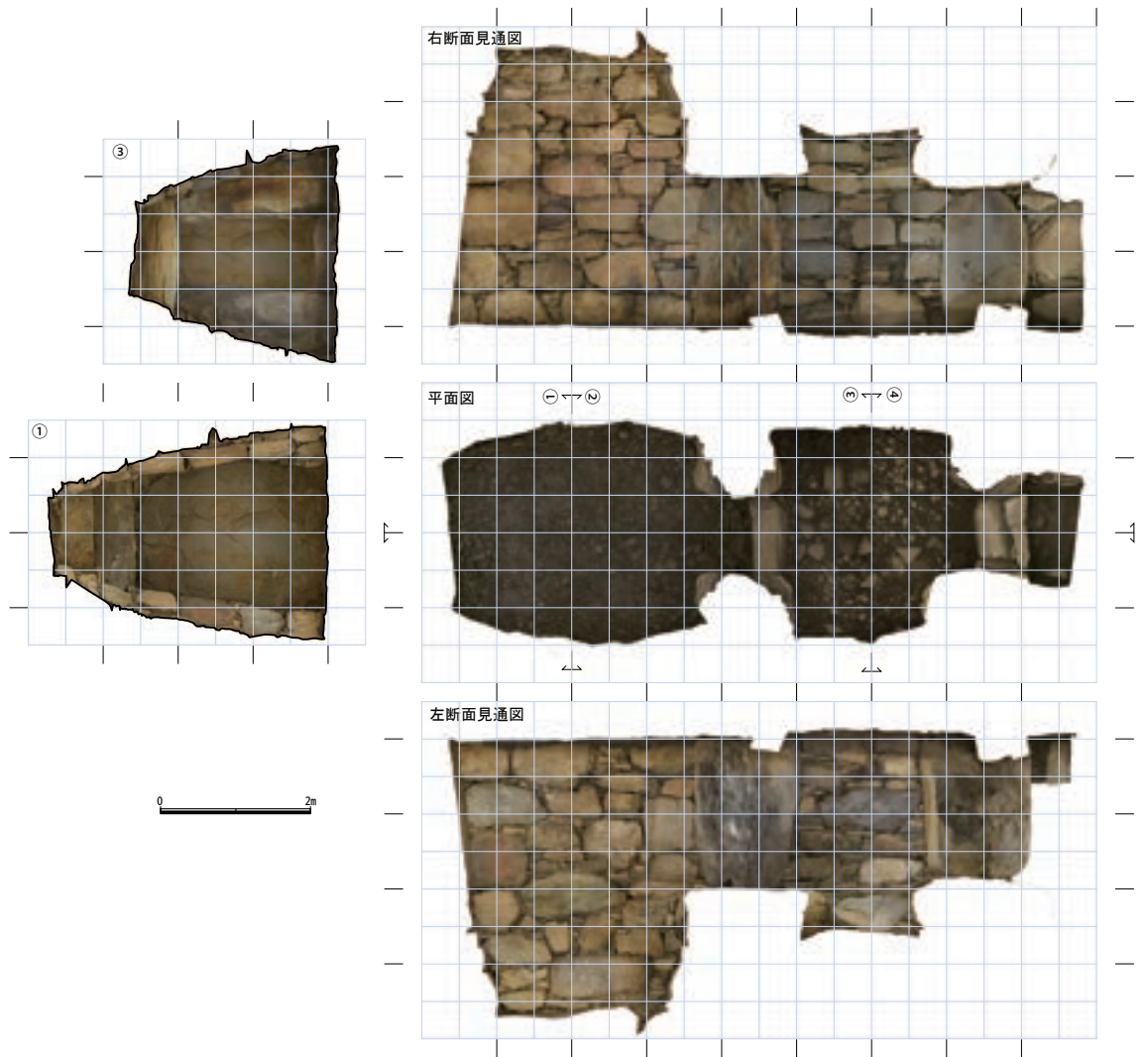


図 364 塚花塚古墳石室正射投影画像 (1/100)

九州歴史資料館 2001 撮影 35mm カラーリバーサル 6 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 57 点

熊本県立装飾古墳館 2000. 5. 16 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 9 点、モノクロ 4 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 36 点 (No. 0107 ~ 0117、No. 0648 ~ 0658、No. 1334・1338、No. 1370 ~ 1378)

模写 日下八光 現状模写 4 点 (国立歴史民俗博物館)

パネル 九州歴史資料館 1 点 (210 × 200)・九州国立博物館 1 点 (158 × 127)

文献 島田寅次郎 1923 「筑後地方に於ける古墳 (上) 『筑紫史談』 第参拾集

島田貞彦 1924 「筑後に於ける二三の装飾古墳の新例」 『歴史と地理』 第十四卷第一號 史学地理学同攻会編集

工芸美術研究会 1926 『上代文様集』

福岡縣 1925 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』 第一輯

浮羽町史編集委員会 1988 『浮羽町史』 上巻 浮羽町

浮羽町教育委員会 1994 『朝田古墳群概報』 浮羽町文化財調査報告書第 10 集

54 盾（たて）古墳

立地 盾古墳は福岡県の南部、筑後川中流域左岸にあり、耳納山地北麓の隈上川によって形成された丘陵端部微高地上にあった。装飾古墳として著名な塚花塚古墳の南側約 700 m に位置し、かつては付近の小円墳とともに群集群を形成していたようだが、現在では開墾が進み多くの小円墳群が失われた。

経緯 発見の経緯は定かではないが、崩壊が危惧されるため昭和 43 年に浮羽高校考古学部が調査を実施したことが調査参加者の言により知られる。この時点で既に墳丘盛土の大半が除去され石材が露出した状態だった。『浮羽町 1988』には南面して開口する複室構造の横穴式石室という記載があるが、ここには装飾文様に関することは全く触れられておらず、装飾古墳であることを示す公的記録はない。町史編さん時の 1988 年当時、古墳はまだ現地に残っていたようだが現在では消滅してしまった。

名称 楯古墳（埋蔵文化財包蔵地カード 1966）

盾古墳（『浮羽町 1988』一の瀬 2 号墳（福岡県教育委員会 1977『福岡県遺跡等分布地図（浮羽郡編）』）

所在地 うきは市浮羽町朝田

主体部 横穴式石室（複室構造南側に開口）後室長 2.3 m、幅 2.7 m、高 3 m、前室長 1 m、幅 2.3 m

装飾 奥壁に敲打によって施文された大きな同心円文があったらしいが、石室や施文部の図面等は残されていない。その他、前室と後室の間の袖石にも施文があったという言もあるが定かではなく、現在ではその石材も失われている。写真では二重の同心円文が少なくとも 1 つ確認できる。

遺物 浮羽高校考古学部が昭和 43 年に発掘調査を行った際、馬具や武器が出土（うきは市教育委員会）

年代 古墳時代後期～終末期

調査歴 昭和 43 年 石室内部の掘削調査（浮羽高校考古学部）

現況 消滅

写真 九州歴史資料館 1992 撮影 35mm カラーリバーサル 2 点
古墳全景等、紙焼写真 3 点（個人蔵）

文献 浮羽町史編集委員会 1988『浮羽町史』上巻 浮羽町



図 365 盾古墳位置図 (1/25,000)



図 366 盾古墳全景



図 367 文様拡大

(参考4) 安富(やすどみ)古墳

立地 福岡県の南部、筑後川中流域左岸で耳納山北麓に形成された複合扇状地に立地する。装飾古墳群として著名な屋形古墳群から1 kmほど東、安富天満神社の境内に位置する古墳である。周辺には古墳が確認されておらず、単独墳の景観を呈している。

経緯 開口の経緯は不明だが、神社境内に位置していたためか破壊されることなく開口した状態で現在まで保存活用が図られている。昭和56年に吉井町(現、うきは市)史跡に指定された後は案内板設置の他にも、電源が付設されて照明や音声アナウンスが設置される等、石室内の見学に対する配慮が行われてきた。

これまで装飾古墳として認識されてこなかったが、近年の照明技術やデジタルカメラを使用した写真撮影技術の向上に伴い、あらためて石室内の写真撮影を行ったところ、奥壁に描画文様のように見えるものが撮影されたことがきっかけとなり、装飾古墳の可能性が示唆されるようになった。

名称 安富古墳(指定名称)

所在地 うきは市吉井町福益

指定 うきは市指定史跡 昭和56年11月1日

墳丘 円墳(15 m)

主体部 横穴式石室(複室・両袖・南西側に開口・花崗岩石材使用)全長11 m、玄室長5 m、幅4 m

装飾 肉眼観察では不明瞭だが、デジタルカメラを使用して写真撮影を行うと、玄室奥壁の中央付近に並列する二艘の舟や人物らしき文様を確認することができる。観察所見では顔料を塗布した痕跡は無く、彩色壁画であることは否定されている。敲打による施文の可能性が考えられるが、肉眼観察では明瞭な凹面形成の痕跡を確認することはできていない。光拓本を実施した結果でも、明瞭な痕跡を確認することはできなかった。描画と認定するのであれば、その技法について今後の検証が必要である。

遺物 石室内から玉類出土(うきは市教育委員会)



図 368 安富古墳位置図(1/25,000)



図 369 安富古墳全景



図 370 安富古墳墳丘測量図(1/200)



図 371 安富古墳石室正射投影画像 (1/100)

年代 6世紀末～7世紀初頭

調査歴 未調査

現況 石室は良好な状態で保存・
活用が図られる。

図面等 昭和56年度指定時、墳丘
測量図・石室実測図

(うきは市教育委員会)

(写真測量)九州歴史資料館

2024.2.21 計測

写真 うきは市撮影写真

九州歴史資料館 2024.2.21 撮影

デジタル写真データ



図 372 安富古墳奥壁

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
J H	2120253
登録年度	登録番号
6	0001

福岡県の装飾古墳
福岡県文化財調査報告書第 288 集
(上 巻)

令和 7 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会
〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
印刷 株式会社 三光 福岡営業所
福岡県福岡市博多区山王1丁目14番4号

